詩篇珠玉集

小池辰雄著作集

第四巻

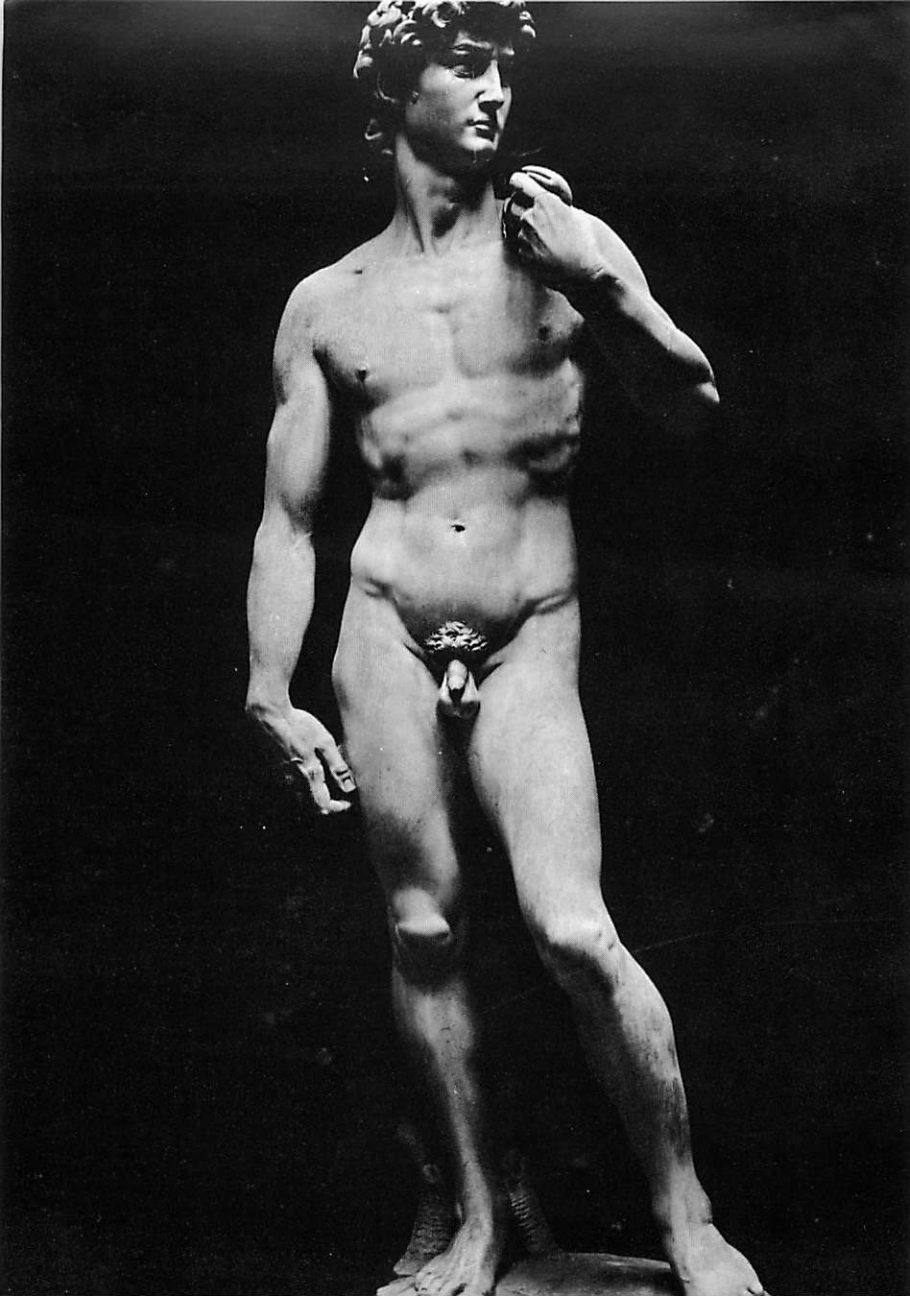
④詩篇

詩篇珠玉集

小池辰雄著作集

第四巻

この『詩篇珠玉集』を
往年　私の「詩篇」の訳と解説に共感して
あつい友情を示された
手島郁郎兄の霊に捧げる



緒言

曠野をその揺籃とした民イスラエルが血と涙の歴史を以てしたためた祈りの詩集がある。『詩篇』がそれである。近世の暁鐘をうち鳴らしたワルトブルクの預言者は、これを「小聖書」(eine kleine Bibel)とその「詩篇序言」の中でいっている。民族の心と歴史はまたその民族の個人の心と生涯の中に生きている。人間のいつわりなき声は、また万人の胸にひびく。ユダヤの曠野の祈りは大和島根の山野にも木霊する。それはおのずから日本的なひびきとなる。

新しき葡萄酒は新しき革袋を要する。キリストも使徒たちも聖霊の天韻によって詩篇の祈りを自分の祈りにした。私も聖霊のひびきに誘われて、これを訳した。

先人の学的業績も勿論参考にした。しかしヘブライ語は非常に弾力性のある言語であるので、特に時称の点ではインドゲルマン系の言葉とは構造がちがうので、日本訳は日本訳としての特色をもって好いはず

である。配語の上では原詩（マーソラ原典）の語調、格調を成るべく伝えたく努力はしたが、言語そのものの相異のため如何ともしがたい面のあることは言うまでもない。訳文は文語的口語体とした。従来の文語体の日本語訳は名訳として、いつまでもすてがたいものと敬意を表している。原文は詩文であるから、現行口語訳聖書における如く、文語訳も是非とも改行詩態に改むべきである。

解説は、所謂註解的な書物が、既に研究業績として多々あるので、（別表「参考書類」で研究していただきたい）、それに一つを加えようとしたのではない。本書は、詩篇百五十篇の中から、珠玉的なもの五十篇を選び出し、夫々にいろいろな角度から光を当て、夫々ある焦点をとらえて、その詩篇の主題となし、霊風のまにまに夫々のひびきを流れしめた。「儀文は殺し、霊は活かす」（コリ後三・六）との使徒パウロの精神で解説をした。それは一種の告白でもある。それが全体として有機体的な、また劇的な福音的交響曲でありたく念願した。

私も「涙の子」である。キリストのあわれみなくば生きられない者である。誠に彼の十字架が私の信の土台であり、復活が望の根拠であり、聖霊が愛の源泉である。キリストの十字架の砕け（イザヤ五三・五）によって、たましいの砕けを賜り、天界のキリストから聖霊のバプテスマにあずかったので、み霊の力を賜っている。感謝と讃美、悲哀と歓喜、呻吟と叫喚、愛憐と執成、悔改と救贖、そのような自分を「詩篇」の中に見出だし、おのれをキリストの中に投げ入れる。そこに私の祈りがある。読者もこの事態を共感されると思う。

口はパンを食べ、水を飲む。人と語り、歌を唱う。だが神、キリストとの語らいたる祈りを忘れたら、たましいが渇く、いのちが枯れる。「詩篇」は讃美歌集（テヒッリーム）であり、祈禱集（テフィッロートゥ）である。詩篇の祈りをルターの如く「わが祈り」としてキリストの中へと南無（＝帰依、帰入、祈入）することこそ肝腎である。そこには戦うべき何ごとかが与えられ、荷うべき何ごとかが課せられる。神・キリストと霊交する者に、生きることが自他に対して十字架であり、聖霊である。祈りがその焦点であり、挺子であり、霊泉口である。

凡そ義のために戦い、愛のために荷う旅人を、緑の丘へ、憩いの汀へ導き、死の蔭の谷も恐れなく渉らせ、敵前にあっても霊の饗宴にあずからしめ、聖霊の油を全身にそそぎ、生命の霊酒を乾杯せしめる『詩篇』の国へ渡すべき小舟の渡守ともこの「翻訳と解説」がなり得るならば、舟びとの歌は、聖名への感謝と讃美の外何ものでもない。

一九七九年　晩秋

小池辰雄

解題

神名　旧き訓み「エホバ」は、「ヤハウェー」の子音と「アドナイ」の母音の混合であるが、「ヤハウェー」は「実存者」、「アドナイ」は「わが主」。それで私はむしろ旧き訓みが両義をふくむので、却ておもしろいと思い、旧き訓みを用いる。即ち「実存主（エホバ）」ということになる。

「詩篇」の語義

さて「詩篇」の語義を一言しておこう。原語は「セーフェル・テヒッリーム」で「讃美歌の書」の意。謂わば「讃美歌集」である。「テヒッリーム」は「ハレルヤ」（詩一四六・一）と語幹を同じうする。即ち「ハーラル」という動詞は「輝く」意だが、その「ヒッレール」（ピエル相）は「歓呼する」という意で、神に関わるから「讃美する」意になるわけ。因みに「ハレルヤ」は「ハレルーヤー（ハ）」で、「汝らヤー（ハ）

（ヤハウェー）を讃美せよ！」という意。それから詩篇は「テフィッロートゥ」「祈禱」（複数）とも称われる（詩七二・二〇参照）。即ち「祈禱集」である。むしろこの方が本質的な表現と思われる。「祈り」はあらゆる内容をもっているからである。

ギリシャ語七十人訳旧約聖書、セプテュアギンタ（LXX）における「詩篇」は「プサルモイ」（複数）と謂い（Die Psalmen〔独訳〕、The Psalms〔英訳〕）、この名詞は絃楽器伴奏で讃美する意味の動詞「プサローー」から派生したもので、私は「絃歌」と訳す。だから「プサルモイ」は「絃歌集」というわけ。「詩篇」の中に「ダビデの歌」と謂われている歌がたくさんあるが、ヘブライ語で大方「ミゾモール・レ・ダーウィドゥ」と謂われ、この「ミゾモール」が正に絃楽器伴奏の歌を意味する言葉で、「絃歌」というわけ。「レ・ダーウィドゥ」の「レ」は前置詞で、「……に属する、……作の、または……に帰せらるべき」の意で、一般にダビデ「の」というように理解されている。学問的にはダビデ「の」作ということを肯定できる客観的実証はないとされている。

「詩篇」の年代と作者

「詩篇」の年代はダビデ王の紀元前千年の頃から、マカベヤ王の紀元前一五〇年頃までに亘る長期間のもので、原形は意外に古いものが少なからずあって、少なくも原形はバビロニア捕囚期前のものが相当あると私は思う。バビロニア捕囚期及捕囚から帰還して第二神殿が建てられてから（五一五年以降）のものが

かなりの数を占めているであろう。「詩篇」の中には「ダビデの」という詞書のある詩篇がたくさんある。私は「ダビデ歌集」（別表参照）の相当数においてダビデの原作を認めたいと思っている。

『詩篇』全体は、ユダヤ教団の祭儀や礼拝用の歌集として各種の祭儀及礼拝に愛用されていた。そのために原作が祭儀や礼拝に適するように形式上整えられたに相違ない。原形には、父祖時代、モーセ時代、士師記時代の書かれざる伝承の声を背景としたイスラエル民族の声が下地となって、ダビデその他の無名の種々な社会層の個人、すなわち王、預言者、祭司、教法師、一般の恵信者（ハシディーム）、病者、貧者、等々無名の作者がかくれた土台をなしていると思う。個人の生活体験から発した祈りの告白が、——それが讃美であろうと、悔改であろうと、感謝であろうと、歎きであろうと、審判の訴えであろうと、——土台となっているからこそ、東西古今の読者の心を、魂を、霊を代言し、感銘を与え、慰めとなり、励ましとなり、助けとなって来たのである。

作者が誰であろうと、いつの時代のどういう状況、環境のもとであろうと、——学問的探究とその結論がどういうように定着しようと、しなかろうと、——作者の心と魂と霊から発したいつわりなき祈りの告白に、「詩篇」の不滅の価値がある。そして所謂整えられた礼拝的な、祭儀的な句節は、神・キリストを相手にする読者には響かないであろう。

「詩篇」の構成と類型

「詩篇」の構成は周知の如く、五巻から成り立っている。第一巻は一―四一、第二巻は四二―七二、第三巻は七三―八九、第四巻は九〇―一〇六、第五巻は一〇七―一五〇である。これらのくぎりは各巻の終りの詩篇に頌栄句があるので解る。

「詩篇」の文学的類型をうち出したのはグンケルであるが、ワイザーも詳細な諸種の分類をやっている。しかし類型を以て各詩篇はわりきれるものではなく、内容から見て、二、三種類にわたるものが多々ある。元来詩というものは、その本質上、分析的な概念でわりきれるようなものではないからである。グンケルもワイザーも古典的名著であるからドイツ語の読める読者は勉強すると好い。

○「詩篇」の構成を表示すると次の如くである。

第一巻（一―四一）

一　総序歌〔プロローグ〕

二　第一巻の序歌

三―四一　ダビデ絃歌集（九、一〇は一篇と見なされる、三三は無詞書）

第二巻（四二―七二）

四二―四九　コラの子ら歌集（四二、四三は一篇と見なされる）

五〇　アサフの歌

五一―七二　ダビデ祈禱集（五六―六〇、ダビデのミクタム歌集　七二、ソロモンの歌）

第三巻（七三―八九）

七三―八三　アサフ歌集

八四―八九　雑歌集（八四、八五、八七、コラの子の歌　八六、ダビデの祈り　八八、ヘマンの歌　八九、エタンの歌）

第四巻（九〇―一〇六）

無詞書歌集（九〇、モーセの祈り　九二、安息日の歌　一〇一、一〇三、ダビデの歌）

第五巻（一〇七―一五〇）

一〇七―一一九　雑歌集（一〇七、無詞書　一〇八―一一〇、ダビデの歌　一一一、一一二、ABC歌　一一三―一一八、ハレルヤ歌集　一一九、大ABC歌〔律法讃歌〕）

一二〇―一三四　宮上り歌集（一二七、ソロモンの歌）

一三五―一四五　頌栄集（一三八―一四五、ダビデ歌集）

一四六―一五〇　ハレルヤ歌集（一五〇、跋歌〔エピローグ〕）

○「詩篇」の類型を表示すると大体次の如くであるが、私自身はこのような類別を全面的に首肯しているわけではない。当然重複しているものも相当ある。ゴシック数字の詩篇は本書に選出のもの。

讃歌　**八、一九、二九、三三、三六、六〇**、六五、六七、六八、九六、九八、一〇〇、**一〇三**、一〇四、一〇五、一一一、**一一三、一一四**、一一七、一三四、一三五、一三六、一四五、一四六、一四

七、**一四八**、一四九、一五〇。

感謝の歌（個人的なもの）九、一八、**一九B**、二二B、**三〇**、**三二**、三四、四〇、**四一**、**六三**、六六、**七三**、九二、一〇〇、一〇七、一〇八、一一一、一一六、一一八、**一二〇**、一三八。

神威の歌　二四、**四六**、四七、四八、六八、七六、**八七**、八九A、**九三**、九六、九七、九八、九九。

王の歌　**二**、一八、二〇、二一、四五、七二、八九B、一〇一、一一〇、一三二、一四四。

民族の哀歌　四四、五八、七四、七七、七九、**八〇**、八二、八三、一〇六、一二五、**一三七**。

個人の哀歌　**三**、五、**六**、**七**、**一三**、**一七**、二二A、**二五**、二六、二七、二八、**三一**、三五、三八、**三九**、四二、四三、**五一**、五四、五五、五六、五七、五九、六一、**六三**、六四、六九、七〇、七一、八六、八八、**一〇二**、一〇九、**一二〇**、**一二六**、**一三〇**、一四〇、一四一、一四二、**一四三**。

悔改の歌　**六**、**三二**、三八、**五一**、**一〇二**、**一三〇**、**一四三**。

感謝祭の歌　**三二**、四〇、**四一**、五〇、六五、六六、七五、**八五**、九二、九四B、一〇〇、**一〇三**、一〇六、一〇七、一一六、一一七、一一八、一三六、一三八、一四六。

智慧の歌　**一**、一二、一四、四九、五二、五三、七八、**九〇**、一一二、一二七、一二八、一三三、一三九。

巡礼歌　**一五**、二四A、八一、**八四**、**九一**、九五、一一五、**一二一**、**一二三**、一二三、一二四、一二九。

ABC歌　九、一〇、**二五**、三四、三七、一一一、一一二、一一九、一四五。

信頼の歌　四、一一、一六、二三、二七、六二、一二一、一二五、一三一。

目次

緒言……一
解題……四
詩篇
第一巻（第一―第四一篇）より二十五篇
第一篇　否定道……三
第二篇　メシヤ預言……六
第三篇　ダビデとアブサロム……三五
第四篇　神の義に平安あり……四〇

第六篇　涙……四五
第七篇　サウルとダビデ……五一
第八篇　乳児の力……五九
第十一篇　義を愛する神……六四
第十二篇　恵信は絶え信実は失せた……六八
第十三篇　いつまで……七三
第十四篇　いづこに……七七
第十五篇　幕屋人……八一
第十六篇　最高善……八六
第十七篇　義の叫び……九二
第十九篇　天然と律法……九九
第二十三篇　人生の歌……一〇八
第二十五篇　あわれみ……一二九
第二十九篇　荘厳の神……一三七
第三十篇　恩恵……一四一

第三十一篇　信頼……一四七
第三十二篇　罪のゆるし……一五六
第三十三篇　新しき歌……一六三
第三十六篇　光……一六八
第三十九篇　旅人……一七四
第四十一篇　苦杯……一八一

第二巻（第四二―第七二篇）より五篇

第四十六篇　信仰の凱歌……一八九
第五十一篇　砕かれた霊……一九七
第六十篇　一旗万旒……二〇九
第六十二篇　力は神に在り……二三〇
第六十三篇　聖翼……二三四

第三巻（第七三―八九篇）より五篇
第七十三篇　ただあなただけ……二五五
第八十篇　葡萄樹……二六三
第八十四篇　力より力へ……二七七
第八十五篇　恵信一如……二〇五
第八十七篇　終末的帰一……二一九
第四巻（第九〇―第一〇六篇）より五篇
第九十篇　永遠の今……二三九
第九十一篇　戦闘の幕屋……二四七
第九十三篇　神威……二五八
第百二篇　死生の転換……二六五
第百三篇　旧約の福音……二七七

第五巻（第百七―第百五十篇）より十篇

第百十三篇　降臨の神……四〇一
第百十四篇　出エジプト……四〇六
第百二十篇　戦争か平和か……四一九
第百二十一篇　神の護り……四二三
第百二十二篇　わが愛エルサレム……四二八
第百二十六篇　涙の種子、歓びの禾束（たば）……四四二
第百三十篇　待晨……四四六
第百三十七篇　思慕の魂……四五〇
第百四十三篇　しがみつき……四六七
第百四十八篇　万象の讃美……四八六
略語表……四九三
参考書……四九四
後記……四九五

詩篇珠玉集

第一卷

（珠玉的詩篇　二十五篇）

詩篇第一篇

1 恵まれたる哉、この人！　この人は
　悪の徒の謀略に歩まず、
　罪びとの途にも立たず、
　嘲者の座にも坐らず、
2 反って、エホバの法にこそ、その歓喜があり、
　聖法をば憶う昼も夜も。
3 その存在は木にぞ似る、水の流く辺に植えられて、
　その期到らばその実を結び、
　その葉もまた凋落むなき。
　かるがゆえそのなすところみな栄えゆく。
4 然かはあらず、かの悪の徒は。

1 「恵まれたる哉」（アシェレー）（アシェレー〔複〕、アシェル〔単〕。）多恵（直訳）。マタイ五・三の「恵まれたる哉（マカリオイ）」と同類の語で、恵みから来る幸であることを忘れてはならない。だから「恵福」とか「恵幸」とか言うべきところ。聖書には、いわゆる「幸福」、ドイツ語で言うと「グリュック」は稀で「ゼーゲン」（祝福、恵福）が圧倒的である。「悪の徒」（レシャーイーム）詩篇、箴言に多い語。レシャ〔単〕、不義、無神の徒、反対概念は「義」（ツェデク）。
「罪びと」（ハッターイーム）ハッター〔単〕、律法（おきて）を犯す者で、新約的な罪びとの意ではない。イスラエル人は律法の民だから、この罪は罰に価する。「嘲者」（レーツィーム）レーツ〔単〕、高慢で、不虔で、メフィストーフェレス的な人間、詩篇にはここだけ。

むしろ似る、風の吹き去る籾殻に。
5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、
また罪びとは義人の集いに。
6 宜べ、エホバは義人の道を知り給う。
されど、悪の徒の途は亡びる。

第一篇　否定道

創世記第一章を見ると、天地創造の当初、神は光と闇とを分けた、とある。自然界に光闇の二相が交替するにつれて、生命体は動と静の二相を現ずる。即ち昼間には動き、夜間には眠る。これは自然の秩序である。それなのに人間はいつの間にか、光に善を結びつけ、闇を悪と関連させるに至った。ユダヤの神話によれば、アダム・エバの神への不従順という原罪が、闇を悪に染めたというものである。神人の縦の関係、即ち神意が成るところに義があるのだが、この義が破られた。即ち人間は不義の子となった。これが罪びとの相である。それを闇といい、無明（仏教的表現を用うるならば）という。この詩篇で「悪の徒」

5 「義人」（ツァディーキーム）ツァッディーク〔単〕、律法に即して義しい人（創二三・七）。その言行において正しい人（ヨブ一七・九）。神の嘉し給う実存の人、（創六・九。イザヤ三・一〇）、神は義人（申三二・四）。この語は「義」（ツェデク）という語から来ており、「義」は全聖書を貫く最も重要な脊椎骨的な語である。

（レシャーイーム）というのは、新約的な言葉でいえば、「不義の徒」である。傍若無神で、平安なき徒輩である。人間界のそのような罪性が自然界にも投影して、大自然にも大なる不調の嘆きが生じた。このことはパウロがロマ書八章で「我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを」（ロマ八・二二）と言っている通りである。

ともあれ、自然現象が光闇の交錯の中に生滅してゆく如く、人間生活は善悪錯綜の濁流に浮沈している。けれども是れは有るべからざる状態である。人の生活様相には、静動の交代はあろうとも、善悪の混交は有るべきではないからである。性来の人間は、善を欲しても、それは悪に対して決定的に抗争（プロテスト）するものではない。悪を否定し、罪と戦わんとすればついにはパウロと共に、善に無力な性来の自己を直視し、「噫、われなやめる人なる哉、この死の身体より我を救わん者は誰ぞ」（ロマ七・二四）のなげきに陥り、性来の意志、即ち自由意志の無力をルターと共に告白し、キリストの十字架が、自我、我執を瞰った贖罪を全的に信受しなければどうにもならない。「罪のゆるし」とはこのことであり、我執からの解放であり、性来の自由意志の否定である。悪とか罪とかの否定は、実は性来の自己の否定、我執の捕虜となっている自己の否定を、観念的にではなく、具体的に、最も内的な体験としてなすことである。それは、キリストの十字架に於ける自己否定を焦点としなければならないのである。

ところで旧約の世界に於て、イスラエル民族が拠って以て立つべき立場は何処にあったのか。彼らは単なる処世道徳や諦念悟道の如きを、その生活の規準にしていたであろうか、否！　彼らにとって罪過の第

一義は神に対してであり（詩五一・四）、思念言動のすべては、神に隠れなきことであった（詩一三九）。それは彼らの生活を律する規範は、エホバとその律法であったからである。神は聖であり、律法は聖く、その一点一画も過ぎゆくべからざるものであった。それ故、これを遵ることは彼らの義務であった。然らばその義務の対象たる中心的善は何であったか。それは律法の根本精神たる、「心を尽し、精神を尽し、力を尽して、その唯一の神エホバを愛する」ことであった（申六・四、五、一〇・一二、三〇・六）。即ち善の主体は、律法に忠実にして、エホバに貞節ならんとする誠心であり、善の客体は、エホバとその律法であった。

この具体的な善にこそ、イスラエル民族の存在の意義と使命があった。神から律法を授かった彼らには、「昼も夜もこれを憶う」ことは、ギリシャ人の如く思弁することではなく、克くこれを学び、且つ之を行うことに外ならなかった（ヨシュア一・八）。無論、世を経るに従い、律法が儀文に硬化し、繁雑となり、生活が形式に堕した事実は明かであるが、律法の精神を実践することは、彼らの無上の義務であるのみならず、衷心の歓喜であらねばならなかった。

それならどうして「エホバの律法にこそ、その歓喜がある」ことが可能であったか。他なし。彼らは実践道徳の民であるよりは、寧ろ信仰の族であったからである。エホバにこの民が、ノアの古へから、如何に選ばれ、愛せられ、如何に鍛えられ、約束をもって励まされたかを顧うとき、誰か忠信なるイスラエル人の血に、聖言信従と聖法思慕の熾烈なるものがあるをあやしもう。そこでわかるのは、彼らにとって唯

一の真理なる聖法（広義に於て）を思慕せしめ、これを実践せんとの意志と歓喜とを与えたものが、歴史的にも、論理的にも、モーセ律法以前の或るものにあったことを。

是れ即ち、エホバがこの民を信ずるその信の力であった。神の力！　神のこの民への信！　これを措いて彼らに、聖法を想い且つ歓んで是れに生きる立場、不信邪悪と戦って拠るべき力はなかったのである。かの預言者的霊的人物が、その歴史の初期――アブラハム――から唱道してやまなかったものは、このエホバの信愛に応うる絶対的信頼であった。預言者（広義）こそは、エホバの律法の本質を体して、超律法の世界を濶歩した者である。然り、彼らにはエホバ彼自身の外に聖法はなかったのである。

聖法！　全宇宙を統べ、全歴史を貫く聖なる意志であり、発しては「光あれ！」の霊言となり、現われてはかの民族をエジプトより率き出だす行為となった聖法。この聖法の成るがままに、と念じ、これにその身縛せられて動く者は恵福である。彼こそは最も自由なる人である。聖法は光よりも輝かしく、闇よりも隠れたる道である。聖法一切か、人智本位か！　択るべき途は孰れか一つのみ。人生到るところに岐路がある。しかも人生に岐路は唯だ一つのみ。「悪の徒の謀略（はかりごと）」を斥け、「罪びとの途」を拒み、「嘲者の座（あざけりのざ）」を否むは、聖法に生きる者のみの敢て為し得る積極的否定である。

義の法則と愛の摂理の綾なす聖法に対して、絶対の信頼をおく天から賜った第二の意志（新しき我）は、この人智中心の社会、虚栄虚偽の巣窟、功利打算の生活、不虔不義の現世において、道はただ否定に在りと断ずる。曾て如何なる真の行為が、この世への「否」を以て始まらなかったか。神の意志に捉えら

れた彼らは、否定道をひき廻された。ノア、アブラハム、モーセ、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、パウロ、アタナシウス、アウグスティヌス、フランシス、ダンテ、ザヴィエル、ルター、ウェスレー、わが内村、藤井、等々、その存在は秋の世に闇を否定する星辰の光！　真理は否定に在る。いつか審判の大いなる日が来て、最後に悪が闇から絶滅し、神の意志と理念が全く成就する期まで、この道は続かざるを得ない。

人生の旅の始めに、はや枕する処のなかった人の子は、十二の少年にしてすでに父母の家路を拒まざるを得なかった。また三十路を越ゆる頃、曠野と飢餓の中でただ独り、不信の大敵を三度び否み退けた。遂には弟子の何びとも従い得なかった否定道を辿りつめ、何処に到りついたのか。ゴルゴタに！　しかも彼自身、「わが意志」を「汝の意志」を以て否定し、「汝の聖意」の大肯定なる十字架の上に身を曝した。実にキリストの十字架道に優る否定道が何処にあるか。

「わが神、わが神、汝ぞ我を棄て給いし」（詩二二・一、マタイ二七・四六）の絶叫にこもる神義の叫びは、「父よ、彼らを赦し給え、その為すところを知らざればなり」（ルカ二三・三四）の贖罪愛への転入となる。

しからば、キリスト・イエスの徹底的自己否定道によって成就した義の道は如何にして可能であったか。彼の中に聖霊が充満し、聖意を欣んで肯定して、我意を否定する力があったからである。我意のみではない、サタンの霊に打ち勝ち、凡そ神にそむく一切の事態を否定し、相手が大祭司であろうと、パリサイ、サドカイの徒輩であろうと、ローマの官憲であろうと、否定を貫き、天下無敵の勇者で彼はあった。彼にとって愛は敵を否定しながら、これを荷って救うことであった。これが聖霊がもっている愛である。贖罪

愛である。

自己なき、無私の無的実存の、この否定道は「エホバの僕」の道で、イザヤ書第五十三章がキリストのこの道を預言していた。

それゆえに、我々がこの否定道を行ぜんとならば、ロマ書七章のパウロの悲痛の叫びたる「この死の身体」我執の捕虜たる存在を、十字架という贖罪門を通って、聖霊のキリストの中へと投身するのほかに道はない。パウロが「我れキリストと共に十字架せられたり、我れ生く、されど我に非ず、キリストわが中に生き給うなり」（ガラテヤ二・二〇）といった、その「キリストわが中に」とはキリストの聖霊がわが中にということの他何ものでもない。十字架の大否定道を賜ってこそ、聖霊の大肯定道を往くことになる。

そのときはじめて、その存在は「水の流く辺に植えられた」木のように、枝葉が伸び、花が咲き、実が結ぶのである。これはキリストと神の栄光のあらわれであって、生涯が讃美となる。

詩篇第二篇

1 何ゆえに諸民は立ちさわぎ、
諸国は虚しきことを謀るのか。
2 地の諸王は立ち構え、
群伯(おさら)はもろともに論議(あげつら)う。
エホバに背(そむ)き、その受膏者(メシヤ)に逆って。
3 「我らいざ彼らの桎梏(かせ)をうち砕き、
我らより彼らの繩目を棄て去ろう！」
4 天に坐し給う者うち笑い、
主は彼らを嘲り給う。
5 かくて彼は憤怒(ふんぬ)のあまり彼らに言辞(ことば)を発し、

本篇は「メシヤ詩篇」として二〇、四五、六一・七二、八九、一一〇、一三等を参照。特に八九を。

1 「虚しきこと」（リーク）この一語にルターは全詩の鍵を見た。宗教的な「虚しきこと」は偶像崇拝である。創六・五、詩一四・一―三等と合せ思えば、世俗的なねたみ、あらそいのすがたがわかる。

第一行、第四行は完了形、第二、第三行は未完了形、動的事件の躍如たる表現。訳文としてはむしろ現在的な表現とした。

2 「受膏者（メシヤ）」（マーシーアハ）、ギリシャ語ではクリストス。

神政に与る王（サウル、サ前八・七、ダビデ同一六・一三、サ後一九・二一、ソロモン代下六・四二の如き）、祭司（出三〇・二二―三三、レビ八・一〇―一二、詩一三三・二）、族長（詩一〇五・一五）、預言者（六一・一―三、但し預言者の場合は内的霊的次元が高い）等がその職またはその使命を負うとき、首に聖灌膏をそそがれたことに由る。聖別され、神霊の降下を蒙った者。詩篇において王たるメシヤに関連する例は、二・二、一八・五〇、二〇・六、二八・八、八四・九、八九・三八、五一、一三二・一〇、一七等。キリスト・イエスへの預言と思われる信仰的判断においてメシヤ預言ということになる。

4 「うち笑い」（イスハーク）詩三七・一三、五九・八参照。アブラハムもサラも老年で子が生れることを笑った。そこで生れた子に神から「イスハーク」（イサク）と命名すべく命ぜられた（創一七、一八）。

憤激をもて彼らを顚わしめ給う。
6 「されど我は立てたるぞわが王を
わが聖山シオンの上に！」

7 私はエホバの神命を宣べよう、
彼は私に宣うた、「汝はわが子、
我は今日こそ汝を生んだ！
8 我に求めよ、さらば我は与える、
汝が嗣業として諸々の国を、
汝が有として地の極までを。
9 汝は鉄の杖で彼らをうち破り、
陶工の器の如く彼らを砕く。」

10 さればいざ諸王よ賢くあれ、
警告をうけよ地の審士ら。
11 畏敬をもってエホバに仕え、

6 LXX（七十人訳ギリシャ語旧約聖書）によると「されど私は彼によって置かれた、彼の聖山シオンの上に」。(Gk, Dh, Bt はこれに拠り、Kl, Kg はM原典を支持する。訳者はMに従った。)

戦慄(おののき)をもって歓び、
12 子に接吻(くちづけ)せよ！
彼怒って汝らが途に亡びないために。
その怒はたちどころに燃え立つから。
恵福なる哉、彼に信頼するすべての者は！

第二篇　メシヤ預言

詩篇第一が、個人の実存の根本問題、人生行路における実践問題とそれに由る福祉を説くものであるならば、第二篇は、個人の有機的団体としての国家の在るべき態度、国家存立の原理及びそれに関わる歴史の課題を示すものと言い得よう。前者が実存の基本的真理の故に全篇の序詩に据えられたとするならば、後者はその時代的背景が必然的契機となって詩篇第一巻（一―四一）の序篇たるの位置を占めたものと思われる。我々は今この詩の本義の把握を試みたい。

「何ゆえに」と詩人は異常な憤激をもってまず問題を提起した。それがいかほど現実には顧られない警告

12「子に接吻せよ！」（ナッシェクー・バル）「子」という語がアラミ語の「バル」で、ヘブライ語の「ベン」でないので、この警告に対外的要素もうかがえる。「接吻せよ！」は強い表現が用いられている、「あつく、ながく、接吻せよ！」といった語調。

であるにせよ、現実の諸国の不穏な状態とその原因を明察する詩人にとっては、黙すに堪え難い発言であった。問題の提起者たる彼は、その解決の原理をしかと把握している。しかしそれが実現の至難をも彼はひそかに洞察していたであろう。にも拘らず、偉大な確信は理想を遠き彼方にのみは見ない。理想は遠くして且つ近い。しかし彼の理想の解釈の側には避けがたい錯誤があった。

詩人の魂は何処に腰を据えてものを言っているのか。彼は、天翔りて清火天に昇り、この真白き薔薇の王国を訪ねたダンテの如く、神の聖座近きあたりに侍り、そこから此処擾乱の巷を瞰下していたと言い得よう。誰か混沌の世の一隅に居て、世の暗影を一眸におさめ得ようか。真に罪の何たるかを知る者は、罪を贖われて義とされた者である。真に世の汚濁を観るものは、その心この世には死んだ者の眼である。その如くこの力ある詩人の眼は神の光に滲透されていた。地のもろもろの主権者、代表者の相議し相論ずるところ、さまざまの民族、国人のざわめき求め、いらだち謀るところ、その究極の目的は何か。神への反抗である。聖なる経綸の蹂躙である。彼らはそれが恰も跳躍を試みて地球を蹴得たと思うほどの愚挙であり、一石を投じて大海に波瀾を起し得たと信ずる程にもの狂おしいことであるのを知らない。彼らはまた何をもってその拠所としているのか。

天からこれを臨めば、彼らは風を喰い、また泡を呑む者の如く、藁に縋りまた水をつかもうとするに似ていないか。凡そ此くの如きは天に坐する者をして破顔一笑を禁じ得ざらしめる戯事。もう一人の実在者からも嘲笑の的とならざるを得ない醜状。さて聖なる神が笑い嘲るというが如き表現は詩的妄想の所産で

あるか、詩人の戯言であるか。それとも所謂「心理的擬人観」の譏を招くものであろうか。科学的実在性と文化的実感性においてのみ意味と価値とを見出そうとする「余りにも人間的な」近代人には、旧約の世界における生き生きとした実体験、霊的実在者に直面する厳かな事実を知る由もなかろう。「神の嘲笑」という皮肉な表現の奥にひそむ深い憐憫を想う。

神の笑いはまた憤りに転ずる。神の愛がときに怒として現われるように。彼の聖憤は聖言に発し、その聖言は聖業に現われた。それは何処に実現したのであるか。彼の「聖山シオンの上に！」そしてそれは何時であるか。「今日！」である。そしてそれは何びとにであるか。「エホバの受膏者（メシヤ）に」。即ち神政の王者に、しかも詩人その人に！　今日こそ彼は立たしめられて、神と父子の関係に入った。神の選びと宣言に由らなければ知り得ない自覚であり、与えられなければ有ち得ぬ特権である。彼は世界の統治者たるの大任を負わしめられたと信じた。野心が彼を立たせたのではなく、神の要求が彼を捉えたのである。そこにこそまことの責任と義務とがある。王権は神への信従においてのみ全うされねばならない。

しかし彼が現実に世界を統治すべく神から委ねられたかどうか。国運隆々たるソロモンの自負か、或は独立に意気揚々たるマカビウス時代の過信か。そして現世のメシヤに対する期待は、ダビデをその預言的存在として仰ぐとも、イスラエル民族の自負による宿命的禍根ではないか。現世の王は断じて神の位置に立つことをゆるされない。世界の統治はただ神のみの聖業にして犯すべからざるものである。さもあらばあれ、祝福されたこの誤信よ！　この誤信に偉大な歴史的課題が秘められていた。エホバが曾つてある夜

ナタンに告げ給うた言（サムエル後書七・五―一六）は、かの王者ダビデにおいて目覚ましき応答を得たとは言え、果してそのための預言であったかは知る由もない。またこの王者の偉大な自覚は、現実には幻滅と悲劇に終らざるを得ないものであったにせよ、その言の奥に潜在する真理そのものは、やがて歴史の上に驚くべき啓示の事実として生れ出づべき預言であったのである。特に「我はかれの父となり、彼はわが子となるべし」（同七・一四）との一言は不思議な冥合となった。神は機に臨んで、そのとき最も適切な言を与え給う。そこに預言の本質がある。その実現が遠き未来であるか、近き将来に於てであるか。それは神の側の秘義で「父のみぞ知り給う」ところである。そういう不可知的なものでありながら、つねに迫りをもった質的なものであるところに終末的という意義がある。預言というものは、大洋をそれとなく点綴する島嶼の如きものである。舟人は風波潮流になやまされ、雲霧暗夜に進路を失わんとして、始めてその島のそこになくてならぬ意味を窺知し、いつか図らずも岸高き不滅の国に着いて見れば、かの島々こそいつしか舟人を目的の王国へ導いて居たものであるということを知るのである。預言の島は寂しい。その島の言は世の言と調子がちがう。その島の主（ぬし）たる預言者すらも、究極の意味を知らない。神の言であるからである。あるとき特別の意味で、「汝はわが子」という声を聴いた人があった。彼はその後、人には斥けられ、神にすら棄てられたが、

「我は今日こそ汝を生んだ」

という事実は、その人に永遠の真理となった。何となれば彼は全く逆説的に、地上では「神の僕」とし

て聖意を体現し、天界では霊の王者、メシヤとして、霊界から霊油たる聖霊をそそぎ、万人救済の本願をもって、世の終末まで、「地の極まで」救のわざを進めて在り給う。

この詩篇には「子に接吻せよ」[12]という大胆な表現がある。しかもそれは「畏敬をもって」[11]「戦慄をもって」[11]という前提のもとである。即ち平伏しの魂、砕けの心をもってメシヤに信頼、托身、投身せよとの意である。メシヤは抱き荷って下さる。聖霊の力が臨む。聖霊はそのような白熱の愛の霊である。イザヤもエレミヤもホセアもミカもヨエルもマラキも預言者は皆夫々の契機と使命においてメシヤの霊にあずかり、キリストを知らずして預言していたのである。

「恵福なる哉、彼に信頼するすべての者は！」これを新約の光でよむとき、「恵まれたる哉、彼キリストに托身し、聖霊を受けてキリストの力に与かるすべての者は！」ということになる。「信頼」とは主観的に、依り頼むといったくらいのことではない。自分の信仰も実存もあてにならない。あてになるのはメシヤ、キリストだけである。だから、あるがままの自分をキリストの中に投身して一如となる、そういう現実である。それが救贖である。そこに預言の目的がある。

詩篇第三篇

(1)　ダビデの絃歌　その子アブサロムから遁れたときの。

1 (2)　ああ実存主(エホバ)よ、何と増し加わるかわが敵は！
　　何と多きや私(わたし)に起ち向う者は。
2 (3)　何と多きやわが魂に向って言う者、
　「救は彼に神からありはしない」と。　セラ
3 (4)　だがあなたこそは、エホバよ、私を囲む楯。
　　わが栄光(さかえ)、わが首(こうべ)を擡(もた)げ給う方(かた)！
4 (5)　大声で、エホバに私はいつも呼ばわった。
　　そのとき彼は応え給うた、その聖山から。　セラ
5 (6)　私は、寝た。眠った。目さめた。
　　エホバが私を支え給うからだ。

1「実存主(エホバ)よ」。エホバは周知の如く、本来「ヤハウェー」という神の名。ヤハウェーは「ハーヤー」という動詞から来る。これは「生起する」「存在する」「実存する」意。だから、動的な「実存者」の意となる。その「ヤハウェー」という聖名を経典をよむとき「アドナイ」と訓んだ。これは「わが主」の意。ヤハウェーの子音と、アドナイの母音を交ぜて訓んだら、「イェホーヴァー」となった。そういう誤読がわかったのが前世紀のことである。学問的には「ヤハウェー」であるが、私は歴史的な訓み方「エホバ」に従う。というのは、「実存者にしてわが主」という意味が、この「エホバ」という訓み方にふくまれて、却って、内実があると思うからである。「エホバ」は即ち、「実存主」ということになる。

2「セラ」節後附記のこのしるしは、一般に絃歌にあるので、次節から絃音か声音を「高める」か新たな伴奏を「起す」附号と思われる。

4「大声で」(コーリー)「わが声」という謂わば投げ出したような表現。

○　さてこの第三篇に「その聖山から」とか、第八節の如き句があるので、ダビデの言葉とはうけとれない、と大方の学者が判断するが、アブサロムの叛逆に遭ったときは既にエルサレムは都となっていたから、聖山シオンを中心に考えてさしつかえないわけである。終句の祭司的な祈りも、何も祭司に限らず、王者の祈りとして不可ではない。

6(7) 私は怖れない。千万(ちよろず)の民が
私をとり囲んで立ち構えようとも。
7(8) 起ち給え、エホバよ！ 救い給え、神よ！
あなたはわがすべての敵の頬骨(つらぼね)を撃ち、
悪い奴らの歯を砕き給うた。
8(9) エホバにこそ救はある。
汝(な)が民に汝(な)が祝福のあらんことを！ セラ

第三篇 ダビデとアブサロム
——ダビデの晨の祈り——

私はこの絃歌第三篇は、次の第四篇と共にダビデの姉妹篇として、「晨の祈り」「夕の祈り」の伝統に従いたいと思う。

妹タマルのために兄弟アムノンを殺害してから、ゲシュルに隠れること三年、エルサレムに居ること二歳。しかも父ダビデの目を避けていたアブサロムにはすでに或る野心が萌していた。ダビデに一抹の憂色なきを得なかった。眉目秀麗才気無雙の御曹子アブサロムはまことに藍より出でて藍より紺(あお)き王子であった（サ後一四・二五）。更に流れた四年は彼に何を齎らしたか。人心は彼に服し、父王の議官アヒトペルは

既に薬籠の中にあった。彼は期を謀ってダビデを詐り、その間密偵を遍くイスラエルの支派に遣わし、事の次第を露知らぬ二百の者をひき具してヘブロンを指して進む。子を信じて神に事うる者となし、「安然に往け」と祝したのはダビデであった。ときならぬ喇叭の響はヘブロンの空に戦雲を呼び起したのである。エホバは天に在ます！　けれども王座は地に揺ぎ、乱臣賊子のため、無比の勇者ダビデも今は、「起てよ、我ら逃げん」という悲痛の一言と共に都を落ちゆく敗者となった。

いかなる宿命の戯れか。アブサロムとは「父は平安なり」との意なるに、愛の絆は叛逆を以て断たれつつある。しかのみならず、見よ、雲霞と紛う敵勢を！　また「救は彼に神からありはしない」とは聞き知らぬ者らの嘲罵ではない。かつて一度び大きな罪を犯したとはいえ、彼の心はすでに平伏し、砕かれて今あるはただ信頼の一途。エホバは彼の拠所また栄光である。そうではあるが反逆の民の嘲笑は皮肉にも古き罪業の疵跡と現実の流落の身を喰むのである。けれどもこの時こそ彼は瞭然と知ったのである。おのが立場も存在も、その原因も目的も方法も、すべてが唯だエホバであることを！　その牧場から呼び出し給うたあの夢のような少年時代から、波瀾重畳絢爛多彩の生涯を今まで導き給うたのは唯だ彼の深き意志と愛であったことを。

「だが汝こそは、エホバよ、私を囲む盾。……」とは魂のどん底からの叫びであった。讃美の底には平安がある。「私は、寝た。眠った。目さめた。」敵前のこの事実、信頼の勝利はこの一句に尽きる。全身を神のみふところに全托の眠り。知らぬ間に霊気をたましいが吸っている。それで力が湧き立つ。千万の民

が背くとも、何かあろう。後年カーツームの籠城空しく、その義血を濺いだ無剣の将軍ゴルドンに枕を高うせしめたのは此の如き一句ではなかったろうか。信実は信実を呼ぶ。放浪の王にも忠臣が現われた。それはいったい誰だ！　異邦の市ガテのイッタイがその人であった。

「誠に王わが主いかなる処に坐ますとも、生死ともに僕もまた其処に居るべし」と（サ後一五・二一）。「海ゆかば水つく屍、山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ」。東西志士の言相応えてゆかしき限りである。子に背かれて却って見知らぬ者に信頼されたのである。顧うに、イスラエルは神に逆って異邦人が却って神を仰いだのである。受難者ダビデの心痛に、我らは神の嗟嘆を思う。ダビデの祈禱は徒らにその懐に還らずしてアヒトペルの計策は神これを愚かならしめ給うた（サ後一七・一四）。けれどもダビデは飽くまでも己れを迫むる子を撃とうとはしなかった。サウルの族のシメイが大音声に、「汝血を流す人よ……」と非道なる呪咀を浴びせた時も、彼は怒り立つ臣等を鎮めて、「視よ、わが身より出でたるわが子わが生命を求む、況んやこのベニヤミン人をや。彼を聴して詛わしめよ。エホバ彼に命じ給えるなり」と諭した。驚くべき大度、赦免の心！　終にヨアブがダビデの禁令を無視してアブサロムを槍にかけたのを知ったときの彼の切々たる悲嘆は！

「わが子アブサロムよ、わが子、わが子アブサロムよ！

嗚呼われ汝に代りて死にたらんものを！　アブサロムわが子よ、わが子よ！」と。

さきにはサウルの執拗な追迫に報ゆるにあの忠節と信頼を以てしたダビデ。彼れと此れとを想い合せる

とき、ヨアブの言が図らずも偉大な真理を表明したことを知る。「汝はおのれを悪む者を愛し、おのれを愛する者を悪むなり……」（サ後一九・六、七）。

まことに愛し果せたのである。然り、彼は叛逆の子のためにおのが生命を棄てんと欲した。

「ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、……」人の子は誰の為にその生命を！

ギデロンの川を涙ながらに渡った者の野のほとりの祈りは永く晨の星が黙示する。

「エホバにこそ救はある」と。

「ゆかしき神のおもいに融けゆくわが心は
露けき朝の息吹きにいきづく野べの花か」

（讃美歌三〇番）

詩篇第四篇

(1) 楽長に絃器の伴奏をさせたダビデの絃歌

1(2) わが号叫に応え給え、わが義の神よ！
窮地を私のために濶くして下さった。
憐み給え、わが祈りを聴き給え。
2(3) 人の子らよ！ 何時までわが栄を恥にするのか。
汝らは虚しきを好み、偽りを慕うのか。セラ
3(4) だが知れ、エホバは恵信者を
おのがため別ち給うたことを。
エホバは聴き給う、彼に私が呼ばわるときに。
4(5) 憤るがいい、ただ罪を犯すな。
汝ら臥床でおのが心に語って黙せ！ セラ

1 「楽長に」（ラメナッツェーアハ）動詞ナッツェーアハ（ピエル型）は「指揮する」意。代上一五・二一に「拍子をとれり」がこれ。聖歌隊の指揮者、「楽長」は「メナッツェーアハ」。祭事、礼拝等に当ってレビ人の歌班を指揮した（代上二五・一―八参照）。このような詞書のある詩篇は五十五ある。

「絃器の伴奏をさせた」（ビネギノート）「ネギノート」絃器は竪琴、琵琶の類。ダビデがサウルを慰めるために弾いた絃器は、キンノール（サ前一六・一六、二三）。詩三三・二の絃琴でネーベルという。後者は竪琴に、前者は琵琶に類するという。

2 「人の子ら」（ベネー・イーシュ）社会的地位高き人々。内面的に優れた人。詩四九・二「貴き人」、六九・九「高き人」参照。ここではアブサロムやアヒトベルの輩に対する反語的表現。反之、「人（間）の子ら」（ベネー・アーダーム）詩四九・二「賤しき人」、塵より出でて塵に還る人間一般。

3 「恵信者」（ハーシード）、普通は「聖徒」、「敬虔者」と訳す。しかしこの語は本来「ヘセド」愛、恵、恩沢、といった意の語から来た語で、神の恵みを信受する者、という語義と思うから、「恵信者」という新訳語を考えた。エペソ二・八参照。

5(6) 義の供物を献げよ、エホバに依頼め！
6(7) 多くの者はいう、
「誰が嘉きものを我らに見せよう」と。
聖顔の光を我らの上に掲げて下さい、エホバよ！
7(8) あなたはわが心に歓びを与え給うた。
彼らの穀物や新酒が豊かであった時よりも更に多く
8(9) 全く安らかに私は寝る、そして眠る。
それはあなたが、エホバよ、
私を独りで平安に処らしめ給うから。

第四篇　神の義に平安あり

――ダビデの夕の祈り――

ダビデに悲痛な経験を嘗めしめたのは、その子の叛逆であった。しかしその源を原ねれば、罪は自分にあった。彼の乱倫の非行は王朝を血ぬらずしてはやまなかったのである。誰か畏れざる、神の「憐憫は審

判に向って勝ち誇る」とはいえ、審判は儼として一度び悔改の彼方においてすらも実現することを！　辜なきウリヤの血は地より叫びこそせね、何者かこれが執成をなして、罪と罰の鉄則の成就を要求するのであった。しかしまた罪の果を刈り取りつつも、ダビデはその全き悔改の心を以て、憚らず神の前に出ることができた。ダビデがロゴスの実在者（詩一一〇・一）を知ると知らざるとに拘らず、神は彼の信頼を嘉し給うた。神との和解なくして彼にこの祈りはなく、この平安はなかったのである。

背信、虚偽、奸策、罵詈、落魄に囲まれて、今や老いたる己れの心境を知る者なきの期、彼は人の心腸を見給う者に向って、「わが義の神よ！」（エローヘーイ・ツィデキー）と叫び出でざるを得なかった。これはまことに重き一言である。聖書は他の何処にもこのような発言を記さない。彼は神におのが正体を指摘されてから、まことの謙虚を学んだ。「恵信者」とは今や彼の超主観的自覚であった。これは神を主体とする語である。

ダビデはその生涯においてしばしば窮境に陥ったが、神は必ず活路を拓き給うた。エンゲデの野の経験（サ前二三・二四―二四・七）の如きもその著しきものであった。それは必ず彼の魂が神をのみ相手としている時であった。自己を求めず、神の聖意におのが願望を明け渡している時であった。人間ダビデは罪過と失敗の経験を通して、神の義は限りなく厳かなものながら、深い赦しを秘めているものであることを知ったのである。これ、何たる発見であろう。即ち知る、神との和解は神の義の中に存せしことを。想え、若きルターが、「神の義」の何たるかを知った鍵は、正に同じくダビデの祈り「あなたの義によって

私をお救い下さい」（詩三一・一）であった。信ずべくもあらざる者をなお信じ、望むべくもあらざる者を望み待つ神の義は痛ましい。この神の義は罪びとに対する愛となって砕けるのである。

それでこそ、「わが義の神よ！」[1]即ち、「神はわが義なり」と叫んでダビデは神の義の中に独り立ち得たのである。神命に由らない王位が何か、アブサロムの野心の虚しさよ。信義なき友らは何の頼みとなろう。アヒトペルの背反の醜くさよ。ダビデは嘆く。「人の子らよ、何時まで虚しきを好み、偽りを慕うのか」[2]と。人の在るべき義しき唯一の態勢は神の直下現前、神に向っている相である。その他、おのれを見たり、他人を見たりしているすがたは皆虚しい。本ものでない。そこには平安は臨まない。アウグスティヌスの告白の如く、「汝は汝自身のために我らを創造し、我らの心は汝の中に安らうまでは平安を得ない。」まことに神の「聖顔の光」[6]を措いて慕うべき嘉きものはない。神の与え給う「歓喜」は神自身を有った者でなければ味い知らぬところである。悲境に在りながらダビデは王位の奪還を祈っては居ない。王座や「穀物」や「新酒」を失って獲得したものは何か。神である！　その歓喜である。暗黒の谷は彼にとってさながら光明の峯であった。彼の従者の中、誰かまた知るダビデのこの平安を！　この神に何の献物か、砕けた信頼の心を外にして！

「全く安らかに私は寝る、そして眠る。
それはあなたが、エホバよ、
私を独りで平安に処らしめ給うから」

正に神のふところに息づく者の夕の祈りの声である。独りあるとき、即ち神と唯二人きりであるときにのみ全き平安ありとは、何と人の魂が相対界ではどうにもならず、絶対界を要するかを証するものである。換言すれば絶対の無力である。さればこそ神の力を宿して絶対性に触れるとたましいはいかに尊厳無比なるものであるかを語る告白である。永遠の義は神に在る。その神との絶対関係に入ったとき、その義が与えられ、義への渇きは満たされる（マタイ五・六）。そこに魂の平安がある。

ユダヤの曠野の一角、流浪の旅寝において、神を「わが義」と呼んで憩うたダビデの奇しき平安は、黄昏に眠る死海の静波が調べ永くも囁いて居よう。

「静けき夜な夜な　臥し寝ぬるごとに
みそばの憩いを　想わしめたまえ」

（讃美歌三八番）

詩篇第六篇

(1)　楽長により絃琴伴奏第八音を以てしたダビデの絃歌

1
(2)　エホバよ、聖怒を以て責め給わざれ！
　聖憤を以て懲らしめ給わざれ。
2
(3)　エホバよ、憐み給え、萎えています私は。
　エホバよ、医し給え、戦慄いていますわが骨は。
3
(4)　わが魂さえも甚く顫えています。
　エホバよ、こうしてあなたは何時までですか。
4
(5)　帰り給えエホバよ、救い給えわが魂を。
　助け給えあなたの恩寵を以て。
5
(6)　まことに死んではあなたを憶うことなく、
　陰府にあっては誰があなたに感謝できましょう。

1　「第八音を以てした」（アル・ハッシェミニート）原語は明かに「第八に」という序数を表わす語。代上一五・二一、詩一二にあるものと同様、低音（バス）第八を基調とした弾き方を意味すると解釈したい。（GS）

○　本詩篇はいわゆる「七つの悔改の詩篇」（六、三二、三八、五一、一〇二、一三〇、一四三）の最初のものである。しかし叙情詩というものは一つの詩の中にいろいろな感情の波や内容的な変転があって、概念的な範疇定めのしきれるものではない。

○　本詩篇の響きはいかにもダビデにふさわしいと思う。「ダビデの」とある詩篇の少なくとも原型はやはりダビデに帰したいと私は思っている。

6 (7) 私は疲れた、わが呻吟のために。
夜な夜な私は床を漂わせる、
涙でわが褥を溶かす。
7 (8) 衰えた、わが眼は悲愁のために、
老いた、あらゆる敵のために。
8 (9) 退け、私から！ 汝らすべて邪悪をなす者ら！
エホバがわが涙の声を聴き給うたから。
9 (10) エホバはわが切願を聴き給うた、
エホバはわが祈禱を受け給うた。
10 (11) 甚く恥じ踉てるであろう、わが敵はみな。
彼らは退き、遽かに恥じらうであろう。

第六篇　涙

この詩が我々に印するものは何か。虔しき戦きを以て嘆き祈る魂とその上に臨在する神。これは余りにも現代人とは関わりのない世界の消息である。眼を転じて我々人界のすがたを見るに、物質文明に欲心がゆらめき、文化的栄華にたましいが奪われている。衣食住の百貨の偶像を趁う民衆あれば、学芸の殿堂に拝跪する智識階級があり、不動産や大企業に安住する金権者流あれば、政権闘争に国民を食いものにする政界財界がある、といった様相が大半ではないか。意欲の対象にとらわれている自己、即ち我執というすがた、これが人間のどうにもならぬ現実である。この自己欲がさまざまな仮面のもとに右往左往している個人であり、社会であり、なお且つ国家であり、世界である。

民主主義という、それはどう見ても人本主義である。しかしそれが果して究極の真理か。主義というならもう一つ次元のちがった主義があるはずである。神主主義とでもいうべき、神本主義である。民主主義は、謂わば天動説である。天動説にコペルニクス的転向をもたらしたのは地動説であった。地球が太陽にひき廻されていることは物理界の真理となった。人間界が本来、神に、霊的実在者に依存しているもので

あることに目ざめるのが、たましいの世界のコペルニクス的転向ではないか。神中心の人生道、世界観に立ち帰らねばどうにもならないところに二十世紀の世紀末は来ている。しかし何とこの事態から現実の世界は、日本は、遠ざかっているか。危機的現実である。

ともあれ、この詩の作者は聖憤を畏れ、平伏して神の憐みを乞うている。骨までも戦慄していると告白している。どんな罪過を犯したのか。作者がダビデその人であるとすれば「ウリアの妻たりし女」（マタイ一・六）を奸策を用いて娶った罪（サ後第十一章、第十二章）を顧みて、みゆるしを乞うているのであろう。自分では、神の前に帰りゆくこともできない。「帰り給えエホバよ」[4]と呻いている。神があわれみをもって、神の方から顧みて帰って来て下さい、とはどん底にある人間のぎりぎりの叫びである。人間とちがって、神はこのようなどん底の、砕けきった魂の叫びを無条件に聴いて下さる。「すべての罪を蔽う」愛が神の愛である。「助け給え、あなたの恩寵を以て」[4]と、この作者は、神の絶対恩寵にすがった。事実彼は、罪過からくる呻吟のため夜な夜な涙で褥を溶かす、と思うまで泣きぬれた。万斛の涙である。

情なき人間どもが、味方と思っていた友人たちも、況んや敵どもが、パリサイ根性を以て、責めたり、無視したり、白眼視したり、かげ口をもって非難したりする。

ダビデはサウルに対してもアブサロムに対しても、そのにくしみやねたみを信愛をもって返すことの出来た美しい魂であった。情感がゆたかなために、東洋的王者の例に洩れず、多くの妻妾をもち、人妻バテシバの美に顕いたのであった。

詩人ダビデのどん底の祈りをエホバは聴いて下さった。それで彼は立ちあがって叫んだ。

「退け、私から！　汝らすべて邪悪をなす者ら！
　エホバがわが涙の声を聴き給うたから」（八節）

おのれを義とする邪悪な者らに対して、彼は「退け！」と叫んだ。イエスの「サタンよ、斥け！」と同じく、傲慢な霊はサタンのものである。砕けた魂は神のものである。悔改の涙の一滴も有たない者を神はどうなさるであろう。あやまちを犯した者を審いて、自分たちの信仰は義しい、勝ったと思っているパリサイ連中が、天国へ往けると思っていたら、ちょっと待て、といって天国の門番に断わられ、枯葉の如く舞い落ちてゆくことがあるだろう。イエスが、「審くなかれ」と言われた言葉は、そんな力をもっている。我々はただ平伏して進もう。

かのインフェルノ（地獄）とプルガトリオ（煉獄）とを歩んで来た涙の詩人ダンテがしずかに告げた。

「いくほどか涙を流す悔罪の
　つぐのひもなくして、レテを渡るべく
　この糧の味ははるべきものならば、
大神の高き掟は破られむ」

（竹友藻風訳）

（『神曲』煉獄篇　第三十歌　一四二―五）

ダンテもここに謳っているように、罪のゆるしを受けるこちらの魂は、「悔罪」の心である。その罪の

ゆるしの恩寵を執り成した人の子は、「今は許せ」と言って、ヨルダンの川波にその「頭越すまで」自ら浸り給うた。即ち「悔罪」の要なきキリストが、我らの罪を負って「悔罪」の洗礼を受けた。そのときヨルダンの水がキリストの涙であったろう。「これわが涙なり」と声なき声が波紋を描いたであろう。ヨルダンは既にゴルゴタに通じていた。即ち十字架の贖罪に。

イエスの系譜の「ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりて」（マタイ一・六）という文字の奥に、罪過を通しても神の恩寵は現われてゆくという啓示が秘められてあった。

「イエス涙をながし給ふ」

（ヨハネ一一・三五）

詩篇第七篇

(1) ダビデの激越賦（シッガーヨーン）。ベニヤミンの人クーシュ（クシ）
　の誣言（ことば）の故にエホバに詠いしもの。
1 (2) エホバわが神よ、あなたに私は依り頼む。
　私に追い迫るすべての者から救い給え、助け給え。
2 (3) さもなくば彼は獅子の如くわが魂を掻き裂き、
　私は掠（かす）められても救手は一人もいません。
3 (4) エホバわが神よ、若し私がそんなことをしたならば、
　若しわが手に邪悪（よこしま）があるならば、
4 (5) 若し私に和（やわ）らぎし者に悪を以て報いたのならば、
　——私は私に故なく仇たりし者をさえ助けたのに！
——

(1)「激越賦（シッガーヨーン）」、「情感生活の高潮を表現したもの」（Kg）、動詞シャーガー「踏み迷う」から派生した名詞。ギリシャの「ディテュランボス」（狂熱的頌歌）と類似した格調の歌というわけになるが、「感情の踏み迷い」方には天地の差がある。ダビデのそれは信仰的道念に基づく激越の調べである。
「クーシュ」（クシ）この固有名詞は不明。聖書に記されていない物語に由るものか。或はアブサロムの死を告げた使者なるクシ人（サ後一八・三一、三二）か、またはダビデをバホリムで罵倒したベニヤミンの族サウル家の一人シメイのことか（同一六・五―八）。しかしこの詩をダビデがサウルに追われていた期間のものとみる学者は、概してサウルの僕卒の一人と見なしている。筆者はこの説をとる。

5 (6) 若しそうならば仇人がわが魂を追い捕え、
わが生命を地に踏みくだき、
わが尊厳を塵につけんことを！
6 (7) エホバよ、起ち給え、聖怒を以て！
立ちはだかり給え、わが仇の苛ちに向って。
かくわがために目醒め給え、
あなたは審判を降し給うた方です。
7 (8) いざ諸々の国民の集群をしてあなたを囲ましめ、
それをうち越えて高き処へ還り給わんことを！
8 (9) エホバは諸々の国民を鞫き給う。
エホバよ、私をさばき給え、わが義に循って、
またわが率直に従って私を。
9 (10) どうか終局に至らしめて下さい悪人の悪を！
そして義人を立たしめて下さい、
心と腎を試み給う者、義なるエホバよ！
10 (11) わが楯は神にある、心の直き者を救い給う者にこそ。

11 (11)2 神は義しき審士、神は日毎に怒り給う者。
12 (13) 人もし立ち帰らずば彼はその剣を研ぎすまし、
その弓を張って立ち構え給う。
13 (14) また是れに死の器を備え、
その矢には火をつけ給う。
14 (15) 見よ、その人は苦しんで邪悪を産み、
禍害を孕み、虚偽を生み出だす。
15 (16) 彼は坑穴を掘り穿って、
しかも作りあげたその坑穴に自ら陥ちた。
16 (17) その禍害は自分の首に帰り、
その頭頂におのが強暴は降るのだ。
17 (18) 私はエホバに感謝する、彼は義に在ますから。
讃め称える、至高きエホバの聖名を。

第七篇　サウルとダビデ

イスラエルの民が預言者サムエルに王を立てることを要求した動機は、信仰に由るものではなかったが、神はこの願いを容れ給うた（サ前八・四―二二）。父の迷える驢馬を尋ねて出て往ったキシの子サウルは（同九・三）、図らずも中原の鹿を逐う者であった。即ちサムエルに膏沃がれたサウルは「別の人」となった（同一〇・九）。一介の野人サウルは一躍して王に立てられた。しかし民がサウルを崇めて神を畏れることを忘れ、サウルが王権を知って神に従うことをしなかったとき、神政王国の本義は破れ、審判の聖手は君民を撃たざるを得なくなる。

王者サウルの胸に宿った「別の心」が試みらるべき期が来た。アマレク討伐がそれであった。彼に勝利そのものが問題となったとき、彼は「神に順うことが犠牲にまさり、聴くことが牡羊の脂に勝る」ことを知るべくもなかった（同一五・二二）。神への不従順、これはエホバにとって重大な問題であった。神はサウルを王に立てたことを悔い給うた。人を信じ給う神の悔いはいと深い。神は惜し気もなくサウルを見棄て給うた。悪鬼はしばしばサウルを捕えた。密雲が彼の心を鎖した。冷酷に見える程の神のこの断乎たる

処置！　ただ或る祈りのみが残されて。

その頃ベツレヘムの野に羊を牧して明け暮れていた少年があった。或る日突如彼は牧場を棄てなければならなかった。牧杖をもっていたその手が、琴絃に触れると神を讃える調べとなり、悪鬼はサウルから影を潜めて、サウルの心に平安が臨むのであった。羊を守っていた腕が投石の妙技を振えば、仇敵ペリシテの巨人ゴリアテは斃れたというエサイの子ダビデであった（サ前一七・四九）。

サウル、ためにダビデを愛するや大、けれどもその愛は武断政治のための一片打算の念に過ぎず、その陰にはやがて嫉妬の毒牙が伸びゆくのであった。彼の武勲が婦女の群をして、「サウルは千を打ち殺し、ダビデは万をうち殺す」と謳歌せしめるに至った（同一八・七）。サウルの嫉妬と憎悪が積極的行動に移るべき転機は熟した。文武百般ゆくとして可ならざるなきダビデには人の声望と愛慕彼を囲むとも、それは自然の成りゆきに過ぎず、彼の心を不純な野心に駆るに当らなかった。彼には牧羊の豊かさがあり、また牧人に従う羊にも勝る神信頼があった。

王サウルに対しては、惟忠惟孝ならんとの一念があっただけである。いや増しゆくダビデの実力と栄誉を妬むサウルにおいては、「更にますます」彼の存在を懼れるばかり。恐怖は不信の子である。神に託された王政の創業を果すべきであったサウルが、どうして惶しくも自ら没落の路を急ぐのか。哀れなるかな麒麟児サウル、何で義子ダビデの純忠を誤認して、信従の道を彼に阻止せんとしたか。ダビデと肝胆相照して刎頸の交りを結んだヨナタンが、父王を諫して、「何ぞ故なくしてダビデを殺し、無辜者の血を流し

て罪を犯さんとするや」とさえ直言したが（同一九・五）、それも竟に空しかった。ナヨテからの逃亡に際し、ヨナタンに、「我れ何をなし、何の悪しき事あり、汝の父の前に何の罪を得てか、彼れわが生命を求むる」と訊ねたとき（同二〇・一）、彼にとり怪訝に堪えないのはサウルの追迫であった。この間の消息を本詩の第三、第四節の詩句がほのめかしている。

「若し我に悪しき事あらば、汝自ら我を殺せ……」（同二〇・八）とまで友に切言したダビデ。それも本詩の第五節が相応えている。このようなダビデの眼底には何があったか。まことにあやしきまでに純にして深くあったのは、己れを責める王者に対する彼の信であり、愛であった。孤影黯然としてギベアを棄て去ってから、ノブへまたペリシテ人の都ガテへ、アドラムの洞穴に、ハレテの叢林に。既にして流浪の徒に長としてケイラ、ジフ、マオンの原、エンゲデの野へと、転じては隠れ、隠れては遁れ、危急、不安、窮乏、悲嘆の中に辛酸の幾星霜は流れる。

依り頼む神の守護はあった。身に武勇の覚えはあった。だがダビデに露なかったのは「敵は本能寺に」との叛逆心であった。敵はいやしくも油そそがれた主君である。ただその故に破邪の剣は鞘に黙した。「イスラエルの王は誰を趁わんとて出でたるや、汝誰れを追うや。死にたる犬を追い、一匹の蚤を趁うなり」と彼はサウルに拝跪して告げた（同二四・一七）。憶うにわが九郎判官義経が頼朝の猜疑と景時の讒訴に遭い、「義経無レ犯而蒙レ咎、功有雖無レ誤。蒙二御勘気一之間、空沈二紅涙一」と慨嘆した心もダビデの熱涙には及ばなかったであろう。ダビデはサウルの前に自己を無き者と思った。だが彼もまた人である。苦

衷を訴うべき者なくしては争で堪え得よう。その衷情の発して祈りとなったものの一つが本詩篇たることに疑はなかろう。これはサウルに対する忠信を表明する紅き血の祈りである。神の負わせ給う義のためにおのれを問題としない心である。自己を絶しての信実の死守である。かく信義に徹する心は終末的世界審判の相を洞察する。

彼のこの祈りの詩が、個人的体験から普遍的要求へ、普遍から再び個へと還りくる真実性を、その外的不調和、ドラマーティシュな変転のゆえに我らは読み誤ってはならない。ダビデはサウルを批判しない。審判はこれを神にゆだねまつる。そしてその奥には執り成す祈りがあったはずである。信愛の念深いダビデであったから。飽くなき追及迫害を蒙った歳月に耐えしめたものは忍びの愛の力であった。そして神の顧みの追跡は、敵の追跡よりも強く且つ熱くあった。誹謗も落魄も苦難も悲哀も、この「死にたる犬」を殺すことができなかった。ただ彼は神に信頼し、げにや敵をも愛している者に、何ゆえ苦難が臨むかを想うて苦しんだ。実際苦しんでみて、彼は忍びの愛の中で解決のない解決の秘義をつかんだ。彼は勝った。審判は彼のおもいを超えた方法で相手の者どもに臨んだ。人生も歴史もそういうおごそかな神の審判の下にある。また深い神の顧みの愛の中にある。人の毀誉褒貶を問題にする要はない。

サウルに関する限り、ダビデの掌は潔くあった。「罪なき手」の実証は、かの洞穴の劇的な奇しき経験において極った（同二四章）。「わが子ダビデよ、是れは汝の声なるか！」と叫んでサウルは慟哭した。しかしサウル王の不信の心は竟に帰るべきところを失っていた。砕けざるサウル王のためにダビデは心を

砕いた。既に地には亡き彼のためにもなお心を尽した（サ後四・一〇、一一）。サウルはある抗すべからざる力――サタン――のために殉れ、ダビデはそれよりも力強き力――神――に在って荷い貫いた。

「サウルとヨナタンは愛らしく楽しげにして
生死ともに離れず、
二人は鷲よりも速く獅子よりも強かりき。
嗚呼勇士は仆れたるかな
戦のうつわは失せたる哉！」（サムエル後書第一章より）

――ダビデの「弓の歌」――

詩篇第八篇

(1)　楽長によりギッティート調を以てしたダビデの絃歌

1 (2)　エホバ我らの主よ、何と輝しいかな、聖名は全地に！
　荘厳なるあなたは大空の上に崇められてあり給う。
2 (3)　幼児と乳児の口を通してあなたは力を礎えて
　敵に向わしめ給う。
　仇人と怨恨ある者とを鎮圧めんがために。
3 (4)　あなたの指の業なるみ空を観、
　あなたの据え給うた月華と星辰を観るに、
4 (5)　あなたが顧み給う人間とは何であるのか。
　あなたが尋ね給う人の子は何であるのか。
5 (6)　あなたは之を神より少しく劣らしめて

(1)　「ギッティート調を以ってした」（アル・ハッギッティート）、むしろ「アル・ハッギットート」と訓んで、「搾酒に際して」と択（と）った方が当っているかも知れない。幾人かで酒槽（ガテ）を踏んで葡萄酒を採る際に、収穫の歓喜と感謝のゆえに、合唱した絃歌があって、そんな調子を以て結茅節（かりほずまいのいわい）等の際に絃誦したものと思われる（参照、士九・二七、イザヤ一六・一〇）。なおペリシテの都城ガテに由来する絃器ギッティート、またはガテの曲調と見做す説もある。

3　「あなたの指の業」（マアセ・エッベオーテカー）の指は複数、シナイ山の石板の話における神の指は「人指し指」を暗示する単数形（出三一・一八、申九・一〇）。本篇のは「聖手を以て」というのと大差ない表現。ただ「指」と言えば、業の精細、多様性をほのめかしていると思われる。

4　「人間」（エノーシュ）、単数であるが、「凡そ人間」という総称と見る。同節の「人の子」（ベン・アーダーム）、即ち土（アダマー）から出来たアダムと同様、「はかなき者、死すべき者」という内的な意味を有つ。詩九・一九、二〇、九〇・三、一〇三・一五参照。またこの語は主としてヨブ記、第一イザヤ、詩篇に散見する。

これに尊厳と栄誉とを冠らせ給うた。
6(7) あなたは之に聖手の業を治めしめ、
すべてのものをその脚下に置き給うた。
7(8) すべての羊と牛とを、さらにまた野の獣を。
8(9) 大空の鳥と海原の魚を、また許多(いくた)の海路ゆくものを。
9(10) エホバ我らの主よ！ 何と輝かしいかな、
聖名は全地に！

5 「神より」（メ・エロヒーム）LXXによれば「天使より」となるが（サ前二八・一三参照）、この詩の内容からみて、その背景的思想は創造譚（特に創一・二六―二八、P）で、神性具有者にして万物の霊長たる霊止（ひと）が考えられているから、これは「神」であって「天使」ではない。

○ 本詩は学問的判断からするとPの影響を受けていると判定され、ペルシャ時代（前五三八―三三二）のものであるという。しかし多くの嬰児を見ているダビデの原作によるものと私は見る。

第八篇 乳児(ちご)の力

清く澄み渡った夜、曠野のほとりにただ独り佇んで、涯しもない大空を余念もなく詩人はうち仰いでいた。何かは知らぬが、地上を遍く包む輝かしいものを彼は認めた。それは彼にとって唯一の讃美の対象である聖名の光耀であった。地上はおろか、大空も聖名の光を容れるにはなお狭いものであった。否むしろ、かくも名状し難い栄光の源は、天穹の遙か彼方(かなた)にあると信ぜざるを得なかった。曇り易い眼(まなこ)も、今宵

妙に靄れ渡ってみれば、何たる霊しき光の世界であろうか。罪の世の塵はこの光の海を濁らすとは言え、彼方昊天の上に崇められている聖名は、永劫の光の源である。当時の宇宙観を越え、我々の想像をも絶する永遠の光の国、ただ黙示録の記者が示してくれたその曇りなき「神の光」の国へ、この詩人の心の眼は向けられていた。

彼はいま人生の頂点に達している王者でもあろうか。恩沢に乏しい曠野の自然、平和稀なる外敵内紛の災禍を通して、今日まで護り給うた神の有難さに首を垂れたとき、彼の胸中感恩と讃美の念とどめ難きものがあった。王者のほこりは落日と共に去って、彼はどことなく人らしき本来の姿に還りつつあった。万籟粛として声なく、ただ星辰の和やかな瞬きと、月華の清楚なる笑みが彼の心にささやくものは何であったか。かの乳児の瞳とその口もとではなかったか。静寂にして雄大なる、崇高にして単純なる天空に懸かる星辰月華の暗示するところのものが、かくも小さき乳嬰児の姿であるとは彼自らあやしとしたところであろう。乳児や幼児を守るものはかの天使のみではない（マタイ一八・一〇）。月も星も彼らのために証するのである。かくて彼の心を突如しかも泌み泌みと捉えた想は何であったろう。

彼は幾度も戦場を馳駆した戦士であった。彼もまた戦争の悲惨を嘗めつくした。多くの戦の動因が凡そどんなものであるかを彼は経験した。戦勝に誇る軍勢の前に道徳の鉄柵も蹂躙されることを知っていた。それは良心に反して。しかしどんな好戦の士も、血に飢えた獣の如き将卒も、泣き叫ぶ幼児や、敵兵とも知らで微笑む乳児の前には、剣執るその腕に力の減ずるのを覚えたはずである。およそ世に無力なものと

て乳児の如きがあろうか。彼らはただその母の乳房を求めるほかに心の向うところはない。その生存の根拠も理由も目的もその母にのみ懸かるものは彼らである。然るに彼らには不思議な力がある。サタンの智慧も勇者の鉾も之に抗することができない。何故であるか。ただその無力と無辜の存在そのものが神的であるからである。勿論悪に抗争せんとする自覚的意志は小児の中にはない。悪は彼らの世界に存在の権利を有ち得ない。小児の世界に主権を握るものは何か。それは人格的本質に根ざす無自覚の誠である。泣くも、笑うも、感ずるも全人的である。分別未然の一如の世界である。智の目醒めていない情意未分の世界に彼らは生きている。純なる情意未分の心を本質とする嬰児は信の世界に最も近い。彼らの存在形態が本能的であるからとて、その奥に本具する人格を無視する者は、神の存在を蔑視する者である。真なる哉詩人の言！「幼児と嬰児の口を通して」神が「力を礎え給うた」とは。この間の消息を限りなく深めた言がイエスの口を通して発せられた事実の何たる厳粛さぞ（マルコ一〇・一四―一五、マタイ一八・三―六、一〇―一四、二一・一五、ルカ一八・一六、一七）。

彼は王者であれ、戦士であれ、詩人であれ、はたまた牧人であれ、――事実ダビデはそのいづれにも通ずる人物であった――深遠なる穹窿の前に眇たる一個の人間に過ぎないおのれを見出した。盈ちては虧ける月の影、流れて流れない星の姿は、幼い頃から彼が野べに水辺に親しんだものながら、歳月と共にうつろいゆく人の生涯の果敢なさを顧うとき、永遠なのは天体で自分は死すべき者たるの寂しさに襲われざるを得なかった。生活の外的喧噪から退いて、静謐なる夜の懐に抱かれた時、人の最も固有の問題に彼の心

は向った。その時彼はギリシャ人の如く、自分を自然の中心の如くは考え得なかった。彼は自己を或る他者との絶対関係において見た。その他者の偉大さの前には、自己は何者であろうか。何の価値があるのか。彼はまた近代の哲人の如く明晰な認識のもとに自然を観じたのではなく、道徳的価値の問題を意識の根柢に置いて比論したのであった。

しかし今在る彼が神の前に如何ほど価少なき、罪深き者であるにせよ、神が古へからその民を曠野に揺りて護った民族史の跡、今もなお一人一人を探り顧み給う神の測り難き心などを想うとき、そこに何らか深い理由が自己の側にはないことを想わざるを得なかった。

果せる哉、彼の冥想はその翼を伸ばして遠く人類創造の暁の空に彼を運んだ。独一の歴史観、宇宙観、目的論は渾然として彼の心魂に迫った。創世記第一章の啓示と同質の内容が詩句となって湧いて来た。人間は魚類、鳥類、獣類、牧畜類の統括者として、神の似姿につくられているという啓示であった。聖名は讃美すべき哉、神に由り、神に在って、神のために、神と一如の相に創造られた。その原型を乳児・幼児において見る。人は神の尊厳と栄光を証しすべく創造られている。人間創造の暁には、天使らが、日月星辰と歓呼の声をどよめき渡らせた（ヨブ三八・七）。人間の本質と現実の矛盾を自覚すればこそ、いよいよ平伏して聖名を讃美する、月華星辰と共に。

詩篇第十一篇

(1) 楽長によって、ダビデの。

1 エホバに私は信頼する。
どうして君らはわが魂に言うのか、
「遁れよ、君の山へ、鳥のように！

2 見よ、悪者どもが弓を張り、
弦にその矢をうち番え、
闇の中から直き者を射殺そうとしている。

3 柱礎が砕かれたら、義人に何ができるか」と。

4 エホバはその聖殿に！　エホバはその聖座をみ空に。
その聖眼は人の子らを視、
その眼瞼は彼らを試みる。

○　これは確かに個人の信仰体験に発した詩である。劇的な迫力を感ずる。詩篇三、四、六四、一二〇、一三九、一四〇、一四二等と類似している。

1 「鳥」（ツィッポール）燕雀のような小鳥。原文に「のように」という語がなく、ただ「鳥」とあるのみ。却て強い表現。むしろ「鳥となって」といった気持だろう。

3 「柱礎が砕かれたら」をグンケルは「若し弓が殺害するなら」と訓み変えている。その方が自然かも知れない。なにしろヘブライ語は本来子音のみで構成されている文字だから、テクストのよみ方の問題となったら、永久に終止符がうてない。活き活きとした弾力性のある劇的性格の言語だ。時称など超越しているから、非常に現在的な現実性の強い言語だ。

5　エホバは義人を鍛え給う。
聖魂は悪人や強暴を愛する者を憎む。
6　彼は悪人の上に罠を降し給う。
火と硫黄と熱風は彼らの酒杯に受くべきものだ。
7　義しきはエホバである。彼こそは凡そ義を愛し給う。
直き者は彼の聖顔を見奉るであろう。

6　終末観的詩句である。

第十一篇　義を愛する神

私は神に信頼しきっているのだ。君たちは何だって私の心に囁きかけてこういうのだ、「小鳥のように山へ遁げて行きなさい。悪い奴らが徒党を組んで善人どもを暗殺しようとたくらんでいる。こう悪人が跋扈して世の中が乱れたのでは、義人が何をしたって駄目ではないか」と。宜しい、事実はそうだし、遁走は得策であるかも知れない。しかし一寸待て、自分は神に絶対信頼だ。何で得失に左右されていいものか。神を神のゆえに信ずるのが信頼だ。躬の安否を顧わぬのが信頼だ。神が山へ往けと命じ給うなら往こ

う。そうでなければ私は此処に踏み止まって一歩も退いてはならぬ。友らよ、山よりも遙かなる高処を見よ！　鳥も翔り能わぬみ空の彼方を仰げ！　彼処見えざる聖殿に、宇宙の大空に神の聖座がある。我々の住む社会の柱や礎が、悪徳のために腐ちたところでそれが何だ。聖座の一角が崩れたというのなら大変だが。そんなことで神の経綸に支障を来たすと思うのか。神の偉大さがどんなものか、人の思いを越えたものだ。それを信じないで何の信仰か。

しかもその神が我々を顧み、我々の心を験し鍛えて下さるというのだ。毎日どんな瞬間にでも。悪に与して神の憎しみを買うな。神の審判は千態万様で不可解であるが、期が来れば悪は必ずやソドムやゴモラのように劫火と硫黄と地獄へ吹き払う神風で審かれる。一見混沌としてわいだめもない神の秩序の深さを想え！　今は我々の酒杯は空でいい。否、毒が盛られるかも知れない。何がどうなっても神に即した義はついには勝つ。そこに義の面目がある。神は大乗的には公平であり、義で在り給う。「恵福なる哉、義に飢え渇く者」である。神の義を追求しよう。義とは何だ。神を義とすることだ。義人とは何か。神意に全托し、神意を信受する人だ。おのれを義としたらパリサイになる。神を義とすることが信頼なのだ。信頼は神本位であって、自分の救のためではない。

「神は義を愛し給う」とは、具体的には神命に全托する魂を愛し給う、ということだ。徳目の正義のことではない。全存在的、全人的な神本位のたましいの相を義というのだ。そういう魂を神は愛し天国人となし給う。神が神らしく在り且つふるまいつつあり給うことを信じ抜くところに天来の義が衣せられる、力

が与えられる。そういう真っ直ぐなたましいは聖顔を仰ぎ瞻ることになる。悪人がどうなるか、他人のことは詮索する必要がない。ただ彼らがたましいの方向転換をすることを祈るのみである。

「見ぬ世にうつりてまみゆるそのとき
主の義をまといてみ前に立たまし」

（讃美歌二八〇）

詩篇第十二篇

(1) 楽長により第八音伴奏を以てしたダビデの紘歌

1 (2) 助け給えエホバよ、恵信者(ハツシード)は絶え、
　信実者(エムニーム)は人の子らから失せた。
2 (3) 虚偽を彼らはかたみに語り合い、
　二心もて唇(くち)滑らかにものを言う。
3 (4) エホバは滑らかな唇を総て断ち切る、
　大袈裟にものいう舌をも。
4 (5) かかる徒輩は言う、「われらは舌で勝つ。
　われらの唇は我らの属(もの)だ、誰か我らに主たり得ん。
5 (6) 「悩める人々圧(おさ)えられ、惨(みじ)めなる者共呻くが故に
　今ぞ我れ起たん！」――エホバ言い給う――

(1) 第六篇の詞書参照。
○ 類似の詩篇に一四（＝五三）、三六等がある。

4 直訳は「我らの舌により我らは強い、我らの唇は我らと共にある」

「平安に置く、凡そ焦がる者を」と。
6(7) エホバの言は純き言である。
地の炉で煉られた白銀である。
しかも七度び精煉られたる。
7(8) エホバよ、あなたは彼らを保ち、
かかる族から我らを護り給わん。
8(9) 到る処、悪しき者どもの遍歴することかな。
「くだらぬことが人の子らに持て囃されて」。

8「無法者が威張って大地をへめぐるにまかせよ、あなたは人の子らを蛆虫のように蔑み給う」（グンケル訳）

第十二篇　恵信は絶え、信実は失せた

人の世に恵信者、即ち天恵を信受して恵信一如の信に生きようとした人、信実者、即ち信義を貫く人、これらの人々の絶えたその昔、世の中に虚偽と幻惑の甚だしい現実を見て、激しては憤り、呻いてはひたすら祈り、聖言を得ては独り慰めた想いが、この一篇の短詩となって二千数百年を越えた今もなお鮮かに

語る。神に由る言の生命いや旺なりというべきである。何の蛇足をも要しない。

この詩人が世の諸々の罪悪を問題とし、これが実情を考察し、その由って来たる禍根を検討し、その解決の道を思いめぐらしたとき、辿りついた道は、現実には一切の術を拒まれた人の登りゆく道、いのりであった。

それは彼にとり何ら新しいことではなかった。まことに祈ることは彼にとって敬虔なる何ものかであるような宗教事ではなかった。中世の神秘境的感情、或は近代の主観主義的敬虔は少なくともユダヤの預言者や詩人には縁遠き心境である。彼らの敬虔は全身を以て神にぶつかるより仕方のない真剣さであって而もそこには何ものも之を抑え得ぬ自由と豊かさがあった。それは宛ら大気を呼吸せずしては居られず、しかもそれを知らない鼻の穴にも似ている。

見よ、彼の耳目に触れる世人の心と舌と眼と四肢に現われる百姿千態の厭わしきもの、虚栄虚偽、偽善虚構、円転滑脱、権謀術数、無節無操、二心両舌。噫、もし呼びかけるべき唯一者が儻かったならば、彼の魂はどんな狂風にから舞わねばならぬことか。真夜中に目覚めて母親を求める乳児の如く、彼もまた神にすがった、「助け給え、エホバよ！」と。

何がゆえの助けか。血に渇いた焼刃の脅かしが無いではない。しかし彼の苦悶は仇敵の兇刃の故でもなく、貧窮の脅威に由るのでもなく、問題は虚偽の世の核心に巣喰う害毒が、わが霊性の心臓を刺し殺そうとするにある。世人も人であり、彼もまた人である。同じく罪に染み易いものであることは、彼も既に自

覚していた。正にこの自覚の故にこそ、彼は神に対しては恵信一如、人に対しては信実一貫の魂とせられ、世の現実に対して深刻な嘆きと憤りを覚えているのである。

ここにおいてか彼は、彼の自覚の反証となるべき一句を、人々の口から放たれた千万の空しい言の中に捉え得たのである。その言に曰く、「我らの舌は我らの力！　我らの唇は我らの有だ！　誰か我らに主たり得るか！」[4]驚くべく恐るべきかなこの言。これこそはこの世の君サタンを代言して余すなき地獄万代に亘る金言ではないか。現代のあやまった民主主義にこのような毒素がまじっている。噫、しかし憐れむべくも悲しい哉、我執に毒された自由主義。唯物思想に毒された全体主義。畏神なく、信愛失せたる二十世紀末！　この詩人の世においても、このような驕慢不遜な心が滔々として義人と弱者を押し流そうとしていたのである。

さてこの禍なる言は何を語るか。舌三寸の力を頼み、口唇の自由な駆使を誇り、生ける屍の主権を主張して得々たるこの者は我欲のためにはすべての言動に自由があると思っている。想うにアダムとエバ――神話的原人――が人格の自由を慾の奴隷としたとき、本当の自由は死に、人格は分裂を来たし、「虚偽の父」（ヨハネ八・四四）サタンの霊が主権を握ったのであった。神の現前での慾の動きは、不従順として現われ、「楽園喪失」となり、人類史それ自体が叛逆、迷謬、虚偽、我執の罪悪史の如き様相を呈している。失明の詩人ミルトンが遺した畢生の大作『パラダイス・ロスト』は、いつまでも現実への警告であり、預言である。

ここに「恵信者」という語を私が敢て造ったのは、神の「恩恵」「ヘセッド」という原語から派生した「ハッシード」という原語は、「恵まれたる者」天恵を信受し、体現する者という意だからである。恵みの信者、恵信者は、神絶対に生くる恵信一如のたましいである。また詩人がこれの対句として「信実者」「エムニーム」という語をここに揚げているのは、「エムニーム」はもと「アーメーン」信ずるという語に由るもので、神を信じ、人を信じて裏切らぬ意であるから、こちら側からの信義一貫のたましいである。即ち恵信は上からの関係、信実は下からの関係というひびきの語で、恵信者、信実者は同義語といえるのである。「恩恵と真理はイエス・キリストによりて来れるなり」とヨハネ福音書一・一七にあるが、この「恩恵と真理」のヘブライ語が正にこの詩篇の両語と相通ずるのである。

「悩める人々圧えられ、惨めなる者共呻くが故に
今ぞ我れ起たん！」――エホバ言い給う――
「平安に置く、凡そ焦がるる者を」と。

弱者の味方、恵信者・信実者の味方となる者は神であった。神からのみ本当の「平安」（シャーローム）が臨む。この平安には不屈の力がこもっている。神の言は炉で七度煉られた白銀よりも純なるもの、霊的な力をもっている。神の霊言は直ちに力である。天恵とはこの神の霊言を直ちに力とし、霊とし、生命として受ける事態を言う。これを恵信一如と言い、信実一貫という。この天恵を慕い焦がれるところに平安が臨む。この詩はそういう白熱の魂の告白である。

詩篇第十三篇

(1)　楽長によるダビデの紘歌

1 (2)　いつまでか、エホバよ！
　私を忘れ給うか、いつまでも。
　いつまでみ顔を私から隠し給うのか。
2 (3)　いつまで私はわが魂に煩慮を横たえ、
　わが心には終日憂愁を。
　いつまでわが敵はわが上に高められてあるのか。
3 (4)　顧み給え、応え給え私に、エホバわが神よ！
　わが眼を明るくなし給え、
　然らずば私は死を眠ります。
4 (5)　然らずばわが敵は斯く言うでしょう、

○　詩の種類としては、個人的な「嘆きの歌」詩体はかなり不規則。
詩の構造、一―二節、嘆訴。三―四節、願望。五―六節、信頼。
2　「終日」（ヨーマーム）A写本には「カイ・ヌクトス」（夜も）と附加してある。また他説には「日に日に」。
「いつまで」という祈りは終末的性格をもっている。実感の迫る詩である。ダビデの幾歳月の苦難の中から発せられた祈りの一つであろう。

「俺は彼に勝った」と。
わが敵は私が揺ぐとき欣ぶでしょう。
5(6) けれども私は、あなたの憐みに依頼みます。
わが心があなたの救いを喜び得ますように。
私はエホバに歌う、彼がゆたかに報い給うたから。

第十三篇　いつまで

寄せては返す徒波のように、いつまで、いつまで！　と彼は叫ぶ。呼べど叫べど神の耳は応えざること巌の如くである。神は眠れるか、情なきか。弱き者の不安と焦慮と煩悶は募るばかり。かくて神は顧み給わないのか、いつまでも。彼は望みを断たねばならぬのか。底なき闇から彼の心は今一度擡げられて切に、「顧み給え、応え給え、……わが眼を明るくなし給え」（三節）。そうでないと、「死を眠る」と彼は呻いた。見えざる神へのこの悲痛な声。まことの実在者なくしては、どうしてこの痛ましい事実を考え得ようか。地中の芽は、種子がどう横たわっていようとも、知らずして太陽に向って伸びてゆく。

性来の人間が見ることができず、聞くこともできない神が、見え且つ聞こえるために、天来の唯一の器官がある。是れ即ち信仰である。信仰は信念でも要求でもない。信仰は主観的なこちら側の信念や要求ではない。信仰は飛躍的、彼岸的なものである。切なる要求、願望はその前段階ではあるが、それに絶し、それを越えたものである。信仰は上からの何ものかに捉えられる消息である。ある日、ある時突如として。正に次元的にちがった世界である。普通、信仰というものが、観念化して似て非なる事態が多い。

この詩の作者は、「いつまで」自分は神に願ったら神は聴いて下さるのかと、祈り、苦しんでいたが、突如、神に聴かれ、捉えられたのを覚えた。それは何か現象的に、結果的に聴かれたというのではない。神自身が近くなり、神の現実の中に捉えられたからである。

それゆえにこそ彼は強く信頼を告白し、救を喜び、聖名を讃美するに至った。そのようにして彼は「いつまで」なる暗黒の渕を出で、「顧み給え」の不安の瀬を渉り、「讃美する」光明の彼岸に立つを得た。

しかし信仰の現実は、彼岸を此岸に於て有つ現実であり、時間において永遠を有つ現実であって、彼岸そのもの、永遠そのものではない。「かの日」「その日」「末の日」と預言者たちが告げた終末の日、歴史の終末を、現在においてもつ終末的現実が信仰の現実である。それゆえ「いつまで」は「今ここに」と共に別な意味でのこる。この「いつまで」は信仰から来る希望として新しき祈りとなる。信仰と希望は、即ち「今ここに」と「いつまで」は、そういう緊張関係にあって生命的である。神の実在と罪深き世との対立は、この「いつまで」の祈りをとどめおく。そして人の側からではなく、神の側から発せられる「いつ

まで斯くあるべき」という呻き――そこには審判と憐憫がある――を聞き得る者は恵まれたる哉幸なる哉。その人は神と共に、キリストと共に、終末の日を忍び待ち得るからである。

「にくみあらそいあとを絶ちて、
愛と平和は四方にあふれ、
み旨の成るはいづれの日ぞ！
来たらせたまえ、主よ、み国を」

（讃美歌二二八）

詩篇第十四篇　（第五十三篇）

(1) 楽長による、ダビデの。

1 愚者が心の中で言った「神は無い」と。
彼らは腐れ果てて、悪行をなす。
善を行う者は絶えて無い。

2 エホバは天から人の子らを瞰下して、
若しや求神の賢者ありやと見給うに、

3 どれもこれも背いて、悉く堕落している。
善を行う者は絶えて無い、一人だに無い。

4 不義をなす者は皆知らないのか、
わが民を喰いパンを喰っていることを。
エホバを呼ぶことを彼らはしない。

○　本篇は第五十三篇と大同小異である。これを見ても全詩篇がいくつか（五巻）の巻に編纂されたために、ダブルことがあり得た証拠である。本詩篇における完了形は預言的完了の性格が強い。一般説、本篇は捕囚期後のもの。ケーニヒは捕囚前の最悪期、ユダ国滅亡寸前となす。第四、五、六節は本文破損のため、明確なる解決が得がたい。

4 「パン」（レヘム）とは「エホバのパン」のことらしい（レビ二一・六、八参照）。因みに「ベツレヘム」とは「パンの家」という意。

5 見よ！ 彼らは怖れに怖れている。
そは神が義人の族と共に在り給うから。
6 貧しき者への謀を彼らは恥らうであろう。
エホバが彼の避所であるから。
7 誰がイスラエルの救をシオンから与えるか。
エホバがその民の運命を換え給うとき、
ヤコブは喜び、イスラエルは楽しむであろう。

7 終末観的祈願。礼拝用の附加句とみなされる。

第十四篇 いづこに

祭司か為政者か、否そればかりでなく一般の社会人も、道ならぬ生活を営んでいた時に、何の択びか、雑草に混る菫の如き小さな存在ながら、神に対してその信義を貫いていた少数者があった。その中の一人があるときどうしても黙していることができなくなった。

彼は人々を指して大胆に「愚者」と称した。愚とは何か。彼によれば「心の中で神は無い」とすること

である。これは後世の所謂無神論の如き智的な判断のものではなく、実践的に神の存在を無視することである。それは預言者ホセアが示したように、「神を知る」こと、即ち神と霊交をなし、信仰的節操を守り、信頼し尽すことから背き出ることである。傍若無神に言動する彼らの心は、傲慢のために硬化し、貪婪のために愛なく、邪淫のために腐敗してゆく。凡そ善きことは彼らに望まるべくもない。

「エホバは天から人の子らを瞰下して、若しや求神の賢者ありやと見給う」た、とこの詩人はいみじくも語っている。求神、求道の者が、愚者に対する賢者である。これも智的有神論者ではなく、実存的に神を求め、道を求める者である。そういう求神のたましいは少なくとも善を行う者であるはづだが、そういう人間が一人も無いと嘆いている。

詩人は天上の神の聖顔に深き憂いと憤りを見た。聖顔の陰翳（かげ）は何によるか。それは預言者アモスが告げたように、「エホバを求める」人が失せているからである。かつて神がエデンの園にアダムを尋ねて「汝はいづこに居るか」と言い給うたように、この度もまた神らしい寂しさの中に、「我を求むる者はいづこに!?」と人の子らを親しく捜し給うたのに、驚いたことには、一人だに彼を求める者、彼の心に応える者がいない。勿論、少数の信仰者、賢者、義人は居り、詩人自らもそれを認めていたが（五節）、彼が「一人だに無い」と断言した（一節、三節）句は、相対的な判断を越えて、高次元、絶対次元的な角度から、宣言した天来の声である。使徒パウロがこの句をとらえて新約の光の下で、「義人なし、一人だになし」といったのが正に同じ角度、同じ次元からであった。即ちこの詩人自らも知らなかった預言的真理が、こ

の矛盾の言のうちに蔵されていた。即ち人間は性来皆罪びとに過ぎないことが。求神、求道も、はじめは暗中模索に過ぎないことが。

「我れ中なる人にては神の律法を悦べど
わが肢体の中に他の法ありて我が心の法と戦い、
我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。
噫、われ悩める人なるかな！
この死の体より我を救はん者は誰ぞ」

（ロマ書七・二二・二三・二四）

詩篇第十五篇

(1) ダビデの絃歌

1 エホバよ、誰か宿るあなたの幕屋に。
　誰か住まうあなたの聖山に。
2 全く歩む者、義の行者、
　その心の中で真実を語る者ぞ。
3 彼はその舌で誹らず、
　その同胞に非をなさず、
　その隣人に侮蔑を致さない。
4 棄てられた者は彼の眼に蔑まれ、
　エホバを畏れる者を彼は貴び、
　彼誓うや、禍害となるとも変えない。

1 「幕屋」（オーヘル）。本来、遊牧の民の天幕。例えばアブラハム放浪時代における（創一二・八）。モーセは神との「集会の幕屋」（オーヘル・モーエード）を張って（出二七・二一、二八・四三）、神を拝し、神からの啓示を賜ることを始めた。そこに神エホバの臨在を示す「契約の櫃」（アローン・ベリート）がこの集会の幕屋の中にある（代上一六・一）、「我はイスラエルを導き上りし日より今日に到るまで家に住みしこと無くして、但だ幕屋より幕屋に移り、天幕より天幕に遷れり」（同一七・五）、これは預言者ナタンに告げたエホバの言である。終にダビデがシオンの山に神の幕屋を定着させた（サ後六・一二―一八）。ダビデが「力を極めてエホバの前に踊躍った」のはこの時である（同六・一四）。ソロモンが神殿を建て、幕屋をその中に設けて、幕屋の最高の形態が成った。

1 「住まう」（シャーカン）は永住的に住む。同節の「宿る」（グール）は旅の宿として暫時宿る。幕屋は動的、神殿は静的。イスラエル宗教の真髄は幕屋にある。形式が完成することは、宗教の硬化を招く。

5 その銀子を貸しては利息をとらず、
無辜者を強いて贈物を受けない。
これらの行者は、
永遠不動である。

第十五篇　幕屋人

神を拝するに、特別に聖山とか、神殿の幕屋とかを必要としないことはキリストがはっきり言った。しかし旧約の世界では、イスラエル人にとってシオンという聖山、エルサレムの神殿はユダヤ教の本山として宗教礼拝の中心、終末的な神の国の中心と考えられていた。彼らの眸はシオンの山に向い、彼らの脚は山上の神殿とその幕屋を慕った。巡礼の旅の宿りもこの山で、その願いは満たされるのであった。第二の故里がこの山のほとりに得られるならば、その歓びは極まるのであったろう。

然らばこの聖山に住まい、神殿の境内に宿らん者の資格は何であったろうか。人々の眼には外的な敬虔がものを言っていたに相違ない。この作者も目にあまる虚しき祭儀、礼拝、献物を目撃したであろう。こ

こにおいて彼は真の礼拝者がどんな人間であるかを改めて宣言するの必要を認めた。問題は人の眼にどう見えるかではなく、神の前にどうであるかにある。そこで彼は先づ神に親しく祈る要を感じた。そのことは本質的には、神から投ぜられている課題であった。神意は那辺にあるか。祈っているうちに、神意を求めているうちに、真の礼拝は、日常の実存にあることを知った。そこに本質的解答が与えられて来た。それが告白となり預言となるのであった。

かくて第二節以下は神の啓示による作者の自答であり、告白であり、預言である。

誠に作者の心眼に映じた聖山永住の資格者は、その人格の本質においては当才の羔の如く疵なき完全性を、その意志においては黄道をめぐる陽の如き義の実行力を、その心情においては、うつろう季節にも変るなき松柏の如き真実を有つ者であった。このような人こそ聖なる律法の精神を実践し得る者であると彼は断じた。そのような人は、「全く歩み」、「義を行い」、「真実を語り」、「舌で誹らず」、「非をなさず」、「侮蔑を致さず」、「神に棄てられたサタンの子らを蔑み」、「畏神を貴び」、「誓が禍害となるとも変えず」、「銀子を貸して利息をとらず」、「無幸の純真な人からは謝礼を受けない」（以上十一項目）という。パウロがコリント前書第十三章で謳っている「愛の讃歌」の旧約版の如き詩篇である。

人格は律法に先だつべきものであった。然るに翻って現況を見るとき、そこには律法の枝葉に拘泥する人格的枯死者が何と多く蠢いていることか。人格は律法に破れていた。彼が人々に期待するところは余りにも高い理想であるか。現実との背馳がいかほど甚だしいものであるにせよ、彼の敢て提した命題はエホ

バの厳かな要求である。しかし、その厳かさは実は律法ではなく、愛の要求なのである。ここに告白されている内実は、詩篇第一篇よりも積極的な愛の心こそが果し得るものである。しかしこの愛の実践は果してどれほど可能であるか。愛の奥に秘められた天来の、本願の霊力を受ければ、本質的な意味で可能となってくる。現実には神の本願の力、聖霊を受ける人が稀有である。たとい聖山永住の資格者が一人だになくとも、聖山永住の宗教的、道徳的地価はそのために毫も低減されない。然るに聖山の土は偽善の足で穢されていた。礼拝は虚構の何乗かであり、神殿は偶像そのものと化していた。

かつて旧約のシオンの山に登るべかりし人々も、やがて新約の新しきエルサレム、新しきシオンの山（黙二一・二）に招かるべき人々も、その心にいつわりなく、その魂に深い思い遣りのある人々。怨とか、愛とか、仁とか慈悲とかいう心の行者であるにちがいない。そのような人々が幕屋人で、地上到るところを聖山と観じ、霊的な幕屋を張って、地上の旅路を進み往く。

〔補註〕

2 「全く歩む者」（ホーレーク・ターミーム）の「全く」（ターミーム）。完全に、間然するところなく、の意。「義しく歩む者」（箴二八・一八）、「直く歩む者」（詩八四・一一）等における「義しく」「直く」はこの「全く」と同語。原義は即ち、完全に、無謬にの意で、所謂逾越節で屠られる羔が「疵なき当才の牡」（出一二・五）とある「疵なき」がやはりこの語である。またエホバの律法が「完全」（詩一九・七）であるから、全く歩むとはこの律法を完全に果すことになる。そのような「全さ」はキリストの他何人もできない。しかし、旧約においてはこれが出来るとなした。パウロも完全に出来たと自認していた。それが「律法の義」であった。（ピリピ三・六）

○本篇の内容及び形式に類似するものに、詩二四・三―六、イザヤ三三・一四―一六がある。なおゼカリヤ七・一〇、八・一―三、一六、一七、を参照。語法、用語等から推して、捕囚後、神殿改築後、預言者の流れをくむ敬虔な一信徒が作者か。

○タルムード（口伝律法）のゲマラ（注解補充）に、モーセの六一三条の律法の意をダビデは十一条に（本篇の項目を数えあげると十一箇となる）、イザヤは六条に（イザヤ三三・一四―一六）、ミカは三条に（六・八）、アモスは「汝ら我を求めよ、さらば生くべし」の一条に（五・四）、ハバククは「義人は信仰によりて生くべし」の一条に（二・四後半）に籠めたと記されてある由。

「我はイスラエルの子孫をエジプトより導き出せし時より
今日に到るまで家に住みしことなくして
ただ天幕と幕屋の中に歩み居たり。」

（サムエル後書七・六）

詩篇第十六篇

(1) ダビデの秘詩(ミクタム)

1 護り給え、御神よ！　あなたに私は依り頼む。
2 私は実存主(エホバ)に告げた、「あなたはわが主、
　わが善福(さち)はあなたを超えてある無し」と。
3 この地の聖徒といえば、
　彼らはまこと秀れたる者ゆえ、
　彼らにわが歓びのすべてがある。
4 他(あた)なる偶像(もの)に節を変える人の悲嘆(かなしみ)は増しゆく、
　私は彼らの血腥き酒祭(さかにえ)を何で灌ぎ得よう。
　また何で彼ら偶像の名をわが唇にのぼせ得よう。
5 エホバこそはわが嗣業(ゆずり)、わが酒杯(さかづき)の分前である。

(1) 「秘詩」（ミクターム）。詩一六、五六―六〇の六篇がこの部類。五六、五七、五九、六〇は三音格詩（トリメーター）、一六、五八は四音格詩（テトラメーター）。なおこれにイザヤ三八・九―二〇の五音格詩（ペンタメーター）をこの詩群に加える学者もある（Brg.）。この語義は不明だが（Dh. Kl. Gk）、アッシリヤ語カタムが「秘す」、アラビヤ語の「マクトゥム」が「秘れたる」意であるから「秘義、奥義をもつもの」、「格言的なもの」、或は「今まで秘められていたもの」という意かも知れない。ケーニヒは特に「格言詩」（Kg.: Sinngedicht）となしている。LXX. Vulg. によればステーログラフィヤ、ティトゥリ・インスクリプト、「題銘」、「碑銘」とある。
また一方ではこの語をケテム（黄金）に由来するとなし、「黄金賦」とか「珠玉篇」とかいう意に解する説がラビの間に多い。ルターはそれに因んで „ein gülden Kleinod“（金の宝）と訳している。この「秘詩」はいづれも力強い詩で、その語調、精神は捕囚期前の預言者に似通う。詩篇中最古のものに属するらしい。本詩はベルシャ時代初期のもの（Brg.）、或は捕囚期のもの（Ew.）、或はダビデその人のもの（Del.）等諸説あり。
5 エホバがわが嗣業と酒杯との分前であるという観念は、レビ族に対する歴史的啓示の事実に由来する。即ち約束の地カナンをイスラエル民族が得たとき、彼らレビ族の

あなたはわが運命を支えて在り給う。
6　準縄はわがために楽しき地におちた。
　げに嗣業はわが上に善福となった。
7　わがため謀り給うエホバを讃めまつる、
　夜な夜なわが腎はそのことを諭す。
8　絶えず私はエホバをわが前に在らしめる。
　彼わが右に在ますゆえ、私は断じて動かされない。
9　さればわが心は欣び、わが栄光は躍る。
　わが軀もまた安康に在る。
10　そはあなたがわが魂を陰府に棄て置かず、
　その愛する者を墓に臨ましめ給わぬから。
11　あなたは生命の道を私に知らしめ給う、
　歓喜は溢るるばかり、
　あなたの在まし給う許にある。
　諸々の悦楽は永遠にあなたの右にある。

み土地の分配に与らず、エホバに献げられるものをおのが分前となした。謂わばエホバそのものを嗣業、産業（所領）酒杯とした（申一〇・八、九、同一八・一―八、民一八・二〇）。

第十六篇　最高善

聖名によってなし、聖名のためにする契約の櫃を中心としての神事・祭事が、祭司アロンの一門及びレビの支派の天職であった。イスラエル十二支派（族）の他の支派の如く彼らには所領がなかった。彼らは確かに神のため選ばれたものであった。彼らは恰も家に家長があり、族に族長があるように、イスラエル全民族における特殊種族であった。それはまた更にイスラエル選民観念の核的な現象と言えよう。

祭司的存在がもと神の啓示に由る限り、それは犯すべからざる意義を保持すべきである。然るに祭司階級は律法観念の発展に伴れてその存在の本質をはやくも失い、信仰的実質を離れて徒らに宗教的特種階級の色彩を濃厚にするばかりであった。聖浄法典次いで祭司法典の成立を見るに及んでは、外的律法の墨守、宗教的儀礼の尊重が、彼らの信仰生活の中枢となったのも無理からぬところであろう。バビロンから釈放された民の心を把えてこれを固めつつあったものは律法主義であった。即ちペルシャ配下のユダヤに隠然として根を張り枝をさし拡げたものは祭司的宗教であった。このような情勢の中にもなお新鮮な薫香を放つ花は其処此処に存在していた。もしその孰れもが歌わない花であったならば、彼らのため遺された

秘歌があった。その「身は浮舟の波のまにまに」ただ神にだけ依り頼んだ人ダビデに帰せられている本篇がそれである。

星は星に黙示をおくる。「あなたに私は依り頼む」とこの人は一夜しづかに祈る。そのとき彼の心は、ある重い鎖からすっかり解かれているのを知った。何という単純なこの心！　余りの単純さに自ら訝りたいほどである。解かれた鎖は何であったか。日頃彼の心を圧していた律法の数々である。祭儀の煩雑である。律法が神ではない。祭儀が主ではない。わが神はエホバ、わが主もエホバ！　彼の外にわが善きものはなく、わが幸もない。然らば私は何をエホバに捧げて感謝しようか。羊の燔祭か、肥獣の膏か、牡牛の血潮か。否々、私には神の前に斎らすべき何ものもない。ただこの心、砕かれた私自身があるのみだ！　祭司輩の遵りまた遵ろうとする一切の律法的行為、或は執り成し執り成そうとするあらゆる祭司的行事はそれ自体無意義ではないが、神の前に恩恵を受くべき何ものでもない。恩恵とは何か、什一の献物にあづかることか、犠牲や初穂か。否それらのエホバから賜わる生活の資ではない。人の生くるはまづ神の言による。神の言、神自身こそはわが恵と呼ばるべき総てである。このように祭司のことを想いつつ彼が到達した無意識的自覚は何か。おのれ自らが無衣の祭司であるというのであった。

エホバこそはわが嗣業、わが酒杯の全分前である。エホバ自身がわがために準縄の落ちた地である。エホバは今や明かにわが総ての総てである。彼は図らずも無祭司主義をうち立てつつあった。そこにまた預言者的精神が力強くも動いている。それゆえまた真の祭司が何であるかを意味するものであった。後年ル

ターが万人祭司主義を主張した精神と相通ずる。祭司職根性は禍である。しかし祭司精神は普遍の真理であらねばならない。神の啓示の本義は貫いてやがて「永遠の大祭司」にまで到らねばならなかった。いつの世にも祭司職根性乃至律法主義に対しては、預言者精神が立たざるを得ない。

然らばこの人に於てその預言者魂は何を獲得したか。神そのものを！　けれどもそれはどのようにして可能であったか。曰く、信頼の一途。罪の問題はいま前面に現われて居ないが、神御自身の見えざる執成しを考えることなくしては、その信頼が確乎たるものであることを冀うことができない。それはあだかも罪が新約の世界に於て始めてその根本の意味に於て知られ且つ赦されたように、無限の力が神から臨む。活ける現然たる神から、エホバは確かにわが傍らに在ます。この実在に対するこの実感！　しかしこれは何らかの道によって彼が罪のゆるしを経験しなかったならば、耐えられるものではない。我々はイザヤにおいてその著しい例を知っている。ここに於て更に知られることは恩恵の内容が罪の赦しの外の何ものでもないということである。信頼はただ此処にのみ全きものであり得る。そしてこの信頼と信仰が恩恵の翼の陰にあるところ、そこに平安と歓喜が漲る。このようにしてこの詩人は完全に超律法の世界に息吹くを得た。これは現世即永遠の立場である。

「道徳律は世界に於ける最高の可能なる善を私のすべての行為の最後の対象とせよと命ずる。けれども私は私の意志が神聖にして善良なる世界創造者のそれと一致するのでなければ、最高善の実現を期待することが出来ない」とは哲人カントの厳粛なる告白であった。その根本において我執である我々罪びとの意志

が神の意志と一致する可能は、ただ恩恵に対してわが意志が信頼と信仰に甦るときのみである。このようにして神と共に在るということが、道徳の世界からは希むべくもないことであるとしても、信仰の世界では何と容易であるかを知る。詩人は預言者魂の根柢たる、何ものもこれをうち砕くことができないまでに砕かれた謙虚と、何ものもこれをうち砕くことの出来ないほどの力に溢れて曰う、

「絶えず私はエホバをわが前に在らしめる。
彼れわが右に在ますゆえ、私は断じて動かされない」

と。神と共なるこの最高善（summum bonum）の楽土を踏みしめて立つを得た詩人の視界においては、現世と来世の相会う水平線は杳として消え去り、その意識の圏外に退いてしまった。死と陰府とは問題を残したまま解決を得た。「神と共に在る」と。而も「わが右に在まし給う」とは神の力を意味し、自分は神の力だけで生きている、ということである。これが問題の問題、解決の解決であった。これが「歓喜溢るるばかり」の「生命の道」であった。神の力は、愛の力である。この最高善がどのような相の下に存続し得るものであるかは福音が明示している。それはキリストが体現し給うた聖霊の愛、神の愛である。（ロマ八・三九）。

詩篇第十七篇

1 (1) ダビデの祈り
エホバよ、聴き給え、義を！
わが叫びに意を留め、
虚偽の唇でないわが祈りに耳を傾け給え。
2 聖前からわが判決が発でて、
あなたの眼が公正を視て下さい。
3 あなたはわが心を試み、夜には訪ねて下さった。
あなたは私を糺し給うたが摘発すべきところなく、
我意が口から出たことがない。
4 人間の業については
あなたの唇の言により私は暴虐の路を避けた。

(1) 簡単に「ダビデの祈り」とあるが、よんでみるとどうもダビデ原作であるように私は感ずる。
1 「義」（ツェデク）。聖書でこれは一番重い語。ドイツ人は鉄が好きだが、ユダヤ人は義が好きだ。LXX には「わが義を」（テース・ディカイオスュネース・ムー）とあり、ヴルガタにも「わが義を」（ユスティティアム・メウム）とあるが、原典の如くただ「義を」の方が力強い。「わが叫び」と「義」が同義語的になっている。即ち「義の叫び」なのである。

わが歩みはあなたの轍に確と著き
　わが踏む足は動かされたことがない。
神よ！　私はあなたに呼ばわる。
　あなたは応えて下る。
　私の方へ耳を向けてわが言を聴いて下さい。
御恩恵を奇しくも現して下さい。起ち向う者から
　遁れる人を右の聖手で救い給う方よ！
眼娘なる人像のように護って下さい、
　御翼の蔭に隠して下さい。
私に暴ぶるあの悪しき者から、
　わが身辺をとり囲むわが魂の仇から。
彼らはおのが脂肉を鎖し
　その口で誇りやかにものを言う。
我ら今しも歩まんとすれば、彼らは我らをうち囲み、
　地に擲ち伏せんとてその眼を据えている。
その態は抓き裂かんと焦つ獅子の如く、

8「眼娘（ひとみ）なる人像（すがた）のように」（ケ・イーショ・ン・バト・アーイン）瞳に人の像が映るし、娘は大切に護らるべき存在、そのように眼は大切なもの。それで共に瞳のこと。
10「おのが脂肉」（ヘルバーモー）内臓を蔽っている脂肪性の膜のことで、アラビヤ人、シリヤ人の見解では感情中枢とされていた、それゆえ「心情（レーブ）」のこと。

密処に待ち伏せる牡獅子のようである。
13 エホバよ、起ち給え！
彼に立ち向い、打ち伏せ給え！
わが魂を悪者から救って下さい、あなたの剣で。
14 エホバよ、聖手〔を以て〕！ 死すべき者から、
生ける間にその分前を〔享けた〕
この世の死すべき者から。
彼らは子らに飽き足り、
彼らはその幼児に余財を遺す。
15 〔けれども〕私は義に在って貴顔を見る、
目覚めるとき貴容に飽足らん哉！

第十七篇　義の叫び

15 「義に在って」（ベ・ツェデク）義即ち律法に在って、義に即して、といった無私の心地。福音で言うなら「キリストに在って」ということになる。

15 「目覚めるとき」（ベ・ハークィツ）注解者の CRUX INTERPRETUM（註解の十字架）である。詩人が現実に夜の眠りから目覚めるとき神殿礼拝で神の栄光を見ること（Ew. Dh.）。「見るとき」（ビ・ロート）と訓み変える（Sel.）、同じく「視るとき」（ベ・ハーシス）によみ変える（Gk.）。この両説は LXX の（エン・トー・オフテーナイ）に因る。更には「義に在って」の対句として「罪なくして」（ベ・ニッカーヨーン）とよみかえる（Bt.）。イスラエルがその無力から「覚醒せんとき」という解し方（Kau.）。終末観的解釈としては、神の国に敵する者らが滅ぼされて、神の民が俘囚状態から解放され、復興する意味にとる（Kg.）。死よりの復活とする者（Del. Kl.）。

これらの解釈の夫々に夫々の意義はあるが、私はもっと卒直に詩人―おそらくダビデ―の具体的な文字通りの告白と思う。本文の解説をよまれたし。

義と不義、善と悪。そういう単純にして素朴な対立の世界にユダヤ人は生きている。律法は行うべきもの、踏みて行い得るものと彼らは単純に考えているようだ。旧約の世界を見るに義を慕い求める者は無条件に義人であり、悪に堕ちゆく人は無条件に悪人であった。

この詩の作者もまた義人が乏しく悪者が蔓るおそろしく不均衡な世に人となった。闇黒の力が彼の身辺に迫ってくるのを彼は感ぜざるを得なかった。何のゆえの敵か。無論彼は当面の敵に対して何ら悪をなした覚えはない。おのが義しさをこそ彼は自覚している。然るに不当の迫害と侮辱とは日に日に加わる。彼は時あってか敵に対して一応の弁明を試みたであろう。しかしそれは彼の魂そのものにとっては何ら益するところがなかった。また彼は少数の味方の者に己が義しさを認められ、しかもそこに慰安や激励を見出したでもあろう。しかしながらこれとても彼の魂の深淵に反響を与える何ものでもなかった。彼には訴うべき他の相手がある。言うまでもなくエホバの神であった。もしそれ上から臨むエホバの声に接しては、心の渕も浅瀬と躍り、欣然と応えざるを得なかった。

何びとに何と難ぜられても、ただ神にのみは「然り！」と一言応えて戴きたいのが彼の心である。神からの然りの「判決」を聴かまほしく、彼は人なき処で叫んだのである。祈ったのである。かつて神のおと

づれを夜しづかに受けたとき、彼に何ら虚しい心のないことが認められたことがあった。神に嘉せられた過去の経験は、今彼の祈りに新しい力を藉すのである。神に試みられ、神に幸された恩恵がなかったならば、仮令今自ら義しとするとも、その祈りに信頼の豊かさがあり得るだろうか。義がもし神の前に自己を主張せんとするものであるならば、その義はどうして枯死しないでいることができようか。人の心の義はそれ自体の姿において、究極のところ無である。否罪ですらある。義が本質的なものであるときには、自己に執することは出来ない。必然神への志向であり、あるものへの要望である。彼の心の底に動かぬ義はこのような性のもの、即ち無義の義であった。

このような義であるので、この義は「彼をして神の轍にその歩みを確かと著かしめ」[5]、その「脚を磐石の不動に置いた」。彼は元来弱者であったが、それは最早どうでもいい問題であった。彼は憚らず、自分の弱さを弱さとした。というのは彼は相対界には居ながら、別個の力、即ち神の力が能く器となっているからである。自己の義をではなく、義に在る己れを大胆卒直、単純に告白し得る彼は、それ故に信頼深く神の護りを祈求するのである。曰く、「瞳子（眼娘）のように護り、翼の蔭に隠し給え」[8]と。見よ、彼の心は神の眼に吸い込まれ、神の懐に抱かれている！　彼は神の力だけを信じ、神の護りだけを本当のものとなし、その他の何ものをも力としない。神を信ずるに、何の保証ぞ、打算ぞ、計画ぞ。わが衷に住む義をどうしてくれる。「我れ」が叫ぶのではない。義が叫んでいるのだ。義が神に祈っているのだ。こういうのが彼の「義」の肯定であり、「義」の主張であった。このあらっぽい義と人格との素朴な一体を近代

人は何と見るか。死んだ神学と似而非なる信仰とを以てこれを審くならば反対に審かれるであろう。

彼の眼前に咆哮するものは何か、「獅子」である。彼の耳目を盗んで潜み待つ獣は何か。「牡獅子」である。凡そ此の如き悪の群が、権力者が脅かしながら、隠れながら、彼の魂を塵にしてしまおうとする。しかし彼の眼指は何処を瞻仰しているのか。神の聖手とその剣！　傲岸なる野獣輩は草と薙ぎ倒されるのみ。密処に隠れる卑怯者は白日の下に曝されんのみ。

彼らの分前も年歯も既にメネ・メネ・テケル（「数えたり、数えたり、秤れり」（ダニエル五・二五）である。神は彼らを祝福してか、彼らに種々の財宝を附与し給う。彼らの子らは増えて地に充ちようとするのでもあるか。それは在来の観念からすれば、確かに恵まれた徴である。しかし恩恵の皮肉はここにも現われている。恩恵はこれを享ける者の心によっては呪咀とならぬとはかぎらない。その間の消息を看破したこの詩人はたしかに啓示のより高い次元に飛躍したというべきである。神の賜や奇蹟に価値があるのではない。享けてこれに執しないところ、恩恵を私しないところ、そこに神は自ら臨み給うのである。神に捉えられたこの人の想い、今や一切の慾望と逆行するのを見る。人々の迷盲を思うて熟々憐憫の情遣る方なきものすらあったであろう。同胞の一人よ、来りてわが心に漲る一つの願望を共にせずやとこそ彼は念じたであろう。

「私は義に在って貴顔を見る、
目覚めるとき貴容に飽き足らん哉！」。

彼の生活態度は正にこの一句に尽され得て余りある。義は彼の生活の脊椎であり、神との霊交の存する場であり、何びとに対しても実践を迫るところの厳かな力である。義を慕い、神を求める彼にとって、この義が彼の生活の重荷にも無理にも功利にも偽善にもならなかったその自然さは、恰も幼児が母の顔を見て欣ぶことにも類するものであった。彼は安らけく神の懐に憩うた。神において一切を有つ彼、神ゆえに一切を有たぬ彼は、義の光を冥想しつつ、神の聖顔を拝する心地がしたにちがいない。また闇を退散させる旭光にも優る神の聖容を迎えまつる心地して晨の光を浴びたにちがいない。

世の禍害と暗黒と汚濁の募るにつれて彼の義の叫びはいよいよ熾烈に、彼の神信頼は愈々徹しゆくのであった。今宵眠って明朝の陽が彼を迎えぬことがあろうとも、彼にとって何か。彼はなお神の胸に在る。来世の復活を彼が信じ得たかは、何びとも知らない。しかし彼の心底に萌した明けゆく晨の希望、義にあって聖顔を見る楽しさ。これに神は十全に応じ給うた。そのことは彼が地上を去ってから、身親しく見たところであろう。

さもあらばあれ、畏るべき躓きの石、「義」の一字よ。ユダヤ人の死守した「義」のために、キリストは十字架に懸った。キリストが十字架上で「わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給いし」と叫ばれたのは、正に乾坤一擲の義の叫びであった。神意を貫いて生きたキリストの義が立たなかったら世界はひっくりかえる。その義が実に贖いの義であった。この十字架を通った福音の義、キリストの義がユダヤ人のために恵みとならん日をぞ祈り待つ。

詩篇第十九篇

(1)　楽長によるダビデの紘歌
1(2)　諸天は神の栄光をあらわし、
　蒼穹は聖手の業をしめしている。
2(3)　昼は昼に霊語をつたえ、
　夜は夜に霊知をおくる。
3(4)　言なく、語なく、
　声こそ聞こえね、
4(5)　その響きは全地にゆきわたり、
　その言は地の極にまで。
　陽のために彼は幕屋を設け給うた。
5(6)　陽は新郎の如くその天幕を立ち出で、

○　本篇は明かに1―6、7―14の二部から成る。詩の両部が全然別個の詩篇の作為的結合であるか、或はそのまま一篇の原作であるかは不明。大方の学者は前説を採る。即ち、第一部においては、雄渾なる筆致が突如中断された感があって、恐らくより長きある一篇の序曲と思われ、その内容が預言文学的色彩に富むに反し、第二部に於ては、格調が前者と異なり哀歌調で、それ自身独立の一篇を成すの感あり、内容がより後代（捕囚後）に属すると推測されるからである。

　しかしながら、ある時は自然を通して神を観、あるときは律法によって神を想いつつ生活していた敬虔な人――それは申命記法に親しみ、預言者的な気魄ある者――の折にふれての断想が、著しい対立をそのままに、むしろ非技巧的に結びついて、茲に雄篇が成ったのではあるまいか。

1　「神の栄光」（ケボード・エール）、民族神エホバはここに宇宙の創造神エールと称えられている。

「蒼穹」（ハー・ラーキアハ）雲を漂わせ、雨を降らせる弓張りの空。

2　「霊語」「霊知」（オーメル、ダアト）どちらも「語」「知」なのだが、神秘的な内容であるから「霊」の字を附けた。

勇士の如く欣然と馳場を駈けてゆく。

6 (7) 諸天の極みから彼は現われ、
その極にまで巡りゆく。
その暖熱から隠れあるものとてはない。

7 (8) エホバの法は全くして、魂を活き甦らしめ、
エホバの証は真にして、愚かな者を賢くする。

8 (9) エホバの諭は直くして、心を喜ばしめ、
エホバの戒は潔くして、眼を明かにする。

9 (10) エホバの畏は清くして、永遠に立ち、
エホバの審は真にして、すべて義しい。

10 (11) 是らは黄金よりも、多くの純金よりも慕わしく、
蜜よりも、また蜂の巣の滴瀝よりも甘い。

11 (12) あなたの僕は是らによって誡められ、
是らを遵るとき報復は大である。

12 (13) 過誤を誰が気付きましょう、
隠れたことから私を潔めて下さい。

7 「法」（トーラー）「ヤーラー」投げ出す、指し示す、教え導く、意の動詞から出来た名詞。詩一・二と同様、成分律を意味する。詩人は先ず総括的な一句を打ち出し、以下類似的、分析的語句をつらねる。七、八、九の三節に列挙してある（律）法、證、諭、誡、審の五語は詩一一九に多く見られる。祭司典では特に十誡の「律法」のため「証」（あかし）という語が用いられている（出二五・一六、二一、二二）。

11 「報は大である」（エーケブ　ラーブ）ユダヤ人においては宗教と道徳の関係が根と幹の如くつらなり、因果関係をなしている。そして実践が報復をもたらす報酬思想（Vergeltungsgedanke）が強い。キリストの山上の大告白にもそれが出ている。それはしかし功利思想とはちがう。幸福を目的とする倫理ではなく、実践がもたらす然るべき結果を述べるまでのことである。

13 (14) また高慢からあなたの僕をひき戻して下さい。
そんなことを私に主たらしめませんように！
そのときには私も全き者となり、
大いなる罪から解かれて罪なき者となれましょう。
14 (15) わが口の言が悦ばれ、
わが心の想いが聖前に至らんことを！
エホバよ、わが巌、わが贖主よ！

第十九篇　天然と律法

（前半）　天然

この詩は明らかに二つの部分から成っている。即ち天然と律法が謳われている。しかもその内容を見るに深い連関がある。謂わば互に作用しあっている連星か、楕円運動を起こす地球の二焦点にも似ている。冒頭に曰く、「諸天は神の栄光をあらわす」と。この起句に見るように、天界の主体は神であって、諸天にその神の栄光があらわれている、と。諸天は被造物のうちいと高く、聖座のあるところ（詩一一・四）

である。それゆえ諸天は大自然の冠として神の栄光の顕現するにふさわしい場である。この「神」はエールという原語で、「力強き者」の意と言われる。宇宙を創造した神が力ある実在と称われるのは至当なことである。そのエールの「栄光」はカーボードという原語だが、本来重厚を意味するので、「壮厳」と訳すのがむしろ原意に近いと思われる。詩篇五〇・六には「諸天は神の義をあらわせり」とあり、詩篇八五・一一には「義は諸天より視下せり」とあるように、力の神は、義の神である。それから詩篇三三・六を見ると、「諸天はエホバのみ言によりて成り、天の万軍はエホバの口の霊気によりて創造られたり」という著しい聖言がある。神の言は霊気をもっている。即ち天地万物は神の力強い霊言、霊気によって創造された。そして創造の業が神の愛に発していることは言うまでもない。このようにして諸天が神の壮厳と栄光を顕現している、という一句がいかに神を讃美している心であるかを知る。大自然の背後に、超絶の壮厳雄偉なる人格的にして霊的な創造神を信じ仰いだところにイスラエル民族の独一性を見る。詩篇第九六篇を見ると、民族神エホバが同時に宇宙の創造神、天国の審判者ということを明かに自覚し、讃美している著しい数節がある。「諸々の民のすべての神はことごとく虚し、されどエホバは諸々の天を創造り給えり。……諸々の民の族よ、栄光と力とをエホバに与えよ。……エホバは公正をもてすべての民を審き給わん。……エホバは来り給う、地を審かんとて来たり給う。義をもて世界を審き、その真実をもて諸々の民を審き給わん」とある。

さて、「昼が昼に霊語をつたえ」の「霊語」は語らいを意味する「オーメル」という原語であり、「夜

は夜に霊知をおくる」の「霊知」は「ダーァツ」という「知」を意味する原語であるが、次節に「言なく、語なく、声こそ聞こえね」とあるのを見れば、昼の「霊語」も夜の「霊知」も、神韻縹渺たるもので、正に霊的なひびきのもので、霊覚を以てしなければ、祈り心をもってしなければわからないもの、つかめないものであるから、「語」と「知」に霊の字を冠して訳語としたわけである。

ユダヤ人の自然観によれば、「自然」という特定の語がないことからもわかるように、自然は自在的な存在ではなく、どこまでも神の具体的な被造物である。「物」といっても、唯物論的な「もの」ではなく、霊的な、生きた神の属である。であるから、一石一草にも神の栄光があらわれる。仏教で「山川草木悉く仏性あり」というが、イスラエル宗教も一石一草悉く神性の具現なり、ということができよう。キリストはあるとき野草に神の栄光を見た。あるとき「石が叫ぶ」と喝破した。神性は大自然に超在し、貫在し、遍在し、内在する。だから諸天を通し、万物を通して、人言以上の霊言が、人智以上の霊知が、神韻をもって「全地に、地の極までも」ひびいているのである。神なしの自然というものは彼らの意識にない。自然は神の天然である。神の意志によって、自然現象に変化が来たりする。自然には勿論自然の法則がある。しかし神の霊法はしばしば自然法を破る。霊法は次元の高いもので力をもっている。うつろいゆく自然において、うつろわない神の意を知ることは、自然そのものを手ばなしで神秘的実在として見る汎神論的な見方とはちがう。あのかたくなな意志、あの強烈な情感、あの神秘的な智慧のゆえに、苦難を荷って来たイスラエル民族は、自然の背後に実在する偉大なる者を信じ、これに叫び、これに祈り、これを讃美

するのでなかったら、彼らはやりきれない民なのである。彼らは単に自然に親しむのではなく、自然を通して、自然に於て、神と交るのである。神と交るところに彼らの歴史があった。彼らは自然と共に呻き、自然と共に讃美する、神を！　そのことは詩篇の中にも預言書の中にも随所にあらわれている。この詩篇のように、自然にして神の霊言、霊知を蔵するのでないならば、どうして自然において言い知れぬ慰藉と激励の友を見出し得たであろうか。この詩はよく自然の中に神の栄光を観じ、神の言の妙音を聞き、自然を越えて神の聖座に想をいたした。この間の消息を使徒パウロも闡明して曰った、「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは、造られたる物により、世の創より悟り得て明かに見るべければなり」と（ロマ一・二〇）。

かくて詩人は、被造物のうち、最も目ざましきものたる日輪をとらえ来たらざるを得なかった。陽の荘麗は祝典の天幕（ヨエル書二・一六参照）を立ち出でる新郎にたとえられ、その雄偉は何ものも恐れない丈夫（ますらお）である。このように作者は端的に太陽において神の尊厳の一面に想を馳せた。そしてまた陽の遍照の光から、何ものも隠れてあることの出来ないように、何びとも神の烈日の如き審判から免れ得ないと同時に、煦々たる暖熱の恩恵を蒙り得ない者もないことを作者は謳った。しかし陽において彼が讃おうとしたこころは、象徴的に意味づける気持からではなく、啓示の率直な表現に過ぎなかったのであろう。ギリシャやバビロンやエジプトの詩に太陽を讃えるものがあるのに反し、このヘブライの歌は陽を讃仰の対象として神化しようとはしない。この詩人には陽の彼方に別の陽がある。詩の前半はこの自然界の王者太陽を

神の栄光の具現として端的に謳ってあわただしくも途絶えている。恰も太陽が忽然として山の端に没したかの如く。しかし、全地に遍き神韻を聞き、全地に遍照する日輪を見た詩人はそれで天然の音と光を謳ったのであって余韻は無限無量といって好い。

わが国の名歌名曲「美しき天然」（武島羽衣作詞、田中穂積作曲）は、神の創造の業として天然を謳ったもので、その精神はこの詩篇第十九篇と相通ずるものである。

（後半）　律法

「天然」の詩は大方四―四強音のあかるい調べであったが、後半の「律法」の詩は大方三―二強音の哀歌調に変る。活動の昼から冥想の夜に入ったようなものである。まづ、

「エホバの法は全くして、魂を活き甦らしめ」と。

エホバの法とは明白に総括的な言で、所謂「モーセ律法」を指すのであろうが、詩の気持からは神の訓令、指示、宣言というような原義的な意味をも含んでいるであろう。彼らの魂の生命は、神の言より他の何ものでもない。被造物を通して神の栄光を知るのみでなく、直接に神自らが預言者（広義）を通して語り給うた神の言こそ、ユダヤ民族の進むべき道しるべ、不滅の光であることは決定的事実であった。

道徳の法はいつ人の心に植えつけられたものか。否、人の心そのものの本質として道徳律は据えられて

いたにちがいない。それを哲学的に解明したのがカントであるが。「神の似すがた」につくられたという神話的表現が、そういう啓示の神学的大前提を語っているのである。それが自覚さるべき最初の試みは、聖書史観によれば、原人アダム・エバが善悪を知るの樹に関して、神から禁令を受けたときである。神命は自由なる服従を要求する。服従は最初の律法であった。そして彼らが神命に従うか否かは、彼らの人格の内なる律法の主体（良心）の声のままに、自由に決せられて可なるべきものであった。このような課題に原人は悲しい哉敗れた。即ち自由の誤った選択によって、本質的に自由は捕われた。何に、我執という自己本位に。自己本位のあやまった自由の相が、罪というものである。かくてパラダイス・ロスト「楽園の喪失」となった。その後絶えず試練が臨んだ。ノア、アブラハム、そしてモーセ。彼らはよく従った。神の言への服従の決意とその可能は何によったか。曰く、信仰。モーセに至って神の言は特に律法の形を以てイスラエルの民に臨んだ。律法に現われた神の言の根本精神は「十言」（出二〇、申五）、通常「十誡」と称われているものに明かである。これを遵るには信仰の戦を要した。その後のイスラエル史を一瞥するとき何びとも容易に知り得るところは、信仰の苦戦であり、現実は惨憺たるものであった。例えば、「何時まで汝らはわが誡（ミツワー）とわが律法（トーラー）とを遵ることをせざるや」（出一六・二八）というような神の譴責が反覆されねばならなかった。律法の根本理念を飛躍的に継承しているのは、言うまでもなく預言者たちの超律法的実践の精神であり、また律法を儀文から解放し、生命の言としてこれを把握しているのは詩篇の心である。

律法は何故にこの詩篇においても言を尽して歎称されているか。道徳的要求も、宗教的儀礼も、社会的条規も遵り易くないことながら、その根本は民族的契約とそれがもつ希望にかかっているので、またその限りにおいて律法は生活の拠り所であり、歓喜を齎らす原動力であった。彼らは神の言を信ずると共に律法に対して失望することを知らず、楽観的に讃美し得たのである。即ち、律法を遵ることは、「エホバを畏れる道」であり、「純金より慕わしく」、「蜂の巣の滴瀝よりも甘い」という。イスラエル民族が律法民族である一つの秘義は、彼らにとって律法が慕わしく甘い蜜であるといった愛慕の情をそそるものであるというところにある。

若しこの詩人が国家的潰滅の憂目を見た後の人、即ちバビロニア捕囚後の人であるとするならば、彼にとって希望は、いよいよ律法の実践と、契約の根源なる恩恵（一一節）の神にして贖主たるエホバ（一四節）にかけられざるを得なかった。彼の心は砕かれていた（一二・一三節）。自然と律法を通して昔も今も変りなく自らを現わし給う神の外、その心を満たすものがなかった。この終りの数節は切々たる体験から滲み出た実感のあふれている深いまた力強い告白で、ダビデの原作ではなかろうか。

詩篇第二十三篇

(1) ダビデの絃歌

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。
2 若草の野に彼は私を臥させ、
憩いの水汀に伴れゆき給う。
3 わが魂を彼は甦らせ、
義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。
4 また縦い死の陰の谷を渉るとも
私は禍害を恐れない。
あなたが共に在ますから。
あなたの笞、あなたの杖、それが私を慰める。
5 あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う、

○ 実感溢れた短篇を以てイスラエル民族の宗教心の真髄を告白している。詩篇中の傑作。この短篇に天国と地獄と煉獄がおのずから展開している。ダビデの作と見たいが、誰であっても可い。

1 牧人（ローエー）、エホバは「イスラエルの牧者」（詩八〇・一、イザヤ四〇・一一）であり、イスラエルは「その牧場の羊」（詩七九・一三、九五・七、一〇〇・三）。「困る」（ハーサル）、不足になやむ（詩三四・一〇）。「若草」（デシェ）家畜が極めて好む草（ヨブ六・五）。

4 牧人が畜群を伴れて歩く道には多くの危険と困難が伴う。ウァーディ（アラビヤ語）と称する小暗き水なき川底のような谷がある。そんなところを経過することがある。また断崖、峡谷はかの断層山脈をもつパレスティナには珍らしくない。このようなものを「死の陰の谷」といったのであろう。LXX, Vulg. はいずれも「死の陰の真中」となっている。

「笞」（シェーベト）尖端に鉄の金具が附いた梶棒の如き牧杖。野獣や盗賊に対する武器（イザヤ三一・四、サ前一七・三四―）。

「杖」（ミシュエネト）牧人が羊を導くとき、或は難路をゆくときに身を支えたり羊を助け出したりするとき用う。

わが諸々の敵前で。
あなたはわが首を油漬けにし給う、
ああわが酒杯は溢れた。
誠に善福と恩恵とが私を追跡する、
わが生命の日の限り。
かくて私はエホバの家に住む、
日に日が続き果てるまで。

第二十三篇　人生の歌

まえがき

詩篇第二三篇！　あまりにも有名な詩篇で皆さんは御存知過ぎておられるかも知れませんが、私は第二三篇は何度読んでも新しいんです、飽きることがないのです。まあ詩篇一五〇篇の中で、もしただ一つの詩篇を選べと言ったら、やっぱり第二三篇です。それくらい

6「私は……住むであろう」（ウェ・シャブティー）の「ヤーシャブ」を「シューブ」と訓みかえて、「私は帰り往くであろう」とする。W. E. Barnes. 即ちダビデがアブサロムに追われたあとでエルサレムに帰還する背景をこの詩に考えている（サ後一五・三―一七、一九）。

この詩篇は人生の歌です。全く福音そのものです。詩篇中の詩篇です。

京都にうかがう時に、列車の中で私はちょっと歌の本を開いて「荒城の月」なんかを口ずさんでみたんですが、実に単純な譜でありながら、無量の余韻をもっていますね。極めて日本的であり、万人のハートに訴える世界的名曲ですね。ドイツの「ローレライ」もその通り。短かい名詩名曲を二つ、三つ、作ったらもうそれでその人ははっきり人生の目的を達したようなものですね。ただしあの天才作曲家滝廉太郎は無限の可能性をもっていたので、その早世は、日本はおろか世界的損失でありました。

ともあれ、この詩篇第二三篇は正にそういう世界的名作たる詩篇です。「ダビデの歌」とありますが、正にダビデにふさわしいです。

天国的現実

1　エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

「エホバ」は旧い訓み方で、「ヤーウェー」と「アドナイ」、即ち「実存者」と「わが主」の二つの名称の子音と母音の組み合わせから出来た名称で、両義がふくまれているわけで、却ておもむきがありますから、やはり「エホバ」を用いることにしましょう。

「エホバこそはわが牧人」、イスラエルの民は元来遊牧の民ですから、彼らの歴史と生活からおのずから出て来た信頼深い表現です。我々日本人には、彼らが本当に身に泌みて感ずるほどに感ずるわけにはいきません。けれども、何と生命的な関係ではないか、と思うわけです。一切牧人に任せて生きている羊群の

ように、イスラエル民族は神に信従して生活していたのが彼らの本当の姿でした。「恵福なるかな柔和なる者、その人は地を嗣がん」（マタイ五・五）という従順で柔和であるというのが、あの「山上の垂訓」でも出てくるところの、キリストが非常に評価された在り方です。一見それは何か弱虫のようです。しかしこの従順にこそ力が宿るのです。どんな強そうな人でも本当に神様に従順であるという姿はすばらしいことなんです。キリスト・イエスこそはこの第一節に最もふさわしい人でした。彼は徹底的に神様を牧人とし、自分を羊とした人でした。無力に徹しました。そしたら最大の勇者となりました。父なる神様の力が十全にイエスを通してはたらきました。キリストを神の羔（小羊）という所以です。これは私たち一生かかって徹底的に神なる牧人に従順でありたいものです。それは具体的には主なるキリストに全托することです。

「私は何もこまらない」、原訳「乏しきことあらじ」は立派な訳です。信仰は断言的でないと力がよわまるので私は「何も困らない」と訳しました。単に文法的な訳をすると却て原語の弾力性を失うことしばしばです。文法的表現の奥の根源現実を洞察して私は訳したいのです。神との一対一の白熱的なドラマの中に自分を投じ入れて、自らドラマの中の人となったり、動物となったりしてよむことです。この場合は我々は羊になって、「エホバはわたしの牧人で、私は何にも困らない」、羊心になることです。従順なんて言うより羊心と言った方がいいです。さきほど、讃美歌二一三番の「緑の牧場に」という歌をなぜ一番先に歌ったかと言うと、こちらに来る時にもね、あの皐月（さつき）晴れの新緑がきれいで、目が覚める

ようでしたから、「緑の牧場」の歌を真っ先に歌いたかったのです。そして「緑の牧場」は二一三番で、詩篇二三と似ている、ニ、ジュー、サンだから二三篇にした（笑い）。私のすることはいつもこんな調子で、何にも特別に考えないのです。ここに来て決めたんですからね、ちょっと冥想しているとそういうことになるんですから。そういう自分は羊心になって、ちゃんと牧人が全部引き受けてくれる、そのことがちゃんと書いてある。

2　若草の野に彼は私を臥させ、
　憩いの水汀に伴れゆき給う。

文語訳では「エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水浜にともなひたまふ」と、すばらしい句ですね、これは天国的な現実です。地上に於ける天国の状況なんです。

神様は信頼深いたましいを養い給う。羊に若草と清泉を与える牧人のように、神様はまじめに働く者には、なくてならぬものを与え給う。キリストが「思いわずらうな」と言われたように。こちらがわで大切な一事は勤勉な働きであります。

信仰の世界は神と一対一です。教会（エクレシア）は複数の群、召されたる者たちの群れなんだけれども、それを構成する単数を忘れてはならない。イスラエル民族の父祖時代のアブラハム、イサク、ヤコブという名称はみな単数であり、且つ同時に種族の意味を持っていました。やっぱり単数が、一というものが、これが土台です。宗教は一の世界なんです。個というものをいい加減にしたら、宗教の世界には本当

に入れないのです。親が信仰があるから息子もというわけにはいかないのです。各人が神に直結するわけです。一対一で直結できないようなことであったらば、信仰の世界はいつまで経ってもダメです。だからこの詩篇二三篇が単数で告白されているということが、のっぴきならない現実を語っているわけです。一人称単数、相手の神が三人称的に表現されていても、それは二人称単数として読まねばダメです。

3　わが魂を彼は甦らせ、
　義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。

空気は私たちの身体を生かしてくれる。この春、五月はすばらしいです、自然界を甦らせます。ところで私たちの魂を甦らせる者は、これは神様の霊気。神様の素晴らしい霊気はわが霊魂を甦らせ給う。神霊によってこそ不滅の生が与えられる。そして神の義の路を歩ませられるのは、私の実存云々のゆえではない。神の聖名の故である。聖名は原因であり、目的であります。この「聖名のゆえ」の人生であります。そしてそれが実現する力は「聖名に在って」であります。「聖名のゆえ」の奥に「聖名に在って」を受けて下さい。

こういうわけです。で、「聖名」というのが主体なんです。神の名、神名。キリストの聖名、それに在って、その故に。これが人生の一切です。マルティン・ルターも最初に聖書を翻訳した時に、彼は自分の名前を書かなかったです。ルターはキリストの聖名だけだと。彼は確かにその点非常に正しい根本的な角度を持っていました。

だから「聖名の故をもて」、こっちのためじゃないんです。神様の聖名の故に私を義しい路に導いて下さる。聖名は同時に聖名の栄光、聖名の栄光のためにと言うことです。

「義しき路」なんてわからないです。何がただしいんだか、で、神様の導くところがただしいんです。一人一人を神様が導く路が、即ちこれが義なんです。そういう聖名の故に。日本の名に於てだとか、京都の名に於てだとか、何とかの名に於て、という言い方をするでしょう。あれが非常に大事なことなんで、聖名の故をもて。これは必ず、その導いて下さるところが、即ち自分にとって義しい路なんです。以上一―三節は天国的現実であります。

地獄的現実

4　また縦い死の陰の谷を渉るとも
　私は禍害を恐れない。
　あなたが共に在ますから。
　あなたの笞、あなたの杖、それが私を慰める。

今度は地獄が来ちゃったな、さっきは天国でしたのに。「死のかげの谷」、正直死を怯やかされるようなところがある。昼間も小暗いような谷があるんです。非常に際立った岩壁を持った谷がある。そこはウァーディ（WADI）〔アラビヤ語〕と言いましてね、大方水もないんですけれども、その蔭に猛獣が隠れてたり、盗賊が隠れてたりする。だからそれが死のかげの谷なんです。そういう危険なところを歩んでも

禍害をおそれない。「あなたが共に」という。「彼が」じゃない。「あなたが」です。あなたが共に在まし給うから。

ここで「あなたが共に在ますから」と。

あのモーセが出エジプトさせられる時に、神が「イスラエルの民が苦しんでいるから、助けてやりたいと思う。お前往きなさい」（出エジプト記三章）と言い給うた。そうしたらば、「いや、とても私にはそんなことはできません」とモーセは断わった。すると神様は「我必ず汝と共に在るべし」と力強く言って、モーセを励ましました。詩篇の方では「汝我と共に」と言って、こちらから告白してるんですが、この出エジプト記三章一二節では、「神いひたまひけるは我かならず汝と共にあるべし是はわが汝をつかはせる証拠なり」、何かお札があるんじゃない。しるしはわたしがお前と一緒にいるということだと。神様の方から、「わたしがお前と」と。大事なのは、「我汝と共に」という天来の響きを聴くことです。それでこそ「汝我と共に」と告白できるのです。これが信仰の作用、反作用です。神様を信じて、汝我と共に在ますからと信じかかってる。ところがその信仰の土台は「我汝と共に」。預言者は神の言葉を伝える。上から来る言葉を。祭司は民の言葉を神に伝える、執成す。預言者と祭司とはそのように、上からと、下からとの二面を代表するわけです。預言者も単独者で、みな神様にとっつかまえられて、神様に呼びかけられて、そして神にひっぱりまわされながら神の言葉を伝えた。ところが祭司は、民の言葉を、願いを、執成す、下から上へ。

で、この「汝我と共に」というこの信仰は、「我汝と共に」という神の声が土台にあるということを忘

れないように。その声を聴くのは祈りの場です。

聖書の宗教は啓示の宗教で、神様の方から呼びかけ、神様の方から捉まえかけてきた。そういった立体構造のドラマです。光が闇の中にさし込んでくる。だから救いのドラマです。で、その神の救い、神の呼びかけ、神の御声、それを信じて汝我と共にと。いわゆる神秘的に神様の声を聴かなくったっていいですよ。聴こえる時もあるさ、聴かなくたっていい、我々にはちゃんと保証がある。聖書という保証が。聖書という歴史的な保証がありまして、そしてこの聖書は単に歴史的じゃない。聖書の歴史というのは必ず現在化してくる歴史なんです。過去におけるところの神の恩寵は今も尚同じく働いてくる。その御言葉は今も尚同じく響いてくる。で、その響きを聴かなくったっていいですよ。今テレビがあれば音楽が響いているんだよ、テレビが無いからわかんないけれども。だけどもテレビが無くても音楽の響きがあるということを私たちは信ずることができる。そのように神の言葉は私たちを包んでいる。その御手は私たちを捉まえている。ということは、聖書の現実が現在も同じくそうであるということを受け取るところに信仰があるのです。だから聖書が信仰の土台であるということは、ただ歴史的に土台であるということじゃなくて、過去的なものが単に過去として終わらなくて現在であり、また未来にもそうなってくる。だから聖書の事実というものは単なる相対的な、歴史的な事実とは違うんです。聖書の事実というのは、いつも現在的な事実なんです。いつも過去から、現在化の事実であり、また現在化の預言である。だから過去の事実も未来の預言もみなここに於て現在化してくる。

そういう死のかげの谷をあゆむとも、いつ死に出っくわそうとも恐れない、「あなたが私と一緒にいらっしゃるから」。たとい死というところを現実に通らなくちゃならなくても、それは決して滅びにはならない。死の関門を突破する。とにかく死というものは私たちにとって決定的なある一つの関門だからね。すなわち、「汝我と共に在す」ということが、これが「我汝と共に」、「汝我と共に」というこの関係が常恒的になりたいものです。どんなに孤独であろうとも、神様は私と一緒に、私は神様と一緒に。そこにまことの平安があります。

旧約の世界ではキリストは出てこない、それはしょうがないよ。新約になって現われた。で、私たちにとって神様が私と一緒にということは、具体的にはキリストが私と一緒に。どうぞ皆さんひとりびとりがこのキリストと共に、を現実にして下さい。こちらの状態一切に拘らず、キリストは平伏しのたましいを無条件に受け入れて下さる。こっちはもうしょうがない野郎だから、しょうがない野郎と一緒にいて下さるのがキリストなんだから。キリストはどんな野郎にも、女郎にも、十字架上に処刑された盗賊にも、「お前は今日、わたしと一緒にパラダイスだ」なんておっしゃって下さるお方だから。最後の瞬間に、「お前は今日、わたしと一緒にパラダイスだ」と、キリストと共にパラダイスに入って行ったのは立派な人じゃなかった。一番悪い奴だった。どうにもならない地獄行きの奴が天国に行っちゃった。地獄におっこちる途中から、キリストにスーッと方向転換して、そしてキリストと一緒に天界に入っちゃった。最高の恵みですよ。これが福音の世界。悪しき者、病める者、どうにもならない者をキリストは救わんとして来ら

れた。それで、

「たとひわれ死のかげの谷をわたるとも禍害をおそれじ、なんじ我とともに在せばなり」、まあとにかく、今日は旧約の世界ですから、「共に」ということをしっかりつかまえて下さいね、一緒に。やっぱり皆さん、どこかへ行く時にお友達と一緒に行きたいわけですよ。これはキリストというお友達、これは絶対に裏切らないです。この友達は。ここにどうしてもキリストを持って来ざるを得ないのです、私みたいな奴は。

それで、「あなたが共に在り給うから」、ありがたくてしょうがないです。ありがたくて。「あなたの答あなたの杖、それが私を慰めるから」、答と杖というのは二通りありましてね、答の方は先に鉄の金具がついていて狼なんかが来たらそいつでやっつける武器です。杖の方はこっちに来るんだ、あっちへ行くんだといろいろ導いて指図してくれるところの杖なんです。そういう二つの答と杖を牧人は持ってるんです。導くための杖と、盗賊や猛獣を防御するための答。だから「なんじの答なんじの杖われを慰む」と。だから死のかげを通っても大丈夫、護られるからと、護りのことを徹底的に言っているのは詩篇一二一篇、「昼も夜もいつでも神様は護ってくださってる」と。

で、第四節は地獄的現実でした。

煉獄的現実

5　あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う。

わが諸々の敵前で。
あなたはわが首を油漬けにし給う、
ああわが酒杯は溢れた。

現世は戦いの世界だから煉獄です。ヨブ記七・一にも「それ人の世にあるは戦にあるが如くならずや」とあります。ヴルガタの（ラテン訳）で簡潔に Militia est vita hominis.「人生は戦なり」と訳しているのは、セネカの有名な言、Vivere militare est.「生くるは戦うことなり」と相照応します。しかし神は仇の前に筵をもうけて下さる。仇の前に我がために筵をもうけて大いに慰め、また力を与えて下さるというわけだ。その筵はどういう力を与えるかと言うと、「わが首を油漬けにし給う、わが酒杯はあふれたり」と。「あぶら漬けにする」というのは御存知の通り、「油注がれたる者」メシヤ、クリストス、という言葉があるように、神が神霊をそそぎ給うことを詩人は力強く告白している。

サウロという最初の王様がいましたね、あれにサムエルが油を注いだ。そしたら神霊が臨んで、何をお前はしても大丈夫だと言われた。サウロは初めはよかったんだけれども、ダビデという家来が、あまりに立派な能力のある家来だもんだから妬んだ。そうしたら妬みの心と共にサタンの霊にすり変った。それでサウロの末路は悲惨なことになりました。妬みや争いはサタンから来ます。

その敵前の筵で首に油を注がれる。即ち神霊が注がれる、即ち新約の光でよめば正にみ霊のバプテスマです。霊火を浴び、霊油をそそがれて、力を得ます。人生の戦で勝つ唯一つの本当の力は聖霊にありま

す。私は自分の体験からハッキリ申します。みたまの力がどんなに私を助け給うたか。毎日何らかの意味で聖霊のみ力にあずかっています。み霊に替えられるものは私にはありません。私の唯一の宝は、み霊です。そしてみ霊はどん底の愛の力をもっています。

煉獄に於ての戦い、人生の戦いに於て勝つためには、聖霊が最大の力です、信仰信仰なんて言ったってダメですよ。私は長いこと無教会にいましたが、み霊の力を知りませんでした。十字架のことはサンザン承りました。「十字架を仰ぎ見る」という言葉はよく聞きました。本当は、パウロさんと同じに、「われキリストと共に十字架せられたり」というところに来て、「最早われ生くるにあらず、キリストわが内に在りて生き給うなり」というところまで来なくては！　このキリストとは何ですか、「わがうちなるキリスト」とは聖霊のことです。あのガラテヤ二・二〇は無教会でも教会でも大いに引用するんだけれども、パウロの次元からはずれています。観念化しています。私は無教会の本流にいたからよく知っているんです。私は御霊のバプテスマを受けて、正直ガラリ信仰の本質が変りました。今までの信仰にはヴェールがかかっていた。何か足りないと思っていたらこれだった。はっきりしています。使徒たちもみな聖霊を受けて本当に立ち上ったんです。聖霊以前にキリストの復活がありました。キリストが復活した、だから嬉しいなんて立ち上ったって、そんな位ではまだだめだったんです。聖霊を受けないうちはその喜びはぬか喜びになっちゃう。だから、実はペンテコステが我々にとっては一番大事なことなんです。クリスマスよりも、復活節よりも、もっと大事なのは聖霊降臨のペンテコステなんです。ところが、このペンテコステ

をみんないい加減にしているね。で、聖霊についていくら語ってもだめですよ、これ。聖霊の中から響いてこなければ、そういうことで、どうぞ皆さんは是非とも、聖霊のバプテスマを受けなさい。もし未だでしたら。そのためには棄身の祈りをすることです。棄身とはキリストの中に自分を棄てることです。それが「南無」、帰入、帰依で、私は祈入と申します。祈りつつキリストの中に入ることです。だからパウロが言ったでしょう。「われキリストの中に」、「キリストわが中に」と。皆さんひとりびとりみたまのバプテスマを体験して下さい。勿論私を通してということもありますけどね。

で、この「わが首をあぶらづけにしたまう。わが酒杯は霊酒で溢れた」と。もし霊酒というならば、わが酒杯というのは、われという酒杯ということです。われという全存在が神様の酒杯になった、それだから全身に御霊が満ちてきた、これが、この二三篇の五節です。ある意味に於てこれがこの詩篇の中心です。我という酒杯が神の霊で満ちあふれる！　私たちの全存在は空気でもって包まれ、空気を吸って血は清められながら生きているでしょう。空気は身体にとって絶対に必要なんです。我々の魂にとっても絶対に必要なものがあるわけです。これは神の気なんです。神気なんです。キリストのみ霊です！「天地正大の気」というけれど、この天地正大の気の実質は神様の霊気なんです。で、それじゃあこの霊気はどうするか、これはキリストが下さる。それは十字架を通らなければだめですよ。キリストの十字架の贖いで。キリストの十字架は、過去現在未来の全我を贖いとって下さった。相対的な自分などもはや問題にせず、勇敢に聖霊に在って生きる一念のみ！　キリストは我々の相対的な善悪を問題になさらない。善悪の

彼岸なんです。絶対的な世界に入りましょうというのです。絶対的世界っていうのは条件がいらないんですよ。絶対的世界というのは無条件の世界です。無条件にわたしはお前を贖いとったから、過去のお前も、現在のお前も、未来のお前も、もう心配するなと。そのままでいいんだと。ということは、そのままに放っておくということじゃないですよ。そのままでいいから入って来いと、そうしたらばもう既に根底から贖いとられているから、ものすごいものがお前の中に入ってくるぞ、これが聖霊です。十字架という狭き門を通ると、向こうは広大無辺なところです。詩篇二三篇のみどりの野、憩いの水汀なんです。向こう側は霊気の満ちているところのみどりの野、憩いの水汀なんです。私はいつか冥想していたら、本当にそういう処に入って行ったよ。そうしたら、そこはもう聖霊が満ちていますから、聖霊のバプテスマを受けざるを得ないんです。だから十字架と聖霊は離すことができないと言ってるんです。無条件なんだから、無条件に聖霊が来るんだから、何か難しいことでも何でもないですよ。十字架を本当に受けて、すっかり問題は無いんですから、ありがとうございますと平伏してごらんなさい。何か知らんけどすがすがしい世界に入ってくる。自己から抜けちゃっていますからね。こだわりが無くなりますからね。そこで主様！　と呼んでごらんなさい。御霊の世界が豁然としてやってくるから、いや実はその中に入っていたことに気がつくから、そんなもんですよ。気がついて頂きたい、何も難しいことはない、これほど易行道なことはないです。努力精進、何にもいらん。

親鸞の「歎異抄」で本願にあずかるあの信仰の角度と同じです。悪人こそ救われるって言うんだ。だめ

な奴こそ、自分をあるがままでもってキリストにぶつかって行けば無条件にはいれるんです。「お前はこんな悪いことをしやがったからだめだ、何回こういうわけだからだめだ」なんて決しておっしゃらない。人間は言うよ、すぐああだこうだって人の事を。そういうことを言ってる人はいつまで経っても本当の世界に入れないですよ。人の事をいろんな事言ってる人は。はっきり事実が証明するから。で、もう一対一でもってキリストの中にそういうようにして入って下さい。それはもうとっても楽しい。だから私は楽だと言うんです。駱駝じゃありませんけどね（笑い）、駱駝くらいに砂漠も歩けるようになるでしょう。で、この渇かざるところの霊水を頂いているから、だから、「われという酒杯」は神の御霊の水であふれにあふれて、生命の泉が湧く、とキリストが言われた通りです。

聖霊は水と言われたり火と言われたりする。一向さしつかえない。これは永遠の火で、決して消えないのです。どんな嵐が来ても、この灯は消えない。燈台なんかは具合い悪くなったりするけれども。我々の中の聖霊の火は、「汝らは世の光なり」の光源で、御霊の光が光っているんです。御霊の光が光っているから本当の世の光、どんなに世の中が絶望的になろうが、混乱になろうがびくともしない。そんなことでもって動じないです。シラーがウイルヘルム・テルの中で「強者はひとりある時に最も強し」と言いましたが、本当に「強者は、ひとりある時に最も強い」。それはキリストの霊が入っているからです。歴史は一が動かす。あなたがたは、どんな乙女であっても、ひとりの乙女が動かしますよ。歴史は女が作るなんて言う言葉もあるくらいだからね。そういうわけで、誰でもかけがえのない存在なんですから、いいです

か、本当ですよ。相対的な能力がどうだなんて、そんな問題じゃないですから、キリストが入ってきたら皆さんひとりびとりは天下一品、全世界を相手にすることができるんです。本当ですよ。それだけの御霊の祈りの現実の充満！　一粒の芥種というのは、あなた方ひとりびとりが本当の原始力なんだ。原始の力が入ってくる。それは原子爆弾が爆発したって、我々の肉体はすっ飛んだって、我々の存在はすっ飛びませんですよ。ですから信仰というのはそれだけの強さを持たなかったらつまらないです。いい加減な信仰はやめた方がいいです。で、信仰というのは信じ仰いでいるんじゃないです。神様を信じ、キリストの信の交わりの中に入っている。「汝我と共に」「我汝と共に」というのは、この交わりの世界、信交の世界。二にして一なんです。この「共に」は二即一なんです。なぜ一かというと、あなたの中に聖霊がある、わたしの中にも聖霊がある。この聖霊があるので二にして一と言えるわけです。内に聖霊を宿すから、「共に」がただの共にじゃなくなっちゃった。今度は、「の中に」入っていく世界です。なぜ中にかと言うと、そこに共通なるものがあるから、汝は汝なんだ、どこまでも。我は我なんだ、はっきり。だけれども、これが一つだということは、ここに共通な聖霊があるから、だからパウロは、「我彼の内に、彼我が内に」と言っている。この内の世界は何か、パウロがキリストと言おうが、聖霊と言おうが、神と言おうが、あれみんな通じているんですから、分析する世界じゃないんですから。詩篇二三篇が自分の歌にならなかったからだめです。これ「私のうた」ですよ。ダビデの作だけれども、「わが詩篇」と叫ぶようになります。

6　誠に善福と恩恵とが私を追跡する、

わが生命の日の限り。
かくて私はエホバの家に住む、
日に日が続き果てるまで。

「私を追跡する」という言い方をしてるんです。善福も恩恵も、神様の愛で、それがどこまでも私を追跡して下さっていると。もっとハッキリ言えば、善福と恩恵そのものたるキリストがいつでも私たち一人一人を後べから追跡して下さっている。我々はキリストに推進せしめられている、というのです。ぶっ倒れれば抱きあげ、担いあげて前進して下さる！

「エホバの家に住む」、「住む」、じゃない。「私はいつまでもエホバの宮となる」なんです。そうは書いてないよ。書いてないけれどもそう読むんだ。旧約では宮に住まん、エルサレムの宮。だけれども新約では、もう黙示録には神の宮は、神殿はなかったと書いてある。神と羔しかなくて、それが神殿であるという言い方がしてある（黙二一・二二）。だからエホバの宮とならん。パウロが言ってるです、「汝らは神の宮なり」と。その通り、我々が活ける宮、活ける神殿、キリストが活ける神殿でした。だからエルサレム神殿が壊われても、わたしは三日で建てると言ったのは、三日目にわたしは甦えるということです。彼自身が生ける神殿だからです。神殿は、本当の教会は、自分自身がそうです。『教会の誤解』というブルンナーさんのあの本を読んでごらんなさい。いわゆる教会はだめだから、ブルンナーさんはあれを書いたら、教会の人に憎まれたらしいね、だけどもだめだよ、あれ真理だよ本当に。「聖霊を宿していない教会

は教会じゃありません」とはっきり言ったんです。活ける御霊にあっての存在、即ち活ける宮、活ける神殿、我はとこしえに神様の宮とならんであります。これではっきり二三篇は新約の光でもって読んだわけです。天国、地獄、煉獄、どれにも対処して大丈夫。だから運命、環境はどう変わって行こうが絶対に大丈夫！　皆さん、もう、いわゆる幸、不幸なんていうものは問題じゃないですよ。この世の幸福なんてものは。本当の幸いは汝我と共にという世界、我汝と共にという現実。これが本当の幸の世界。キリストと一緒でないところには、ひとつも本当の幸はありません。どんなに幸のように見えてもそいつは滅びて行く、それはむなしい。もう嬉しくてしょうがないですから、キリストと一緒だったら。で、すべっても、ころんでも平伏して、主様！　と進んで行く。

この十字架が立っているために人間は傲慢になれないです。人間がもし傲慢になったら、それは十字架が消えてる証拠です。キリストの贖いの十字架を本当に受ければ聖霊が来る。聖霊を受け取ることが、「わが血を飲み、わが肉を食う」という最後の晩餐の内容でもあるのです。即ち聖霊はそのようなキリストの永遠の生命を宿しているところの霊ですから。ですからそういう意味に於て十字架が立っている限り、私たちは本当に平伏せざるを得ない。平伏して、本当に十字架の後に聖霊が来ていれば、これは権威なんです。平伏しのあるところに権威ありなんです。そのような事態であるので非常に楽なんです。だから何にも無い。だから私はキリストに在る無者だというんです。それで無者の最大のお手本は誰れあろうイエス・キリストなんです。キリストが神様の前に本当に平伏しておられたから無即無限無量なのです。

とにかくそういうことで二三篇は私たちに、いかなる天国であろうと、地獄であろうと、煉獄であろうと、それを本当の天国に化して、過去も未来も本当に現在化して、現在、今、ここに於て天国があるという世界。それが即ち永遠を常に持っているということです。そうしたら、自分はいつぶっ倒れてもアァメン、ハレルヤというわけです。そこまでに徹底してごらんなさいよ。何か知らんけれども全存在に力が来るから。とにかくそういうことで、絶対的な世界を持たなけりゃ私はやりきれません。私はいい加減なことじゃ済まないでね、しょうがないです。しょうがない男です。立派な人は適当なとこで済んでるはず。立派でないもんだから絶対的な者にしがみつかなけりゃどうにもならないから。そういうことで、およそ偉くない、簡単な馬鹿者がこの福音に捉まえられた。けれどもありがたいことに、絶対的な世界を捉まえると、相対的な偉さなんて問題じゃなくなっちゃう。

今日は詩篇二三篇を、まったく自分のうたとした。汝、エホバ、のところをみんなキリストに切り換えてあなたがた読んでごらん。そうしたら本当に、汝主様！　と言って、もうどんなことがあっても私たちと共にいて下さるから。インマヌエルというのは、「神我らと共に」。みなさんひとりびとりが本当に共になる時に、今度はお互いが本当に共になるんだ。絶対的なものを捉まない人とは、いくら共になんて言ったって、当てにならないですよ、これ。当てにならないから、じゃあしょうがないって言うんじゃないですよ。当てにならない奴をなお相手にして、こっちが、こっちだけが相手になると、やってると、向こうがあれはすごいなと言って当てにしてくる。そのすごさは何かというと、自分のすごさじゃない。キリ

ストのすごさ。だから本当に信頼できる人はこのキリストを持っている人。どうぞ、そういうことで、何か知らん落ち着きが出て来たでしょう。内容は問題なくなったでしょう。肉体的な問題とか、結婚問題とか、何んだかんだっていろいろあるよね、若い人は。だけれども集会毎にとにかくそうして乗り越えて行くんです。そうすると電車の中でもパッとその世界に入れますから、そうしたら本当のシャーローム。シャーロームというのは平安ということです。平和じゃないですよ。平安。京都は平安神宮があるからね、よくお参りして下さい。本当の平安。我は平安神宮なり。皆さんひとりびとりが本当の平安神宮だ。京都の平安神宮よりもすばらしいんだ、あなた方ひとりびとりは。そういう平安神宮になって進んで行くことです。「エホバの宮とならん」というのは、そのことです。終わります。

（一九七五年五月三日、京都春期特別集会講筵）

詩篇第二十五篇

(1) ダビデの

1 エホバよ、あなたにわが魂を擡げます。
2 わが神よ、あなたに信頼します、
　私に恥なからしめ給え。
　わが仇の私に勝ち誇ることなからしめ給え。
3 実にあなたを俟ち望む者は何ぴとも恥を受けず、
　恥を蒙るは空しくも信を失う人々である。
4 エホバよ、あなたの道を知らしめ、
　あなたの小径を教え給え。
5 あなたの真理に私を歩ましめ、教え給え、
　あなたはわが救の神に在まし給うから。

○本篇は各節の始めの語の頭文字がアルファベット順に並べられて、ヘブライ語のアレフから最後のタウまで揃っている所謂イロハ歌の形式をとっている。そのため多少技巧的な面、思想の流れに自由ならざるふしが見える。幾分教訓めいたり、箴言調を感ずるふしなきに非ずである。各節は大体三揚音句二聯（3＋3）という対句節をとっている。個人の哀歌に属する。そのような形式があるにも拘らず、作者の内面的生活態度、即ち罪の自覚とエホバに対する信頼が真実を以て告白流露されている。普遍的真理がいかに個人的具体性に基づかねばならぬかということを知る。第二十二節は拝礼用に附加された句と思われる。

あなたを私は終日俟ちのぞむ。

6 エホバよ、あなたのあわれみを想い出し給え、
またいつくしみをも。
それらは昔からあったのですから。

7 わが若き日の罪と過ちを想い出さないで下さい。
あなたの愛(いつく)しみに従って
私を憶えて下さい、ああ、あなたよ！

8 あなたの恩恵(めぐみ)のゆえに、ああエホバよ！
めぐみ深く、ただしい哉、エホバは！
さればこそ彼は罪びとをその道で諭し給う。

9 彼は謙(へりくだ)る者を審判(さばき)に導き、
謙る者にその道を教え給う。

10 エホバの道はすべて愛である、義である。
その契約と詞(あかし)とを遵る者らには。

11 エホバよ、聖名のゆえにこそわが罪を赦し給え、
これは多大なるゆえに。

12 誰だろう、エホバを畏れる者は。
彼はその者にその択るべき道を教え給う。
13 その魂は善福に住み、
その裔は地を嗣ぐであろう。
14 エホバの親交はエホバを畏れる者どもにある、
彼の契約を彼らに識らせんためにある。
15 わが眼は絶えずエホバに向う。
そは彼がわが脚を網から取り出し給うから。
16 わが方へ向き給え、私を憐み給え、
私は独り苦しんでいます。
17 わが心の憂いは大きくあります、
わが患難から私を取り出し給え。
18 わが患難とわが労苦とを覧わし給え、
わがすべての罪過を赦して下さい。
19 わが敵を視給え、彼らの教多く、
狂暴と憎悪をもって私を憎むが故に。

20 わが魂を守り、私を助けて下さい。
私に恥を負わしめ給わざれ、
私はあなたに依り頼む故。
21 完全(まったき)と辛直(なおき)とが私を護らんことを、
私はあなたに依り頼む故。
22 神よ、イスラエルを贖い給え、
その憂苦(くるしみ)のすべてから。

第二十五篇　あわれみ

神へのほかに擡げようのない魂に彼はなった。依り頼まないではやり切れないのである。彼もまた「人生の旅路半ばに」来た者か。ともかくも彼は今、人生のある重大な時期(カイロス)に立っている者に相違ない。それにしても彼はどうして此処まで来得たのだろう。それは「昔から易らない」神のあわれみのお蔭であったのだ。しかし過去を想うと共に彼の心に映じて来たものは「若き日の罪と過ち」であっ

た。罪過の潮路幾十年。痛ましき想い出の数々！　けれども彼は神のあわれみによって海のこちら岸に立たされている者である。怖しい死の浪もついに彼を神のあわれみから奪い去ることはできなかったのである。「あなたの愛しみに従って私を憶えて下さい、ああ、あなたよ！」と呻くのは本当だ。十字架上の一方の盗賊の心と相通う砕けた心である。あの沢山の罪過、そんなものを「想い出さないで下さい」と願うは罪びとのいつわりなき声である。そして神はそんなものは神自らレーテの流れに投げ棄てて下さるのだ。罪の赦免から罪の忘却へ！　恩恵とは何たる驚くべき無条件的救いかな。ヒルティーも罪の忘却のありがたさを語っていた。

原罪的性質をもった人間の罪、万人がこれを自分でどうすることも出来ない。といって、それはどうでも可いというのではない。罪責は各人がこれを負わねばならない。しかし負いきれない。そこに残る道は唯一つ。罪の神への告白。砕けた、「謙った」心をもっての罪のゆるしの告白。これは神が神の「恩恵のゆえに」無条件にゆるし給う。この詩篇の祈りはその間の消息をよくつたえている。

拭うべからざる罪過の事実。彼の自覚の有無を問わず、人間がもつ根源的罪性。然り、存在そのものの根本的喪失。これは神に棄てられてもやむを得ない事態。しかし、このことが却て神の心をあわれみに動かすのか。恩恵は全く、神の聖名のゆえ、創造の秘義のゆえ、神の愛のゆえ。「めぐみ深く、ただしい哉、エホバは！」という叫びは人間のどん底の事態において、神を聖名のゆえに讃美する叫びである。

あわれみの霊光はいかなる罪の影をも照破して消してしまう。もうこちら側をくよくよするを要しな

い。もしなお自分を責め、自分を顧みているならば、それは却て不信というものである。「謙る者を審判に導き」、謙る者に神の義を示し、神の義を受けよと本当の「道」を示し給う。

「エホバの道はすべて愛である、義である」（第一〇節）

これは実に著しい聖句だ。どん底の人間というもの、人間のどん底というものを自覚した砕けの魂に、絶対的な神の義を与え、愛を与え給う。神の義は即ち愛であり、神の愛は即ち義である。このことは神中心の信、神の本願に祈り入るとき体受される「あわれみ」の本義であり、内実である。この「エホバの道」を体現なさったのがキリスト・イエスであった。

どの「時」の断面においても、罪びとに過ぎない彼は、あわれみの光の下で過去を顧み、現在を直視し、未来を予見するわけである。するとありがたいことに気がついた。「聖名のゆえ」の「あわれみ」の光は、罪過の経験や体験を変貌させて、否定の奥から現実に力を与える何ものか肯定的なものを具体的に示すではないか。「あらゆるものは信ずる者にはたらきて善となる、益となる、役立つ」といったことをパウロはロマ書八・二八で言っているが、そのようなことは旧約であろうと新約であろうと、信仰の現実が本ものなら、同質な事態である。すると単なる忘却が好いのではなく、どんなマイナスもプラスも、次元のちがった本当のプラスに再体験できることになる。過去の想い出というものをこのように想い出すことが、人生をゆたかにし、本当に明るくし、いよいよ希望ゆたかなものにする。そのようにしてゆきづまりを知らぬ人となる。かたくなな信仰の人は、単なる相対的な過去の否定をやって、いよいよ視野を狭く

して、知らぬ間に自分をパリサイにする。そんな所謂キリスト者の何と多きことか。聖霊のバプテスマを本当に受けたキリスト者は凡そこのたぐいとは異う。この詩は勿論旧約の世界だから、今私が書いた次元までは来ていない。

再び詩人の声に耳を傾けてみる。「エホバよ、聖名のゆえにこそわが罪を赦し給え、これは多大でありますから」（第十一節）。罪を見れば絶望。だから「聖名のゆえにこそわが罪を赦し給え」と祈る。彼の救の希望は全く神の側にあるだけだという心である。神の絶対のあわれみに依り頼むことが彼の現実の姿である。本当にこのような神のあわれみに生きるという現実が永遠であるのだ。この永遠は形而上学的概念ではない。霊的な人格的な生命の通う現実である。相対的な罪の現実が、絶対的な恩恵の現実に否定されるところに永遠がある。罪は審判を呼ぶから、いかなる過去の罪も消えはしないが、絶対恩寵の下ではその効力を失い、消えたも同然となる。即ち、審判は罪を生かして「時」を「滅亡」に閉ぢこめるが、あわれみは罪を殺して「時」を「永遠」にまで贖うのである。神、キリストのあわれみの中で生きる現実、即ちまことの信仰的実存の性格は霊であり、いのちである。このような霊的生命をもった「時」に「永遠」が宿る。あがなわれたる「時」よ。それは永遠の今というものである。そういう現実でこそ本当に気息がつける。そこが本当の故里である、天国である、神の国である。

神の憐みは我々をこのような矛盾の相、死と生命の相、審判と恩恵の相に置きながら、永遠の現実に贖い出だし給うのである。この詩における深刻な明暗の交錯において、我々はこのような「現実」の性格を

見る。旧約の預言者や詩人が深く神と交った世界は、まづこのような現実であり、このような永遠ではなかったか。死からの飛躍、永遠の獲得が本質的に戦われていたのであった。しかしそれはまだ願望、祈願の域、乃至預言と希望の現実であって、これが成就にはキリストの出現を要した。

「いつくしみ深き友なるイエスは
われらの弱きを知りてあわれむ
なやみかなしみに沈めるときも
祈りにこたえてなぐさめたまう」

（讃美歌三一二）

詩篇第二十九篇

1 ダビデの絃歌
エホバに帰せよ、神の子らよ！
エホバに帰せよ、荘厳と偉力を！
2 エホバに帰せよ、その聖名の栄光を！
エホバに跪け、聖き衣を着て。
3 エホバの聖声は　水の上にある。
荘厳の神、轟き給う。
エホバは　大水の上に在ます。
4 エホバの聖声は　威力ある哉。
エホバの聖声は　威光ある哉。
5 エホバの聖声は香柏を折り砕き、

エホバはレバノンの香柏を裂き給う。
6 彼は彼らレバノンを犢の如く、
シリオンを野牛の仔の如く躍らしめ給う。
7 エホバの聖声は火焔の舌を閃めかせ、
8 エホバの聖声は曠野を震わせ、
エホバの聖声はカデシの野をうち撼う。
9 エホバの聖声は羚羊を躍り廻らせ、森を枯れしむ。
彼の宮でそのすべてのものは言う、「荘厳なる哉！」
10 エホバは大水の上に在ます。
エホバは永遠に王として坐ます。
11 エホバはその民に力を与え給う。
エホバはその民を平安を以て恵み給う。

6 「レバノン」（レバーノーン）、「白い山脈」を意味する（四時雪をいただいているから）。パレスティナの北部に聳え立つ高峰の連山。
シリオン（シルヨーン）、「鱗とじの鎧」の意、ヘルモン山をシドン人がこのように呼んだ。ヘルモンは「聖き山」の意。宗教的な遺跡がある。レバノンの東方に位置する。
8 「カデシの野」（ミドバル・カーデーシュ）。カデシは「聖別」を意味する。ベエルシバをずっと南々西に進み、シナイ半島の北部にある曠野。

第二十九篇　荘厳の神

塵寰に花咲く小賢しき文化、悪の幕屋に蠢めくなやましき闘争、自然を征服しようとするあやまった文明、イデオロギーで世界を統一しようとする愚かな権力。そのような現象の多い人類の歴史は何を刈り獲ろうとするのか。二十世紀はこれで無事に二十一世紀を迎え得るだろうか。唯だ一つの事を忘れている。然りそれは或る心を失ったからである。ある心、それは何か。近世の警世者は叫んだ、「自然に帰れ！」と。

けれどもイスラエル太古の詩人は詠った、「エホバに帰せよ！」「エホバに跪け！」と。彼は自然の偉力を見て自然を神化したのではなく、神の直接的表現を直視した。冒頭の驚くべき詩語に聴け。詩人は人に呼びかけず、自然に語らず、天界の「神の子ら」に呼ばわった。超現世的神的存在一般を天軍の如く見做して総称したのであろう。何のためにか。彼らに拝跪せんがためか。そうではない。「荘厳と偉力」を神エホバに帰し奉らんがために。彼は今しがた荘烈なる景観に接したからである。

エホバの聖声は雷鳴と轟いて山野を震撼せしめ、電光を閃めかしては森林をうち砕き、疾風豪雨をおく

っては湖海に大浪を躍らせる。見よ。偉容堂々たるレバノンも犢の如く、崇高なるヘルモンも野牛の仔の如く躍る。今や暴風雨はカナン全土を席捲して南方カデシの曠野に咆える。かくも荘厳雄偉なる聖手の力に何ものか抗し得よう。

雷雨の現象を説明するものは科学である。しかし雷雨の偉力を観るものはこの啓示的直覚である。雷雨を表現するものは例えばベートーヴェンの第六交響曲の如き芸術である。荘厳の神を有つ者のみが真の「力を与えられ」、栄光を、霊力を神に帰する者のみが真の「平安を恵まれる」のである。文化文明も歴史もこの偉大なる実在者、永遠の無限無量者を忘れては、「空の空なる哉、すべて空なり」となる。否、罪を孕み、滅亡を獲んのみ。素朴な古代人の神本的な愚と複雑な現代人の人本的な賢といづれが最後の真理であるか。

詩篇第三十篇

(1) ダビデの絃歌、献殿の歌

1 (2) エホバよ、あなたを崇めます、
あなたは私を引き揚げ、
わが仇が私を喜ばぬようにし給うたから。

2 (3) エホバわが神よ、私はただあなたに呼ばわりました。
あなたはそのとき私を癒して下さった。

3 (4) エホバよ、あなたはわが魂を冥府からひき揚げ、
私を生かし、墳墓に私が降るのを止どめ給うた。

4 (5) エホバを奏で謳えよ、その恵信者よ！
その聖潔を憶えて感謝せよ。

5 (6) それ聖怒は束の間で聖恵は生涯に亘り、

○「献殿の歌」（シール・ハヌッカト・ハッバイト）。後人の加筆か。マカビ王朝、紀前一六五年（第一マカビ四・五二以下）、宮潔の祭（ヨハネ一〇・二二参照）のとき歌われたものか。しかし原作はダビデであろう（サ後五―六章参照）。

3「墳墓」（ボール）は元来、堀井（申六・一一）とか陥（エレ三三・六）、牢獄（創四一・一四）などの意。それから派生したもの。

夕に泣涕きたり宿るとも晨には歓呼となる。

6(7) また私は言った、安泰であったとき、
私はいつまでも動かされまいと。

7(8) エホバよ、あなたがめぐみ深く
わが山を堅く立たせ給うたが、
あなたが聖顔を隠し給うたので、
私は戦き惑いました。

8(9) エホバなるあなたを私は呼ぶのです、
わが主にだけ私は切に願うのです。

9(10) 墓穴に降ったら、わが血に何の益があろう。
塵はあなたに感謝を致し、
あなたの信実を述べ得ますか。

10(11) エホバよ、聴きあげ給え、憐み給え。
エホバよ、わが助けとなり給え。

11(12) あなたはわが哀願をばわがために踊躍にうち変え、
わが麁布を解いて歓喜を私に帯びし給うた。

11 麁布（サック）。麻の粗衣または粗布、喪服。その他患難、罹災のとき（王下六・三〇、ヨブ一六・一五、イザヤ二七・一二）、また預言者が憂国の至情から慨嘆したときに之をまとうことを人々に勧告している（イザヤ二二・一二、エレ四・八、四八・三七）。

第三十篇　恩恵

彼は何故に死の床に就かねばならなかったか。敵は彼の苦患を見て天譴しるきものと思って喜んでいる。他人の苦患を見てよろこぶ心は（ドイツ語では Schadenfreude（シャーデンフロイデ）といって）卑劣なさもしい心である。彼が滅び失せんことを敵は願っている。彼自身はその胸のうちに痛みをもっていた。彼には同情さるべき事情があったにせよ、彼はその重患の原因を自覚する面があったからである。外に過酷の譏りを受け、内に良心の苛責を負い、彼の適（ゆ）くべき処はいづこか。人は弱い者である。弱いとは心気が弱いとか、意志が弱いとかいうのではない。罪を知った者にとっては立つ場所がないというのである。斯く弱きを知った彼に赦された唯一の立場があった。それは神への祈りであった。

「私はただあなたに呼ばわりました。
あなたはその時私を癒して下さった」。（第三節）

これは本当の体験だ。神の力が彼にはたらいた。彼の信頼に神の信実が応えて下さった。彼の魂は既にして冥府（よみ）の門を潜ろうとしていた。彼は幽明の境にあって、いのりの手をいのちの綱にさし伸べた。彼は

神の綱によって恰も釣瓶のように引き揚げられた。いのちは彼の現実となった。（第三節）

彼が今や絃歌を謳い、同信の友らを誘って神に感謝しようとしたことは、晨に囀りいづる鳥の歓びよりも自然であり、美しくあった。（第四節）

彼はしかし徒らに救われた結果を喜ぶ人間ではなかった。彼は顧みて己が罪の那辺にあったかを指摘しようとする。彼が安泰な月日を送っていたとき、その心に築かれつつあったものは不動の確心であった。（第六節）

彼の立つ山は彼の心と共に冥府を地下に踏まえ、敵を脚下に遠ざけていた。しかしそれが神の力によることを彼は忘れていた。あるとき神は自らを隠し給うた。（第七節）

神のものをいつしか己がものとしていた彼は、神を失って愕然として我に帰った。雷雨将に到らんとして怯えまどう小鳥のような自分を彼は見た。神の怒が容赦なく彼を撃った。彼は倒れた。また病に臥した。見れば墓穴が無気味な口を開けている。冥府の門の閂は外されている。枕べにひびくは魔王の使者にもまごう敵の嘲りと呪いとである。夢の中で塵と化した自分を見た。地に溶けこんだ黒い血を見た。そんな自分が「神の信実を述べ得ようか」と思った。目が覚めた、なさけない現実、惨めな心境である。（第九節）

神の怒！　それは実に神の実在の大きな証拠だ。墓と冥府の存在までが神の怒の証拠に見えて来た。自分は何と思いあがっていたのだろう。神を忘れて何の平安か、何の確心か。否、実にわが在るは神在ます

に拠る。然り、自分が祈れたことそのことが、神が自分を顧みつつ在り給うた証拠だ。神は自分をいつまでも離すまじと荒仕打ちをなさったのであった。その神の心と神の力とが自分から祈りを引き出して下さったのだ。

このように神に新たに把えられて、今や生命に溢れているこの人は過ぎた苦難と病患を顧みてしみじみ感じた、神の聖怒が束の間に過ぎなかったことを、またこれに反して神の恩恵は生涯に亘って易らないことを。（第五節前半）

神を相手とし奉らなかった彼は神の怒を蒙ったが、実にその怒の神に、神の隠された恩恵があったことを知った。神の審判に遭って、畏れて祈ったそのことが、罪びとへの恩恵であった。救われたとき彼は救を感謝し歓んだとはいえ、歓びは救いを越え、自己を越えて神を見た。神こそは恩恵そのもの。恩恵は禍福の彼岸の世界のものだ。恩恵は真理であり、生命であるのだ。恩恵は神と共に永遠に、生涯と共にいつまでも在ることを。然り、神自身が恩恵そのもの、真理そのもの！「恩恵と真理」という言は実は一つのことなのだ。この偉大な恩恵の現実を破り得るものはない。人生においてこの現実にぶつからなければつまらないものだ。所謂現実は儚なき夢にすぎない。波瀾の多い人生だ。この夕かの夜に「涙」が来たり宿る。しかしこの「涙」という客は東雲と共に歓呼の羽音高く舞い昇るのである。罪がある限り、「哀嘆」は地上の友である。しかしこの恩恵が現在する限り、「踊躍」を道伴れに天上に躍り入ることができる。「麁布」は仮の衣であろうとも「歓喜」という無縫の天衣がすでに備えられてある。詩人の歌は我もなき

「栄光」のうちにいつまでも神を讃えている。（第十一節）

ダビデ自身、こういう人間であった。「ダビデの絃歌」という絃歌には、相響き、相応える劇的な情緒と信仰が貫いているのを感ぜざるを得ない。

「父なるみ神に涙をぬぐわれ、
いこいてたのしむ晨はまじかし、
憂いの雨は夜の間にはれて、
つきせぬ歓び朝日と輝かん」

（讃美歌五二二）

詩篇第三十一篇

(1)　楽長に托したダビデの紘歌

1
(2)　エホバよ、あなたに信頼します。
　　いつまでも私に恥なからしめ、
　　汝(な)が義で私を助けて下さい。
2
(3)　汝が耳を私に傾けて速かに私を援け、
　　あなたがわが力の巌となり、
　　私を救う砦(とりで)の家郷(いえ)となり給え。
3
(4)　まことにあなたはわが岩、わが砦、
　　されば聖名のゆえ私を導き給え。
4
(5)　彼らが私に隠した網から私を曳き出し給え。
　　そはあなたこそわが砦ですから。

○本篇と姉妹篇をなすものは第七十一篇である。そして第七十一篇では「汝が義」が本篇よりもハッキリと主題になっている。しかも「汝が義」に「汝が救」があることをより明かに告げている。これは第二イザヤの思想と相照応するもので、第七十一篇は極めて福音的である。

1　「汝が義で私を助けて下さい」、神の義に救がある、という消息は福音である。

「エホバよ、あなたに信頼します」、「ベカー・エホバ・ハーシーティ」、直訳「あなたの中へ、エホバよ、私は逃げ込みました」。実は祈りの秘訣はこの一句にある。神の中へ自分を投入することが、祈りのアルファであり、オメガである。勿論、新約の世界ではキリストの中に自分を投入。十字架が贖って下さっているから、おそれなくキリストの中へと投身するのが、祈りのアルファであり、オメガである。

○　本篇第一節―第八節を、ダンテは『神曲』煉獄篇の第三十歌六三―六五行で、天使が歌ったのを告げている。

5 (6) 聖手にわが霊をゆだねまつる、
エホバ、信実の神よ！ あなたは私を贖い給うた。
6 (7) 私は憎む、虚しき偶像を崇む者らを。
だが私はエホバに信頼しまつる。
7 (8) 私は汝が憐みを歓び楽しむ。
あなたはわが患難を顧み、
わが魂の困窮を知り給う。
8 (9) 私を敵の手に閉ぢこめしめず、
わが脚を広き地に立たしめ給うた。
9 (10) エホバよ、憫み給え、私になやみがあるので。
わが眼、痛恨のために暗みました、
わが魂もわが身も。
10 (11) わが生命は悲哀のために、
わが年華は悲嘆のために果てようとする。
わが力はわが不義のために尽き、
わが骨は枯れ果てました。

5 極めて大切な一句。十字架上のイエスがこの句の前半を叫んだ（ルカ二三・四六）。
「信実の神」（エールエメト）、アーメンの神。即ち決して裏ぎらず信義、信愛を相手に対して貫く、という意味の「信実」の神、主観的心情の「真実」ではない。この「信実」の行為が「贖い」なのである。
この第五節は行七・五九でステパノが叫んでいる。その他殉教者ポリカルプ、ジェローム、ベルナルド、フス（火刑場への途上、この句を繰返したという）。ルター等、殉教者、聖徒たちの臨終の声となった。
6 「私は憎む」（サーネーティ）、LXX では「汝が憎む」この説をなす者 Ew, Del, Kg, 等。
「虚しき偶像」（ハブレー・シャーウ）、（直訳）「虚しい空しいもの」、そういう実体は偶像のこと。（参照、申三二・二一、王上一六・一三、エレ八・一九、一四・二二）。
「だが私は」（ワ・アニー）。強い「ワ」（あるときは「ウェ」）で、強い対立的表現。「ワ」「ウェ」は普通は「そして」であるが。
10 「わが不義のために」（バアウォーニー）。LXX の如く「苦難のために」と読みかえる説かなり有力（Gk）。

11 (12) 諸々の仇のゆえに私は恥辱とされた、
しかもわが隣人において甚だしい。
わが知人には忌み怖れられ、
街衢で私を見る者は私を避ける。
12 (13) 私は死者の如く念頭から忘れられ、
破れた器のようになってしまった。
13 (14) 多くの人の囁きを私は聞く、
惶懼は四方にある。
彼らが私に向かって相議ったときは、
わが生命を奪わんと企てた。
14 (15) だが私は、エホバよ、私はあなたに信頼しました。
あなたはわが神であると告白しました。
15 (16) わが諸々の時期はみなあなたの聖手にあります、
私をわが敵手と私に追い迫る者から助け出し給え。
16 (17) 汝が僕の上に聖顔を輝かせ、
汝が愛しみで私を救って下さい。

13「惶懼は四方に」（マーゴル・ミッサービーブ）。これはエレミヤ特有の句（エレ六・二五、二〇・三、四、一〇、四六・五、四九・二等）。

15「わが諸々の時期」（イットータイ）、時期（エート）、ギリシャ語の「カイロス」にあたる。ある特定の時点乃至時期。

17 (18) エホバよ、私に恥を負わしめ給わぬように、
私はあなたを呼びまつりますので。
悪しき者に恥をうけしめ、
陰府にあって黙さしめ給え。
18 (19) いつわりの唇をつぐましめ給え、
彼らは義者に対して不敵にも
高慢と侮蔑を以てものを言う。
19 (20) 何と豊かなる哉、汝が恩沢は！
あなたはそれを、畏敬の者のために隠し給い、
あなたに遁れゆく者に、
人の子らの前で施し給うた。
20 (21) あなたは聖前の蔭に彼らを隠して、
人間の徒党から免れさせ、
彼らを仮庵にかくまって、
舌の紛争から遠ざけ給う。
21 (22) 讃むべき哉、エホバ！

19 「恩沢」（トーブ）。「善福」と訳しても可い。エレ三一・一二、一四、ホセア三・五参照。
20 「聖前の蔭」はおかしいといって、「聖翼の蔭」とよみかえる学者あり（Kl. Gk.）。
21 「讃むべき哉」（バールーク）。本来は「祝福されたる哉」であるが、神に向っての言葉としては、こう訳すのが自然のようだ。詩一八・四七、二八・六、四一・一四、六六・二〇、六八・二〇、八九・五三、一〇六・四八、一一九・一二、一二四・六、一三五・二一、一四四・一等。
○ 本詩は原文に問題多し。一―八節、九―一八節は夫々一貫したものがある。礼拝歌とするために礼拝用の追加句が見受けられる。

彼は堅き城市で私に恩恵を奇しくも示し給うた。
22(23) けれども私はわが驚異に在って言った、
「私は汝が眼の前から断たれた」と。
しかしあなたはわが切願の声を聴き容れ給うた、
あなたに私が呼ばわったときに。
23(24) 彼のすべての聖徒よ、エホバを愛せよ！
エホバは信実なる者を護り、
高慢を振舞う者には報いて余りある。
24(25) 君たち雄々しかれ、君たち心を堅うせよ、
エホバを待ち望むすべての者よ！

第三十一篇　信頼

「エホバよ、あなたに信頼します」。人影なき岩かげに身を倚せて彼は口を開いた。彼は親しくエホバに

語りかけたのである。底なき彼の悲しみは何のためか。おのが義の立たないためか。おのが罪のなやみのためか。それともまた敵の迫害の故か。ああ、さもあらばあれ、すべてこれらの理由の奥になお一つの深き「わけ」がある。「あなたの義」が蹂躙されている。「聖名」の尊厳が瀆されている。「偶像」が神の代りに崇められている。彼の心は深く痛む。静かに祈っていた彼の心の渕を一陣の霊風が震わせた。それは天心に深い谺を返した。曰く、

「聖手にわが霊をゆだねまつる、
エホバ、信実の神よ！　あなたは私を贖い給うた」。（第五節）

彼はその時別な世界に腰を据えたことを知った。この前半の句は実にイエスが十字架上で最後に叫び給うた祈りであった。そればかりでない。実にイエスの霊の全生涯の在り方であった。「あなた」という実在は、「私」から信頼の外の一切の立場を奪う。「あなたの信実」はわが信仰の果敢なさを曝露する。「あなた」の贖いの意志は、すべての愛より強く、すべての願いを越えている。ああ何たるおどろくべき「あなた」の発見ぞ！「あなたは私を贖い給うた」との現実性豊かな救済の完了！しかもこの贖いの根拠は「あなたの義」にあった。詩人は「あなたの義で私を救って下さい」（第一節）と冒頭に祈っている。ルターがはじめにこの句に躓いたが、後にこの「あなたの義」が審く義でなく、与える義であることを知った。だから「義が救う」のである。この義を与えて下さったのがキリストである。贖罪が全く天来の一方的な恩恵の意志で完了しているということは、同時に平安と信頼の弁証法的力

源を成す。この信頼は主観的な自己の側の心理的な力味の何ものでもない。信頼は投身であり、棄身である。それは手から物をはなせば、地に落ちるように、自分が神、キリストの中に霊的な力で投げ入れられ、抱きあげられることである。信頼は燃える火の如く高きに属く。帰依、帰入の強靱性である。彼はこの神に属いたので、すべての偶像の敵となった。彼はおのれを取り巻くパリサイ的な小世界を敵とし、「だが私は」と言って神を主張した（第十四節）。この「だが」（ウェ）の一画は宇宙を二分する経線である。おのれは「破れた器」（第十二節）であろうが、何であろうが好い。信頼は彼を立たしめる。ただ神をのみ神とせんために！　原因も目的もただ神である。

ダンテが地獄、煉獄の導者に立ち別れ、泣きぬれたのち、天使たちからこの詩の一―八節の合唱を静かに聞いたあの深い消息を想う。だがまたこれに応える調べ、一四―一六節の高鳴るを聞かないでおられようか。

英国の大詩人ブラウニングがその有名な「ラビ・ベン・エズラ」の第一節でこう謳っている、

Grow old along with me!
　The best is yet to be,
The last of life, for which the first was made:
　Our times are in His hand
Who saith "A whole I planned,

Youth shows but half; trust God:
see all nor be afraid!"

老いゆけよ私と共に！
最善はこれからだ、
人生の終末、そのために最初が作られていた。
我らの時期は彼の聖手の中にある。
彼は言い給うた、「一全を私はもくろんだ、
青年は半ばにすぎない、神に信頼せよ、
一切を達観せよ、そして恐れるな」

すべての時期が聖手の中にある、とは正にこの詩の第十五節の句と相通ずる。一切を達観して恐れるな、神に信頼せよ！　とブラウニングも叫んでいる。ラビ・ベン・エズラの一篇は実に大乗的な「信頼」の詩である。ダンテもブラウニングもこの詩篇の作者も、人生の多くの苦難の風波を「信頼」の帆を張って帆走しぬき、天界の港に到り着いた。そのとき「聖顔の輝き」を仰ぎ見たことであろう。

「この世を主に捧げまつり、
神の国となすためには
せめもはじも死もほろびも
何かはあらん主にまかせて」

（讃美歌二八五）

詩篇第三十二篇

(1) ダビデの「神諭（マスキール）」

1 恵福（めぐま）れたる哉、過（とが）をゆるされ、
　罪を蔽われた者！
2 恵福れたる哉、エホバこれに不義を負わせず、
　その魂にいつわり無き人！
3 私は黙していたとき、
　わが骨は衰えていった、
　終日（ひねもす）のわが呻きの中で。
4 そは昼も夜もあなたの聖手がわが上に重くして、
　わが潤（うるお）いは変って夏の果（み）の日干（ひぼし）になった。
5 わが罪をあなたに告げ、

○ この詩篇は所謂七「悔改」詩篇（六、三二、三八、五一、一〇六、一三〇、一四三）の中の一つ。また神の教えを諭す意の十二の「神諭」（マスキール）詩篇（三二、四二、四四、四五、五二―五五、七八、八八、八九、一四二）の中の一つ。

(1) 「神諭」（マスキール）。語源は「サーカル」で、真理を洞察する意。このマスキールは使役型で、その洞察を人に知らしめる意「訓諭」で、それが神から来ているわけであるから敢て「神諭」と訳した。

1 「過」（ペシャ）。逸脱的言動。道徳的まちがい一般。「罪」（ハッターアー）。目標を語る意から律法に外れた一般の罪。「不義」（アウォーン）。偶像崇拝的邪心、宗教的姦淫。「いつわり」（レミッヤー）。虚偽、偽瞞、盗みは物的慾心の行為であるに対し、いつわりは人格的なあざむきであるから、罪は本質的にはぬすみより重い。

4 「わが潤い」（レシャッディ）。アラミ語注釈タルグムには「わが脂肪」とある由。そうであろう。生命的「潤い」と見る。

わが過を私は匿さなかった。
私は言った、「わが過について
　エホバに私は告げよう」と。
それであなたはゆるして下さった、
　わが罪なる不義を。
6 それゆえ、凡て恵信者は祈る
　見出すべき期に。
縦い洪水の氾濫があっても、
　それはその者に達し得まい。
7 あなたは私には隠れ場であって、
　禍から私を救い出だし、
　救の歓呼をもって私を囲み給う。
8 「我れ汝を教え且つ導こう、
　汝が歩むべきその道に。
　我れは勧告しようわが眼を汝にそそいで。」
9 「汝ら弁別なき馬の如く、騾馬の如くある勿れ！

彼らは手綱と轡をもって、装身具を結び、
汝に幸きゆくことのないように。」
10 悪しき者には悲しみが多いが、
エホバに信頼する者を必ずや憐みが囲む。
11 義しき者よ、エホバを喜び躍れ！
すべて心の直き者よ、歓呼せよ！

第三十二篇　罪のゆるし

かつては「悪の徒の謀略に歩まず、罪びとの途にも立たず、嘲者の座にも坐らざる」者に「恵まれたる哉」と響く声を聞いた。今は「過を赦され、罪を蔽われ、不義を負わされぬ」者は「恵福れたる哉」と告げられる。かれは理想を掲げて「恵まれよかし」と呼ばわる律法の勧告の意味がふくまれているが、これは現実を指して「恵福れたる哉」と断ずる恩恵の嘉信である。

ではあるが、我らはこの詩が直ちに純粋な福音を告げるものと即断してはならない。我らは詩の言に従

って作者の心境に立ち入ろう。

さきに彼は「黙っていた」が、それはその罪に関する限りのことであった。彼は口の奥に罪を含みつつものを言っていた。それはしかし何の慰めにもならなかった。反対に「呻き」が彼の胸を焦がせ、骨を蝕んでゆく。彼は煩悶の末、病魔に憑かれたらしい。見る影もなく痩せ細ってきた。彼の口はなおも或る者に向って鎖されていた。けれども彼はシオンの子であった。神エホバの「聖手の重圧」を感じ得ない背神の徒ではなかった。瑞々しかった己が軀も、遂には「日干し」の如く乾枯らび、魂の気息も絶えようとしたとき、彼はただ上を仰いだ。未だ告げなかったことを神に述べた。それは彼にとって何か特別な罪の経験であった。しかしそれを残りなく告白したときに、実は自分そのものを告白しているのに彼は気がついた。これは大なる発見であった。

今まで自分を圧えつけていた神の聖手は、今は反対にわがすべての重荷を自ら受けとり給うて、自分をしっかり支えて下さる聖手となった。彼は今や祈りと告白によって救われた経験の人として、ほかの恵信者もまた自分と同じく救いに与ることを確信し得る証人となった。心身の回復は確かに「救の歓呼」であった。人は須らく自ら神のみ許に馳せ、神に凡てをさらけ出して信頼すべきである。「弁別なき馬や騾馬の如く」頑なであってはならない。神に信頼せぬ者は「悪しき人」であり、それには悲しみが臨む。「神に依頼む者」は「心の直き者」であり、「憐み」は「彼を囲む」。以上が現実に救われた彼の結論らしくある。

我らは知る、罪に苦しみ、神に鞭うたれ、神に立ち帰って残りなく己れを告白したときの彼こそは真の人間であったことを。けれども救を救の故に喜び、信頼を信頼の故に高く評価し、義者のうちに自らを無意識的になりとも数え入れていたとき、彼はパリサイの卵を立派に作っていた。そこに我々はしかし根深いユダヤ的宿命を見る。彼らは義と幸の現実照応を切に願うのである。神が実在し、律法が厳存する限り、前者への信頼と後者への実践が、必然救と幸とを現に齎らさざるべからずとなすは、彼らの抜くべからざる現実感である。そこにまた彼らの偉大性もある。

それはともかく、この詩において我らの注目すべき一事は、作者が罪の赦しをかくも高らかに感謝し、讃美するかげに、一つの言を書き入れたことである。曰く、「その魂にいつわり無き人」。罪よりもおそろしいのは「いつわり」である。罪を罪としないのが「いつわり」である。おのれを罪びとに過ぎずとしないのは「いつわり」である（ヨハネ第一書一・八）。罪のゆるしのまことさは、この「いつわり」なき魂のうちに、更に深く、自己そのものを「いつわり」なりと告白する砕けの魂に臨む。この詩の永遠のかくれた真価はこの一言に宿る。詩人の自覚の有無をよそにして、真理は潜入的に啓示されてゆく。そこに啓示の純粋客観性がある。天的主体性がある。

アウグスティヌスが死の床の壁に掲げて、独り静かにこの篇を口吟み、感謝の熱涙を流したのも、ダンテがレーテの岸辺で、まづこの歌に慰められねばならなかったのも、彼らの魂が「いつわりなく」自らを悔いたからであった。赦しの歌はひびく、

Beati quorum tecta sunt peccata.

Purgatorio XXIX

恵まれたる哉、罪の蔽われた者！

「いさおなき我をかくまであわれみ
イエス愛し給うみ許にわれ往く」

（讃美歌二七一）

詩篇第三十三篇

1 義しき者よ、エホバに歓呼せよ。
　直き者にふさわしきは讃美である。
2 手琴でエホバに感謝し、
　十絃の竪琴で彼を讃め歌え。
3 新しき歌を彼のために唱い、
　歓呼に和して巧みに弾奏でよ。
4 そはエホバの聖言は直く
　その聖業はすべて信実であるから。
5 彼は義と公平を愛し、
　エホバの恩恵は全地に満ちている。
6 諸天はエホバの聖言によって成り、

1 詞書なし。この第一節は詩篇第三十二の末節と同じ内容。
2 「手琴」（キンノール）。ギリシャのキタラ（黙一四・二）に似た楽器。共鳴盤が下部にあり、提琴のように腕で水平の方向に支えて撥か指で弾く。七絃琴（リラ）もこれと同様の楽器、これは純東方産（創一四・二一、サ前一六・一六、イザヤ一六・一一、詩一三七・二、ヨブ三〇・三一）。
「竪琴」（ネーベル）、共鳴盤として空洞の木製胴体あり、腕があり、絃は胴から腕に垂直に張られている。キンノールもネーベルも歩きながら弾奏できたと思われる（サ前一〇・五、サ後六・五イザヤ二三・一六）。キンノールの方が小型で一般向き、現代のギター、ヴァイオリンの原始的なもの、ネーベルは小型のハープで手軽なものを想像したら好い（王下一〇・一二、イザヤ五・一二、アモス五・二三、詩五七・九、八一・三、九二・四、一〇八・三、一〇五・三）(Benz)
6 「万軍」（ツァーバー）、「軍隊」（代上一二・二三）、「衆群」（エレ八・一）、「万軍」（イザヤ四〇・二六、四二・一二）。複数の（ツェバーオート）形が多い。「万軍の神」とか「万軍のエホバ」とか「万軍の主」という表現など、預言書と詩篇に多い。宇宙の万象や天使と聖徒の群など、ひろい内容をもっている。

万軍は悉く聖口の息吹によった。
7 彼は海の水を堤の如くあつめ、
諸々の淵を倉庫に蔵め給う。
8 全地の者はエホバを畏るべく、
世に住まうすべての者は聖前に畏めよ。
9 そは彼宣えば則ち成り、
彼命じ給えば則ち立つがゆえ。
10 エホバは国々の謀計を破り、
諸々の民の企画を挫き給う。
11 エホバの計画は永遠に、
その聖心の思念は世々に立つ。
12 幸なる哉、エホバをその神とする民、
その嗣業たるべく彼に選ばれた民。
13 大空からエホバ覧し給う、
彼は人の子らをすべて見給う。
14 彼その御座より視給う、

7 「堤の如く」を「革袋の如く」とよみ変える学者相当あり。しかし、出エジプトの場合の如く（出一五・五）水をせくことを言うのであろう（ヨブ二六・八、三八・一）。

地に住まうすべての者を。
15 彼はまた彼らの心の創造者
彼らの為すわざを悉く弁え給う。
16 王者大軍によって救われるに非ず、
勇者剛力をもて自らを助け得ず。
17 軍馬勝利のために虚しく、
その大いなる力も救うことなし。
18 見よ、エホバの眼彼を畏れる者の上に、
その憐みを俟ち望む者にとどまって、
19 彼らの魂を死から救い、
飢饉にも彼らを存えしめる。
20 我らの魂はエホバを待ち望む。
彼は我らの援助、われらの盾なるぞ。
21 そは彼に在って我らの心は愉しみ、
彼の聖きみ名に我らは依頼む。
22 エホバよ、あなたの恩恵を我らの上に垂れ給え、

我らがあなたに信頼したのに応えて。

第三十三篇　新しき歌

戦塵すでに収まり、葡萄の稔り山野に豊かに、秋のひかり和やかに流れる頃、来るべき祝祭を望みつつあった詩人は新しい感激に迫られたのであった。それは詩人の単なる偶感といったものではなく、なにか大空から響き来たる気息、歴史を越えて歩み来る何者かの跫音とも言うべき具体的な現実であった。

節会に集うイスラエルの人々に先ず勧むべきは何であるか。琴線をかき鳴らし声を斉えて高らかに神を讃美し、神に感謝することである。その理由はそれでは何であるか。すべて神そのものの側にあった。即ち神の言は直く、些末の曲折なく、その聖業は必然ありのままである。その率直さとその真実さに詩人は今更の如く驚異の眼を瞠ったのであった。神の歩み給うところに義の足跡が印せられ、神の呼吸し給うところに公平の気が漂う。啻に義の秩序があるのみでない、義の相のより深い半面に恩恵の相がある。このような消息は、苦難の中に神を仰ぎ瞻て詩人が始めて明かに知ったところであった。恩恵は決して報酬的なものでなく、神の実在の実存面の事実である。彼はまずこのような人格の神に捉えられたのであった。

この詩がどういう経験を契機にこの神に面接したかはわからないが、信仰の何よりも深い根拠は、正に神らしい神に捉えられたことで、彼は新たに神を見直した。

ところでこの詩の冒頭に「義しき者」「直き者」と呼びかけている「義者」とは、神との関係が垂直に脚下に平伏してある如き魂の姿勢の人を意味する。「直き者」もその通りだ。そういう人が真に聖名にあって動くところに栄光の渦がある。

彼は神の言が、どれほど人間のそれと全く次元が異なり、現実を創造する力があるかを詠う。かの諸々の天空もそこに群なす万軍の星も、その存在は神の言に負うに過ぎず、天上地辺の渺々たる水も神はこれを恰も農夫が山羊の革袋に水を充たし、穀倉に穀物を蔵めるように取り扱い給う。

「諸天はエホバの聖言によって成り、
万軍は悉く聖口の息吹によったのである」（第六節）

とは千古の真理である。即ち霊言、霊気一如の力によって万象は創造されたのである。このような言葉は文化人には神話的にひびくであろうが、神話的な大胆な表現の奥に深遠な真理が秘められてある。「太初に言あり、言は神と偕に在り、言は神なりき」に通ずるものである。

このような言即成の強烈な霊神、人格神にして始めて全能なる神である。全能神（エール・シャッダイ）はユダヤ人の好きな名称である。であるから、夕に事あって神意動くや、諸国の計謀企画も晨には瓦解してしまう。思即行の全能さを詩人が詠う所以である。このような神の導きを外にして歴史を知らないイス

ラエル民族の幸を詩人は感謝すると共に、他にもこのような民あれかしと祈るかに見える。大軍も王者にとって何ぞ。膂力も勇者に於て何か。軍馬も勝利に何の益かある。之は偉大なる信仰告白である。力は神に在る。神は始であり終りであるという心である。

イスラエル民族は、多くの苦難とその救出に、深い摂理の神を知った。勿論歴史には不可解な事象が多くあったろう。しかしこの神の眼である、それが彼に信頼する個人と民族を竟に見棄てるはずはない。縦い歴史は欺こうとも、神は欺かない。歴史を導き、現実を創造し、終局を来らす神に対する信頼と讃美を新たにしたこの歌に不断の新しさがある。

「手には緒琴口には歌
たのしきはみくに！
過ぎしときの憂き悩みも
きよき調べとならん」

（讃美歌四八六）

詩篇第三十六篇

(1) 楽長によって、エホバの僕ダビデの。
1 (2) 「罪悪」の耳語(ささやき)が悪者の心の衷に臨んだ。
神の畏れは彼の眼の前にない。
2 (3) この者は神の前で彼に阿(おもね)り、
彼が不義を見出さんことを厭うから。
3 (4) その口の言は邪悪と虚偽で
善く識り、善く行うことを拒む。
4 (5) その寝床で邪悪を謀り、
善からぬ途に蹲(うずくま)って悪を厭(いと)わない。
5 (6) エホバよ、あなたの愛憐(あわれみ)は天に漲り、
あなたの信実(まこと)は雲にまで及ぶ。

6 (7) あなたの義は神の連峰の如く、
あなたの審判は大いなる深淵である。
あなたは人と獣とを護り給う、エホバよ！
7 (8) あなたの愛憐は貴い哉、ああ神よ！
人の子はあなたの翼の陰に寄り添う！
8 (9) 彼らは汝が家の脂で飽き足り、
あなたは汝が愉楽の流水を彼らに飲ましめ給う。
9 (10) そは生命の泉はあなたの許にあり、
あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。
10 (11) あなたの愛をあなたを知る者のために、
あなたの義を心の直き者のために永く保ち給え。
11 (12) あなたは驕れる脚をして私を踏ましめ、
悪しき者の手をして私を戦慄わしめ給わざれ。
12 (13) 時あってか不義をなす者は斃れ、
擲げ棄てられて再た起ち得ない。

8「愉楽の流水」（ナハル　アダーネィカー）ゼカ一四・八、エゼ四七・一―一二、ヨエル四・一六―一八、詩四六・五、黙二二・一～二参照。「愉楽」は「エデン」と言い、固有名詞としてのエデンに懸けた表現。」この節の前半の「家の脂」と共に象徴的表現である。

第三十六篇　光

彼が悪人なら、私は罪びと。否定し難きは「罪悪（ペシヤハ）」が実際にあるという一事。彼はおのが心に忍び寄る「罪悪」の耳語を聞いた。やがてその「罪悪」の捕囚人（とらわれびと）になる。「神の畏れが彼の眼前になくなる」。神の声を拒んで聴かない者の当然の帰結は「罪悪」への隷属である。その声色はある時は神に対して「阿り」となる。「罪悪」は神を畏れない者の「不義」を護り、これを隠匿してしまう。そこに生れるものは「邪悪」であり、「虚偽」である。そこには明知もなければ、況んや善行があるはずはない。暗黒の夜は特にその活動の時である。人の心、ひとたび神の声に対して扉を閉ずるや、失われた自由が「罪悪」と共に擅に振舞うに至る。

地はかくも百鬼夜行である。彼は現実の否定し難い側面を凝視して耐え難く、眼を天上に向けた。おのずから口を迸り出たのは聖名であった。昊天を仰ぎ雲海を望めば、そこには神の「恩恵」の光と「信実」の影が漲っている。また神の義は崇高なる連峰の如く儼として存し、神の審判は深遠なること海洋も及ばない。我らの生きている世界は単なる道徳のそれではない。かくも荘厳なる実在の神の世界である。

彼の自覚は、若しこの神にして自分を護り給うのでなければ、自分は立つことができないという聖なる厳粛感である。と同時に自分を支え給う神の発見はいよいよ彼を驚嘆させた。

「あなたの愛憐は貴い哉、ああ神よ！
人の子はあなたの翼の蔭に寄り添う！」（第七節）

とは神に酔える人の讃歌であり、同胞に対する祈り心である。神在りて我なく、祈りありて我なし。神のふところに入っている霊的現実である。彼は更に「神殿の脂」と「愉楽の流水」とが人々に恵まれんことを想うた。それは現実には神殿礼拝のことや（ゼカリヤ一四・七）、夏の旱（ひでり）の後に受けた慈雨に関するにもせよ（詩六五・一〇）、詩人の眼はある預言的幻影に接していたであろう。彼はユダヤ人らしい具体的現実の経験を通して、更に深い現実に触れたのである。それは疑もなく現在であると同時に、輝かしい未来の投影でもあるものに！　その想いが不滅の言となった。曰く、

「生命の泉はあなたの許にあり、
あなたの光の中でこそ我らは光を見る」（第九節）

原語は六語に過ぎない。「生命の泉はあなたの許にあり」という前半で我らは何を知るべきであるか。「あなたの許に」という、「あなた」は新約の世界ではキリストである。「生命の泉」は正に「キリストの許に」あった。ヨハネ福音書第四章のサマリヤの女と井泉のほとりで会話をされたイエスの言、「されど我が与うる水を飲む者は、永遠に渇くことなし、わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧

き出づべし」（ヨハネ四・一四）が正にこれである。詩篇のこの句は正しくキリストにおいて証された。霊的な神の体現者キリストに向って、「私があなたを相手とし奉るとき、あなたの許に、否あなたそのものが生命の泉であることを知ります」ということになる。詩人はエホバの神に向って同種の告白をしたわけである。新約ではその生命の泉がこんどは自分を通して他者に流れ込むというのである。

詩人は更に続けて言う、

「あなたの光の中でこそ我らは光を見る」。

現世における光と覚しきものに欺かれた彼は、暗黒の世を照破する実在の光を観たのである。これはただならぬ発見であった。光そのものなる「あなた」はいかなる外の光を以て見られ得るか。「あなた」を知ろうとする者は、ただ「あなた」の光に来るの外に途がない。「私」が見るのではなく、「私」は「あなた」に見られた者である。「あなたの光」に遭って始めて見る者となる。「あなた」が存在しなければ「私」はない。「あなた」の光で見られることなくして「あなた」を見ることがない。現実のどんな暗黒がしかしこの光に勝ち得るか。どんな密雲が「あなた」のこの光を遮り得ようか！

生命と言い、光と言い、あなたの中に、あなたの許に、ある、という。我々はここに使徒ヨハネの、そして主イエスの信仰と同質の香りを感ぜざるを得ない。神の生命と光に、深い現実において面接した彼が、再び想いを世の現状に致したときに、救い難い現状に対して神的解決が確かに在ることが信ぜられた。

生命や光がこのような力強い現実における実相であるのは、生命の本質に永遠があり、光の極限に終末の世界があるからである。何となれば、生命にして光なる神が永遠を有ち給うが故である。旧約の予言者や詩人の神は、確かに生ける永遠の神であった。それなら彼らがこの神と交ったその現実が、永遠の性格を有った現実であったことは、彼らの自覚の程度如何に拘らず真理である。永遠感や終末観は実に彼らの厳粛にして豊かな現実感の強度と共に発展と飛躍を遂げた。

絶大な希望の光が我らの詩人の心に臨み、これを貫き、彼の心の奥から直ちに歴史の終末に向って反映した。「あなたを知る者」（神と人格的霊的な交りをなす者）が断じて棄てられず、「不義をなす者」（神を棄てて勝手に生きる者」が必ず仆れて、義と深い愛憐による神の国が期あってか到来するという幻影が、彼が肉眼で見る現実よりも確かであった。少なくともこの詩人の祈りと預言にこのような光の美しい曙光を見る。

その光そのものは「われは世の光なり」と宣言したキリスト・イエスである。変貌の山上のイエスは事実、まばゆきばかりの白光体となられた。そしてペンテコステのとき天降りした聖霊こそは、これを受けた使徒たちの中に内住して世の光となった。そして今日も同じく使徒行伝と同質の霊的恩寵の現象が、聖霊体受の人たちにおいて身証されている。

詩篇第三十九篇

(1) 楽長エドトンに托したダビデの絃歌

1(2) 私は謂った、わが路をつつしんで
わが舌で罪を犯さず、
わが口に銜をかけてつつしもう、
悪者がわが前に在る間は。

2(3) 私は黙してもの言わず、
語らずして善福を離れた。
かくてわが苦悩は掻きたてられた。

3(4) わが心わがうちに熱くなり、
想いなやむほどに火が燃えるので、
私はわが舌で叫び出た。

(1) エドトン（イェドゥーテゥーン）レビ人で、ダビデ王朝に任職された神殿奉仕の三人の楽長即ちアサフ、ヘマン、エドトンの中の一人。（代上一六・三八、四一、代下五・一二、ネヘ一一・一七等）。

1 「わが路」（デラーカイ）、これを「わが言」（デバーライ）と訓み変える説もある。

2 「語らずして善福を離れた」、外の訳としては「黙して喜ばず」(L)、「むだ口をきかず」(Gr, Kl, Gk) レビ五・四、詩一〇六・三三参照。"dumb and ill at ease."（「黙して安からず」）Moff. このモファットの訳は原典に近い。

4 (5) エホバよ、わが終焉を知らしめ給え、
わが日の数がいくばくなるかを。
私は自分がどれほど儚いものかを知りたいのです。
5 (6) 見よ、あなたはわがすべての日を束の間となし、
わが生涯聖前には無にも似ています。
まこと総ては空です、
人間はみな立っているけれども。
6 (7) 本当に幻影と人は行き交い
まことに空しくも彼らは騒ぐ。
人は集積るが誰がそれを収めるかわからない。
7 (8) 今や私は何をか待とう、主よ！
わが希望はあなたに在るのみ。
8 (9) わがすべての罪から私を救い出し給え、
愚かな者の誹を私に向けさせないように。
9 (10) 私は黙しました、私は口を開きません、
そはあなたが成し給うから。

5 「束の間」（テパホート）、手幅即ち四本の指の幅という空間的概念から時間的な概念に変った。

10 (11) あなたの苛責を私から外らして下さい、
聖手の懲らしめによって私は亡びます。
11 (12) 過ちを責めてあなたは人を懲らしめ、
慕い求むる者を紙魚の如く失せしめ給う。
噫、空しい哉人間はみな！
12 (13) わが祈りを聴き給え、エホバよ！
わが叫びに耳を傾け給え、
わが涙に黙し給うなかれ。
13 (14) まことに私は旅人よ——あなたが伴侶です、
私は寄寓者です、わが烈祖すべての如く。
私が去って亡き者とならぬ間に
眼をそらせて安らかにしてください。

第三十九篇　旅人

率直な気持を告白しようとするけれども、「悪者」があまた住まう里ではいたずらに誹謗を蒙り、嘲笑を受けるばかりである。人々は謙虚な心を以て魂の真の叫びや嘆きを聴こうとはせず、自ら良心の声を踏みにじっている。他人を誣い己れを欺いているのである。さればとて、悪に対して激越な言を発し、「わが舌で罪を犯す」[1]ことは「つつしむ」[1]べきことである。噫、心なき人々の前に何を語り、何を訴えようぞ。「悪者がわが前に在る間」[1]は、「沈黙」[2]が最善の「路」[1]であると彼は「謂った」[1]しかし語らないことは「善福を離れる」[2]呪咀であり、「苦悩」[2]である。彼の「思念懊悩」[3]はやがてわが身を焦がす「火」[3]と化して来た。彼はどうしてもおのが苦悩を人にではなく、神に語らねば遣る瀬なくなって来た。哀なる火は即ち祈りとなって燃えあがった。

「エホバよ、わが終焉を知らしめ給え」[4]大きな嘆息のように、彼の祈りはこのように始まった。彼は何か「聖手の懲らしめ」[10]に逢い、死期も遠からぬ病にあるもののようである。そして彼はその病を罪の問題と無関係に考えることは出来なかった。伝統的信仰は彼の良心を痛めた。罪と病との間に何らかの因果関係

があるとしても、それは第三者より批判されるべき問題ではない。「愚かな者の誹」[8]は正にこのような立場である。彼は罪の自覚に苦しめられると同時に、何か人生の不合理に悩んでいる。人生のどこに意味があり、価値があり、目的があるのだろう。「わが生活は聖前に無ではないか」[5]。人間の「存在」[5]と「活動」[6]は結局「空」[5・6]ではないのか。不信の徒も信仰の人も斉しく亡びゆく人のいのちの儚さよ。[4]善悪の対立の止揚か、伝統的信仰に対する疑惑か、詩人の心臓は重くなり、底なき悲哀に沈んでゆく。祈りは中断の絶壁に面した。

時に突如として光明の一閃が深淵に差し込んだ。

「今や私は何をか待とう、主よ！
わが希望(のぞみ)はあなたに在るのみ。」（第七節）

人間的善悪禍福の対立はここに一応消え去って、主なる神の前に「わが罪」[8]のみが現われた。現実の惨めな儚ない姿がまざまざと映し出された。「あなた」の前にいる「私」は罪のほか何者でもなく、「私」の前に在ます「あなた」はわが信頼のすべて、希望のすべてであり給う。彼の眼は覚めた。彼は真の現実にぶつかった。彼は来世をここに夢みているのではない。驚くべき現実の神を発見して叫んだのである。「わがすべての罪からの救い」[8]を求めている。その解放の望は人になく、我になく、ただ「あなた」にある。自己の罪の問題に真剣な彼は、再び人一般にまで思い及び、罪過のため「紙魚(しみ)に蝕まれるように失せゆく」[11]人間の姿を嘆いた。

祈りは三度び波と寄せ返し、涙を交えた。彼も人である。寂しきは彼である、彼は旅人であった。しかし彼の荒野の旅には「あなた」が道伴れに在ます。[12] 顧えば「わが烈祖の如く」自分もイスラエル民族の旅路の一点に立つ「寄寓者」[12]である。神は民族の生命をこのようにして保ち給うのか。それにしても自分は遠からず「亡き数に入る」[13]のである。それまで暫しわが罪から「眼を遠ざけ給うて」[13]わが心を「歓ばせて戴きたい」[13]ものである。我らの作者のこのいじらしい心境に、罪ゆえに神を畏れ、み赦しに依り頼み親しむイスラエル本来の信仰的心情のいみじき現われを見る。

陰府という暗黒に直面しつつも、陰府を怖れるのではなく、罪とわが身の一切を神にゆだねたこの旅人の姿に、「旧約的信仰の英雄気質」（デリッチ）を見る。否むしろ神の驚くべき現実在につかまえられた旧約的信頼の幼児的素朴を見る。来世の浪漫的憧憬乃至罪の問題を抜きにした霊魂の不滅は、ギリシャ的であってヘブライ的ではない。わが詩人のは神の世界の現実である。神は来世の啓示を永く隠して置き給うた。この旧約の悲壮な信仰の夜路なくして新約の曙光は迎えられなかったのである。そういう消息をいみじくも語っているのが、ヘブル書第十一章の左の聖句である。

「彼らはみな信仰を懐きて死にたり。未だ約束の物を受けざりしが、遙かにこれを見て迎え、地にては旅人また寄寓者なるを言いあらわせり。斯く言うは、己が故里を求むることを表すなり。若しその出でし処を念わば、帰るべき機ありしなるべし。されど彼らの慕う所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼らのために都を備え給えばなり」（ヘブル一一・一三―一

六)。

この旅人はただ神を道伴れとして現実を歩いた。彼がやがて踏み入ったところは陰府と思いきや、予想を欺いた明るい緑の牧場の如き霊界であったにちがいない。

このような放浪の旅を幾年もした「旅人」の代表的人物は正にダビデであった。その心境から察してもこの詩篇はダビデ原作のものと思う。

「なんぢの聖言はわが脚の燈火
わが路の光なり」

(詩篇一一九・一〇五)

詩篇第四十一篇

(1)　楽長に托したダビデの紘歌

1 (2)　恵福なる哉、みじめな人を顧る者！
　禍の日にエホバは彼を救い給う。
2 (3)　エホバは彼を護って存えしめ、
　彼は地にあって恵みを享けている。
　その仇どもの欲うに委せて彼を渡し給うな。
3 (4)　エホバはその煩いの床に彼を支え給わん。
　あなたは彼が病むや
　そのすべての病臥を変え給わん。
4 (5)　私、私は言った、「エホバよ、私をあわれみ給え！
　わが魂を救い給え、私はあなたに罪を犯したので」。

1　「みじめな人」（ダール）、貧困、病弱、悲惨、などの人。「アーシール」富める、豊かなの反対。詩七二・一三、八二・三、四、一一三・七参照。箴言一九・一七「貧者を憐む者はエホバに貸すなり。その施済はエホバ償い給わん」。この句は詩篇のこの節と好一対をなすものと思う。
　この節を「神に心を注ぐ者」（Gress）または「神に親しむ者」（Gl）とよみ変える説があるが、却て当を得ないと思う。

5 (6) わが仇どもは我が禍を語って言う、
「いつ彼は死に、彼の名は滅びるのか」と。
6 (7) 彼が来て会うときは、虚しきを語り、
その心自らに邪曲をあつめ、
戸外に出でては言い散らす。
7 (8) すべて私を悪む者私に抗い相寄って囁き、
私に抗いわがために害悪を謀る。
8 (9) 「破滅の事彼にそそがれてあり、
臥した者再び起きることはあるまい」。
9 (10) 私がこれを恃みとし、わが糧を喰った親友すら
私に叛いて踵を強くした。
10 (11) けれどもあなたエホバよ！
私を憐み、私を助け起し給え！
さらば私は彼らに報ゆることができる。
11 (12) このことによりあなたが私を愛し給うを知りました。
即ちわが仇が私に向って

5 「彼の名は滅びる」（アーバッド　シェモー）、肉体の死は万人に来る。しかし名は滅びない人が少なくない。名が滅び、忘れ去られてしまうのは、決定的な消滅を意味する。（サ前二四・二二、サ後一四・七）。しかし、福音的にいうならば、地上に名が残る残らぬはどうでも好い。天界に名が記されることが本当の決定的なことである。
6 「彼」とは誰か。仇どもの一人か。病者訪問のことはサ後一三・五以下王下八・一九、九・一六、ヨブ二・一一以下等参照。
8 「破滅の事」（デバル・ベリヤアル）を「奸悪な言」と解し、呪文に関するものと解する説あり（Mow. Schm.）LXXは「非道の言を彼らは私に降した」。
10 「私を助け起し給え！」（ハキメーニー）死の床からの再起であろう。ホセア六・二。

闋(とき)の声を挙げ得ないことにより。

12(13) 私については、あなたが全的実存の私を堅く支え、
聖顔の前に永遠に私を立たしめ給う。
13(14) イスラエルの神エホバは讃むべき哉！
永遠より永遠に至るまで。
アーメン、アーメン。

12 「全的実存の私を」（アニー　ペトゥムミー）、直訳「わが完全に在る私を」詩一九・三、二六・一参照。
○　本篇は詩篇第一巻（一―四一）の終篇であり、本詩は第一篇と同様「恵福なる哉！」を以て始められている。本篇第十四節は編者が第一巻の結句として附記したもの。また本詩の結句としても適切。最後の「アーメン、アーメン」は更に後人の応答的加筆とみなされる。ネヘ八・六、代上一六・三六参照。及び詩篇各巻の終を参照。（即ち、七二、八九、一〇六、一五〇）。そして最終は「ハレルヤ」である。
　これは感謝礼拝歌（Danklitургie）で、1―3を祭司、4―11を神殿の階段から会衆の一人が、12を再び祭司が、そして13を会衆一同が唱えるものと見ることができよう。

第四十一篇　苦杯

「恵福なる哉、みじめな人を顧る者！
　禍の日にエホバ彼を救い給わん」（第一節）

彼は弱者の友であった。彼がこの不合理の世に在って聊か生きる意味を見出だしたのは弱者の友たる幸を知ったからである。然らば彼自らは世の強者智者に対して戦い得る力ある者であるか。否、実に彼自らが性来貧者、弱者であったが、彼の在るはおのれの力に拠るのではなかった。

上に威信ある王者なく、外に秩序のある社会なく、富強にして巧智なる者の横行した乱世にあって、彼は今何か重い病に臥しているのである。日頃弱者の友であった彼は、今やおのれの「禍の日」に遭い、神の助けがないとは考えられなかった。[1:3] しかし世の無情はどうしたことか。訪ねてくる友もない。彼の心は痛んだ。彼は正直な男であった。むしろ気の弱いまでに。人々の攻撃に遭い、彼は自分の病が何か「罪」[4]の結果であると思った。無条件に神に「憐み」[5]を祈った。我々は彼の「私、私は言った……」[4]の語気にその間の消息を知る。彼を亡き者にせんと「謀る」[7]仇どもは、彼の惨めな状態を見てその「死」[5]と彼の「名

の消滅」[5]を待っている。しかのみならず、或る者は「虚偽の見舞」[6]を敢てし、街に出ては彼を譏謗するのである。[6]彼は罪のため「破滅」[8]に瀕しているというのである。悪者どものため、世の誤解と中傷と誹謗の渦中に彼は病臥している。わが腹心の友はどうしているのだろう。嘗て親しく食を共にしたわが信頼せる友は！　噫、驚き呆れた。その友すら「踵を挙げて」[9]わが敵となったとは！　交友で裏切りくらい気もちの悪いものはない。シーザーを裏切ったブルータスに対して、彼は「君もか、わがブルータス！」と忿懣やる方なく叫んで刺客の刃に仆れた。イエスの高弟ユダは、イエスに近づいて「ラビ、安かれ」となめらかな言を吐き、しかも接吻までした。何たる二重の裏切りをふくんだ言と行為ぞ！　イエスは勿論それを見抜いて、「友よ、何とて来たる！」（マタイ二六・五〇）と言った。ユダは白いサタンに化していた。サタンは黒から白にいたるまで、変色自在である。ダンテが亡恩者、裏切者、を地獄のどん底で見たのは至極もっともなはなしである。

この詩人も嘆いたであろう。友はわが心の底がわからないのか。友は自分を信じ得ないのか。こんなに愛しているのに、と。今やわが孤独と苦杯を知ってくれる者はヨブかエレミヤかイザヤか。「わが朋友は我を嘲れども我が目は神に向いて涙を注ぐ」（ヨブ一六・二〇）。「わが親しき者はみな我が躓くことあらんかと窺いて互にいう、彼は誘わるることあらん、しからば我ら彼に勝ちて仇を報ゆることを得んと」（エレミヤ二〇・一〇）。「義しき者ほろぶれども心に止むる人なく、愛しみ深き人々取りさらるれども、義しき者の禍害のまえより取去らるるを悟る者なし」（イザヤ五七・一）。

このような時、人の望みの絶えた時、地の底にただ独り臥した時、彼の心がただ上を仰ぎ瞻た時、彼は言った、「けれども、あなたエホバよ！　私を憐み、私を助け起し給え！」[11a]一言また一言、切々として神に迫った。他人は私を絶対に審き得ない。神は私を知り、神が私を審き、神が私を憐み給う。そして神が私をこの「病臥」[3]から起して下さる。「さらば私は彼らに報ゆることができる」[11b]。この「報復」は自分がするのではない。神がなし給うのである。義憤の魂よ！　詩人ダンテも故里に裏切られたので、『神曲』一篇を以て世に聖なる復讐をした、神の力で。

彼の生涯はその後もなお、孤独と誤解と誹謗と迫害と白眼視から免がれることができなかったであろう。人の思念はいさ知らず、彼の神に対する関係は病床以来愈々「全く」[12]、愈々「堅い」[12]。「弱き人の友」として彼の飲み干すべき苦杯は絶えなかったであろう。彼の知り得なかった真の報復は、しかし、その愛の苦杯の中に成就しつつあったのである。地に於ても、地を去って後も、彼は立たしめられていた、弱者を荷いつつ。それはあのクリストフォロスの豫表の如く。それはしかも聖顔の前に永遠に！　讃むべき哉神、讃むべき哉聖名、永遠より永遠に至るまで。アーメン、アーメン。[13]

第二卷

（珠玉的詩篇　五篇）

詩篇第四十六篇

(1)　楽長に指揮をとらせコラの子らに
　アラモートゥ（高音）調で歌わせた歌
1
(2)　神は我らの拠所また力、
　なやみの時の強き助けぞ。
2
(3)　されば我らは怖れない、地は変り、
　山々は海の最中に揺ぎ落つとも。
3
(4)　その大水轟きて激らば激れ。
　その漲りにより、山々は震わば震え。
4
(5)　河ありてその諸流神の都を、
　至高者の聖き住居を喜ばす。
5
(6)　神その中に在まし給えば、

アラモートゥ、「秘かなるもの」「少壮なるもの」、或は「オーラーモートゥ」「永遠なるもの」ともよめる。更には「エィラーミュートゥ」（エラム調）とも解するが、「乙女の調」「高音調」（代上一五・二〇）と見るのが隠当であろう。これはシェミニートゥ（第八音、低音調、詩篇六・一、一二・一、代上一五・二一）に対するもの。

3　第三節と第四節の間に、第七節、第十一節と同じ内容の句があるはづである。即ち「万軍の主は我らと共にある。ヤコブの神は我らの高き巌である。」が先行三節ごとのあとに来て力強く繰返すわけである。

そは小揺ぎもせず。
晨近づけば神これを助け給う。
6(7) 民らは騒ぎ、国々は動いた。
神その声を出だすや、地は崩れた。
7(8) 万軍の主は我らと共にある、
ヤコブの神は我らの高き巌である。
8(9) 来りて見よ！ 実存主の聖業を。
彼は地に驚きのみ業をなした。
9(10) 彼は戦争を止どめた、地の極にまで。
弓をうち砕き、槍をへし折り、
車営を火で焼き棄てた。
10(11)「汝ら鎮まれ！ 我れの神たるを知れ！
我は国々に崇められ、全地に崇められん。」
11(12) 万軍の主は我らと共にある、
ヤコブの神は我らの高き巌である。

第四六篇　信仰の凱歌

詩篇全百五十篇の中から十歌を選ぶとも、五歌を択るともその中にこの詩篇を数えないでは居れない。ルターが宗教改革の軍歌としてこの歌に取材した自作の歌を謳いつつ福音の戦を進めた心根を想う。万軍のエホバはルターにとっては同時にイエス・キリストであった。この雄篇から彼はいかにしばしば深い慰めと力とを与えられたことか。「さあ、フイリップ、また詩篇第四十六を謳おうじゃないか」と信友メランヒトンをさそって合唱すれば、うなだれた魂は奮い起たされるのであった。それが彼自身この詩篇に拠って作詩作曲したあの有名な

„Ein' feste Burg ist unser Gott."「われらの神は堅き城なり」

「神はわが櫓」（讃美歌二六九）であった。その他に我々が親しんでいる讃美歌「神はわが力、わが高き櫓」（讃美歌二八〇）も正にこの詩篇に準じて詠われたアイザック・ワッツの歌である。

どの詩篇も決定的に年代と作者を断定することが出来ない。しかしどの詩篇もイスラエルという具体的民族の苦難の歴史の中から響き出でた声である。この詩が何か大きな歴史的事件の感動の中に作られたも

のであろうことは、全詩の現実的迫力と第一、第六、第八、第一〇の諸節から推測される。なお本詩の雄大な信仰内容とその雄勁な表現は、本詩がイザヤ的な予言者魂の作であることを推測させる。

例えば第一節の「神は我らの拠所また力」はイザヤ一二・二「神はわが救、われ依り頼みて懼るるところなし、主エホバはわが力、わが歌なり」と相応え、第二、第三節の天変地異にも動じない信仰は、イザヤ一七・一二、一三の天地の鳴動に敵の審判を見ている信仰の勝利感と相通ずるものがあり、第四節、第五節の「神の都」の消息は、イザヤ書第六十章の十節から二十二節の消息と相応える。第七、第十一節の「インマヌエル」のおとづれは、イザヤ七・一四、八・八、一〇の「インマヌエル」即ち「神我らと共に」を連想させる。第十節の「汝ら鎮まれ！　我れの神たるを知れ！」はイザヤ七・四「汝謹みて静かなれ」、三〇・一五「汝ら立ち帰りて静かにせば救を得、平隠にして依頼まば力を得べし」と相照応する。

詩の形体が祭礼用にふさわしいという学者もあるが、私はこの迫力あるリズムを見ると原作はイザヤかイザヤの弟子に相違ないと思う。然りとすれば、かの紀前七〇一年のエルサレムの奇跡的な救いが歴史的背景となっていると見る伝統的な説がやはり最も妥当と思われる。

東方の猛鷲アッシリヤが西方の巨鰐エジプトと雌雄を争わんとした時、アッシリヤ王センナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱禱を嘉し給うたエホバは、アッシリヤの陣営に天軍を遣り、一夜にしてこれに殲滅的打撃を与え給うた（列王下一八―一九、イザヤ三六―三七参照）。このような史的背景はこの詩に最も相応しい。その他アレクサンダー大王の猛威を振ってい

た紀前第四世紀の末か、それに続く継承者等の紛争時代を想像する説もあるが採らない。

神なる実在者を外にして、我らが拠って立つべきものは何か。人間的自主独立を主張する者をして言わしめよ。それはニーチェ的超人、ディオニソス的人間像に極まるのみ。真の自主独立は、自己を絶対他者に投じた絶対他主他立に在る。我らは人間として「なやみ」なきを得ない。しかしこのなやみをいかに感じ、いかに受けとるかが問題である。すべてのなやみは絶対面に於て受けとられない限り、真の意味も解決への道も与えられない。絶対面においてとは、自己を神の前に投じて神に面接するということである。そのとき、神は神らしき力と慰めとを必ず与え給う。その「助け」は本質的に人間の想いを越えたものである。人間の想いを越えた神であるからこそ、神は唯一の拠所また力である。

火山鳴動、暴風地震の如き天変地異に、大空襲、戦車来襲の如き大動乱裏に、なお怖れざる信仰は、我らの魂のどん底でこの実在者に、贖罪主キリストに現実は接しているものでなければならない。この預言者の信仰は実に此の如き突き抜けたものであった。この罪の世において、真になやむ魂は、それが極めて個人的なものであると同時に社会のなやみをなやむことであり、同時に民族や国家や世界のなやみを何らかの意味で負う立場である。この立場は、実に世界内的な限界を突き破った全く終末的な信仰でなければならない。預言者イザヤの信仰は正に此の如きものであった。此の如く、世界苦を負い、世界苦に打ち勝つ信仰は、決定的に自己の砕かれたものであり、神に終末的に支えられている立場である。

アブラハム、モーセ、エリヤ、ホセヤ、イザヤ、エレミヤ、第二イザヤ、パウロ、ヨハネ、ペテロ、皆

然らざるなし。実に旧約新約を貫いて終末的信仰こそ、イスラエルの現実と歴史とを支えて来たものである。そしてその決定的なものは実にイエスの十字架の死と霊生の復活であった。終末はイエスにおいて極点と支点とを現に有っているのである。

神の都の至高者の聖所と清流の神境、エゼキエルもこのような神境を礼拝の中心とした（エゼキエル書第四十七章参照）。しかしこの詩においては、エゼキエルに見る如き祭司的現実性はない。ここでは世の動乱を足下に見下す神の聖都の厳かな姿が見られる。世の民はバビロンに集り、神の民はエルサレムを慕う。この作者が謳った神の都は、最も美しい終局史的終末観においてヨハネに啓示された。

詩篇第二に見るように、国々の動乱も、神の前には、おのづから崩れゆく空しき立ち騒ぎに過ぎない。人類とは何と無駄な謀略と擾乱を以て自らの墓穴を掘る者であろう。今や人類はおそるべき科学兵器の極るところを知らぬありさまである。それのみでない、大気の汚染、地中の汚染、海中の汚染、油田問題、世界的経済問題、人口問題等々、問題だらけである。ノストラダームスの預言がぶきみな顔で見ているような現実である。しかし、要するに人間社会、国家の問題中の問題は心の問題である。万人は救を要する。たましいが神仏の問題に気がついて、神仏に立ち帰ることをしない限り、人類は亡びるであろう。

一人の神の僕イザヤが当時最強のアッシリヤの大軍を前にして神への信頼を以て立った。エホバの聖手がこの信に応えて動いた。敵は一夜のうちに壊滅した。彼は双手をあげて叫んだ、「来りて見よ！　実存（エホバ）主の聖業を。」神の決定的勝利を預言者は信じた、神は必ずや戦争を廃棄せしめ給うことを。武器もすべ

て砕かれることを。

しかしそれはいつであろうか。「汝ら勝手なことはやめよ。鎮まれ！　心砕かれよ！　祈れ！　そして私が神であることを知れ！」このように呼びかけておられる神の言を、世界の人々が、特に権力者たちが、真に心のどん底で聴く期である。肉の耳でではない。各人の心腸を以てである。心腸を以て聴くまでは、世界は火山の周辺で大爆発を待つポンペイ市と同じである。世界は本質的に失われている。ミルトンの『楽園喪失』も、ダンテの『神曲』も、ゲーテの『ファウスト』も、その詩句の奥から警告を発している。この終末的危機を自覚するならば、我々はいい加減な信仰では在り得ない。キリストも使徒たちも人間の終末的現実、神の審判、神の国の到来を眼近かに意識して白熱の信に生き且つ言い且つ行じていた。それが新約聖書の現実であった。預言者たちもみな同質の現実において生き動き且つ神の言を吐いていた。二十世紀の世紀末の現在は、いよいよ質的に然りである。預言書や新約聖書の文字が血となり肉となるのでなければ、この危機を突破し得ない。

「汝ら鎮まれ！　我の神たるを知れ」。

今日全世界に知らしむべきは神のこの一言である。「鎮まれ！」とは「深く静まって祈れ！」ということである。平伏して祈ること、そして「南無」すること、帰入し祈入することである。神、キリストのふところに投身することである。

かくて神を讃美する声が全地から響き出でんことを。そのときは、ベートーヴェンの第九交響曲のベー

トーヴェン＝シラーの祈り、

„Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder — überm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen."

「相抱けよや、千万の人々よ！
この接吻を遍く世界に！
同胞よ！　星の幕屋のかなたには
愛の御父ぞ住み給う。」

（小池辰雄著作集第二巻『芸術のたましい』三七九頁参照）

この人類愛への祈りが新しい響きを発するであろう。またヘンデルの「メシヤ」のハレルヤ・コーラスも霊的なひびきにどよもすであろう。

（一九四八年初夏）

詩篇第五十一篇

(1)　楽長に托したダビデの絃歌。
(2)　ダビデがバテシバと通じた頃、預言者ナタンが彼の許に来た時に。
1 (3)　神よ、汝(な)が愛によって私を憐み、
　　汝がゆたかなるあわれみによってわが罪過を消し給え。
2 (4)　わが不義から私を全く洗い去り、
　　わが罪から私を潔めて下さい。
3 (5)　まことに私はわが罪過を知り、
　　わが罪は絶えずわが前にあるのです。
4 (6)　あなたに対し、あなたにだけ私は罪を犯し、
　　しかもあの悪事を汝(な)が眼の前でやりました。
　　それはあなたが語れば汝(な)が義は現われ、

あなたが審けば汝が公明は自認されます。

5 (7) 見よ、不義の中で私は生れ、
　罪の中でわが母は私を孕んだのです。
6 (8) 見よ、あなたは深い処で信実を欣び、
　隠れたところで智慧を私に教えて下さる。
7 (9) ヒソプで私を潔めて下さい、
　私は浄くなるでしょう。
　あなたが私を洗って下さる、
　私は雪よりも白くされます。
8 (10) 私に歓びと楽しみとを聞かせ、
　あなたが砕いた骨を喜ばせ給え。
9 (11) み顔をわが罪から隠し、
　わが不義のすべてを消し給え。
10 (12) ああ神よ、清浄心をわがために創造り、
　不動霊をわが衷に新たに起し給え！
11 (13) 私をみ前から棄て給うな、

汝が聖き霊を私から取り去り給うな。
12 (14) 汝が救いの喜びを私に回復し給え、
さらば自由の霊は私を支え給う。
13 (15) 過誤を犯した者に汝が道を私は教えたい。
さらば罪びとはあなたに立ち帰るでしょう。
(16) 神よ、わが救済の神よ、流血の罪から私を救い給え。
わが舌は汝が義を喜び謳うでしょう。
15 (17) わが主よ、わが唇を開き給え、
わが口は汝が栄光を宣べつたえます。
16 (18) まことにあなたは犠牲を喜び給わない。
たとい捧げても、燔祭をあなたは喜び給わない。
17 (19) 神への犠牲は砕かれた霊！
砕かれた、ぶちこわされた心を、
神よ、あなたは軽しめないで下さい！
18 (20) み旨のままにシオンを嘉し、

エルサレムの城壁を築き給うでしょう。
19(21) その時、あなたは義の犠牲、燔祭、全き燔祭を欣び、
その時、人々は汝が祭壇に牡牛を捧げるでしょう。

第五十一篇　砕かれた霊

「七つの悔改の詩篇」（六、三二、三八、五一、一〇二、一三〇、一四三）の中で、この第五十一篇は何といっても最たるものである。そしてこの詩篇の詞書と本篇の内容が表裏一体するところを見ると、作者がダビデであると判断するのが一応自然であるが、詩人というものは、歴史的主人公に自分がなって、その環境と心境を躍如と描き出すことのできるものであるから、この詩篇の作者をダビデであると断定する客観的根拠がない限り、学問的にはこれをダビデの作と断定するわけにはいかないこと、他の詩篇の場合と同様である。ではあるが、我々はこれをダビデの作としてここに解説したいと思う。この詩篇の告白は生ま生ましく、体験者自身のものと見たいからである。

ダビデは愛の心情の人間である。それゆえ神の「愛」、神の「あわれみ」に縋らねばやりきれない人間である。自分の「罪過」を神が愛をもって「消して」下さるように開口第一に祈っている。第二節でも、同じ「罪」同じ「不義」から「洗い、潔め」られんことを祈っている。その「罪過」はよく自覚しており、寝ても覚めても、念頭から離れない。[3] その「罪」は、「あの悪事」は、神の「眼の前」でなされた。隠れてなされたことも、神の眼の前であるからである。[4]

こゝに作者が特に「あの悪事」（ハーラハ）といっているのは、ウリアをことさら激戦場に遣って戦死させたこと（サ後一一・一五―一七）、そしてそれより以前にウリヤの妻バテシバに姦通して孕ませたことである（同一一・二―五）。

これを当然神の「義」の「審判」が「自認」されるときがくる。[4] ダビデは自分の罪過を深く顧みつつ、人間の罪性を思わざるを得なかった。自分の罪は罪だが、掘りさげてみると、自分は「不義の中で」生れた。「母は罪の中で私を孕んだ」。[5] これは母の罪でもない。逆ればアダムとエバの物語にまでゆかねばならない。しかもこれは物語りであって物語りではない。人間の根本悪とか原罪という深刻な根源相の実相である。それが歴史的に遺伝されている。だから、「母は罪の中で私を孕んだ」というのは事実である。それゆえ、個人の罪性は本来生まれながら有っている。そうではあっても、個人の自由のゆえに、罪過には責任がある。それゆえ罪過は原罪の一つの現象であると同時に、個人の罪過として罰に価する。

想いを罪の問題で深めた彼は、罪にも拘らず神の欣び給うものは何であるかに想いをひそめた。神が

「深いところ」で欣び給うものは「信実（エメッ）」[6]であるにちがいない。神に信じ入ること。こちらの如何に拘らず、神様にアーメンということ、裏ぎらない心根、即ち信実である。虚色、虚偽、裏切りはゆるしがたい。そしてその半面、神様が「隠れたところ」で、教え給うものがある、それは「智慧」（ホクマー）[6]である。この「智慧」は新約的には奥義（ミステリオン）であって、神からの啓示的真理である。おのれを否定して神にアーメンと告白する信実な魂には神が奥義たる智慧を啓示して下さる。[6]

ダビデは旧約の潔めの風習（レビ一四、一五章）に従って「ヒソプ」（牛膝草レビ一四・四）で「洗い浄められ」[7]んことを祈っている。勿論これは徴としての表現で、たましいの浄めは、外的な洗いでどうかなるものではない。それは気分的なものに過ぎない。日本の神道の儀式はどんなものであろうか。

神のヒソプは、内容的に霊的なものである。それでなければ、「雪よりも白く」[7]されることはない。我々の言葉に「潔白」というのがあるように、ダビデもヘルモン山の雪を望見して知っているから、純潔な境地を望んで「雪よりも白く」と言って、神のあがないの力を表現したわけであろう。

「あなたが砕いた骨」[8]とは、神様にこっぴどくやられて四肢の骨が砕かれたように、全身が紛砕されたみじめさを表現しているものと思われる。

だから、もうやりきれないから、「み顔をわが罪から隠し、わが不義のすべてを消し給え」[9]と平伏して祈っている。

しかしそれでもなおもの足りない。彼は更に積極的に神に求めた。何を求めたか。「清浄心」[10]と「不動

霊」[10]である。清浄心、不動霊を自分の衷に新たに創造し給えと。「恵福なる哉、心の清き者、その人は神を見ん」とキリストは言った。清浄心は、無欲で、明鏡止水の如く神の御相（すがた）を宿すことになる。私心のない無者となる。「不動霊」は我々の中に新たに内在し得る。それは旧約では無理である。キリストが不動霊を有っておられたから、あの様な驚くべき聖言と聖業が自由自在に発現したのである。ダビデは新約のペンテコステ（五旬節）の出来ごとを豫見するかの如く、述べた。

神から来る不動霊は、「聖き霊」である。この「聖き霊」は新約の「聖霊」とは区別しなければならない。新約の聖霊はキリストの十字架の贖罪という土台のあとで与えられた霊であって、十字架霊といったら最もハッキリするかも知れない。ともあれ、ここには「汝が聖き霊」とあるので、汝たる神の聖き霊ということで、預言者たちも要するに、この神の聖き霊を直接受けた。この詩人もこの祈りにおいて神の聖き霊を受けた。だから「取り去り給うな」[11]と切願している。

神の聖き霊こそは、詩人に自由を覚えさせるみ霊である。それで珍らしくも「自由の霊」[12]（ルーアハ・ネディーバー）という表現がでてきた。「み霊のあるところに自由あり」とパウロが新約でいっているが、旧約の律法の世界で「自由」（ネダーバー）を唱えるのは一つの突破であり、新約への近づきである。み霊の力が衷にはたらいて、内的なやむにやまれぬ衝動がこの自由（ネダーバー）である。これが力をもっているから、「私を支え給う」といっている。

神に救われた彼は、同じような「過誤（あやまち）」[13]を犯した者に神の道を教えたい、そうすると、「罪びと」は神

のもとに立ち帰るようになる、と思った。

第十四節で、ダビデは「流血の罪」ということを告白した。これは忠信な部将ウリヤを前述の如く激戦場に遣って戦死させた罪である。これとは全く異ってわが乃木希典(まれすけ)将軍は、日露戦争で、自分の愛児勝典を南山の戦に、保典を旅順二〇三高地の激戦に遣って、多くの戦友と共に護国の柱として戦死させた。

姦淫と殺人の二重の罪をバテシバとウリヤに対して彼は犯した。この罪は、何らかの贖いによらなければゆるされない。ダビデという人は、他面深い愛の顧みと、不動の忠誠の人物であった。ガテ人イッタイに対する思い遣りの如きもその愛の一つのあらわれである（サムエル後書一五・一九―二二）。臣ダビデを殺害せんと執拗に追跡する王サウルに対して、サウルが戦死してのちまでも忠誠を尽したダビデの信義は、東西古今稀有な忠誠である。主君の勘気忍びがたく、「敵は本能寺にあり」と叫んで信長を討った光秀とは全く反対の武士道をダビデは証した。ダビデには、神が、一度び預言者サムエルを通して油をそそいだサウルに対して抗するは、神に逆うものであるとの信がダビデの信であったからである。現実のサウルが神霊を失い、サタンの霊に動かされていても、それはダビデにとって、むしろあわれむべきサウル王であったからである。

ともあれ、ダビデは、ウリヤに対して犯した罪を忘れることが出来ず、「わが罪過を消し給え」と祈ったところで、それは空しい。神様もこれをそのままゆるすわけにゆかない。その罪の解決のために遣わされたのが預言者ナタンであった。ナタンはダビデを訪ねて、ある譬話を語った（サムエル後書一二・一―

四)。多くの羊と牛を所有している「資産家」(「カピタリスト」という語は牛の頭「カピタル」の数量を多く有っている者、という意から来ている語)が、自分の牛羊を惜しんで、貧者の唯だ一頭(この場合は「一灯」ではなく)たる牝羊を奪ってこれを旅人のために烹て食べさせた、という話であるが、これを聞いたダビデが、「大いに怒って」ナタンに「エホバは生く、誠にこれをなしたる人は死ぬべきなり。……その牝羊を四倍にして償うべし」と言った。これを聞いていたナタンは、ダビデに「アッター・ハー・イーシュ!」「汝はその人なり」と喝破した(サムエル後書一二・七)。これにはダビデは全く参った。「我エホバに罪を犯したり」(サムエル後書一二・一三)、この告白はこの詩の第四節の告白と符合するものである。

そこでダビデは平伏した。預言者ナタンによって彼の魂は「砕かれた。」「砕かれた、ぶちこわされた心を、神よ、あなたは軽しめないで下さい!」との祈りはここにおのづから発せられた。

旧約の宗教で、犠牲は最も中心的な宗教行事である。それをすら否定しているのが、この第十六第十七節である。「犠牲も、燔祭もあなたは喜び給わない」(16)、「神への犠牲は砕かれた霊!」である、と告白した(17)。普通これを「砕けたる魂」といっているが、原文はあきらかに「砕かれた霊」(ルーアハ・ニシュバーラー)である。人間は自らなかなか砕けた霊になれない。そこに我執の罪がある。それが何かにぶつかって、神に砕かれる。そのとき心も魂も霊も新たにされる。そのように砕かれた霊、ぶちこわされた心、これが神からのたまものだ! そこで新生して新たな生命と力が与えられる。

ダビデは姦淫と殺人の罪を犯したが、それが致命的な罪であったことを知った。彼が、「その人は死すべきなり」とナタンの譬話の資産家に対して吐いた言は、自分自身への断罪となった。彼もナタンの「汝はその人なり」の言下に一旦、死んだのであった。それで告白したこの詩篇五十一篇は、「砕かれた霊」、「ぶちやぶられた心」の消息のゆえに、信仰告白の焦点、人間のたましいの救の転換、要として極めて大切なものを万人に、万代に提供することになった。その意味においてもダビデはやはり信仰の典型となった。ステパノをして殉道の死を死なしめたパウロも「われは罪びとの首なり」と告白したが、具体的な姦淫や殺人をしなくても、ダビデやパウロの告白は万人の罪告白の代言である。

さてしかし、これで信仰の真理は終るのではない。人間の「砕かれた霊、ぶちこわされた心」は、さまざまな契機に因る。事業の失敗、失恋、近親の死、結婚の暗礁、入学試験の失敗、その他さまざまな、運命の急変、環境の行きつまり、道徳的失敗、社会的圧迫、ひどい誤解、中傷、迫害などに因って、目茶苦茶になったりする。しかし、どのような原因によるにせよ、神の前に、砕かれない限り、その砕けは本ものではない。却て自暴自棄となって逆にサタン的なものになるか、自滅するかである。

ところでダビデのように神の前に「砕かれた霊」となっても、まだそれは本格的な救とはならない。我らの救主、贖主キリストの前でなければ、決定的救いにはならない。しかしキリストの前でもなおダメである。キリストの十字架が、決定的な「砕け」であり、「ぶちこわれ」である。キリストが我らのために神に「砕かれ」、「ぶちこわされた」。それが贖罪の内実である。このことを預言しているのがイザヤ書第

五十三章である。

「彼はわれらのとがのために傷けられ、
われらの不義のために砕かれ、
みづからこらしめを受けてわれらに平安を与う」。（イザヤ五三・五）

即ちキリストの十字架においてキリストと共に「砕かれている」おのれ、「ぶちこわされている」おのれ、を見るまでは、本当の「砕かれた霊」「ぶちこわされた心」にはなっていない。全き贖罪はキリストの十字架にある。これを信受し体受したとき、はじめて本当の「砕かれた霊」を賜わる。「恵福なる哉、霊の貧しき者」という貧しき霊とされる。そこが私が唱道してやまない無者である。

そうするとそこに臨んでくるのが聖霊である。キリストの霊である。そのこともこの詩篇が知らずして祈求し、預言している。それが第十節の「清浄心」であり、「不動霊」であり、第十一節の「汝が聖き霊」であり、第十二節の「自由の霊」である。キリストによらなければこのような心も霊も本ものとはならない。十字架の贖いの体受と聖霊のバプテスマへとこの詩篇は、ダビデは知らずして指向し、預言しているのである。

第十八、第十九節は学者が礼拝用につけ加えた句であるという通りであろう。しかし、旧約の世界では犠牲、燔祭はいつまでも存続していたから、ダビデ自身が、たましいの解決のあとで、一般の礼拝のつまづきとならないようにつけ加えたのかも知れない。形式の奥の世界が本ものなら、形式をぶちこわさなく

ても好いといった消息として受けとられ得るからである。同じことがキリスト教の世界でもくりかえされている。カトリック、プロテスタント、無教会、幕屋、召団等々、人間のいとなむ宗教的形態はさまざまである。問題は相対的形態がどうあろうと、本ものが内実として有るか否かにある。本ものとは十字架と聖霊が不可離の関係においてその人その集会に現実存態としてあるということである。

（一九七九年八月十五日）

「さまよう人々立ち帰りて
天なる御国の父を見よや！
罪とがくやめる心こそは
父より与うるたまものなれ」

（讃美歌二三九）

詩篇第六十篇

(1) 楽長に「証詞（あかし）の百合」の調べで托したダビデの教えの秘歌（ミクタム）

(2) ダビデがアラム・ナハライムおよびアラム・ゾバと交戦していたとき、ヨアブが帰って来てメラハ（塩）の谷で一万二千のエドム人を撃破した。

1 (3) 神よ、あなたは我らを投げ棄て、
　かき裂き、怒り給うた。
　我らに帰り給え。

2 (4) あなたは国土を震わせ、これを裂き給うた。
　その破れを治めて下さい。
　国土が揺（ゆ）れ動いていますから。

3 (5) あなたはその民を辛（つら）い目にあわせ、
　よろめかす酒を飲ませました。

4 (6) あなたは汝が畏敬者に旗を与え、
　弓の前から遁れさせました。　セラ
5 (7) あなたの愛する者が救われんために、
　汝が右手で救い、私に答え給え、
6 (8) 神はその聖所で宣うた、
「私は歓呼してシケムを分けよう、
　私はスコテの谷を測ろう。
7 (9) ギレアデはわがもの、マナセもわがもの、
　エフライムはわが兜、ユダはわが杖。
8 (10) モアブはわが洗い桶、エドムにはわが靴を投げる。
　おおペリシテ！　わが凱歌を挙げよう」。
9 (11) 誰が私を堅固な市に伴れてゆくか、
　誰が私をエドムに導くや。
10 (12) 神よ、あなたは我らを棄てなさったのですか、
　神よ、我らの軍勢と共に出陣なさらないのですか。
11 (13) 迫害者に対して我らに助けを賜え。

人の救済は空しいです。
12(14) 神にあって我らは力を尽そう、
彼こそは我らの敵を踏みにじる。

第六十篇　一旗萬旒

この詩がダビデの作とすれば、ダビデの生涯の劇的戦闘期のものであろう。即ち「サウルの家とダビデの家の間の戦争久しかりしが、ダビデは益々強くなり、サウルの家はますます弱くなれり」という句に始まるサムエル後書第三章以下、特に近隣の国々との戦を述べている第八章乃至第十章を中心とした背景をもったものである。全面的には当てはまらないが、「ダビデ聞きてヨアブと勇士の惣軍を遣わせり」（サムエル後書一〇・七）とか「ダビデ塩の谷にてエドム人一万八千を撃ちて帰り名を挙げ得たり」（サムエル後書八・一三）とかいう句がある。この詩の詞書と数字の上の喰いちがいはあるが、ヨアブはダビデの甥で、ダビデ王の股肱の臣、指揮官の一人であった。

血腥ぐさい戦乱期であったから、神が「かき裂き、怒った」という事態を正直に告白している。それ

で、神に「我らに帰り給え」と平伏して願っている。自分から「立ち帰る」のが普通の悔改の姿勢であるが、それすらできなくて、平伏して、神の顧みを待つすがたで、祈りの中で最も深刻なものの一つである。幼児が倒れて、動けなくなって、「お母ちゃん！」と叫んでいるようなものである。戦乱で動揺しているのも、その背後に神の審判の力がはたらいているのを感じて告白をつづけている。

「あなたは国土を震せ……」[2]がそれである。原文はただ「地」という字だが、国土の意と思う。そのあとからすぐ「民」という語がでて来て、「辛い目にあわされた」[3]とか、「よろめかす酒」[3]という表現があって、国土、国民の動揺がのべられている。イザヤ書五一・一七にも「エルサレムよ、さめよ、起きよ、汝さきにエホバの手よりその憤りの杯をうけて飲み、よろめかす大杯を呑み且つ吸い干したり」という句があるのをみても、神の審判のあらわれである。

しかし第四節はこれと全く対立する著しい句である。

「あなたは汝(な)が畏敬者に旗を与え、
弓の前から遁れさせました」

この「弓」（ケーシェット）という言葉は、テクストの「真理」（コーシェット）という言葉と子音は同じだが、母音を変えると「弓」という語になる。「真理」では意味をなさないので、学者は「弓」に訓み変える。古い文献には、いくらでもそういう間違はあるはづで、「弓」と訓むのが適当であろう。

神を畏敬する者どもに、敵の弓の面前で大旗が与えられ、掲げられた。そのようにして彼らは護られた

という。ふしぎな「旗」である。

ダビデは律法の聖櫃を奉安すべき幕屋を建てた（サムエル後書第六章）。神の幕屋なる「聖所」[6]に祈りを捧げる。聖言を聴く、すると具体的な地名種族名を指して神の宣言があった。詩篇に固有名詞がでてくるのはむしろ珍しい。「シケム」[6]はヨルダン川の中流西方の地、「スコテ」[6]は同じく中流東方の地、「ギレアデ」[7]は同じく東方で、スコテより北方の広い地域。「マナセ」[7]は更に北方の領域でガリラヤの東南方にまで及ぶ。「エフライム」[7]は「豊沃」の意であるが、歴史的には、ヨセフの子の一人で、エジプトに生れた。マナセは兄、エフライムは弟であるが、このエフライムの部族から、モーセの後継者ヨシュアが出現した。預言者サムエルはエフライム部族出身。エフライム族はユダ族と相並ぶ有力な部族。ソロモン王朝のあと、ヤラベアムが北王国イスラエルを建て、ヘハベアムが南王国ユダを建てたが、このイスラエルはエフライムともよばれるようになった。「エフライムはわが兜（かぶと）」[7]とは、勝利の象徴を称う。

次に「ユダはわが杖」[7]。「ユダ」は「讃美」という語義で、ヤコブとレアの間の第四子（創二九・三五）。十二支族の一つだが、ヤコブに祝福されて「獅子の仔」（創四九・九）にたとえられ、永く覇権を握る部族であることが約束される。「わが杖」とは「王笏」（スケプター）のことで、権威の象徴。だから、エフライムとユダで、勝利と権威が象徴されている。

「モアブ」[8]は死海の東方の豊沃な高原地帯。モアブ人というのはロトの子孫。イスラエルとは血縁関係であるが、歴史的には決して単なる友好関係ではなかった。ダビデはモアブを征服した（サムエル後書第八

章)。「エドム」[8]、「赤」という語義。母音を変えれば「アダム」となり「人」の意。ヤコブの兄エサウの子孫がエドム人で、イスラエルとの間は犬猿というわけ。ダビデはエドムをも征服した(サムエル後書第八章)。

「ペリシテ」紀元前十二世紀の頃、小アジア半島の西部、南西部、エーゲ海諸島に航海を自由にして、海路エジプトを脅かしたほどの「海の民」で、カナーンの西南部、ユダの西方を根拠としていた。カルメル山以南の沿岸の平原に定著し、この地域の名は従ってペレシェト(ペリシテ)と呼ばれる(出一五・一四)。後代のパレスティナという名称はこれから派生したもの。彼らは非セム民族である。イスラエル民族とは葛藤が絶えなかった。文明はイスラエルを凌駕していたから、士師時代には部族の団結の弱体であったイスラエル民族はペリシテに征圧されがちであった(士師一〇・七)。単立国家の形態となったサウル王時代にはペリシテはイスラエルに対する支配権を喪失し(サムエル前書第十四章、十七章)、ダビデ時代となってはペリシテは逆に制圧された(サムエル後書八・一)。この詩篇ではその通り、イスラエルに凱歌が挙げられた。

ダビデといえども東はアッシリヤ、西はエジプトという強国と交戦することはできなかった。ただ神の力を信じている不屈の気魄はこの詩の終句にあらわれている。

それが預言者イザヤになると、「その日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし、三つ相並び地の上にて福祉を受くる者となるべし。万軍のエホバこれを祝して言い給わく、わが民なるエジプト、わが

手の工なるアッシリヤ、わが産業なるイスラエルは幸なるかな」（イザヤ一九・二四、二五）。といった終末的預言が謳われている。現代のイスラエルとエジプトがかなりこの預言に近いところへ来ているが、今のアッシリヤともいうべきアラブ諸国は不倶戴天の敵の様相を自ら示している。終末的帰一の日はいつ来るのか。否、それは不可能であるのか。

さてこの詩で一句不思議に思われるのは

「あなたは汝が畏敬者に旗を与え」（第四節前半）

である。旗とは何を意味するのだろう。出エジプト記一七・一五に「かくてモーセ一座の壇を築き、その名をエホバ・ニッシー（エホバわが旗）と称う」という句がある。これはモーセがアマレク族と戦って勝ったときの戦勝のしるしである。「旗」の原語は、「ネース」で、ルターは「ツァイヘン」印と記している。ツァイヘンと謂えば、日本でスポーツにおいてランナーなどが背中や胸につけている数字のマークを「ゼッケン」といっているが、あれは本来ドイツ語の「ツァイヘン」を訓みちがえて「ゼッケン」にしたとか。まるでドイツ語的な発音だが、誰も疑問にしないのが面白い。旗印という言があるが、この詩篇のは正に「旗印」といっても可さそうである。昔から戦には軍旗があり、軍旗を奪われたら、大恥辱であった。わが乃木将軍は若かりし日、第十四聯隊長のとき、西南戦争で聯隊旗を奪われたので責任を感じ、危く自刃せんとした。このことを生涯彼は忘れ得ず、明治天皇崩御の際、自刃した要因の一つをなし

ていたと思われる。旗手は文字通り生命賭けで旗を護った。軍旗は、軍の象徴であるから貴ばれた。またそれを大にしては国家には国旗がある。国旗を貴ばない国民はない。それなのに今日の日本の若者はどうであるか。日本の日の丸の国旗に対する敬愛の気風が非常に稀薄になっている。国旗は国民のたましいの象徴である。これを貴ぶことを軍国主義と思うのは大きなまちがえである。

それはともかく、この旗「ネース」という言葉をしらべてみると、イザヤ書に、「その日エッサイの根立ちて諸々の民の旗となり……」（イザヤ一一・一〇）とあって、これはメシヤ預言であるから、心にキリストが彼を信ずる世界の諸国民の旗となる、という著しい句である。また同じくイザヤ書一八・三には、「すべて世に居る者、地に住む者よ、山の上に旗の立つとき、汝らこれを見、ラッパの鳴り響くとき汝らこれに聴け」とある。これも終末的な預言である。神の国到来の旗じるしである。またイザヤ書四九・二二には、主エホバ言い給わく、「視よ、われ手を諸々の国に向いて揚げ、旗を諸々の民に向いて建てん」これもメシヤ王国の到来を待つ預言の句なのである。同じくイザヤ書六二・一〇には、「門より進み往け、進み往け、民の途をそなえ、土をもり、土をもりて大路を設けよ。石をとりのぞけ、諸々の民に旗をあげて示せ」とある。これも亦メシヤ王国の救いに関わる預言である。

「エホバ・ニッシー」、エホバはわが旗というモーセの決定的な告白のように、神御自身が、個人の人生の、国民の歴史の凱歌の、栄光の旗である。我々にとってはキリストが、前掲のようにイザヤ書が預言しているメシヤの旗そのものである。「旗幟鮮明であれ！」という言葉があるが、我らの旗幟たるキリスト

を推し立てて我らは邁進する。

然らば、キリストの旗は、どういうものだろうか。旗棹は十字形。旗そのものはどういう内容だろう。「われは世の光なり」（ヨハネ八・一二）であるから、太陽に擬せられて然るべき存在である。結論は極めて簡単である。日章旗そのもの、日の丸の旗そのものが、我々にとってはキリストを表わすことになる。「されど我名を畏るる汝らには義の日出でて昇らん、その翼には醫す能力を具えん」（マラキ四・二）とあるように、義の太陽であり、その翼即ち光線は生命を与え、生命の諸相を醫す能力がある。「その光熱から隠れあるものとてはない」（詩一九・六）。地上の万物は太陽光熱のおかげで生命が生じ、生命が生長し、生命が保持され、生命が治療をうける。霊界の太陽はメシヤ、キリストである。霊的生命は彼からくる。十字架の贖罪を体受すれば、聖霊の光が臨み、霊的生命が与えられる。我々はその太陽を存在の中心にもつ。そのことを日本の国旗が象徴している。「あなたが私の中に」という相が国旗の相である。私という旗は何ものでもないから白地である。どんなに罪によごれていても、聖霊の陽が存在の中央に降臨すると、よごれはみんな消えてしまう。即ち白地となる。これは十字架の贖罪と聖霊の光がなすわざである。現実の私は破れた泥だらけの旗だ。しかし、もう一つ奥の現実―信仰の現実―の私は、日本の国旗そのものである。恩恵の力で私は白地であり無色であり、無者である。そこに義にして愛なる赫々たる霊の太陽たるキリストが内住、内燃し給う。有難き極みである。

神キリストの畏敬者は、皆、キリストの絶対恩寵のゆえに日本国旗となる。だから、キリストという神

の授け給うた一旗が、彼を体受する万人において万旒となる！　それがこの詩のかくれた秘義であると見た。その万旒は皆日の丸であると同時に、その白地は無限の色を反映することができる。そしてその万旒はキリストの一旗に帰一する。終末的帰一である。この一旗万旒の相はヨハネ第十五章の譬を以てすれば「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」であるから、一幹万枝となる。これがみ霊の本当の現実である。

ダニエル書にふしぎな聖言がある、「彼の前より一道の火の流れ湧きいづ。彼に仕うる者は千々、彼の前に侍る者は万々……」（ダニエル七・一〇）。「彼」とは勿論「神」である。「一道の火の流れ」とは聖霊の火と見るべきである。これは信受する者を生かし、これに叛く者を滅す火である。即ち聖霊の火の流れを体受する者が、千々、万々あって奉仕している、というのである。そのようにメシヤ・キリストなる旗を体受する者は千々萬々旒！　ということになる。

世界のキリスト教界の一人一人が、そのような一旗万旒の旗の雲霞となって進み往かんことを。

讃美歌三七九番は十字架の旗であるが、ここにその続篇として聖霊の旗を掲げよう。

いざや　み霊の　陽の光、
キリスト・イエスの　旗じるし、
確かと推し立て　進み往き
逆ろう人を　なびかせよ！
勇め　証示の　戦なり

み霊の御旗　輝けり。

（一九六四年一月五日　東京キリスト召団、武蔵野幕屋年頭講筵に基づいて。）

「見よや十字架の旗たかし
君なるイエスはさきだてり」

（讃美歌三七九）

詩篇第六十二篇

(1) エドトン流にて楽長に托したダビデの絃歌

1 (2) わが魂は黙してただ神を待つ、
わが救は彼からだ！

2 (3) 彼こそはわが岩、わが救い、わが櫓、
私は全然不動である。

3 (4) きみらはいつまで人に襲いかかるのか、
きみらは相共に傾いた石垣や崩れかかる城壁の如く
人を仆そうとするのか。

4 (5) げに彼らは人をその高みから落そうとたくらみ、
たばかりを好む。
彼らはその口では祝い、

(1)「エドトン」(イェドゥートゥーン)、ダビデ王朝におけるレビ系聖歌隊の指揮者の名で、アサフ、レマンと共に三流派をなしていたもの。(代上一六章参照)。

その心では呪っている。

5 (6) わが魂よ、黙してただ神を待て！
そはわが希望は彼からだ！

6 (7) まことに彼はわが岩、わが救い、わが櫓、
私は動かされない。

7 (8) 神にこそわが救済（すくい）とわが栄光（さかえ）がある。
わが力の岩、わが避け所は神に在る。

8 (9) み民よ、いかなる時にも彼に信頼せよ！
彼のみ前に君らの心を注ぎ出せ！
神はわれらの避所だ。　セラ

9 (10) 人（アダム）の子らはげにも空虚だ。
人（イーシュ）の子らは虚偽である。

10 (11) 天秤（はかり）にかけると上にあがって
彼らは共に気息（いき）より軽い。

11 (12) 君らは暴力をたのみとするな、
強奪に虚（むな）しいのぞみをかけるな。

財産(ハイル)か、それが増えたとて心を置くな。
12(13) 一度び神は確(し)かと語った、
再び私は聞いた、
「力は神に在り」と。
13(14) わが主よ、愛もあなたに在る。
げにあなたは、そのわざに従って
人に報いをなし給う。

第六十二篇　力は神に在り

さて私たちは、この詩篇を新約の光で読むと、「神は」は「キリストは」になる。旧約ではキリストがないですから、いきなり「神は」でくるわけですが、新約となるとこれが「キリストは」ということですね。

第一節「わが魂は黙してただ神をまつ」、なぜ黙すんですか。「黙す」は「ダーマー」という言葉で、

ダーマーって（黙って）というわけ！　沈黙、「沈黙は金で、雄弁は銀だ」と言う。「黙す」というのは、しかし深い祈りのことです。ただ黙っているんじゃない。祈りの深い世界で祈る時、声を出さずに黙って祈っている。そういう沈黙の祈り、声を出さない、しかしながら、その祈りの世界では、声以上の声が響いている。沈黙の雄叫びと言います。私がつくった言葉ですけれども。「沈黙の雄叫び」の祈りということは、全存在で祈っている。「心をそそぎいだせ」とありますが、全存在をそそぎいだせと。沈黙の世界はそれぐらいの激しさを持たなければだめですよ！

私は昨日、三時に目が覚めたから、すぐ床の上に坐って祈りました。本当に楽しいです。何しろ森然として声なしですからね。夜は沈々として更けてゆく。わが身は浸々としてキリストの中に入っていく。ちょうど六三篇に書いてある「ああ神よなんじはわが神なり、われ切になんじをたずねもとむ、水なき燥きおとろへたる地にある如くわが霊魂はかわきて汝をのぞみ」（一a）というようにキリストの中に入ってゆく。

第二節「神から来る」と言ってね、ただぼやっとしてたってだめですよ、それでは、来ませんよ。「わが救い、わが望み、わが磐、わが櫓、」「あなた」だけがわが救いです。他にも救いがあるかも知れないが、なんて言うんじゃないですよ。神だけが、汝のみが、キリストのみが、わが救いであり、わが望みであり、わが磐であり、わが櫓である。いいですか、真理というものは焦点が結ばれなきゃだめなんです。とかく今の人は気持が分散している。レンズを通して太陽の光が焦点を結ぶ、そうするとそこに火が発す

る。魂の世界も発火しないようなことではだめなんです。ですから祈りも、全存在をもって神様にそそぎ出す、ぶちまける。そうしたらば、「力」そのものたるキリストから「力」がくる。何かいろんなことにぶつかるほど逆に力が来る。「沈黙して」、言葉を絶して全存在で神様にぶつかっていきます、神様に信頼して。「まつ」というのは時間的には待つこと、質的には信頼していること。そして祈りで信頼する、ぶちまけるということ、そこは直ちに魂の世界、直ちに力が来る。魂の奥底は「不動」であります。

まずキリストの中に入って、具体的に祈るのです。キリスト中心になって祈るときは、自分のことでも人のことでも既に聴かれている、完了の状態を受け取って祈るです。そのうちに、そうなるだろうかじゃないです。いつも私が言っている根源事実です。「祈りたることは直ちに聴かれたりとせよ」とキリストは言い給いました。祈り以上に聴かれてるんです。現象面はどのようなことであっても、外側の現象面にはこだわらない。病が癒されることを祈って、どうも癒されない。私の祈りは足りないから。そんなことを考える必要はないです。外側に癒されようが癒されまいが、奥の世界では癒されている。愛の祈りは聴かれている。じゃ癌はどうしてくれるんですか、癌はなかなか治らない、簡単には。だけど祈りで癌が治った例があるよ。けれども奥では癌を癒す。癌は肉体的な一番やっかいな病気だ。だけども癌より仕末の悪いのが人間の罪です。心の癌は罪なんです。これがどうにもならないから、世界の歴史は戦争、また戦争、遂に世の末まで戦争はやまない。人間の罪の結果を、あの戦争というやつが一番よく表わしている。これは癌より悪い。肉体的な癌より尚悪いのは、この人間の罪というやつ。心の癌。この心の癌を取り除

いたのがキリストの十字架です。キリストの十字架の他に心の癌を取り除くものはないんだから。罪の贖いという、イザヤ書五三章！　だからどのような現実も、キリストの十字架の贖いを通して聴かれているんです。いつも申し上げている通り、キリストと共に十字架されると聖霊が来る。そこに神の力、キリストの力が現在するのです。

「わが救は彼からだ」、彼、キリストから来て他のどこからも来ない。キリストだけから来るんだと。わが救いはキリストだけからやってきます。もっとはっきり言うと、「キリストのみがわが救いである」と。キリストはわが救いなり、救いの内容は、どうしようもない「我」の贖いと聖霊の降臨です。これが救いの内容です。

「キリストこそはわが磐」、モーゼが鞭打った岩から水が湧いてきた。「その岩はキリストである」とパウロは言った（コリント前書一〇・四）。パウロさんはずいぶん大胆な言い方をしています。キリストこそわが磐わがすくいの磐清水であると。わが高き櫓であるから人間的には多少揺れても倒れることはない。突かれてもダルマさんみたいに起き上る。七転八起です。第四節は、どういうことが背景になっているにしろ、いつわりを言おうが、謀りごとをしようが、迫害しようが、相手は勝ったつもりでしょうが、どっこい！　と言うわけだ。

第五節「わがたましいよ黙してただ神を待て、そはわがのぞみは彼からだ」、沈黙の祈りをもって神を待つ、祈りのないところには宗教はないですよ。平常生活でいろんな問題にぶつかります。一応ああだこ

うだと考える。考えたっていいけどさ、一番大事なのは祈りへ持っていくことです。祈りに持っていくとね、未解決のまま乗り越えちゃうんです。祈りでもっていきなり解決しようたってそれはむりだよ。簡単にはいかない。未解決のまま、もうひとつ違った次元でもってそいつを突破してしまう！　これが祈りの世界の素晴らしさです。また人生百般に対する秘訣です。そうすると今度は、神様の方で、しかるべき時にいい解決をして下さるんです。頭で解決したってしょうがないんだ。問題なんていくらあったっていいよ。そんなものは。ああ晴れたと思ったら、また雲がかかってきちゃって、雨になったり、あらしになったり、千変万化の天候と同じですよ、人間の運命なんて、いろんなことになる。ロングフェローの "Behind the cloud is the sun still shining."「雲の彼方に太陽はそれでもなお照っている」です。雲の彼方の太陽を人生の雲を突破して受け取る、これが祈りの世界です。そうすると相対的現実を突き破っちゃう、乗り越えちゃう。そういうわけですよ。沈黙の祈りをもって現実に打ち勝って行くことですよ。

「神こそはわが磐、わが救いである」、キリストこそはわが磐、わが救いである、高き櫓は動かされない、不動であると。

第七節「神にこそわが救済と栄光がある」「わが救とわが栄とはキリストにあり、わがちからの磐わがさけどころもまたキリストにあり」です。救済と栄光、キリストはわが栄光である、キリストはわが救、わが栄、「キリストはわが栄光」ということは、対称で言うと、「あなたはわが栄光である」と。キリストの方では、「お前はわたしの栄光」である、即ち、お前はわたしの栄光を現わす者であるということで

す。我々がキリストの栄光を現わす者、即ちそれを証者という。

「わが救とわが栄とは神にあり」、「神はわが救わが栄」と言った方がなお強いです。

第八節「み民よいかなる時にも神に信頼せよ！」、どんな時でもキリストに依頼みなさいと。

「そのみ前に君らの心をそそぎいだせ」、我らの心も魂も身体も、全部そそぎ出せ。

「キリストは我等の避難所である」、避難所に入ると力を得るんですよ。逃げてただお終いなんて、そんなんじゃないです。パウロは本当にそのようにして生きていました。使徒たちはみなそのようでした。全存在火の如く燃焼する。祈りの世界で火の如く深く燃焼する。根源的燃焼。そこに来なかったらそれはつまらんです。御飯を食べると、御馳走を食べると肉体は燃焼するね、暖かくなる。しかし、祈りの世界でキリストのみ霊を戴くと、魂が、全存在が本当に燃焼してくる。いいですね。もう力の秘訣はただそれだけです。

第十二節「力は神に在り」と書いたけれども、「神はわが力なり」と言った方がなおいいくらいです。「キリストはわが力なり」、一般のキリスト者はね、聖霊が来ていないもんだから、こうはっきり言えないんです。形容詞だと思っている。聖書には文法的形容詞はあっても、内容的形容詞はありません。形容的に思われている世界じゃないんですから。そんなのは偽りになる。で、一二節に「ちからは神にあり」、力が神にあるからわたしはいいと言ってボヤッとしているんじゃないよ、こちらは無力さ。無力だけれども力が神にあるということは、神はわが力なり。「わが力」という時には実際自分のところに力が来てい

なければわが力とは言えない。「神は力なり」と言ったら三人称的。わが救い、わが力という時、「わが」と言うからには、神と我とは一つになっている。だから「わが」と言う時には、みんな救いがこっち側にやってきているわけです。そうすると今度は、キリストはわが望み、われはキリストの望み、わたしはキリストに望まれている、お前を通してやるぞと言って力の裏づけのもとに期待されている、望みの事態が上からこちら側に現実となっている。我々はキリストの望みになっている。ね。「神はわが力」という時に、「わが力」だから、神がわれに来ておられるので、私の中に神の力があります。「汝はわが力なり」、非常に乱暴な言い方をすると。神様の方で、「お前はわたしの力だ」と言って、私たちを通して力を現わそうとしていらっしゃる。わたしの力の出所だぞと。それで、ペテロのように「我を見よ！」「わが内なるキリストを見よ」ということになるのです。

神の力も、救いも、栄光も、随時現わす者、これが証者。これだけの現実となっていなければ伝道なんかしちゃいかんです。救いに於て、力に於て、栄えに於て、望みに於て、神、キリスト、我の三者が一体となっているわけです、いいですね。

一度び神は確かと語った、
再び私は聞いた、
「力は神に在り」と。（十二節）
わが主よ、愛もあなたに在る。（十三節）

このところは学者によってよみ方がちがうのです。

一つのことを神は語った、
二つのことを私は聞いた、
「力は神に在ることを、
わが主よ、愛もあなたにあることを。」

といった読み方もあるのです。私は従来の読み方、前者に従います。その代表はグンケルです。ヨブ記の四〇・五に「われすでに一度言いたり、復た言わじ、已に再度せり、重ねて述べじ」という類似の例があります。シュミットやワイザーは後者の読み方をします。「力は神に在る」ということを一度また再度聞いた。その力はどんな力か、愛の力だということなのです。このことは後者のよみ方、「力は神にある」、「愛もあなたにある」という二つのことは結局「愛の力」という一つのことなので、どちらのよみ方にしても内容は同じです。神様はあわれみの力を持っている。神の愛には力がある、力ある愛、力ある愛なんです、神の大慈の劫力です。人間の愛は同情とか、可愛想だなと思うだけです。どうにもならない。ところが、神様の愛は相手を本当に力づけ救い上げてしまう。相手を本当に力ある者としてしまう、そういう現実が上から来て貫ぬくんです。貫ぬいて内住する。聖霊の突破、常然が正にこれです。

別言すると、「ひとたび確かと語った、再び私は聞いた」とありますね。ヘブライ語では一つ、二つ、というようにもとれるんです。で、「一つのことをおっしゃった、また二つのことを聞いた」というよう

にも解釈できる。で、内容的には一つ、二つ、今度は時間的に言うと、ひとたび、二次。しかし、今述べたように結局同じ内容、「神は力ある愛」ということ。"Gott hat ein Wort geredet, das habe ich etlichemal gehört; daß Gott allein mächtig ist."「神だけが力ある者であるということを、そういう一つのことばを神様はおっしゃったが、わたしはこれを二、三回聞いた」と。これがルターの訳です。ルターらしいね、やっぱり。だから内容は、マルティン・ルターは、神だけが力があるということ、これもガラテヤ書の場合のように「アライン」（だけ）を使っているね。

もし他の学者たちが言うように、二つのことを言うならば、前述したようにあとに出てくるところの「愛」という言葉とかかわってくるわけで、「力ある愛」、結局それが二つの事柄であっても一つの事である。神様が力強いとは、「エール」という「神」という言葉が「力ある者」という意味ですから、オールマイティで、知恵にも、生命にも、愛にも、何に於ても全能的実力があるのです。この力はしかしながら相手を倒す力ではない、救う力なんです。敵をも救い上げちゃうのが敵を愛するということです。敵を愛するとは、敵を救い上げちゃうことです。

そういうキリストが、自分の望みでもあり、義でもあり、力でもあり、愛でもあり、わが一切である。わがすべてであると。私はもうこの六二篇を突き抜けて話をしています。

キリストはわが一切であると、無限定者です。そうすると今度は、キリストはこの私たちを通して千変万化のことをなさる。もちろん、我々人間だから無限なことはできません。けれどもキリストの証者とし

て、どういうことをやっても我々ひとりびとりを通してキリストは一切をなし給う。それが本当の意味に於けるエクレシアの各員の在り方です。即ちキリストは頭で、我々は身体だから、いろいろな部分となる。いろいろなはたらきとなる。我々はキリストの一切となる。みんなでキリストの一体となる。だからひとりびとりは、その賜わったところの、一番大事なものを通してキリストを現わす。それがキリストの自現であるのです。キリストの力は、即ち御霊の力です。力あるキリストの霊です。御霊を受け取れば必ずその人を通して何か力あることが現われてくる。いいですね。そういうことで六二篇のたたみかけて、神は……というのは、私たちにはキリストがというたたみかけです。キリストの方からは、我々を通して栄光を現わそうとなさる。そのためには祈りが大事です。祈らなければ力が来ません。「求めよさらば与えられん、たずねよさらば見い出さん、門を叩け、さらば開かれん」と。全存在で求め、たずね、ぶっ叩くのが祈りなんです。これが祈りなんです。そうすると、「聖霊をくださざらんや」です。「よきもの」、即ち聖霊を必ず下さる。マタイ伝七章のそういう「求め、たずね、叩く」というのはみんな祈りのことですよ、祈りの世界で求めるんですよ。全存在をそそぎ出だせ、ぶちまける。祈りの質がそういうことにならないうちは来ないんです。現実は問題だらけ！　問題の解決なんていらない。問題だらけで結構だ。祈りで乗り越えちゃう。この祈りの世界で突破します。キリストを本当に受け取れば相対的な現実は乗り越えて、そのうちにキリストの方から力を下さるから、知らない間に解決される。本当にやってごらんなさいよ。どんなに行詰りそうになっても、悲しくなっても、へこたれちゃいかんですよ。

「大道無門、千差道ㇾ路　透ニ得此関一　乾坤独歩」と。キリストの大道は門なき門です。「われは門なり」と言うけれども、キリストという大道は無門の門なんです。至るところにキリストの門は開かれている。ここがキリストの門なんていうんじゃないんです。これは禅宗だけれども、老子でも、とにかく突き抜けていますよ、彼らは。「千差路あり」、ひとりびとりいろいろあるさ。

「此関を透得すれば」この無門の関、だから無門関というんです。この無門の関所を通り過ぎて行けば、「乾坤」、即ち天地をひとりで歩くことができる。

いかなる時にも全存在を神にそそぎ出だせ、キリストにそそぎ出だせ。キリストの方では待っていらっしゃるんだから、それでキリストはわが力、汝はわが力の現われるところであると、相互関係になってくるわけです。そして力はキリストに在りということは、何回でも、二回だけじゃないですよ。常に新たに聞きながら、常に新たに受け取って進んで行く、限りなく進んで行く。満たされながら求めて行くんですよ、祈りの世界で満たされながらいよいよ求めて行く。これは本当の福音的現実です。そしてこの力は一切を救い上げていく力であることを間違えないでください。これが本当の大慈大悲の世界です。昔の一流の坊さんたちはみんな仏の世界でそこに入っていた。キリストの直弟子たちはやはりそうであったし、歴代の本当の御霊のキリスト者はそうであったと。我々も福音的無門関を本当に突破しましょう。これからの二〇世紀の現実はどんなことになっていくかわからんですよ、正直。日本は精神的に混沌としています。聖霊が本当の中心、力の源！　それが即ち、キリストがわが力なりです。それは原始力的な力です。

ものすごい爆発力をもっています。ひとりびとりが本当に原始力的な力を持って進んでもらいたい。歴史を動かして行ったのは、そういった一個の力なんです。そういったひとりびとりが絶対的に神様に期待されているんです。それにキリストの力を戴かなかったら、この絶対的期待に応えることができないです。また一回しかない地上の人生だ。棟方志功は燃焼したでしょう。彼を見ていると本当に火のようだな。世界的な棟方になっちゃった。何がそうさせたか、彼の中に生きているところの禅宗と浄土真宗をね、渾然として力にしたところの現実が彼の板画に現象しているんですよ、ね。だから何でもそうです。人の批評なんかどうだっていいよ。人にどう評価されようがそんなことどうだっていいよ。本ものは決して滅びません。ゲーテが言っている通り、「本当のものは後の世にも決して失われることなくとどまる。しかし瞬間にきらきら輝くものは消え失せていく」と。キリストの「力より力へ」涯しなく進んで往きましょう。

（一九七六年一〇月三日の講筵）

詩篇第六十三篇

(1) ダビデの絃歌、ユダの曠野にいた時の。

1 (2) ああ神よ、あなたはわが神！
わたしは切にあなたを求める。
わが魂はあなたに渇く。
わが身もあなたを恋い慕う。
水なき乾れた痩せ地のように。

2 (3) さればこそ汝が威力と汝が栄光を見んとて
汝が聖所であなたに目をそそいだ。

3 (4) 汝が愛は生命にもまさるので、
わが唇はあなたを讃美する。

4 (5) されば生涯あなたを寿ぎ、

聖名に在ってわが双手を挙げる。
5 (6) わが魂が髄と脂で満たされる如く、
歓喜の唇でわが口は讃える。
6 (7) わが床の上であなたを想い起こし、
夜を護るなべにあなたを冥想するときに。
7 (8) そはあなたがわが助けで在り給うたので、
汝がみ翼の蔭で私は歓呼する。
8 (9) わが魂はあなたに追いすがる、
汝が右の手は私をば確かと支えた。
9 (10) だが彼らはわが魂を滅ぼさんとたづね求め、
深い低地をうろつく。
10 (11) 彼らは剣の手にかかり、
山犬の餌食となろう。
11 (12) されど王は神に在って欣び、
彼によって誓う者はみな誇れるが、
げにいつわりを語る者の口は緘がる。

第六十三篇　聖翼（みつばさ）

汝はわが神！

神との非常に深い祈り（交わり）の境地の出ている大変大事な詩篇です。

「ユダの曠野にいたときのダビデの絃歌」

学問的には定めがたいですが、ダビデがサウル王に追われてエンゲデの野にあった頃を思い浮べて下さい。

1　ああ神よ、あなたはわが神！
わたしは切にあなたを求める。
わが魂はあなたに渇く。
わが身もあなたを恋い慕う。
水なき乾れた痩せ地のように。

神に呼びかけて、これほど切々たることばが他にあるでしょうか。詩篇六十三篇のこの一節に祈りの秘

訣があります。深いことばですから、よくこういうのは身につけたがいいです。

「ああ神よ、あなたはわが神！」。「エロヒーム、エリー、アッター」という原文です。「エロヒーム」といって神に呼びかけて、「エリー、アッター」の「エリー」は「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」というキリストの十字架上の叫びの「エリー」（わが神）です。「アッター」は「あなたは」の意。「わが神、あなたは」です。

「ああ神よ、あなたは、わが神！」。神様、あなたは、わたしの神さまだ！　と。あなたがいなくちゃどうにもならないということが「わが神！」ということです。他のもので代用のきく人たちは、神さまに呼びかけないです。人間がつくり出したさまざまの文化文明で満足している人は、神には来ない。人間のつくり出した、どんなことでも、どうにもならんという人は本当に神さまに来る。ところが、人間は、本当はそういうわけなんです。どうかなっているような顔をしているけれども、実は、どうにもならないのです。どうにもならないことに気が付いていないばかりです。いつも申しているように、本来、人は宗教人である。助けを必要としない人は、ひとりもいない。人助けということばはあるが、神助けということばはあまり使われていないけれども、本当は神助けがなければどうにもならないし、また、神助けがあれば、あとはどうなってもいい。江戸ッ子弁で「どうにでもなりやがれ！」と私は時々言いますけれども、どうなってもいいのです。本当に神助けを持っていれば。

で、この「ああ神よ、あなたは、わが神！」は我々にとっては、更にどういう事態なのでしょうか。

我々にとってはキリストなのです。キリストがいなければ、どうにもならないし、キリストが来れば、はっきり神がつかめるので、キリストに来ないで神をつかまえたなんて思ったって、あるいは神を呼んでいると思ったって、それはまだ、多少、観念に浮いてしまうか、いわゆる神秘主義的になるでしょう。具体的な実証体、神の実証体、神を実際身をもって証しした人はキリストなんですから。イエス・キリストを抜きにして神というのでは旧約にとどまることになります。パウロが神といっている時も、必ず、キリストがそこにあるわけなんです。マルティン・ルッターは旧約聖書を読む時も、ヤーヴェー（実在者）とか、アドナイ（わが主）とか、エール（神）とかいうところをキリストという気持で彼は読んでいたんです。で、そういう具体的な、「あなたは、わが神！」において、「あなたはわがキリストの神！」、「あなたはわがキリスト！」というひびきが同時にこもっていることが大切です。即ちいつもキリストがその中にござるということを、はっきりと意識しているのが肝腎です。

わが身心は汝を慕う

「わたしは切にあなたを求める」

これに因んで思い出すのは詩篇の第四二篇の第一節、「ああ神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐごとく、わが霊魂もなんぢをしたひあへぐなり、わがたましひは渇けるごとくに神をしたふ、活ける神をぞしたふ、何れのときにか我ゆきて神のみまえにいでん」、この節も深い谷川の水を喘ぎ求めている鹿のように、私の魂はあなたを喘ぎ求めるという現実。

「わが魂はあなたに渇く。わが身もあなたを恋い慕う。水なき乾れた痩せ地のように。」

「わが魂」という。この「魂」は「ルーアッハ」でなくて、「ネフェシュ」という語が使ってあります。旧約では、おそらく「ネフェシュ」の方が多く用いられているでしょう。「ネフェシュ」はドイツ語のseele（ゼーレ）、英語のsoulで、その「わが魂」という言い方は、ある時は「われ自身」と訳してさしつかいないです。ここでは明かに、その次に「身」ということばがありますから、霊肉渾然たる消息を語っているわけです。

「わが魂はあなたに渇き、わが身もあなたを恋いしたう」と、大胆な表現、切々たる思慕です。魂も肉体も、全身であなたにしがみつくというのです。それほどまでに神を具体的な霊的実体として体感している信仰の現実はすばらしいと思います。

「水なき乾れたやせ地」、お腹がすいているよりも、のどが渇いている方が辛いです。普通の断食では水だけは飲みます。人間の体は九十パーセント以上水分ですから、水は非常に必要なわけです。本当にのどが渇いた時には、真清水ほどおいしいものはないわけです。そういうように、魂が餓え渇いている。「義に餓え渇く者は幸いなり、その人は飽くことを得ん」とキリストが言われた、その「義」という「神の義」は、キリスト自身です。キリストに餓え渇く者は幸いであると、飽くことを得る、と。我々は福音書を読んで、本当にキリストをそのように慕っていますか。キリストがあればほかはどうでもいいと、本当にそういう気持になって読んでいますか。この詩篇の「神」を「キリスト」におきかえて読んで下さい。

「わが魂はあなたキリストに渇き、わが身もあなたキリストを恋いしたう」と。この詩篇六十三篇の一節は、切々たる、そしてまた、この神、キリストに全存在が満たされる、飽くことを得ん、という。これを更に具体的に言うと、聖霊に満たされることです。聖霊が臨んできますから、そうしたらば、この聖霊という水を飲む者は、かわくことなし、ということになる。キリストがヨハネ伝四章でサマリヤの女に語っている事態です。ですから、キリストという聖霊の水、これを飲むとかわくことを知らない。そういう、生命的な一如の世界。ところがこういうことばは神秘的だと言って、警戒する観念的な信徒が多いです。「人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし」（ヨハネ六・五三）と言っておられるではありませんか。神、我というものを非常に対立的に、またキリスト、我というものを対立的に考えて、信仰の事態を単なる倫理的な角度からだけ考えている。そういう意識が強すぎるんです。汝と我の対立では、いつまでたっても一如の信には入れません。パウロは、「われ汝の内に」、「汝わが内に」という一如の世界をあれほど言ってるじゃないですか。もう、私のはらわたの中には異言がきているんです。そういう現実の中に入っているから、何とも知れない生命が正直きているわけですね。で、聖書を読んでその現実の中に入っているから、何とも知れない生命が、正直きているわけですね。で、聖書を読んで、その現実に、直ちに入ることが信であり現であり祈りであるのです。だから、私は言っているんです、祈り入る、祈入と。

汝の恵は生命に優る

2さればこそ汝が威力と汝が栄光を見んとて汝が聖所であなたに目をそそいだ。

どうも詩篇を読んでいて、私たちにつまずきになるのは、この「聖所」ということばがよく出てくる。特に神殿宗教的になっているユダヤ教時代に読まれているところの、うたわれているところの詩篇ですからやむを得ません。ユダヤ教以前においても預言者エレミヤが、「神殿、神殿、神殿と言う偽りの言をたのむな」（エレミヤ七・四）と烈しく神殿宗教に反対しています。そんな神殿にこだわるから、本当の信仰生活がないのだとエレミヤは警告を発しています。こういう言葉が、無教会主義の根拠の一つになるのです。無神殿、無教会、結構なんですが、今度は、自分自身が本当に神殿となり、自分自身が本当に教会（エクレシア）とならなければ、「無」が形骸となってしまうのです。これではまたしょうがない。それで私は旅のすがたの動的な霊的人格共同体たるべきエクレシヤの表現として「幕屋」ということを言い出したのです。「幕屋」は組織ではありません。有機体的な生命的な愛の共同体です。エクレシヤの直訳的な表現としては「召団」というのを用いています。恩師藤井先生がその「教会論」で唱えたことに因ります。先生自身は具体的には用いませんでしたが。

そしてエレミヤは、偽りの預言者がいるから、エホバの神は「預言者の敵となる」（エレミヤ二三・三〇―三二）ということも言っている。エレミヤという人は非常にハートの深い人なんだが、それだけにまたものすごく強い言葉を吐いています。ですから、この詩篇の「聖所」を、わが内なる「聖霊の聖所」として読むべきでありましょう。

で、この、「汝が聖所であなたに目をそそいだ」これはそういう礼拝を一面においてやっていたから、そうでしょうけれども、しかし、これは、「そそいだ」という過去のことを言っているので、今、詩人の現実は、曠野の中の自分の家、というところがどうも本当のようであります。

3　汝が愛は生命にもまさるので、わが唇はあなたを讃美する。

「汝が愛は生命にもまさる」というのは、非常に著るしい言葉ですね。

「愛」はヘセドという語ですから愛とか恵みとかという語です。愛は、生命以上である。もう少し言いかえると、汝という愛自身は、わたしの生命に勝る、と。そうですよ、神という愛をじかじかに受け取らなかったら、生命が生命じゃないわけですよ。私たちは自分の生命を惜しむさ、本能的に。だけども、その生命が生命であらんがためには、神という生命の源泉に来なかったら死んでしまう。だから、汝が愛はわが生命に勝る、とは、真理です。詩篇の生きた文句は、しばしば預言書に出ているんです。預言者精神から来ているわけです。エレミヤの二章一三節に「そは、わが民は二つの悪事をなせり、即ち活る水の源なる我をすて自己水溜を掘れり、すなわち壊れたる水溜にして水を有まざる者なり」（一三）。水溜じゃだめだ。本当の水源をもたないと活ける水じゃない。活水源たる神、キリストをもて、というわけです。ヨハネ福音書第四章のキリストです。今橋君の「活泉」という雅号もこれに因ってつけてあげたのです。渇ける水なき衰えたる地で、源泉を、活る水なるあなたを、焦がれている。だから、あなたという源泉は恵みそのもので、私の生命に勝る。まさにその通りです。恵泉女学院というのもこれから来たにちがいない

です。

霊歌的讃美

4　されば生涯あなたを寿ぎ聖名に在ってわが双手をあげる。

「双手をあげる」という。よく手をあげて讃美し、また祈るわけです。日本人の「万歳」という祝いもこれに通ずるでしょう。霊界の太陽たるキリストに向って魂の手を棕櫚や月桂樹の葉のように挙げるとみ霊の流れに浴します。

6　わが床の上であなたを想い起こし、夜を護るなべにあなたを冥想するときに」（五―六a）

これはめずらしい句ですね。こんな句はちょっと他にないです。夜の冥想と祈入！　この句を味わいながら、キリストのふところに入ってゆきます。

5a　わが魂が髄と脂で満たされる如く

「髄と脂」というのは、ちょうどロース・ビフテキみたいな、脂のついている牛肉、羊肉を思わせる言葉で、そういう沙漠の民らしい発想なんです。

霊肉渾然たる生命的な詩篇第六十三の以上の数句をよく味って、その神秘な現実を日常の現実の奥にもつことです。旧約及び新約の現実は、ことばの深い意味における本当に神秘の世界ですから。そして、その神秘は、我々の相対的現実を本当に力づけているところの神秘なんです。「キリストは神の懐に」と書いてあるじゃないですか、神の懐にという言い方をしなきゃならないのは、いかにキリストが神と一如の

実存であったかを語る表現です。この詩篇がそのような一如の現実に入る祈りなのです。

5b　歓喜の唇でわが口はあなたを讃える。

讃美歌をうたうとき、本当に歌詞を味わいながら、歌っていなければだめですよ。そして、歌詞に拘わらず、歌詞の奥を霊的につかんで、讃美する。うたっているうちにみ霊がくる。霊歌の質になります。いわゆる音楽的ではありません。何ごとも本質をつかむことが大切です。本ものとなることです。

聖翼の蔭に

7　そはあなたがわが助けで在り給うたので、汝がみ翼の蔭で私は歓呼する。

今まで読んだところがこの詩篇の本当は中心的なところなんですが、今日はこの「汝がみ翼のかげで」というところに一つの重点をおいて、そこで私は「み翼」と題したわけです。私は、この「翼」（カーナーフ）という字を見た時に、ハッと飛行機を思った。私も、この間、ジェット機に乗ってドイツへ行って来たんだけれど、ねえ、あの翼は案外幅の細い単葉ですよ、それがまあ巨大なずう体の機体を、よくも、もちあげるものだなあと本当に不思議に思いました。それはもちろんジェット発動機のものすごい噴出力が大きな力であるんだけれども。とにかく、あんな翼でよく上昇できるものだなあ、と思います。実は飛行機に乗るたびにその驚異を新たにしているのです。私はバカだから、何でも驚くんです。あんたがたは利口だから驚くものがないようだけど。私は不思議だな、と思うんですよ、正直。もし、エヤーポケットでガターンと落下した際に、この翼が折れてごらんなさいよ、おしまいなんだ、何百人が。だから、私は

乗る時は、パイロットのために祈るんです（笑い）。「パイロットさん、間違いないようにして下さい。神さま、パイロットを護って下さい！」と。でこの、私が、目をつぶっているのが近くにいる人にわからないですね。眠っていると思っているのでしょう。

ところが、ここは、神さまの聖翼。これも、「汝の聖翼のかげに」（ベセール・ケナーフェイカー）と言って、神様は、何も神話的な翼のある偶像じゃないんだよ、ね。だけれども、汝の翼なんて言う言い方を平気でやる。旧約聖書というのは、非常に、その点でも文学的ですよ。文学的といっても、決して形容ではなく、霊的現実の大胆な表現なのです。預言者も詩篇も、ヨブ記も、雅歌書も、ね。

「み翼の蔭で私は歓呼する」

「翼」（カーナーフ）ということばは、詩篇のほうぼうに出てきますから、ちょっと拾ってみます。

詩篇十七篇八節、「願くはわれを瞳のごとくにまもり、汝のつばさの蔭にかくし」。「瞳のごとくにまもり」、瞳のごとくというのは、瞳の中に他の人の像が映るでしょう、相手のを見ていると。そのように守ってくださいということなんです、瞳のごとくにまもりというのは。「汝のつばさの蔭にかくし」というのは、牝鶏が雛鳥を翼の蔭に入れるでしょう。寒いときはお腹の体温であたためてやっているのです。あれが正に、つばさの蔭。キリストのことばにありますね、あれも、この旧約からきている。キリストも思い出して言われたんでしょう。マタイ伝二十三章三十七節だ。

で、それから、十八篇にもある、「かくてケルブに乗りてとび、風のつばさにて翔り」（一〇節）。「風の

つばさ」とは妙なる言ですね。「ケルブ」とは天使のことです。天使はつばさを持っている。「風のつばさ」！　風は聖霊に通ずる。御霊のつばさ、新約的に言えば、正に御霊の翼！　聖霊鳩の如く臨んできたという、あれは鳩の翼の如くということでしょう。翼を持った鳥のように聖霊が臨んできた、と。私がもし、人間でなければ鳥になりたいな、文句なしに。私は時々空飛ぶ夢を見たりする。で、今の人は、あまりに現実的すぎるんじゃないかね。あなた方も空飛ぶ夢見るかね。いいねえ、風のつばさにて翔ける。翼の蔭じゃなくて風のつばさで翔ける、御霊の翻で天翔ける、世界中を、宇宙を。今は宇宙旅行時代に入って来たが、我々はみ霊の翼で宇宙旅行できる。

それから、三十六篇の七節、「神よなんぢの仁慈はたふときかな、人の子はなんぢの翼の蔭にさけどころを得」。いいことばだね、三十六篇もいい詩篇ですよ、これは。「エホバよなんぢの仁慈は天にあり、なんぢの真実は雲にまでおよぶ」。こういう詩的な文句をあなたがたは読んで楽しいとは思わないですか。こういう文句を読んだらば、そのような現実に自分を入れなくちゃあ、だめですよ、ね。雲であろうと、天であろうと、何であろうと、みんな風のつばさでもって、私たちの魂は、自由に動いていて、地面になどはえつくばってはいませんよ。ねえ。こういう言葉だってあるじゃあないか、雄飛せよ！　「なんぢの仁慈はたふときかな、人の子はなんぢの翼の蔭にさけどころ得」深いいつくしみの中にということを、翼の蔭というのです。牝鳥の翼の蔭だからね。人間では母の懐というわけだが、母という字は乳房を表現している象形文字だから、乳房のかげということになるでしょう。

それから、詩篇五十七篇一節、「我をあはれみたまへ、神よわれをあはれみたまへ、わが霊魂はなんぢを避所とす、われ禍害のすぎさるまでは、なんぢの翼のかげを避所とせん」。とにかく詩篇の作者というのは、いろんな患難に出っくわして、そうして書いているんだからね。いい加減な現実で書いているんじゃないから、ね。「なんぢの翼のかげを避所とせん」、翼のかげに入ると、力がくるんですよ。何でも力を得なかったら、しょうがないですよ、その蔭にかくれて眠っちゃったら。その蔭に入ったら、御力が来る、力が。安息日というのは、安息日に私たちは聖書をこのように喰らって、力を得るんだからね、原始力を。ただ、体裁にやってきている人はいないし、私も体裁や習慣で集会をしてやしないんです。

それから、六十一篇四節、「われ永遠になんぢの帷帳にすまはん、我なんぢの翼の下にのがれん」。こんなに芥ということばがあったかと思うほどでしょう。

それから、六十三篇、九十一篇。「かれその羽をもてなんぢを庇ひたまはん、なんぢその翼の下にかくれん、その真実は盾なり干なり」（九一・四）。九十一篇は神の護りを力強くうたった詩篇です。

それから、百四篇三節、「水のなかにおのれの殿の棟梁をおき雲をおのれの車となし風の翼にのりあるき、かぜを使者となし焔のいづる……」。この第百四篇という長編の詩は、第百二、第百三とトリオになっている雄篇です。

キリストのみ翼

「翼」の句のある詩篇は、今あげたところのものだけかと思います。で、最後にマタイ伝二十三章三十七

節「ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと為しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき」。「なんぢの子ども」と言ったって、これは、エルサレムの子ら、エルサレムの人々ということです。「視よ、汝らの家は廃てられて汝らに遺らん。われ汝らに告ぐ、『讃むべきかな、主の名によりて来たる者』と、汝等のいふ時の至るまでは、今より我を見ざるべし」（同、三八―三九節）。やがて自分は十字架だ、ということです。「預言者たちを殺し遣わされたる人々を石にて撃つ者よ」。伝道者たちが今までの歴史において殉教の死を遂げたり、伝道してもなかなか福音を受けとらない。キリストのこの嘆きは、それ全体を代表しているような嘆きです。呻きです。叫びです。私も何十年と学校で語ったり、集会をしたりしているが、それでもなかなか福音の世界を求めようとしないわけです。みんな適当なところでサヨナラをしちゃっておしまい。

だが本当に言っておくが、日本の将来は、ただ、これからの親の在り方、これからの先生方の在り方にかかっている。今の若い者はどうのこうのと言ったって、そういうのをつくっちゃったのは誰れだというのか、我々親と学校の先生です。課題と責任は重大なんです。一朝一夕のことではありません。とにかく私は言うべきことは相当言って来ました。「小池先生の授業は印象深かった」と、そういうことは時々聞くんです。だけど印象深いだけじゃだめなんです。本当にそうだ！　といって福音の世界に飛びこまなくては。だから私は今度のＹＷＣＡにおける講演のビラに書いたのです。「現代日本の精神状況を見るに、

宗教に対する渇望はたしかにある。宗教界は果してこれに応えているであろうか。我らは宗教活動の一環を承って、ここに『福音の原点に還らん！』という警鐘をうち鳴らさんとする。二十世紀の文明文化は、その根底に今こそ宗教心をもつものでなければ、『世界は何処へ往く』、と問わざるを得ない。」と。で、小池辰雄・奥田昌道・今橋淳の一場の講演が、どれだけの果を結ぶか知りませんが、叫ばざるを得ないまでです。なすべきことは、せざるを得ないというだけの話。

み翼の上に

この「み翼」はすなわち、さっきの「風のつばさ」と「翼の蔭」という二つの表現が表わしているように、このキリストの中に入るということが、翼の蔭にかくれるということ。また、風のつばさにのりてというのは、これは自分自身が聖霊の翼を持って、自由自在に動くこと。この二つの面を、私はこの〝み翼〟ということばにおいて、はっきりとつかまえたいから、出したわけなんです。

申命記の三十二章に、「エホバこれを荒野の地に見、これに獣の吼る曠野に遇ひ環りかこみて之をいたはり眼の珠のごとくにこれを護り給えり、鷲のその巣雛を喚起しその子の上にまひ翔るごとくエホバその羽を展べて彼らを載せその翼をもってこれを負ひ給へり」（一〇―一一節）。神様はその翼にのっけて、イスラエルの民を背負って動いた。曠野の旅をこんなすばらしい表現で言っているわけです。「エホバは只独にてかれを導き給へり別神は之とともならざりき」。神さまは、キリストは、翼の蔭に宿すと共に、今度は、翼に乗っけて下さる。どの道それは、聖霊を内に宿すということと、自分自身が聖霊の翼をいた

だいて、天翔ける。そういう夢を見たことがあるんです。今度の『小池辰雄著作集第二巻』の「七夕の霊夢」に出てきます。で、私の手が翼みたいになっちゃうんです、夢の中で。寝る時に、夢の中ですばらしいことを教えて下さいとか、何かある具体的なことでもいいから祈ってねてごらんなさい。明け方近くなるというと、へえーなんて思うことがある、時々。何しろ聖書のことばが言葉じゃなくなっちゃうんですよ。本当に現実になってくるんです。私の体の中に生きてくるわけだね。

で、そういうことで、いいですか、私たちは「翼」ということばを、そのような自由自在な在り方の表現として身につけることです。飛行機は軌道がない。無軌道。鳥は更に無軌道。そして自在に風の法則に乗っかって動く。この間、ドイツでグライダーを正直私は見たんだけれども、いいもんだね、あれ。ほんとに楽しそうだね、あれ。風に乗っかってね。いくらグライダーができようが、どんな飛行機が出きようが、それは、鳥自身にはかなわないですよ。とんびが飛んでいるところを見ても、つばめが飛んでいるところを見ても。鳥の飛んでいるのを見るのが私は大好きでね、ジーッと。そして、この、冥想するんです。私は、自分が鳥となるんです。鳥となると、魂が正に聖霊の翼を持つような魂になる。だから本当に自在な境地に入ってくる。

で、皆さんは、どうぞ、願いというのは、ただ願っただけでなくて、願いの現実の中に同時に、どしどし入っていかなきゃだめですよ。この詩篇なんか読んでも同じこと。でなかったら、つまらないですよ。その現実の中に入って行かなければ。あるいは、詩篇のことばも言い切れなくて困っているんだから、そ

の奥をどしどし読まなくては。もう概念的規定だの、限定だのなんてしてるうちはだめ。いいですね。聖書そのものは、何と言いますかね、ドラマーティシュ（劇的）で、そして、非常に有機体的な構造です。だから、これは、もう説明できないです。けれども、あるところをぐっとつかむというと、その先きが見えてくる。また、自分でもって創造的に展開していく。だから、一つの聖句を本当に身に体してごらん。その現実に入ってごらん。そうしたならば、何とも言えない楽な現実に入り、創造してやまないところのものが出てくる。

み翼となりて

で、詩篇六十三篇は、本当に全存在が汝、神・キリストと一つになるということを力強く示しています。夜中、眠られないなんて言うことがあっても何も心配はいらんです。ただちに坐っちゃって祈り込みなさい。この詩篇を口吟みつつ。そうしたら、楽にキリストの懐の中に入って眠れますよ。眠れないなんて言うのは、信仰衰弱。眠れても、眠れなくても、どっちでも結構なんだ。どの道キリストの中です。それだけ自在な魂にならなくちゃ、だめですよ。断じて現実にへこたれぬこと。

とにかく、キリストの中に入ったら、そうなりますから。そうして聖翼（みつばさ）の上でも、陰でもなく、自分自身がみ翼を戴いちゃって、動き出すようなことになる。ね。「汝のみ翼をわれに賜え」なんて言う言葉はどこにも書いてない。けれども、そういう現実になっちゃうんです。「霊は活かす」とはこのような聖句のよみ方なのです。

そういう読み方を、キリストは、本当に喜ばれるんです。ありがたやこの大主観！　そういうことで、み翼と一如となって、自由自在に飛翔する。そういう現実をこの「み翼」という一言において、私たちは受け取った！　ハレルヤ！

（一九七六年十月十日のＹＷＣＡにおける講筵による）

「み使よ翼を伸べ
永遠の故里へみちびき往け！」

（讃美歌四七六）

第三卷

（珠玉的詩篇　五篇）

詩篇第七十三篇

(1) アサフの絃歌

1 神は恵み深い哉！
　イスラエル、心の清き者に対って。
2 だが私は、わが脚は跟めくばかり、
　わが歩みは滑って転ぶも同然。
3 そは私は驕る者を妬んだり、
　悪者の平安を見たりするから。
4 そは彼ら痛み苦しむことなく、
　その腹は肥え太っているから。
5 彼らはかなき人の憂苦に処らず、
　人と共に患難に遭わない。

○　この第七十三篇から第八十九篇までが第三巻をなす。この第三巻からは七三、八〇、八四、八五、八七の五篇を選んだ。

(1)　アサフ（アーサーフ）「集める者」の意。レビ人でベレキヤの子（代上六・三九）。神殿聖歌隊が三つあるがその一つの楽長（代上一六・五）。詩篇第五十と第七十三―第八十三篇はアサフの子らの聖歌隊の讃美歌集であったと思われる。ダビデがこの聖歌隊を形成したらしい。これは世襲の聖歌隊となった。（代上一五・一七、一六・五、代下五・一二）

1 「心の清き者」詩二四・四、マタイ五・八、参照。

3 ヨブ二一・七「悪しき人何とて生きながらえ、老いかつ勢力強くなるや」
　詩三七・一「悪をなす者の故をもて心をなやめ、不義を行う者に向いて嫉みを起こす勿れ」。エレ一二・一「エホバよ、わが汝と争う時に汝は義し、ただわれさばきのことにつきて汝と言わん、悪人の途の栄え悖れる者のみな幸なるは何故ぞや」。

5 ヨブ二一・九参照。

6 だから高慢はその頸飾で、
　強暴は彼らを蔽う衣だ。
7 その眼肥えてとび出で、
　心の貪欲は溢れみなぎる。
8 彼ら嘲り、悪意で暴虐を語り、
　慢ってものを言う。
9 彼らその口を天に置き、
　その舌は地をねり歩く。
10 この故にこの民は彼らに従い、
　彼らのため酒水はさわに溢れる。
11 彼らは嘯く、「神がどうして知ろう、
　至高者に悟りがあるか」と。
12 見よ、是らは悪者でありながら、
　時めき驕り富み栄える。
13 まことに私は徒らにわが心を清め、
　辜なくしてわが手を洗った。

7 LXX によれば、「彼らの罪は肥えたる体から出で」。
9 イザヤ一四・一三、「汝さきに心中に思えらく、われ天に昇りて我が座を神の星の上に揚げ」サタン的な高慢。ミルトンが『パラダイスロスト』第一巻三四―四九にこのことをつぶさにうたっている。
11 同じく背神の言に「全能者は何者なれば我らこれに事うべき、我らこれに祈るとも何の益を得んや」（ヨブ二一・一五）。

14 私は終日患難に処り、
　朝ごとに譴責を受けた。
15 若しや私がかく言おうとすれば、
　見よ、汝が子らの代を害うことになる。
16 私はこれを悟ろうと想ったが、
　わが眼に痛みがのぞんだ。
17 終に私は神の聖所に往って
　彼らの終末を究めんとした。
18 然り、あなたは彼らを滑かな処に置き、
　彼らを滅亡に墜し給う。
19 彼らはいたく破れよう、瞬く間に。
　彼らは絶え果てよう、畏懼のために。
20 主よ、目さめる時の夢の如く、
　あなたはその目ざめに彼らの幻像を嘲り給う。
21 わが心痛めつけられ、
　わが腎が刺されたとき、

18「滑かな所」（ハラーコート複）すべり易く転落する危険な場所。詩三五・六、エレ二三・一二参照。
20「彼らの幻像」（ツァレアーム）、幻像（ツェレム）は同節の夢「ハローム」と照応する言葉で、彼らのいつわりの繁栄の虚しさを表わす。詩三九・六も同様。ツェレムは本来形象で、神の似像につくられた（創一・二七）人間像という重要な内的同質性をもつ像の意味もあることをむしろ忘れてはならない。彫像も作家のたましいがこもると同様に。

22 私は愚かで悟りなく、
み前に痴者の如き態であった。
23 だが私はつねにあなたのみ許に止まり、
あなたはわが右の手を保ち給うた。
24 あなたはその諭言をもって私を導き、
後に栄光を以て私を受け容れて下さろう。
25 天上天下誰をか慕おう。
ただあなただけ！
26 わが身わが心は衰えるとも、
神は絶えずわが心の磐石、わが嗣業。
27 見よ、あなたを離れ去る者は亡びゆき、
あなたから脱落する者は皆滅ぼされよう。
28 だが私は、わが善福は神近くに在ますこと。
私はわが主エホバに拠所を置き、
あなたの聖業をすべて宣べ伝えよう。

第七十三篇　ただあなただけ

「高慢」[6]なる者、「貪欲」[7]なる者、「強暴」[6]なる者、そういった連中がわが代の春とのさばる世の中である。彼らは権勢あり、財力あり、巧智あり、弁舌あり、である。この世の財宝も地位も名誉も彼らの支配に属する。彼らは傲然として声を放って言う、「神がどうして知ろう、至高者に悟りがあるか」[11]と。一切の幸福は彼らの擅にするところのようである。[12]「その口を天に置き、その舌は地をねり歩く」[9]とは、彼らの専横をよくも表現したものである。

不当なる現実を見て、神を思うとき、彼らの嘲りの心が心にくきまでにわが魂を蝕み、わが雙脚を蹉跌たらしめる。[2]「心を清め」[13]「手を洗う」[13]ことが「徒ら」[13]ではないか。この「患難」[14]と「譴責」[14]は何の故であるか。否、彼らはその幸福な地位から「滅亡」[18]に転落するに違いない。彼らの栄えは一夜の「夢」[20]と消え去るであろう。これが彼の祈りにおいて与えられた神の報復の未来完了的予見であった。

さりながらわがこの現実を如何せん。「心は痛めつけられ、腎(むらと)は刺され」[21]、人にして人に非ざる我であろうか。惨憺たる我れである。しかしそうであればこそ、私はある者に心身を投げかけた。或る者とは

「あなた！」と全心を込めて呼びかけ得る唯一人の者である。父が親らしい力と愛とを以て、幼児の右の腕をとらえて危険からとりもどすように、「あなた」は「私」を保ち支えて下さった。わが「身心は衰えるとも」、そんなことでわが神の我に対する誠は変らない。

「わが心の磐石、わが嗣業」は「あなた」である。この「あなた」さえわが一切となるならば、世の人は如何に栄えても、この世がどんなに矛盾と不合理とに満ちても、然り、「私」がどうなっても、かまわない！

「天上天下、あなたを措いて私の慕う者はない！」生くる限り、私はこの「あなた」を宣べつたえよう。個人、家庭、社会、国家、国際、世界、あらゆる問題は、この「あなた」を各個人が最大問題となし、この「あなた」に比べるものが本当になくなったとき、この「あなた」の外はすべて「空の空なる哉、すべて空なり」と大観できるようになったとき、はじめて神の有として権勢も地位も財力もこれを世のため人のために用いる魂となる。そのときはじめて本当の解決への道が拓かれる。

神を、「あなた」と呼んで「あなた」の中に投身できるとき、真の「平安」がくる。この詩人はその境地についに来たのであった。私にとってはキリストが「あなた」である。彼はわが気息のつきどころである。「私を見た者は父を見たのだ」（ヨハネ第十四章）と彼がおっしゃって下さらなかったら、私の信仰は宙に空らまわってしまう。イエスを発見するまで、人は死んではならない。キリストを発見した者はいつ死んでもよい。「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」の道こそはキリストであった。

この詩人の一言、即ち詩篇七三・二五の原文とその直訳は次の通りだ。

ミー・リー　バシャーマーイム
ウェイムメカー　ロー・ハーファッティー　バーアーレッツ
誰か私にとって　諸天にあろう。
　そしてあなたの外に　私は愛慕しない　地に於ても。

ルターはこう訳した。

“Wenn ich nur dich habe,
　frage ich nichts nach Himmel und Erde.”
「あなたをさえ有つならば、
　私は何をか天地に求めよう」

そしておそらくこの一句を契機にノヴァーリスはある詩を書いた。その一節を紹介しよう。

“Wenn ich ihn nur habe,
wenn er mein nur ist,
wenn mein Herz bis hin zum Grabe
seine Treue nie vergißt;
weiß ich nichts von Leide,

fühle nichts als Andacht,
Lieb und Freude. — Novalis.

私が彼をさえ有つならば、
彼が私の有でさえあるならば、
わが心おくつきまで
彼の信実を決して忘れないならば、
何らなやみを知らない。
帰依と愛と歓びの他
何も感ずることはない。 —ノヴァーリス

詩篇第八十篇

(1)「証詞（あかし）の百合」調で楽長に托したアサフの紘歌
1 (2)イスラエルの牧者よ、傾聴し給え
　羊群の如くヨセフを導く者よ。
　ケルビムの上に坐する者よ、光を放ち給え。
2 (3)エフライム、ビニヤミン、マナセの面前で
　み力を振り起し、
　来りて我らを救い給え。
3 (4)神よ、我らを還し、
　み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん。
4 (5)エホバ、万軍の神よ、いつまで怒気を帯び給うか
　汝が民の祈りに対して。

5 (6) あなたは彼らに涙のパンを喰わせ、
大枡(おおます)の涙を飲ませ給うた。
6 (7) あなたは我らを隣人の争に引き入れ、
われらの敵は互にけなしている。
7 (8) 万軍の神よ、我らを還し、
み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん。
8 (9) 葡萄樹をエジプトからあなたは移し、
諸国人(もろくにびと)を追いのけてこれを植えました。
9 (10) あなたは樹の前を整え、その根を根づかせ、
これを国内に蔓延(はびこ)らせ給うた。
10 (11) 山々はその蔭に蔽(おお)われ、
神の香柏はその蔓枝(つるえだ)にからまれた。
11 (12) その樹はその枝を海にまで伸べ、
その若枝(わかえ)を河にまで伸ばした。
12 (13) なぜあなたはその籬(まがき)を崩して
道ゆく人みなに摘(つ)み取らせ給うや。

13 (14) 森の猪はこれを嚙み裂き、
野の獣らは喰いあらす。
14 (15) 万軍の神よ、いざ還り給え！
諸天から瞰下してご照覧あれ！
15 (16) この葡萄樹を顧み給え、
汝が右手の植えたこの樹を、
汝がために鍛え育てた子を。
16 (17) これは火で焼かれ、斬り倒されたが、
み顔の怒によって彼らが滅びんことを。
17 (18) み手を汝が右手の人の上に按き、
汝がために強めた人の子の上に按き給え。
18 (19) さらば我らはあなたから離れ去らず。
我らをながらえしめ給え、
み名をこそ我らは呼びまつる。
19 (20) エホバ、万軍の神よ、我らを還し
み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん。

第八十篇　葡萄樹

今日は詩篇第八十篇を学びます。題して「葡萄樹」といたします。

「イスラエルの牧者よ」、と神に呼びかけました。「エホバはわが牧者なり」、と第二十三篇にもあるように、神がイスラエル民族にとって牧者であるとは、彼らの遊牧の生活から体験したおのずからなる信仰的自覚の告白であります。どの民族も民族の歴史があるわけです。日本人も日本の歴史というものをじっくり見直して、どのように我々は歴史的に過去の恩恵を被って現在があるのかをキリストの光で見るとよくわかるのです。そういう角度から最初に日本の精神史を見たのが、私の恩師藤井武先生でした。『聖書より見たる日本』（岩波版）というのがそれです。すばらしい論説です。

「羊群の如くヨセフを導く者よ」、ヨセフというのは、父祖時代のアブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）、ヨセフのヨセフで、これはイスラエル民族の主流の大切な人物で、ある意味で歴史的にキリストの予表とされるような人格でありました。兄どもみんなにないがしろにされてエジプトに売られたのでしたが、エジプトで宰相にまでなりました。兄たちが、父ヤコブの命令で飢饉のとき、エジプトへ救援を求

めて来たときに、今度は逆に助けてやりました。そのとき、「私を此処につかわした者は君たちではない、神様なのだ。神様が私をパロ（エジプト王の尊称、元来は「大いなる家」の意）の父となし、その全家の主となし、エジプト全国の宰相となし給うたのです」（創四五・八）、と言って、兄たちの仕打ちをひとつも責めなかったのです。仇を恩で還したわけです。

そのヨセフが中心である族がエジプトのイスラエル民族ですから、「羊群の如くヨセフを導く者よ」というヨセフはヨセフ族ということです。

「ケルビムの上に坐する者よ！」[1]とは何かというと、天使ケルビム（単数はケルーブ）が契約の櫃の両側から羽をもって櫃を被っているのです。それは御座の象徴ですから、「上に坐する者」という言い方をしている。何もケルビムの上に坐っているわけではないのです。

「光を放ち給え」[1]、神の光を仰いでいるわけです。

「エフライム、ベニヤミン、マナセの面前で」[2]とありますが、この三部族はいずれもヨセフの族を構成しているものです。即ちベニヤミンはヨセフの弟、マナセとエフライムはヨセフの子であります。

この詩の背景として「ユダの王、アザリヤの三十九年にガテの子メナヘム、イスラエルの王となり、サマリアにおいて十年の間世を治めたり。彼エホバの目の前に悪をなし彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に生涯離れざりき。故にアッスリヤの王プルその他に攻め来りければ……」（王下一五・一七―二二）としているような現実においてこの詩篇が生まれたんだろうと、ヴァイザーが言っ

ています。

信仰の天が曇っています。それで神の光を非常に求めている。「神よ、われらを還し給え」[3]。これには二通りの意味があります。これは「ハッシーベーヌー」というヘブライ語ですが、シューブという語源からきている言葉で、「変える」とか「還す」とかで、「われらを還し給え」は自分たちの運命、現在の「状況を変えて下さい」ということと、もう一つは、「心をひるがえさせて下さい」といった意味にもとれるわけです。即ち、環境の変化と心境の転向で、その両義をふくむとも言えましょう。

我らの問題においては、環境の変化よりも、心境の転向の方が大切で、自分や他人に向っている心の向きを、神へ、キリストへめぐらすことで、キリストという天極に向って進む在り方を天極道と私は申します。磁石はいくら揺れても北極を指すように、キリストの聖霊が内住すれば、躓いても転んでもキリストという天極を指す人間となります。それはキリストは霊界の霊極だからです。主を念ずれば、直ちに主の中へと引き入れられる、これが御霊の世界です。いわゆる信仰ではそうはならないのです。

「み顔を輝かし給え」[3]と祈っていますが、神様の聖顔はいつも輝いています。こちらがぼやぼやしていたり、運命の暗雲に鎖されているので、み顔が輝いていないと思うのです。ロングフェローの「雨の日」という詩の中に、

"Behind the cloud is the sun still shining."

「雲のかなたに太陽はなおも輝いている」という一句がありますが、雲に目が暗くされるな、心眼は雲の

彼方の太陽を見よ、太陽に照らされているではないかということ。富士は白雲に隠されてござる、というので「白隠」と言われるように。

「我らを還し給え」という祈りは、心の転向、回心の出来ないダメな私たちです。だから、あなたが「み力を振り起して」[2]私たちの心をひるがえし、救って下さいという切なる祈りであります。神の本願によりすがる祈りで、これは本当です。恰も小さな子供が、転んで起き上がれないで、「お母ちゃん！」と泣き叫んでいるようなもので、母親は飛んで来て抱き起こすでしょう。本願の力は絶対ですから、祈りの中でそれを体受することです。ドイツの詩人ヘルダーが、「全世界がある一人の子を退けても、母はその子に全世界となる」と言いましたが、すべての人に見棄てられても、神様が味方となって下さる！　そこに本当の平安があり、勝利があります。詩篇第二十七・一に、

「エホバはわが光、わが救なり、われ誰をか怖れん。
エホバはわが生命の力なり、わが懼るべきものは誰ぞや」

とあるように、キリストのみ力が来れば、我らの心は、魂は、霊は、キリストに転向、転入、帰入せざるを得ません。第二、第三部の祈りをこのようにキリストの光でよむと力づよい現実となります。

この詩の現実は、キリスト以前の、何といっても旧約の世界ですから、そこは簡単ではありません。いろいろな外敵はいるし、内政も問題だらけであったでしょう。

エホバの神は義に強い神ですから、怒り給う。[4]祈りを簡単には聴き入れない。[4]そのために民は「涙のパ

ン」[5]を喰い「大枡の涙を飲む」[5]とまで言いたい悲嘆に暮れました。「万軍のエホバよ、我らを還し……」[7]この句が、第三、第七、第十九、と三度び繰り返されて、この詩のキー・ノート（基調）となっています。そして第十四節では「万軍の神よ、いざ還り給え！」と叫んで、神様が自らこちらへ還って下さい、という。正に還相廻向的本願をねがっています。いかに神を慕っているか、切々たる切なさが感ぜられます。

聖書のつたえている神は、非常に擬人的な表現でしばしば述べられています。ここにも「聖顔の輝き」という表現が第三、第七、第十九節に三度び出ています。具象的な具体的な表現で神を表わしています。しかしそれが偶像に切りかわらないところに健全な象徴性を以て、豊かな人格性と深い霊性の神を表現しているわけです。（このことについては、著作集第二巻『芸術のたましい』の「実存と詩想」の項を参照して下さい）

「光」という概念は、宗教に共通なものですが、現象面では似たものがあるのは当然ですが、その内実が違うのです。我々にとっては旧約においてはキリストは隠れた光であり、新約においてキリストは顕わな光です。ルターは「エホバ」という言葉「主」という言葉において、つねにキリストを念としていました。パウロに次いで、ルターくらいキリスト中心のはっきりしていた信仰者はいなかったといって好いでしょう。

葡萄樹をエジプトからあなたは移し、

諸国人（もろくにびと）を追いのけてこれを植えました。（第八節）

とは何のことですか。葡萄樹とはイスラエル民族のことです。ヨセフの族を中心としたものです。それで直ちに思いあたるのが、イザヤ書第五章とヨハネ福音書第十五章です。神様は農夫で、「私は葡萄樹、汝らは枝なり」の葡萄の幹がキリストで、信徒は諸々の枝というわけ。しかしキリストは根っこで、幹は預言者や使徒といった方が更に適当かと思います。新約の福音の世界では、民族的イスラエルから、霊的イスラエル、即ち全世界の本当のキリスト者のことになります。

この詩では、神がそのイスラエル民族をカナンの地に導き、先住民族や周辺の諸種族と戦って、これに勝たしめ、定住させたことを、「あなたは樹の前を整え、その根を根づかせ」[9]と表現しています。そして、それが発展してゆくありさまを、「国内に蔓延（はびこ）らせ、山々はその蔭に蔽われ、神の香柏はその蔓枝にからまれた」[9・10]といっているのです。

更に進展して「その樹はその枝を海にまで伸べ、その若枝を河にまで伸ばした」とは、イスラエルがダビデ王国のとき、東はチグリス、ユーフラテス河のあたりまで勢力を伸ばし、西は地中海沿岸にまで進展したダビデ王の全盛時代のことを念頭にして書いたものと想像します。

ところが、この作者の時代には、一変した様相を呈しています。即ち葡萄樹のたくさん植えられている葡萄園の「籬（まがき）」[12]は崩れ、道ゆく人が皆摘みとってゆく。しかも惨憺たるイスラエルは「森の猪」に嚙み裂かれ、「野の獣」らに喰い荒されている、そんなイスラエルという葡萄樹となったので、これを何とか

「顧みて下さい」[14]というのです。

こういう事態と相通ずる状況下において預言者イザヤがイザヤ書第五章で書いています。

「我れ、預言者イザヤは、わが愛する者、神様のために歌をつくり、我が愛する者の葡萄園のことを歌わん」（イザヤ五・一）。

この葡萄園は即ちイスラエルのことです。

「わが愛する者」即ち神様は、土の肥えた山に葡萄園をもっていました。彼は園をよくすきかえし、石ころをのぞいて、良質の葡萄樹を植え、園の中に望楼を建て、酒榨を備えて葡萄の良い実が成るのを待っていました。それにも拘らず、結んだ果は野葡萄でした。即ちイスラエル民族の歴史的実存が悪く、野葡萄にもたとえたい仕末でした。これは根源の水なるエホバを忘れたからでした。「わが民は二つの悪事をなせり、即ち、活ける水の源なる我を棄て、自ら水溜を掘れり、即ち壊れたる水溜にして水を有たざるものなり」（エレミヤ二・一三）。

それで神様は葡萄園の籬をとりさって、狐などの食いあらすにまかせました。石垣も毀（こぼ）たれて、践みあらされるにまかせました。即ち、外敵のためイスラエルは滅亡の悲運にさらされるのです。これは神の審判を意味します。

この詩篇では、葡萄樹が「火で焼かれ、斬り倒される」[16]とあり、それは「み顔の怒」[16]による、とあります。

第十七節に、

「み手を汝が右手の人の上に按き、
汝がために強めた人の子の上に按き給え」

とあるのは何のことでしょう。「右手の人」は次句と共に「右手の人の子」ということになるでしょう。ところで「ベニヤミン」は原語の発音では、「ベンヤーミーン」でこれは正に「右手の子」という意味の族名です。それで「右手の子」はベニヤミン族を意味するわけです。即ち神様がベニヤミン族に按手をしてみ霊の力を与えて下さるように祈ったので、極めて重要な一句であります。要するにベニヤミンを以て代表させたイスラエル民族のみ霊の力による復活を祈っているわけです。それによって、「エホバの神に密着し」[18]、「聖名をこえて呼びまつり」[18]、聖名に在っての民族となろうと霊願しているのです。

「エホバ、万軍の神よ、我らを還し、
み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん」

の終句が、こんどは力強く響いてくるのを覚えます。

「われらを還し」は、要するに相対的運命環境の変転としては、もし、捕囚であったら、エルサレムへの帰還でありましょうし、社会的、国家的不信混乱の状況であったら、あるべき信仰的道義的秩序への復帰でありましょう。しかし最も焦点たるべきことは、各個人がエホバのみ許にみ霊の力で還されることであります。我々の問題としては聖霊のパプテスマによってキリストのみ許に、キリストの中に還されること

です。こちらからは、キリストの中へ帰入、祈入、南無することです。

葡萄樹の譬で申すならば、ヨハネ福音書第十五章第七節、

「汝らもし我に居り、わが言汝らに居らば、何にても望みに随いて求めよ。然らば成らん」の「我に居れ」りという消息と同じで、「居る」は「メネイン」という語で、「宿る、止まる、連なる」です。キリストの言は「霊であり、生命であり」ますから、霊的一如の事態となるのです。パウロの「われキリストの中に」「キリストわが内に」がそれです。これは聖霊の内住によってはじめて本ものとなるのです。単なる「信仰」ではありません。もし信仰というなら、信即現の霊的な即の現実です。

「我に居れ、さらば我汝らに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬ如く、汝らも我に居らずば亦然り」（ヨハネ一五・四）。即の神秘が体得できるためには、聖霊のバプテスマを本当に受けなければダメです。

「父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」（同一五・九）。

キリストの愛に居る、とは愛なるキリストの中に居る、ということで、愛の霊たる聖霊を受けてはじめてこの現実に入れるのです。それが霊的信の一如の現実です。そして、それは「聖名に在る」現実です。我らの生活は、「聖名のゆえに」、「聖名に在って」、「聖名のために」であります。これが本当の「救われている」現実で、「救い」は我々のためではありません。栄光が聖名に帰せられ、聖名が讃美され、その中で自分が「無者」即「無限無量」的にされている状態です。これが「汝の中に還し給え」の、この詩

篇の祈りの極致でありましょう。ハレルヤ！（一九七六年十一月二十八日の講筵に基づいて）

そこでこの詩に因んで讃美歌を作りました。

きみは葡萄樹（讃美歌二七三Bの歌調にて）

一、きみは葡萄樹、　われらその枝、
いのちのきみに　つらなりあれば、
つねにみどりし　枯るるを知らず、
花咲き香り　豊かにみのる。

二、祈りてあれば　み霊の光
わが身にそそぎ　力は来たり、
愛のともしび　心に点り、
我れをつらぬき　みわざは進む。

三、「わが葡萄園（ぶどうぞの）、
　みたまの力　　わが召団（エクレシヤ）！
　十字架を負いて　　いのりに受けよ。
　使徒の昔を　　われに従え！
　　今とし生きよ。」

四、わが主イエスよ、　　われらの幹よ！
　み霊（たま）の愛に　　われらは生きん。
　大和島根に　　若枝（わかえ）を伸ばし、
　葡萄の房（ふさ）を　　頒（わか）ちて与えん。

（一九七七年春作）

詩篇第八十四篇

(1)　楽長に托したギデト琴伴奏のコラの子らの絃歌
1 (2)　いかに愛すべき哉、汝(な)が帷帳(あげばり)は！
　万軍のエホバよ！
2 (3)　わが魂は　絶えいるばかりに
　エホバの大庭を慕い、
　わが心わが身は活ける神に叫ぶ。
3 (4)　げに雀はお宿を見出だし、
　燕子(つばくらめ)はその雛を入れる巣を得た。
　万軍のエホバわが王わが神よ、
　これはあなたの祭壇。
4 (5)　恵福(さいわい)なる哉！　汝(な)が家に住む者は。

かかる人は常にあなたを讃えまつる。
5 (6) その力あなたに在り、
その心シオンの大路(おおじ)にある者は
さいわいなる哉！
6 (7) かれらはバーカーの谷を過ぎるときも、
そこに泉を湧きたたせ、
また前の雨は
恵みをもって之をおおった。
7 (8) 彼らは力より力へ進み
遂におのおのシオンに達(いた)って
神にまみえる。
8 (9) 万軍のエホバよ、
わが祈りを聴きたまえ、
ヤコブの神よ、
耳を傾けたまえ！
9 (10) われらの盾なる神よ、みそなわして

セラ

セラ

汝が受膏者の顔を顧み給え。
10 (11) 汝が大庭に住まう一日は
千日にも優る。
わたしは願う、悪の幕屋に居るよりは
わが神の家の門守となることを。
11 (12) そは神エホバは日である、盾である。
エホバは恩恵と栄光を与えて
全的に歩む者に善福を拒み給わない。
12 (13) 万軍のエホバよ、あなたに信頼する者は、
恵福なる哉！

第八十四篇　力より力へ

この詩篇第八十四は、一―四節、五―八節、九―十二節の三部から成りたっています。それは四節の終

りと八節の終りに附いている「セラ」という音節上のくぎりによっても判るわけです。

この詩は巡礼の歌であります。ここに詠われている神殿というのは、バビロニヤ捕囚から帰って来て、紀元前五百十五年に第二神殿が出来ましたが、その第二神殿のことであります。従って、神殿中心のユダヤ教のもとに作られたものであろうというのが大体の学説ですが、これは第一神殿で、即ち、捕囚以前のことであるという人もあります。それは九節の「汝が受膏者の顔を顧み給え」の、受膏者という語が、王を指すとするならば、捕囚期以後は王がいないわけですから、そこで、どうしても捕囚期以前であるというのです。で、私は、捕囚期以前にこの原型というものがあって、それがなお、捕囚期以後に巡礼の歌としての一形体をはっきりと強くもってきた、といったような成立ではなかろうかと思います。概して詩篇というものは、ある時期に個人が創造ったというだけでなくて、時代を経て、礼拝用にされるために形式が整ったのが多いのではないかと思うのです。

1　いかに愛すべき哉、汝が帷帳は！

万軍のエホバよ！

冒頭に「いかに愛すべき哉！」という、非常に情熱的な呼びかけをしています。しかも相手は詩篇四十六篇と同じく「万軍のエホバ」であります。詩篇第八十四は、全百五十篇の中でも宗教的情熱の著しい詩篇の一つであります。「帷帳」は「住処」（ミシュカーン）という字で、それが幕屋や神殿のことにも使われるのです。即ち、汝の神殿は、いかに慕わしきものであるかなであります。

2　わが魂は　絶えいるばかりに
　　エホバの大庭を慕い、
　わが心わが身は活ける神に叫ぶ。

わが魂といい、わが心といい、わが身といっているところに注目したいと思います。魂と、心と、身と、要するに、全存在をもって、全身、全人的にエホバの大庭を慕う。即ち、神殿を非常に慕っている。大庭といっても、丁度「み門」が天皇を表現するように、「大庭」を以て神殿に臨在する神を表わしているわけです。

兎に角、エルサレムの神殿というものが、中心であって、丁度、イスラム教において、メッカが中心であってメッカに向って巡礼していくように、若しこれが捕囚期以后ならば、所謂、ディアスポラ・ユーデ（散在ユダヤ人）ですね、四方に散らされたユダヤ人が特別な祭の時にエルサレムに巡礼にやって来る、そういったときの「お上りの歌」であります。日本でいえば伊勢詣でといったことでありましょう。彼らにとっては、エルサレムの神殿というものは、その宗教生活の、本当の中心になっていたのです。

全存在をもって、この神殿に向っていく―神殿が彼らにとって、即「活ける神の場」であるというような、そういった気持でありますので、この慕い求める気持は非常に切実なものです。特にこの詩篇の作者においてはそうであります。決して形式的にいっているのではありません。神殿にいくことは、神のもとに行くことであるという非常に素朴な気持なのであります。

3　げに雀はお宿を見出だし、
　　燕子(つばくらめ)はその雛を入れる巣を得た。
　万軍のエホバわが王わが神よ、
　　これはあなたの祭壇。

丁度、浅草の観音様に鳩がいるような具合に雀や燕、或は、このつばめを野鳩というような具合にとる人もありますが、燕や鳩といったようなものが、巣をくって、そして雛を入れる巣をえている、「これはあなたの祭壇」といいまして、巣をえているのは即ち祭壇のほとりにあるのでしょう。ほんとに「若し私が鳥であるならば」そこに住みたいものであるというのです。

4、恵福(さいわい)なる哉！　汝(な)が家に住む者は。
　　かかる人は常にあなたを讃えまつる。

といって、雀や燕を羨やましがっています。「かかる人は常に汝を讃えまつる」即ち生活がいつも讃美であるなあ、と、いうことです。それは、またエルサレムに住んでいるエルサレム住民は、この神殿のほとりにおりますから、丁度、燕と鳩と同じようですね。私たちは遠くにいるが、あのエルサレムの人たちは、羨やましい、神殿のほとりに自分も住まいたいなあーと、こういったわけであります。

5、その力あなたに在り、
　　その心シオンの大路(おおじ)にある者は

さいわいなる哉！

で、その力あなたにあり、その心シオン（原文にはシオンという言葉はないですけど）の大路にある者は恵福である、京都の都大路といいますが、正に、このシオンの大路、シオンはエルサレムの東の方にある丘の名前でありますが、それが同時にエルサレムの名前にもなります。「その力あなたに在り」、その力の根拠を神にもっている者、その心の落着きどころをシオンの大路にゆったりともっている者、これは恵福である。

6、かれらはバーカーの谷を過ぎるときも、

そこに泉を湧きたたせ、

また前の雨は

恵みをもって之をおおうた。

このバーカー、或いは、ベカーといいますが、ベカの樹という樹がある、バルサムのような樹でありまして、樹脂を非常に滴（したた）らせるんだそうで、日本語で「涙の谷」とあるのはヘブライ語では「涙」と同音であるので、音の上で「涙」にかけたとみていいでしょう。この樹の生えているところは、非常に乾いた水のない谷あいであって、そして、水のない潤（うるお）いのない谷あい、バーカーの生えている谷は潤いのない谷、そこに霊的な泉を湧きたたせる、というわけです。ルター訳ドイツ語では「なやみの谷」、英語では「バーカー」と、なっています。また、「前の雨」というのは秋に降る雨であって、（秋といっても日本

の気候とはちがい亜熱帯地方ですからいつも熱いのです）それから新らしい農期が始まるわけであります。真夏の旱の後をうけて、はじめて雨が降りだすと、どんどん伸びていくわけです。で、前の雨は恵の雨として、非常に大事なんですね。この「泉」に因んだ箇所を少し参照するならば、先ず、イザヤ書の三十五章の有名な、曠野に花咲くところです、そこに「そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり」（六節）というように、枯れた沙漠に池が川が泉が、というわけです。同じイザヤ書に「乾ける地を水のみなもとと成さん」（四一・一八）という終末的な消息を歌ったところがあります。同じく四十三章の十九節に「われ荒野に道をもうけ沙漠に河をつくらん」、ここのような苦難の谷が歓喜の園に化する「楽園観念」は終末的な救いの現実を意味するものです。

7、彼らは力より力へ進み
　遂におのおのシオンに達って
　神にまみえる。

という、実に不思議な言でありまして、「力より力に」をルターは「勝利また勝利を」と訳していますので、この句は、いまの六節とともに、この詩の一つの中心であるわけであります。

8、万軍の神エホバよ、
　わが祈りを聴きたまえ、
　ヤコブの神よ、

耳を傾けたまえ！

9、われらの盾なる神よ、みそなわして
　汝が受膏者の顔を顧み給え。

エホバはわが盾である城であるという言い方は、詩篇によく出てくるのでありまして、例えば、詩篇の十八篇にそれが非常に畳みかけて出てきます。大体これは神様が力であることをいろんな具体的な表現をもっているわけです、一番さきに「エホバはわれの力」というているんです。盾というのは昔から色々な民族において、非常に重んじられた大事なもので、特に武士にとっては盾というものは非常に大事なものなんですね。息子が戦死して盾に載せられて帰ることをスパルタのお母さんたちは喜んだ。また、盾を戦場に捨ててそして戻ったら、もう武人としての名誉は失墜であると、ゲルマン人は自覚していたと、かの歴史家タキッスが『ゲルマニヤ』という本の中でゲルマン人の武士道の一面をいっています。ヘブライにおいては神を「わが盾」と呼んでいるのですから、これは盾の最高の表現です。「みそなはして、汝が受膏者の顔を顧み給え」この受膏者、特に王としての受膏者（メシヤ）というように考えても、この場合はよかろうと思います。

10　汝が大庭に住まう一日は
　千日にも優る。
　われは願う、悪の幕屋に居るよりは

わが神の家の門守となることを。

「門守」という言語は、「神の家の閾に居らんことを」とも訳せるらしいです。神殿の閾ですね。或いは、神殿のところに「乞食をして居よう」と、乞食というような言語に訳す人もあります。

11 そは神エホバは日である、盾である。

エホバは恩恵と栄光を与えて

全的に歩む者に善福を拒み給わない。

（神様は、日神といったような意味において「日」といったわけではないのです。自分を本当に温めてくれ、また光を与えてくれるところの太陽の如き恵みの神という意味でしょう）「エホバは恩恵と栄光とを与え」、即ち、盾は護りの恵みであり、そしてまた、日は栄光であると、いうのです。

12 万軍のエホバよ、あなたに信頼する者は、

恵福（さいわい）なる哉！

これで第一段、一節―四節までは、先ほどもいいましたように、神の家、神殿、その中に現実に住んでいることが、いかに慕わしいことであるか、恵福であるか、という角度ですね、それから第二段、五節―八節は、この神の宮に到るまでの旅路ですね、この旅路におけるすがたがあらわされ、第三段、九節以下ではその両者を綜合していっているといった具合になっていると思うんです。

礼拝の意義

モーヴィンケルという、詩篇の研究家で非常に権威ある人の「RELIGION UND KULTUS」（宗教と礼拝」という本がありますが、その序文のところで、モーヴィンケルは「宗教には三つの相がある。即ち、礼拝と、それから神話的な要素と、それから倫理的なものとである。これをまた別な角度からいうならば、『敬神』と『信仰内容』と『生活のいとなみ』という三つの相がある。で、この三つの現象は決してばらばらじゃないんで、これは、互に連関しているものである。ところが、今のプロテスタントの信仰が兎角、教義、教説、認識、といった面に傾むき過ぎている」。

という意味のことを申しています。で、私がしょっちゅういっていますように、所謂（いわゆる）、学問教になって、聖書の内容を客体化して、「どうである」「こうである」ということを認識し、研究する角度が強すぎてしまっているのです。ところが、聖書の宗教の事態は、実は一番根本においては礼拝であると、この学者はいうのです。特に、詩篇における宗教の事態は……。で、その礼拝が、同時に、神を実存的に認識することであり、またそれが、展開しては、生活のいとなみとなって、あらわれていく、と、いったもっと全体が実存的であることを、非常に強調しております。特にプロテスタントの信仰は、その礼拝というものを、言葉の深い意味において、相当失っていやしないか、ということを批判しているわけですね……。この詩篇は、そういった礼拝というものが背景になり土台になっているのであって、それを忘れては詩篇は読めないということであります。で、これはまあ、私が時々そういった意味で私たちの聖書の勉強は、決して単なる勉強じゃなくて、集会それ自身が礼拝であるといった角度から申し上げている気持

と、非常に相通うので、こういった一流の学者が大いにそのことをいってくれて、私も嬉しく読んだのであります。ですから、ただ旧約における礼拝というものの内容、内実が、新約の光をもって、もう一ぺん読み直すときに、私たちがこの詩篇を読んで、どうしてもピンと来ない面が、新らしい礼拝として受けとれるものと思うのです。

新約的礼拝

それは、然らば、どういうことであるかという意味において、いま私たちはこの八十四篇にたちむかいたいと思うのであります。この作者が、神殿をかくも慕い求めるという気持がなかなか摑みにくいわけであります。けれども私たちにとっては、この神殿とは別な神殿がある、それは実にヘブル書で最もあざやかに、旧約的礼拝から新約的礼拝への展開が示されています。この旧約における神殿宗教、祭祇宗教、これを最も霊的具体的に身に享けたのが、イエス・キリストなのであります。

神殿宗教、祭祇宗教、この旧約の礼拝を新らしく、イエスが神殿となり、イエスが大祭司となり、イエスが羔となり、イエスがその真の礼拝を与えたのであります。これを最も明かに証言しているのがヘブル書です。ヘブル書を読むと旧約の完成の相がそこに表われています。ヘブル書九章の十一節を見ますと、「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ、この世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て」とありますが、神殿の中心には幕屋があるのです。即ち、神殿宗教になる前に、曠野の宗教においては、幕屋があったのです。その幕屋が神殿の中心に置かれて、そして幕屋の中に聖所と至聖

所があるわけです。

「手にて造らぬ、この世に属せぬ、更に大いなる全き幕屋を経て、山羊と犢との血を用ひず、己が血を以て只一たび至聖所に入りて」、即ち、神殿の一番奥の至聖所に入って「永遠の贖罪を終りたまへり……活ける神に事へしめざらんや……」（ヘブル書九章一一―一四）と。これは非常に大事なところです。で、さらに、ヘブル書八章の一節を見ますと「今いう所の要点は斯くのごとき大祭司の我らにある事なり、彼は天にて稜威の御座の右に坐し、聖所および真の幕屋に事へたまふ」。即ち天界に、神の御座があって、そこに本当の見えないところの霊的神殿がある。霊的神殿に御座があって、それは真の幕屋である。私たちにとっては、いま天界に在り給うところのキリスト、これが即ち、見えざるところの神殿であります。この見えざる神殿に向って、私たちは人生の旅を続けて、その歴史の終りに、神の国がきたら、その神の都においてその神殿に往くわけです。

ところが、皆さん見て下さい、この黙示録の二十一章の二十二節を見ますと、

「われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔はその宮なり」。

いいですか、この天のエルサレム、天のシオン、そこには神殿がある。ところがその神殿は神、羔が神殿であり、宮殿であるのです。

そういった素晴らしい展開、そのことは、既にイザヤ書六十章の十九―二十節に

「昼は日ふたたびなんぢの光とならず月もまた輝きてなんぢを照さず、エホバ永遠になんぢの光となり、

なんぢの神はなんぢの榮となりたまはん、なんぢの日はふたたび落ず、なんぢの月はかくるることなかるべし、そはエホバ永遠になんぢの光となり汝のかなしみの日終るべければなり」

そういったわけでありまして、私たちにとっては活ける神が即ち神殿であります。

キリストが、即ち、幕屋である。そこで、如何に霊的な具体的なものであるかということがわかり、「ゲリジムの山でもなければ、エルサレムの山でもなく、いたるところにおいて神を拝する時がくるだろう、いや実にもう来ているのだ」と、ヨハネ伝の四章でサマリヤの女に語られたキリストが幕屋であるのです。それがイエスの宗教です。旧約の宗教が動的な幕屋から神殿という一つの場所と形態を強く表わすことになりました。けれどもこれは竟に、天界の影でありまして、要するに形態を以ってする徴であるのです。その角度から、私たちはこの詩篇の礼拝、神殿礼拝を中心とした詩篇の歌というものに、真の光を当てなければ、本当の内容を摑まえるわけにはいかない。即ち、これはみな、形であり、影であって、本当の内容はこれぞ、天界に新らしく私たちの神殿がある、幕屋があるのです。キリストは、この神殿を壊して三日にして建てるといわれたでしょう。「これはイエス己が体の宮をさして言い給へるなり」（ヨハネ伝二・二一）。そのようにキリストは、自分が本当の神殿であることを自覚しておられたのです。ですから、この詩篇の作者が「わが心、わが魂、わが身はエホバの大庭を慕い、活ける神に叫ぶ」と詠うとき、私たちは本当にその意味において、魂をもって、心をもって、身をもってイエス・キリストという幕屋を、活ける神殿を慕い、そこに住みたいなあ、ということになってくるわけです。パウロも「わが願ひは身を

離れて、このキリストと偕に居らんことなり」といいました。

そしてこのように、天界に、キリストという神殿を本当に慕うことが出来るのは、実は、私たちの裡に、私たち一人一人の胸の裡に、キリストという至聖所が、既に、きているからなのです。ですから、この天界のキリストという神殿、幕屋を本当に、慕いまつることが出来るのです。その意味において、クリスチャンがキリストという神殿を裡に宿すとは、実に、キリストという神殿において、いま、自分が在るということです。雀や燕子を慕って止まないこの詩篇の作者の気持は、うつして直ちに、実に私たちがその雀であり、又その燕であるのです。即ち、キリストという神殿の中に宿り、神殿を宿して、「我キリストの裡に、キリストわが裡に」とパウロがいっている消息であります。

いいですか、これは面白いですね。私たちは既に、この神殿の人なんです。幕屋の人なんです。活けるキリストの幕屋を既に持っています。丁度、イスラエルの民が幕屋を担いで曠野を歩いて行ったように、契約の律法、神の櫃を担いで、エホバの重大な律法を担いで歩いたようにですね、私たちはキリストを背負って、所謂クリストフォロスの如く、キリストを背負う者、キリストという神殿、幕屋をいつも持って歩く者なのです。キリストを著るという言葉もありますが、むしろ、このキリストの幕屋の中に住むといったようなわけで、神殿の中にあるエルサレム人を羨むことはない、私たち自身が即ち、天のエルサレム人で既にあるのです。ね、いいですか、それであるから、今度は五節から八節にある通りに、「その力なんぢに在り」ということが言えるのです。

「その力なんぢに在り、その心シオンの大路にある者はさいわいなる哉！」「恵福なる哉、その力なんぢに在る者」で、私たちの中に御霊のキリストが来ていらっしゃいますから、ですから、その力はなんぢに在るのです。キリストにおいて力はある、力は内に来ている力です。心は既に神の都の大路にあるんです。でありますから恵福である。彼らは涙の谷を過ぐれども、こんな枯れたような谷を、バーカーの谷を過ぎて行くけれども、人生というこの潤いのなき谷を、荒野を、また涙の谷を過ぎて行くけれども、其処を多くの泉あるところとなす。即ち、源泉なるところのキリストを有っていますから、其処を多くの泉あるところとなす。で、前の雨はもろもろの恵みもて之をおほうと。私たちの上に、本当にキリストの実りが成っていくところの恩恵はやってくるのだと、こういうことになるのです。

人生にはいろいろ、がさがさした、干からびた事もあるし、また涙が絶えません。正直のところ、私たちは普段、目の外っ側に涙を流してはいませんけれど、少し深く想うときには悲哀の涙があるのです。皆さんはみんな涙があるのです。私も涙があるのです。クリスチャンが一番、深刻な涙をもっているはずです。「哀しみの人」（イザヤ書五三章）というならば、クリスチャンは最も哀しみの人であるはずです。第一、自分のいろんな境涯のこともありましょうけれども、またこの世の中の矛盾、不義、さまざまの悲惨な出来事を見るときにですね、その根本を尋ねるならば、人間というものが如何に破れた、失われたものであるかをつくづく思うわけです。ウェルト・シュメルツ（WELT SCHMERZ）「世界苦」という言葉

がありますが、その世界苦というものを、実はクリスチャンが一番深く感じているわけであります。それはパウロがロマ書の八章のところで、よろずのものの呻きをいっている通りに、神の子たちの現われん時を待っている。すべての者が呻いている。自分たちもそうであるといっている。で、人間界の罪ということに思い当るときに、私たちが流す最も深刻な涙は、結局それは罪という淵におちる涙です。で、人類共通の、この罪にぶつかる、そういったもの、涙、これは最後の日まで続きます。死ぬときまで続く。けれども、そうかといって、それじゃ、もの哀しげなものがクリスチャンかというと、決して然らず。またクリスチャンほど、涙と反対に喜びをもっている人もない。パウロがあれほどの艱難と、迫害と、さまざまな何度も死にそうになるような事態を突破しながら、牢屋に繋がれながら、なお、喜びの音信を唱えて止まないのは、これは、その反対に、キリストの救いによるところの生命が彼の中にきているからです。キリストの生命が来ているから、ですからパウロはあのように歓喜の人でありました。で、最も深い涙、哀しみの人が、実は、それと全然反対に、喜びと、生命の溢れている人である。それが、決して、所謂、矛盾ではありません。私たちの存在は、だから、深刻な涙を突破していくことが出来るんです。これは本当の歓喜が来ているからです。で、どう考えても、所謂、思われた世界ではどうにもならない。所謂、理解された世界じゃどうにもならない。これが、身についていなけりゃダメなんです、で、この身についているということが非常に大事なんで、「わが魂、わが心、わが身は活ける神に叫ぶ」と。それは私たちの中に既に与えられているから、真に叫べるのであります。

力の源泉

そういうわけで、「彼らは力より力へ進み、遂におのおのシオンに達りて神にまみゆ」と、本当に天来の力から力に進んでいる、力より力に進むというのは、自分の中に何かだんだん力が出来てきて、力から力へ進むというんじゃないんです。キリストの、神様の力が来るから、そこで、いよいよ力より力へ、というのです。ルター訳では「勝利より勝利へ」とあります。この力ということにおいてですね、さっきのモーヴィンケルの本にも、宗教現象の一ばん根源的なものは、クラフトである、力である、ということをいっているのです。で、著しいところだけにいたしておきますが、イザヤ書の九章六節、

「ひとりの嬰児われらのために生れたり、我らはひとりの子をあたへられたり、政はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神」（この大能という字は力という字です）。

この大能の神ですね、あるいはこれを「神的勇者」というような具合に訳す人もありますが、で、力の神です、これはキリストの予言の箇所の一つです。それからイザヤ書四十章の終りのところ、

「疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには強きをまし加へたまふ。年若きものもつかれてうみ壮んなるものも衰へおとろふ、然はあれどエホバを俟望むものは新なる力を得ん、また鷲のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めども倦まざるべし」（二十九節）といっています。

エレミヤ記の十六章の十九節

「エホバ我の力、我の城、難の時の逃場よ」と、エホバわれの力、我の城とエレミヤもいっています。

ミカ書の三章に

「然れども我はエホバの御霊によりて能力身に満ち公義および勇気衷に満れば」（八節）、これは大切な聖言です。

今度はマタイ伝に来まして、キリストの言葉です、

「イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤まっている』（二二・二九）といって、復活のことを言っておられるのです。

それから、まあ、われわれにとって大事なところは、使徒行伝の一章八節、

「イエス言ひたまふ『時また期は父おのれの権威のうちに置き給へば、汝らの知るべきにあらず、然れど聖霊、なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ及び地の極にまで我が証人とならん」

聖霊を受けるときに汝らは能力を受けるぞと。同じく、四章の三十三節のペテロの言葉でしたね、

「斯て、使徒たちは大なる能力をもて主イエスの復活の証をなし、みな大なる恩恵を蒙りたり、……」

六章八節に、これはステパノのところです、

「さてステパノは恩恵と能力とに満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行へり。云々と」

八章十三節、これはピリポがシモンよりも素晴らしいことをやったので、

「シモンも亦みづから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行ふ徴と、大なる能力と

を見て驚いた」と。

あともう少しにしておきますが、今度はロマ書に来まして、ロマ書の一章、十六節に

「我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始め、ギリシャ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力であるからだ。神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましめるのである」。

二十節にも

「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により、世の創より悟りえて……」

コリント前書四章の二十節、

「神の国は言にあらず、能力にあるからである」

コリント後書四章の七節

「我等この宝を、キリストの福音という宝を、あるひはキリストという宝を、土の器に有てり、これ優れて大いなる能力の我らより出でずして、神より出づることの顕れんためである、……為方つくれども希望を失はず……」というわけであります、まだ、エペソ書一章一九節、三章十六節にも著しい言語がありますが、まあ、切りがないからこれくらいにしておきます。

で、それでですね

「かれら、力より力に進み遂におのおのシオンに達りて神にまみゆ」

で、私たちにおいて、神の力とは何か、これは、イエス・キリストが神から体受した生命であります。

断じて魔力的な力じゃないです、キリストの生命ですよ。

無力とは何か

私たちがいかに無力であるかということは、どこから来たか、それは、私たちが罪人であるということから来ているのです。で、この力ということを、私たちは罪の問題と切り離して考えてはいけないのです。そうでなければ所謂、新興宗教的なことになるのです。で、聖書におきましては、この力は、聖なる神様の、聖なる愛の力であります。力の種類が違うのです、で、力というとき、私たちは唯、この単なる力を考えてはいけない、私たちの無力にも色んな意味がありましょうが、一番無力の中心は何かというと、道徳的に無力である。神様の前に、私たちが義であり得ないということは、私たちの無力の一ばんのポイントなのです。私たちが本当に力がないということは、神様の前に、この義であり得ない、神のみ意を真に受けとって、神意を全身をもって体受できないということです。神の意志を百%に受けることが出来ないという、これが、私たちの無力の無力たる所以であります。

併しです、この無力、ダメにむしろ徹底したらいいのです、併しそれも自分で出来ないのです。

ですから私たちは、もう仕方がない、キリストのもとに行けばよい、それがなかなかキリストのもとに行かないんです。自分を肯定するのです。殊に近代の人間というものは。私たちの道徳的無力というものを、本当に私たちにあらわしてくれているものは、イエス・キリストの十字架です。十字架において、私たちが如何に無力であるかということをあらわし、且つまた、真に私たちを無力にして下さっているので

す。十字架において、私たちは、本当に、神様に対して、義であり得ない姿があらわれている。即ち、神の意志を受けとり得ない姿が。それどころじゃない私たちは、神に反逆しているところの、その拒きの相があらわれている。ですから、この十字架において、自分は本当にダメなものであるということを、徹底的に私たちが受けるときに、逆に本当に力がくる。これは、キリストの生命なのです。単なる力じゃない。即ち、キリストの生命とは、また単なる生命でもない。これは、聖なる生命、神の御意を真に建てることのできる活き方、このような活き方の内容が、生命です。神のみ意を真に建て、神に従って歩くことの出来るその力、その生命。

まことの生命

このようなイエス・キリストが私たちの中に来たことは、み霊のキリストの来臨です。先程使徒行伝に読んだような、御霊における力、旧約のミカ書の三章八節の如く、み霊によりて来たる力がこのようにしてのぞむのです。即ち、イエス・キリストという、活けるみ霊のキリストが私の中に、この十字架の贖罪を通して、やって来ましたから、是れ、生命です。潔らかなる、ほんとうに熱き生命です。これが、私たちの中に来ましたから、これは恩恵です。ですから、どんなに、涙の谷であってもいいです。どんなに乾いているガサガサの谷でもいいです、そこに、イエス・キリストの生命が来れば、これは岩から水が湧き出で、即ち、沙漠から水が湧き出で、河が流れる。沙漠は、サフランの花咲くところの野辺となる。創造の力、生命の力が、私たちの中にキリストに在って来ました。ですから、「バーカーの谷を過ぐれども、

そこに泉を湧きたたせ」ることが出来る、イエス・キリストが、私たちの泉の根源ですから。これを泉あるところとなすことが出来る。なんとなれば、わが裡にこの泉がある、これはヨハネ伝の四章に、サマリヤの女にいわれたように、「汝らのうちにこの泉が湧き出でて流れるぞ、溢れ出るぞ」というんです、即ち、泉が湧き出で、溢れるというこのヨハネ伝四章のことばは正に、これを註解するのに最もよき聖言であります。

で、このヨハネ伝四章の十三節から、

「『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。然れど我があたふる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与ふる水は（即ち聖霊は）、彼の中に泉となり、永遠の水湧きいずべし』泉となって、永遠の生命の水湧きでる！

この泉たるこの生命たる力をもたないから、モーヴィンケルは、今のプロテスタントはダメだというのです。で、私たちは、そこを主眼として戦って来ているわけじゃないですか。で、皆さんは、その意味において、既に泉を、活泉をもっているものである。私たちの中にキリストの生命という力があるから、力より力に進みて、キリストの勝利より勝利に進んで遂におのおのシオンに達りて神にまみゆ。本当に、然り、アーメン。

私たちの生命（せいめい）の根源は、創造者、贖罪主（あがないぬし）キリストから来るんです。ですから、この生命（いのち）を皆さんが戴いていけば、このいろいろな、相対的の恩恵（めぐみ）は全部生かされます。病者が手術を本当に生かすもの、薬を本

当に生かすもの、お医者さんの言葉を本当に生かすもの、それはキリストを受けた病者の中にあるのです。ですから、甲の人と乙の人が同じものを受けてもですよ、キリストを有っている人はその受け方が違うです。祝福されちゃうんです。その意味において、キリストの生命をもつ人は、一切の現象に対して支配的です。また祝福していくことが出来るんです。

力とは何か

その意味において、どうか、力より力に進みとは、本願の天来の力をいよいよ受けとって進むことと心得て下さい。

天界のシオン、先程、黙示録に記されてある、その天界のシオンに私たちが進み、又進んで行きます。おのおの一人一人が進んでいきます。互に道づれとなって。ですから、迫害のためたとえ一人になっても、……進みゆくのです。

信仰生活はパウロもよく譬えたように、マラソン競走です。

キリストの生命力のある者は、人生のラストヘビーがきくのです。ゴールに近づくにつれて、底力が出てくるのです。私なんかも、若しそうでなかったら、こんな貧弱な人間は、とっくの昔に駄目になっているわけです。けれども、感謝すべきかなです、みたまのキリストの生命！

ですから、ほんとにこの詩篇の作者と偕(とも)に、

「われらの盾なる神よ、みそなわして汝の受膏者の顔を顧み給え」

詩篇の作者は、受膏者、王様のことを思って、顧みてあげて下さいと祈っているうるわしい祈りです。私たちにとっては、受膏者はキリストである。キリストであると同時に、受膏者は私たち一人一人である。即ち、私たち一人一人がキリストの聖霊なる油を注がれたるものであるからです。

ですから、皆さんは、この生命を得て輝やかしくなっている、それはこのキリストの聖霊の生命がきているから、この力がきているからです。

罪と死と冥府とサタンに勝ったキリストの力、いいですか、そこらの宗教の力とちがうのですよ。現象面では、同じようなことがたとえあっても、絶対にまどわされてはいかんです。又、観念にも非ず、ご利益にもあらず、というのも、そのことです。そのような素晴らしいキリストの生命の力、聖なる力、光を、愛を、生命を、戴いているとは何たる有難い、素晴らしいことでしょう。で、汝の大庭に住まふ一日は千日にも優れり。我は願えり、悪の幕屋に居らんよりは、わが神の家の門守とならんことを。「一日は千日にも優れり」全くその通り、ペテロがペテロ後書の三章八節以下にいっているでしょう。「愛する者よ、なんぢら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとし、千年は一日のごとし、主その約束を果すに遅きは、或人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給ふなり。されど主の日は盗人のごとくやってくるから、その時は天地がひっくりかえっちゃうぞ。……

けれども、我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。」

キリストの祈り、〝汝の意志を成させ給え〟というのは義ですよ、皆さん、間違いちゃ困るです、汝の意志を成させ給えというこの在り方を義というんです。それを本当にあらしめていたのがキリストなんです。そのキリストにおいて、私たちは本当の義（正義じゃないのです）をいただきます。

で、そのキリストと偕に在る一日は即ち千日にも優る、で、キリストという、活ける神殿、活ける幕屋をもつ者は、その一日即ち、千日にも優る。一日は千年の如し、と、私たちは、即ち、この一日において永遠を生きている、キリストが即ち永遠であります。皆さん、どうかもうケチくさい考えをやめて、ですね、この、病院における一日も即ち千年の如し。もう主にある驚くべき自覚をもっていいんです。イエス・キリストが本当に私たちに生きて下さる限り。人生なんでもやって来いと私たちの中には、絶対にそれに勝つところのキリストの生命があるんだから。キリストの光があるぞ、天国はここにあるぞと、いうわけであります。

イエス・キリスト！　これは何物をもっても換えることが出来ないです！　このキリストを皆さんの中に有っている。若しそうでなければ、これを本当に戴かないで、皆さん、何を求め、何をながめているかということになるのです。

で、そうしたらば、この詩篇八十四篇のごとく、真にキリストの力よりキリストの力へと進んでいきます。そうして、これは本当に勝利の前進また前進、勝利の巡礼である。終末の国、神の国を目ざしての私たちの巡礼である。なんとなれば、神の国は既に汝らの中に在るから、来るべき国は大丈夫お前たちのも

のであるぞというんです。そのような具合であって、本当にエホバはわが日である、キリストはわが日である、わが盾であると。そして、真にエホバに信頼し、かくエホバを一切として歩くところのものは、恵福なるかな、神の栄光があらわれるからであります。キリストの栄光がこの身を通してあらわれて下さる！　ハレルヤ！

（一九五六年〔昭和三十一年〕十一月二十五日、清瀬の国立東京療養所東講堂に於ける講筵の筆記に基づいて）

「神はわが力わが高き櫓
苦しめるときの近き助けなり」

（讃美歌二八六）

詩篇第八十五篇

(1) 楽長に指揮をとらせたコラの子らの紋歌
1 (2) エホバよ、あなたは汝が国土を恵み、
ヤコブの命数をひるがえし給うた。
2 (3) あなたは汝が民の不義をとりのぞき、
そのすべての罪を蔽い給うた。 セラ
3 (4) あなたは汝がすべての怒りをまとめ、
その烈しき憤りをそらせ給うた。
4 (5) 我らの救の神よ！ 我らを立ち帰らしめ給え！
我らに対するみ怒りをやめ給え！
5 (6) あなたは永遠に我らを怒り、
み怒を世々におよぼし給うや。

(1) コラ（コーラハ）、レビ族のコハテの子、イズハルの子コラである（出六・一六―二一）。これはモーセとアロンの継兄弟に当る。コラ人というのはこの一門である。民第十六、十七章にコラ祭司職についてのごたごたが載っている。コラの子らはともかく神殿の楽士となった。

1 「ヤコブの命数」（シェビートヤアコーブ）。バビロニヤ「捕囚」の運命からの解放をしたのは、かくれた神の力であったから、エホバに呼びかけている。「命数」「運命」「捕囚」などは同語。

「ひるがえし給うた」（シャブター）。直訳「汝は……をひるがえした」。この「ひるがえす」「帰えす」「帰る」「転向する」という言葉が「シェーブ」で、聖書の中で極めて沢山用いられている言葉の一つ。これが「運命」「命数」と同根。

この詩はそれで、バビロニア捕囚（紀前五八七―五三七年）の時期が終った直後第二神殿建立以前の歌と思われる。予言者ハガイ・ゼカリヤ時代（紀前五三〇―二〇年頃）。

6 (7) あなたは帰り来りて我らを生かし給わざるや。
　然るときみ民はあなたに在って歓ぼう。
7 (8) エホバよ、汝が恵みを我らに示し、
　汝が救を我らに与え給え。
8 (9) 私は聴かう、この神エホバ何を語り給うかを。
　げに彼は平安を語り給う。
　その民に、その恵信者に。
　彼らが愚行に転ぜぬように。
9 (10) まことに近い哉、彼の救はその畏敬者に、
　栄光は我らの国土に。
10 (11) 恵と信実は共に会い、
　義と平安は互に接吻した。
11 (12) 信実は地から萌え出で、
　義は天から瞰下した。
12 (13) またエホバは嘉きものを与え、
　われらの国土はその産物を出す。

13(14) 義は彼のみ前を往き、
道にその足跡を印する。

第八十五篇　恵信一如

解説一

第一節　この詩篇第八十五篇はこの第一節を見てもわかるように、バビロニア捕囚から帰って来た（紀前五三七年）直後の詩篇でありましょう。それ故、ハガイ、ゼカリヤ両預言書の始めの部分や、エズラ書九章、ネヘミヤ記の始めの部分などの歴史的背景をもったものでしょう。

作者はまずエホバの神に向って、神の力ある恵みのわざをうたっている。「ヤコブの命数をひるがえした」とはイスラエルの捕囚を解放したことであります。出バビロニア、捕囚から自由の身にされてなつかしいエルサレムに帰って来た！　それは夢かと思われるありがたい救の現実（詩一二六・一）！　歓呼のひびきをもった第一節であります。

第二、第三節　神は神に対するみ民の不義をゆるすのみでなく、取り去って下さった。また人に対する一

切の罪を掩ってあたかも罪がなかったようにあしらい給うた。サタンやパリサイ根性は、既往の罪過をあばく。神様はそんなものを見ようともしない。このような罪のゆるし。忘却、取り去りを旧約のエホバの神がなさった。それはまたみ怒をやめ、憤りから御自分を遠ざけなさった、という大慈大悲であった。

そのような恵み深きあわれみに、罪びとは回心して別人の如くなって立ちあがる！　ロマ書第二章第四節に「神の仁慈は汝を悔改に導く」とある通りです。

第四、第五節　恩恵に感謝しつつ、作者は更に内的な自分たちの回心が本ものとなるために、「私たちを立ち帰らしめ給え！　み怒りをやめ給え」と切実な祈りを捧げています。

第六、第七節　さきには「われらを立ち帰らしめよ」と祈り、この度は「あなたが帰り来たり給え」と祈っています。このように神に神自ら向きを換えて来たり給えと祈る、この祈りこそ本願に即した祈りで、必ず何らかの形で神は聴き遂げて下さる。これはしりもちをついて泣く子が「お母ちゃん、来て！」と叫ぶのと同じであります。このような単純な全托の叫びこそキリストの嘉し給う祈りであります。

第八、第九節　ここに「恵信者」と訳した原語は「ハシード」、複数は「ハシディーム」で普通「聖徒」と訳されています。しかし、「聖」という意味があるのではなく、神の恵にあづかった者ということで、主体的には本願に救いあげられた者であり、客体的には信受した者ですから、恵信一如の消息をもった語として「恵信者」という私訳をつくりました。この場合主体的とは神を主体とした意味。客体的とは神の客体としての人間の側を意味します。神様が我々との関係を安らかにして下さるのは平和ではなく「平

安」であります。そしてそれは関係ばかりではなく、神の力という内実がそこに与えられるのです。「彼らが愚行に転ずることなからんために」は「だから彼らが愚行に帰ることはあるまじ」と訳して可いのです。但しユダヤ教で「ハシディーム」というのは、紀前二世紀頃に結束した一団のユダヤ教徒があって、主体的な「恵まれた人々」から客体的な「敬虔な人々」という意味に変って用いられていたのです。彼らはアンティオコス四世エピファネスのヘレニズム化せんとする政策とこの運動に同調するユダヤ人に反対して律法厳守の信仰生活を堅持せんとした連中のことであります。彼らは世俗生活に反対し、終末的希望をもっていました。このハシディームの流れからパリサイ派とエッセネ派が起ったものと思われます。またクムラン教団もハシディームと関わりあるものと思われます。

九節の「畏敬者」は「恵信者」と同語系で、ただ前者は、客体的な、後者は主体的な表現であります。この節は冒頭からたましいの奥にひびくような調子です。

さて、一〇節から一三節までは、特色ある箇所ですが、ある学者は旧約聖書の最も福音的な言葉の一つだと言ってるですが、正に然りと申したいです。

第十節　恵は「ヘッセッド」、信実は「エメッツ」。

ヘッセッドは「恵」または「愛」と訳して可い。さきほどの「恵信者」はこの「恵」という語から派生した言葉です。「エメツ」は「真理」でもあり、「真実」でもありますが、裏切らない意味と、信ずるという意味が充分あるので、むしろ「信実」と書きたいわけです。それで「信」または「真」ということに

なります。「恵と真理」という現行訳が旧約新約を貫いてよく出てくる大切な熟語です。私はこの「恵と信実」を一語にして恵信と申し、恵と信が出会って相照応する境地がここに語られているので恵信一如という言葉となし、題名としました。

「エメッ」はアーメーンという字から来た名詞で、「アーメーン」は「確実である」「不動である」「持続的である」「信実である」という語です。「アブラハム・エホバを信ず、エホバ是を彼の義となし給えり」（創世紀一五・六）と言うのは「アブラハムは神様をアーメンとしました、すると神様はそのことを彼に対して義としました」ということです。信ずるというのは「を信実とする」とか「に信頼する」ということで、神を百パーセントに信じた、そのことが神から義とされることになりました。即ち「義」ツェデク、またはツェデカーとは、おのれを否とし、神を然りとすること、これが信であり、義であるわけです。

ですからこの恵信一如は別な表現だと愛義一如といっても可いわけです。

新約のエペソ書二・八には正にこれに照応する如く「汝らは恵により信仰によりて救われたり」とあります。即ち神キリストの恩恵が本願で、信仰がこの本願を受ける態度です。

その次に「義」と「平安」が接吻をしたという珍らしい表現が出て来ました。「義」（ツェデク）と「平安」（シャーローム）が接吻（ナーシャク）した。とはどういうことですか。

義とは、今見たように神と人間との縦の関係が恵と信実において成り立っている事態。ですから不動の、しかも上から恵（愛）の力が信じている人間に臨んでいるわけで、それがとりもなおさず「平安」で

あるのです。即ち義即平安でありますから、「義安一体」とでも申したい相です。「平和」は人間相互の和でありますが、「平安」は神人の関係が安泰であることで、平安がないところに平和はあり得ません。「神の義はその福音のうちに現われ、信仰より出でて信仰に進ましむ」録して『義人は信仰によりて生くべし』（ロマ一・一七）というパウロの有名な言葉はこの詩篇のこれらの不思議な言葉に照らして、よくうなづけるではありませんか。即ち恵（愛）信、義安が円環乃至内接円的連関の中にあるわけです。

第十一節　今度は恵の代りに義が天界から見おろしている。即ち恵（愛）と義、これが天から本願的に臨んでくる。これに対して「信実」が地から萌え出る。こういう抽象的な言葉が非常に具体的に、擬人的に表現されてあるのですね。これを見ましてもイスラエルの人たちが抽象的な概念を、必ずある具体性をもってとらえていた。抽象的な言葉でも、尚具体性を持っていたといったような事態を、聖書のいろんな言葉に於て忘れないようにしないといかんわけです。しかもそれが偶像的にはならないところに、聖書の真理が、人格的で、しかも霊的な内容をもっていることを知らねばなりません。

第十二節　人間のたましいの在り方が祝福されるような事態になると、自然界にも神はこれと照応するような慈雨や陽光を以て祝福し、地の生産を豊かにして下さる、というのである。これはカントが理想の国では徳と幸とが相即するといっているのと相応ずる天国的事態です。

第十三節　即ち主の歩み給う道が義、主の聖旨が義である。その天道にこれ従うところに人間の地路がある。そしてこの地路は各人各様であるのです。それを実存的な生活と言います。即ち天道に即していると

ころに、天的必然と地的自由が一如の相をなすのです。義が歩むところに道があり、そこに不滅の足跡が印せられるのです。

ところで「恵と信実」と言えば、皆さん、すぐ思い出されるのはヨハネ伝の言葉でしょう。ヨハネ伝の初めの方に出てる、「律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり」（一・一七）ギリシャ語で言うと、「カリスとアレーテイヤ」という字です。「恩恵と真理とはイエス・キリストによって来た」と。その前にも、「言は肉体となりて我らの中に宿りたまへり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とに満てり。」（一四）と。この恩恵と真理というものはキリストの別名の如くに書いてある。キリスト御自身が正に恵信一如の実体でありました。

詩人は観念で言ってるんじゃないです。実際自分たちは信仰を失ったのです。そしてすっかり神様に審かれて、惨憺たる捕囚の現実を通って来た。しかしその中に次第に悔改める少数者が出てきた。神様はそれを見て、この約束を変え給わない。そしてこれを憐んで、神の恵み、憐み、不義をゆるし、そのすべての罪を掩って、このイスラエルをもどしたのです、帰還させた。しかしなお神に、帰って来た者の中に本当に回心を経験してない者があるから私たちを本当に帰して下さい。魂を本当に帰して下さいという祈りをもって、この詩篇の作者はポイントをついて祈ったんですね。彼の魂は本当に神の前に回心的な方向、砕けのことになりました。詩篇の作者はこれを祈っていて、もう砕けと回心のところに来ていますから、

それでこのような事態から神を本当に信ずる信が湧いてきましたから、神の恵みと、今自分の砕けたる心の信とが相会したというところを自然に出てきたわけです。

神の意志は義であります。「汝の意志のあるところに平安あり」という。汝の意志は即ち義であります。そして汝の意志を立てるという事態そのものが義である。そういったところに本当の平安がある。「汝の意志のあるところに平安あり」というのは、ダンテの天国篇の第三曲に出てくる。「われらの平安は汝の意志にある」です。

汝の意志にわれらの平安がある。平安あっての平和です。そして汝の意志は義じゃないですよ。汝の意志したもうことは、どんなにこちらには不合理のように見えても、そこに本当に義がある。そうして、どうですか、「律法はモーゼを通して来たが、恩恵と真理はイエス・キリストによって来た」。キリストが天界に於て恵みのキリストであるが、また地に臨んで来ては信実、信なるキリストであります。イエス・キリストほどに神様を信じ抜いた人はない。彼は神様の義を信じ抜いて、それを受け取り抜いたところのものが即ち真理である。

今度は、新約ではっきりわかる。キリストが真理であるとは何かというと、神の意志を信じぬいて貫ぬいたその在り方が、即ち信仰の在り方であると同時に、その実存の内実は、即ち信仰の在り方であると同時に、その実存の内実は、即ち真理を持っている。この真理は神の意志の内実を、内容を豊かに持っている。

そういうわけで、信はまたこの真理と一つになるから、だから「エメッ」という言葉は、ある時は真理であり、ある時は信実でよろしい。「アレーティア」も同じことです。実存的な真理が旧新約聖書の語っている真理です。「恵と信実」「義と平安」「義と信実」という。こういう天地照応というものは、ナザレのイエス・キリストが体現なさったです。即ち神の真理を受肉したキリスト・イエスでありました。そこでは天と地が接吻しています。天地一如です。乾坤一擲などいう言葉の気合と相通じます。旧約のこの言葉の中に私たちは正にキリストのみすがたを見るわけです。「信実は地から萌え出で、義は天からみおろしている」なんていうのは実に愉快な言葉です。イザヤ書にくると、「恵」という言葉が同義語ですからね。義というと何か堅苦しいような感じがするけれども、実はそうではない。「義は天からみおろしている」は「恵は天よりみおろせり」といってもよいのです。

ベートーヴェンの第九シンフォニーの「幾百万の人たちよ相抱けよや！　この接吻を全世界に及ぼせ！」と言ったシラーの名句も実はこの神人の平安関係、天地の触合というものがなければ、いくら人間同志で仲よくしようたって、それはだめですよ。

神様は私たちを引っぱり回す、そのところに本当の実存的な路がある。神の歴史的な足跡をみて行こう。キリストの具体的に歩いて行った足跡を踏んで行こう。キリストの足跡をみて行こう、しかし真似はしてはいけない。一日を一生として地みちに祈りつつ歩もう！

わが国を想うに、敗戦当初の一億総懺悔も空念仏に終っているので、神の憤りは今ちゃんとあるんで

す。日本のいろんな現状を見て、その事態に対する神の憤りが、積みかさなっているでしょう。神の審判がどの方面から現われますか。イスラエル王国が北方のアッシリアの強襲に遭って滅び、ユダ王国が東方バビロニアの猛攻によって亡びた事実を、預言者たちは神の審判と見ましたが、わが国が第二次大戦で東方アメリカに打たれたことが神の手のうごきであったならば、第三次的な戦があるなら、それがいづれの方面から襲ってくるかは論を俟たないでしょう。本当に国を憂いることは神を畏れることから生じます。そこから本当の外交がなさるべきです。何と不信な国であるか。ですから今、この詩篇の作者が祈っている祈りの現実は、私たちにひしひしと来るわけです。

で私は、最後にこの十一、十二節の句を皆さんとしっかり心にとめたいです。即ち恵にして義なる神キリストは天から今、私たち日本人を見おろしておられる。それを受け取らんとするこの信、アーメンとするこの信の民が、今こそ現実の中に生じなければならない。この信が本当に地から萌え出でて、どんな日照りにも枯れないで伸びてゆくように！　棕櫚は水を撒かないんだけど非常にすくすくと伸びてゆきます。キリストの義と恵みの光と雨を受けて、聖霊の火と水を浴びて、不屈不動の恵信一如の神の民たることを実証してゆきたいです。この恵信一如たる我らを見よ！　ということを、この詩篇の一番のポイントとして私たちは捉みたいと思うのであります。

（一九五九年八月二日　武蔵野幕屋での講筵）

解説二

紀元前第八世紀の終には北王国イスラエルは神の審判にあってアッシリヤのために亡ぼされ、その後一世紀半、紀前第六世紀に入って間もなく南王国ユダ、同じくエホバの聖怒を蒙ってバビロンに滅された。数十年、捕囚の歳月は続く。しかし神は新たにペルシャを興し、キュロスをして捕囚のイスラエル民族のエルサレム帰還を実現せしめ給うた。神の厳かな審判が深い恩恵に翻がえされたのである。永い歴史を通して重ね積み来たった神への不義も社会の罪もすべてゆるされ、蔽われたのである。人間が如何とも自ら処分することの出事ない罪の刻印を消し得る者は神のみ！　詩人はこのような神の恩恵の心をエルサレム帰還の事実の奥に見たのである。

然るに民一般の現実は荒廃した国土の復興見るべきものなく、喪失した信仰の回復ははかばかしくない（ハガイ書第一、二章、ゼカリヤ書第一章参照）。この惨めな現状は、それ自体がやはり神の審判でないのか。神の怒りはこの度は沈然と無為の中に無気味に動いているのではないか。「あなたは帰り来りて我らを生かし給わざるや」。遠ざかって顧みぬほどに怒り給う神ほどおそろしい者はないのである。我らは帰らんとするが、もうその力がない。ただ神自らの顧み、帰還のみが救の希望である。何たる寂しさぞ。神に棄てられた民の惨めさよ。それをしも知らぬ語らぬ民の罪深さよ。エレミヤも民に代ってこう祈った、「エホバよ、汝はわが神なれば、我を引き転し給え、然らば我れ転るべし」（エレミヤ三一・一八）。神の力によらなければ、帰り往くことのできない惨めさである。この詩篇でも「我らを立ち帰らしめ給え！　我らに対するみ怒をやめ給え！」（第四節）と呻き求めている。

ゆるされた恩恵の事実と、なおもみ怒の下にある審判の事実と。詩人は矛盾した、また矛盾を来たらせている人間の根本喪失の相を自らの姿として之を負い、之を直視し、この死の相から民が救われるためには、ただ神自らの回帰、転心を顧うの外なきに至ったのである。

しかし、このように神の回帰を祈る悲願は全く砕けた心である。砕けた、砕かれた心にはやがて神の声が聞えてくるのである。そのおとづれは「平安」であった。神の審判を心砕けて受けるところこそ真の平安がある。さばきの恵みというべきか。審判と恩恵のクロスするところに平安がある。この罪の世に於てはその他のいづこにも「平安」は臨まない。

詩人は恩恵の事実と審判の現実を砕けに於て受け、そこに終末的な恩恵と平安にぶつかったのである。まことに神に於ける平安の現実は神の義（ツェデク）が審判（ミシュパート）としてではなく正に神の恩恵（ヘセド）として上から与えられ、これを受ける魂が信実（エメッ）であるところである。

それは自己の信実に死して、神の信実に生きんとする砕けたものである。誰が神の義（信実）に信実を以て答え得るか。次の瞬間には神にそむく可能性ある人間ではないか。不断に砕かれゆかんとする砕けの心のみ。私は信実をかく解する。

エレミヤの解した「信実（エムーナー）」もこのような性格のものであったと思う（エレミヤ五・一―三）。そして実に神は、このような砕けの魂を、それ以上に自らの心を砕いて抱き給う。そしてこの神の砕けはどこに現われたのであるか。ナザレのイエスに於て、彼の十字架に於て！

天から義の恩恵が降るところ、地から砕けの信実が応えるところ。十字架の下、そこを生き、義のため、愛のため苦しみ、人のため社会のため家族のため重荷を負って仆れた人、仆れゆく人に「平安」（シャーローム）あれ、「栄光」（カーボード）あれ、このような真の終末の世界国土に勝利あれ、神の勝利がそこに証されんために。

「わがもてるものは、主よ、汝がもの、
　きよき聖戦にもちいたまえ！
すべてを棄てて従いまつらん、
　わがすべてに在す王なる主よ。」

（聖歌五八二）

詩篇第八十七篇

(1) コラの子らの絃曲の歌

1 彼の基礎は聖なる山々にある。
2 エホバがシオンの諸々の門を愛するは
ヤコブのすべての住居(すまい)にまさる。
3 諸々の光栄が汝について語られている、
み神の都よ！ セラ
4 「わたしはラハブとバベルを
私を知る者のうちに憶える。
見よ、ペリシテとツロとさらにはクシを。
この人はかしこに生れた」。
5 しかしシオンについてはこう言われる、

4 ラハブ。イザヤ三〇・七に出ているが、イザヤ五一・九によると水中の怪獣龍のたぐいと思われる、「猛悪なるもの」の意、エジプトのこと（詩八九・一〇参照）。
バベル（バーベル）。シナル平原ユーフラテス大河沿の市。バビロンのこと。バベルの塔の故事で有名。バビロンの都を以てバビロニア王国を指す。
ペリシテ（ペレシェトゥ）。「移住民の地」の意。強豪なペリシテ族の国土。カナーンの海岸地帯。大体南北八十粁、東西二四粁。オリーブ、オレンジ、イチジクの果実がよく産出される。主要な市は、北からヨッパ、エクロン、アシドド、アシケロン、ガテ、ガザ。
ツロ（ツォール）。フェニキヤの重要な古い港市（イザヤ二三・八）。ツォールは「島」の意味で、もとは島にあった市のようだ（エゼ二六・一七）。都市国家の形、ツロの王ヒラムはダビデやソロモンに友好関係にあった。ここではツロはフェニキヤのこと、ペリシテのはるか北方の海岸地帯。
クシ（クーシュ）。ハムの後裔。エジプトの南方、紅海にも面している広大な地域、エチオピアのこと。

「この人もかの人もその中に生れた」と。
かくて彼れ至高者（いとたかきもの）がそれを建て給う。
6　エホバが諸々の民を登録するとき、
「この人はかしこに生れた」と記し給う。　セラ
7　かくて歌う者も踊る者も唱（とな）えよう、
「わが一切の泉はあなたの中にある」と。

第八十七篇　終末的帰一

私はこの詩篇を読んで、直ちに「終末的帰一」という題をつけたくなりました。ドイツ語でいえば、Eschatologische Einheit（エスカトローギッシェ・アインハイト）というわけでしょう。この詩篇の作者年代の問題はあとまわしにして、直ちに本文にぶつかってみたいと思います。もっとも、この本文は学者もいうように、相当くづれたものらしく、一寸つかみにくくもあるようです。しかし元来詩というものは概して論理的な構造にはなっていないで、波動的、律動的に思想が展開しているものですから、その気心

でよめば、行間、語間の断層がよめてくるものです。

大道無門

さて「彼」とはもちろん神のことであり、「聖なる山々」とはエルサレムのシオンの山陵のことであります。神の都エルサレムは、神が聖山の上に礎えた神殿中心の都であり、かつての曠野の宗教が、いよいよもって聖山聖都の宗教におさまったすがたを語るものであります。

ヤハウェー即ち実存の主が、神の都シオンの城門を愛したもうことは、ヤコブのすべての住家を愛するにまさるとは、神の家は人の家よりも貴いことを意味し、神殿が貴ばれないなら、人の住居も安泰でないことを意味することになると思われます。どこまでも神殿中心の宗教の面目躍如たるものです。しかもそれをシオンの諸門という表現で語られているのが面白いです。東西の歴史において、城門というものは極めて大切なもので、城門が破られたら、その城は陥落するも同然でありました。門を護ることはすなわち城を守ることでした。道は門に通じ、門は城の鍵であります。そのようなわけで、主は城門を愛したまう、とこの詩人はうたいました。直訳すると、

愛したもう、主は、諸門を、シオンの。（オーヘーブ　ヤハウェー　シャアレー　シヨーン）

と強くうたい出ています。さて私は突然新約の光をこの句にあててよみたくなりました。しかもここに興味ある詩句を「無門関」の序文の中から引用いたします。

大道無門　千差道ㇾ路　透ニ得此関一　乾坤独歩。

「大道無門にして、千差路あり。此の関を透得すれば乾坤独歩せん。」とよみます。さて大道とは何か。イエスは「われは道なり」（ヨハネ一四・六）と言いたまいました。「道」（ホドス）には定冠詞がついていて、道そのもの、唯一の正道、といった意味あいです。イエスこそ天地を貫く大道でありました。そして現にそうであります。またイエスはある時「われは門なり」（ヨハネ一〇・九）ともいわれました。この「門」（トゥーラ）にも定冠詞がついています。これもキリストが門そのものである意です。キリストは一体どこへの道であり、門であるのですか、言うまでもなく、神への道、父への門であるというのです。ところで禅宗の「大道無門」を福音的に解すればどういうことになるでしょう。キリスト教という名称そのものが、実は躓きです。私はいつも言うことですが、キリスト「教」の教えを理解しようという角度がとかく現われるからです。イエスは「キリスト教」というようなことは言わず、「福音」歓ばしきおとづれと言われました。さきにも引用したように、キリストは道なのですから「キリスト教」というよりも「キリスト道」といった方がよいと思います。ドイツ語でクリステントゥム（Christentum）といいますが、これは正に「キリスト者の在り方」という原意で、実存的な意味の語です。われわれ日本人は、もともと、茶道、弓道、剣道、柔道、華道、書道、というように、道を心得た民であります。身につける真理を道といいます。単にあたまでもダメ、単に心だけでもダメ、全身につけることが大切です。身につけるというのは信仰の道においてこそ大切であるのに、一般には大変づれを来たしています。だからイエスは「われは道なり、真理なり、生命なり」と言われたのです。道即真理即生命、この三者は一つでありま

す。またイエスは、「全心、全魂、全意、全力をもって神を愛せよ」と言ったではありませんか。これ要するに全身、全実存を以てせよとのことです。

さてキリストは門そのもので、彼のほかには門はないのです。だから無門なのです。カトリックの門をくぐらねば救われないとか、プロテスタントのどの教派に、教会に来なければダメだとか、無教会でなければいけないとか、神の幕屋であるとか、キリストの幕屋に来なければ、とか手前味噌のような一切のことは本当でありません。実にキリストこそが唯一の門で、そのほかの門は人間のつくった門で本ものではありません。そこでそのような相対的なものに執している間は実はダメなのであって、大道無門！　とは実に気もちのいい言ではありませんか。私は全く然り！　と絶叫します。仏教にはなかなかうがった言が沢山あります。しかし私は仏教にとらわれるのではなく、凡そ真理をキリストの白光に照してつかむ天的な自由を得ているのです。それで真にキリストという門をくぐったならば、こんどはどういう相対的な門もそれにこだわることなく自由に楽に、その門を通ることができるのです。真に絶対界に入った者は、相対界に楽に処すことが出来るようになるのです。

人の子、キリストは枕するところがありませんでした。しかし、彼は到るところを枕とされました。あらしの中で木の葉と揺ぐ小舟の船板を枕として眠りなさったイエスです。それは船板を父のふところとして信頼しきって眠る信仰の秘訣を彼は身につけて居られたからです。無枕が即ち有枕であります。そのように、無門即有門となるのです。真にキリストに在るということは、無有一如の秘訣をつかんでいるとい

うことです。ヤコブが旅にゆき暮れて石を枕に眠った路傍の夢に、天使がのぼりくだりし、且つ彼は神の聖言を賜わり、そこに天門を発見したではありませんか（創世紀第二十八章参照）。路なき路をわけてゆくヤコブの旅路に対して「われ汝と共にあって凡て汝が往くところにて汝を護り、汝を此の地にひき帰るべし、我はわが汝に語りしことを行うまで汝をはなれざるなり」（創世二八・一五）とのありがたい聖言に接して、ヤコブはその後無路を大道としてつきすすむことができました。しかもこの路傍の無門関に天門を発見して、彼は目ざめて叫びました、「まことに（実存の主）ヤハウェー此処にいますに我れ知らざりき。畏るべきかなこの処！　これ即ち神の殿に外ならず、これ天の門なり」（創世二八・一六・一七）。無神殿に神殿を見、無門に天門を見る。これが本当の信仰の現実です。黙示録第二十一章二十二節には「われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および小羊はその宮なり」とあります。まことのキリスト者はキリスト道をゆく者であり、キリストの門下生であるわけです。この道あり、この門開けて、何のゆきつまりあらんやです。皆さん！　たましいが豁然と開けて来ましたか！

千差道路

さて次に、「千差道路」。「千差路あり」とよみます。ここまでおはなしすれば大体おわかりと思いますが、人生は「各」人その「足」であるくから人生行「路」というのです。人はあるいは日本人として生れ、あるいはドイツ人、アメリカ人、ソ連人、インド人、といった具合にさまざまな人種とその歴史と地理に限定され、家系、運命、環境にと、千様万態の限定のもとに生い立っています。誰もほかの人と同一

の路を往くということは絶対にありません。宗教的地盤にしたところでその通りです。だから誰が神の国の民であるかは、どの宗教を信じたからとか信じなかったからとかで定められるものではなく、これは全く神の定めたまうところで、何びとも他人のことを品さだめすることはゆるされません。十字架上の一人の盗賊は魂がくだけたのでイエスと共にまっさきにパラダイスに飛びこみ得たではありませんか。「おまえは、今日私と一緒にパラダイスにあるんだよ」（ルカ二四・四三）とは驚くべき福音ではありませんか。

キリスト者においては、どの集会に属していようとそんなことが問題ではなく、問題はただキリストという門を通ったか、即ち「此の関を透得したか」です。本当に十字架のあがないにあづかっているか、本当にキリストの生命をみたまで受けているか、みたまの内住に、パウロがロマ書八章でいみじくも語っているようにあづかっているか、どんな生活、職業にあろうとも信仰が生活の中にとけて化体しているか、といったことにこそ問題の中心はあります。

「教会」であろうと、「無教会」であろうと、「幕屋」であろうと、キリストという門をくぐり、自分の属する集会を無門として自覚するなら、その集会は本当の門の一つとなります。そのようなキリストにある無門の門となることが、個人としても集会としても本当の在り方であります。キリストはそのような無門の門を愛し給うにちがいありません。

この詩篇で「シオンの諸門を愛したまう」ということを、キリストの光でよむと以上のようなことになります。新天新地の神の都の一員となるべき終末的実存者として、我々はそのような無門の門となって、

キリストという天門へ、苦しめる者、求める者を案内する役割をはたすことを念願とすべきです。否、真に無門の門なら、そうあらざるを得ないことを自ら感じます。そのような終末的実存者となってくると、「乾坤独歩」と「無門関」に言っている言もうなづけて来ます。天地宇宙を往くこと、あたかも庭を歩くように自由なたましいとなります。ダンテがそうでした、ゲーテもそうでした。『神曲』も『ファウスト』もそんな雄大な自由なたましいでなければ書けるものではありません。

透得此関

それゆえに、よく心に銘していただきたい、キリストの十字架という狭い門を全実存を投じて通りなさい。ガラテヤ書第二章二〇節のパウロの告白と共に！　またヨハネ黙示録第五章一―六節の「屠られたる如き小羊」のキリストの十字架の鍵がこの門を開くのです。門に体あたりしてぶったおれ、降参してはじめてこの門は開かれます。否、実にキリスト自らがその血をもって、十字架の門をひらきたもうたことに気がつくのです。そのとき本当の正気に帰り、さんさんとふりそそぐ復活の主のみたまの光を浴び、「われもはや生くるに非ず、キリストわがうちに生きたもう」とパウロと共に告白できます。キリストは「もう心配はいらぬ、私はおまえのたましいの問題は一切解決してしまった。もう自分を問題とするな、私を見なさい、私の血をのみなさい、私の肉を食べなさい。おまえの罪も、あまえの病も皆ゆるし、皆なおす、心配は要らない、全く心身ともにあがない、全きものにしてやる」と言われます。勿論、私たちは死に至るまで罪びとにすぎず、欠陥だらけの肉体でもあります。しかし、根源的にはあがなわれた霊と肉で

あって、霊は潔められゆき、霊体が形成されてゆきます。

乾坤独歩

かかる全存在、全生命は、聖く且つ熱きものでついにキリストのすがたに化せられてゆくのです。千差万別のすがたさながらにして。天地を自由に歩くことさながら鳥の如くです。キリスト者の自由とはこれです。そのような在り方、前進のしかたを終末的実存というのです。このような独歩は必ず、道伴れをおのづから呼びます。星座のむすびの如き引力が見えぬうちにはたらきながら群を成すでしょう。もはや、つまらぬゴタ〳〵を考える気もおきません。自分は今まで何をクヨ〳〵していたかと思うようになります。たましいは自由、明朗、光輝、愛にひかって来ます。自由の光は愛を宿すとき本ものです。愛を現ぜぬ自由は本当の自由ではありません。人々を光の国へ入れる光の門となりましょう。魔軍の眼をくらませる光の盾となるでしょう。キリストを受けたたましいは開かれたるたましい、開かれたる門となって人々をキリストの国へ入れるのです。無門が即ち天門とされるのです。ハレルヤです！

霊的新生

シオン、「神の都」が神の諸々の光栄のあらわれとなることが約束されています。勿論、旧約的な意味で、シオンが現実に神の光栄となることはないです。新約の黙示録に示されている「神の都」は新天新地の終末的な神の都であって、旧約の現世的な意味を、天的なものに変えてしまったわけであります。イエスがメシヤであることは全く天的な意味であったのに、ユダヤ教徒が彼を地上の理想国の王者と見そこな

って躓いたからこそ、彼を十字架にかけてしまった。キリストがその十字架の躓きをそのままおどろくべき恩寵として与えているところに史上最大の逆説があるのです。だから私は「逆徴の福音」（第一巻の「受肉」の項参照）といったのです。終末的な「神の都」を構成する人々は、東西古今の万民からえらばれるわけです。何びとも「神の都」の都民の名と数を知りません、その終末の日がくるまでは。ところでこの詩篇にその終末的な神の都の予言が詩的に語られているのがまことに不思議なくらいです。

さて次に神の言そのものが投ぜられてあります。神様はラハブ（水中の怪物イザヤ三〇・七、五一・九詩八九・一〇）即ちエジプト、バベル即ちバビロニア、この両者を神を知る者のうちに憶える、と言われるのであって、詩篇の作者がこの詩をつくっている現実においては、驕慢なエジプトも残酷なバビロニアも勿論、ヤハウェーの神を全世界の神として信じていないのに、やがてそのような時がくることを示し給う神のみ言であります。それのみか好戦的なペリシテも、金権的なツロ、後のフェニキアも、強豪なクシ即ちエテオピアも、「この者はかしこに生れた」と言われることになると、神が予言しておられます。何たる現実をふみ越えた大胆な予言でしょう。この句は換言すれば「かしこ」即ち「シオン」を故里とするという意であります（メンゲの訳はこの意味になっている）。万民が神の都シオンに来てその神殿に拝跪するときがくるとの予言であります。現実はむしろその正反対でもあるような時代に、これは驚くべき逆説的な、一切の敵をのんだ、真に神の救済の勝利を信じ切った終末的な予言ではありませんか。

「この者はかしこに生れたり」の句を聞くとき、これに照応してひびいてくる聖句があります。それは詩

篇第二篇の

「なんぢはわが子なり、今日われ汝を生めり」

であります。これはまた新約の

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝をよろこぶ」（マルコ一・一一）

に展開します。霊的新生こそ神のよろこびたもうところ、これは万国の万人にひらかれている自由な新生です。いつ、いづこにおいても新生は可能であります。この可能性を現実へと受けとめるか否かにたましいの救はかかっています。絶対無条件に迎えられる新生の晨を迎えるたましいは幸なるかなです。

この新生はもはや命日を迎えない誕生です。何となれば永遠の生命への新生でありますから「汝今日われと共にパラダイスにあるべし」といって主に迎えられる死の突破を可能ならしめる新生です。ブラウニングの辞世の詩の如く、「歓呼の声を以て私を野辺に見送ってくれ、進め進め！　といってくれ」と言い得る死に対する勝利への新生です。そのような霊の誕生をこの人生行路のどこかで迎えなかったら人生は真の失敗となるでしょう。

このような新生を迎える人は、パウロがガラテヤ書四・二二以下で語っている「約束の子」であるわけです。パウロの比喩によればアブラハムの婢女ハガルの子は旧約的なエルサレムであり、アブラハムの自主の女サラの子は天的エルサレムであって、み国を嗣ぐべき約束の子であります。律法か福音か、奴隷か自主か、第一の肉の誕生の子としてとどまるか、第二の霊の誕生、新生を迎えて、永遠の国の民となるか

であります。まことのアブラハムの裔は肉によらず、霊によるがゆえに、すべての人にその恩恵、約束の子となる恩恵の自由が与えられてあります。その消息をうたっているのがこの不思議な詩篇です。

それゆえに「かしこ」、この詩篇の語る「シオン」の中に、天的シオンを我々は見ることが出来ます。天的シオンは、いたるところに天降りします。かのヤコブの夢の天門のように！

「石女にして産まぬ者よ、喜べ。産の苦痛せぬ者よ、声をあげて呼ばわれ、独り住まいの女の子は多し、夫ある者の子よりも多し」（ガラテヤ四・二七、イザヤ五四・一）という不思議な言は何を意味しますか。結婚して子を産んだから幸であるのでもなく、独身で子を産まぬから不幸なのでもない。問題はみ霊の子を産むか産まぬか、自分自身がまづみ霊の子として新生しているか否かに関わります。自ら新生せずしてどうして霊の子を生むことが出来ましょう。我らの間には現にこの浅間高原夏期特別集会の中に、独身の女の人で幾人となくみ霊の子らを生んだ姉妹たちがいます。さればこそ、このような大集会にもなっているではありませんか。イザヤやパウロはそのような事態を洞察して、「喜べ」といっているのです。真のキリスト者は男といわず、女といわず、結婚者といわず独身者といわず、みなみ霊の子らを生むことが出来るし、その使命をになっています。それは勿論主の恵みによってではありますが、その人の祈りと実存が、特に愛の実存が、他人に新生をよびおこすうみの苦しみをするわけです。これをまことの伝道というのです。「わが幼児よ、汝らのうちにキリストの形成るまでは、我再び産の苦痛をなす」（ガラテヤ四・一九）とパウロがやむにやまれずして叫んでいるわけであります。「汝の幕屋をひろくせよ……汝の裔は

諸々の国を得、荒廃の町をも住むべき所となさしむべし」（イザヤ五四・二、三）とイザヤがみ霊の子らの住居のために申す通りです。イエスがニコデモに告げた言、「人新たに（上より）生れなければ、神の国を見ることができない」（ヨハネ三・三）のように、シオンの神殿で、いづれの敵国も、霊神に面接拝跪して新しく生れて、万民が帰一することを予言しているわけです。エレミヤが「エテオピア人その膚をかえ得るか、豹そのまだらをかえうるか、若しこれをなしえば、悪に慣れたる汝らも善をなし得べし」（エレミヤ一三・二三）といっていますが、そのエテオピア人が黒い膚をかえ得なくても、その心を翻してまことの神を拝するときがくることを、この詩篇は予言しています。

万民帰一

このような終末的な万国の救の予言は、イザヤ書第十九章二三―二五節に酷似しています。「その日、エジプトからアッスリヤに通う大道があって、アッスリヤびとはエジプトに、エジプトびとはアッスリヤに行き、エジプトびとはアッスリヤびとと共に主に仕える。その日、イスラエルはエジプトとアッスリヤと共に三つ相並び、全地のうちで祝福をうけるものとなる。万軍の主は、それを祝福して言われる、さいわいなるかな、わが民なるエジプト、わが手のわざなるアッスリヤ、わが嗣業なるイスラエル」と。この詩ではアッスリヤのかわりにバビロニヤが名ざされているので、アッスリヤがおとろえかかり、バビロニアが東に擡頭しだし、西にはエジプトが威勢をはっている時代、ユダの王ヒゼキヤの時代（紀前七二五―六九二年）に、時の予言者イザヤの精神を身につけていた詩人の作ではなかろうかと思われます。ユダ王

国の危機にもかかわらず、神殿宗教の堕落にも拘らず神の都シオンの光栄ある使命を信じ、偉大なる神の栄光の勝利を霊視して、地上の権勢をおそれず、むしろ強国の栄枯盛衰に神の審判を信じ、いつかは、万民がイスラエルに自らを啓示し給うた神を知り、神に拝跪するときがくることを信じて高らかに謳い出でたものでしょう。然らばこれは大悲願のうたであります。

今、我々が神の大愛に信頼して、「わが民なるソ連、わが手のわざなる中共、わが嗣業なる日本」という自覚を得て謳うにも似ています。フルシチョフが軍備全廃への道を唱道し、アイゼンハワーも真剣に平和構策をねっている今日、憲法で戦争放棄を宣言した日本は、日本の現実の諸矛盾を更に乗り越えて、真に誠心をもって、平和文化国家の内実をはかり、信愛の国際友交関係を今こそ実現すべきであります。今こそ日本の青年が、たましいの大転換をなして、偉大な信仰の国、真理を生きんとの熱意熱情の民となるべき期は満ちています。目ざめよ、奮起せよ、青年男女諸君!!

イスラエルの中心シオンについては、「この人もかの人も神の都の中に生れた」と詩人はいう。どの人も、一人一人が神の民として新生した、というのであります。神の国を形成すべき中心の人々は誰であるか、キリスト者であります。今やキリスト者自身が真に新たに悔改をおこして、聖霊の人として新生すべき期！　全世界のキリスト教が何ゆえにかくおとろえているか、神学者、牧師はレギオンでありましょう。聖書の研究はなかなか進んではいます。しかし、一番大切なもの、なくてならぬ唯一のものが大方欠けているようです。イザヤ、エレミヤといった予言者があらわれ、パウロ、ヨハネといった使徒たちがあ

らわれたなら、何よりも慨嘆するであろうことは、今のキリスト教界一般に神のみ霊、キリストの聖霊の燈火がかすかであることであります。ウエットでもドライでもない、燃ゆるたましいの人の欠如であります。キリストが投じたまうた火が消えかかっています。宣教百年のさわぎも、聖霊の不滅の燈火を胸にもたぬキリスト者がどれほどいましょうともむなしいことです。

どのキリスト者もここにみたまによって新生したということが告白できなければなりません。「彼れいと高き者がそれを打ち建ててゆく」とあるように、主のほか、何ものによるのでもないのですから、この新生は確実であります。それはヨルダンに身をひたして、聖霊鳩の如くイエスの上にのぞんだみたまのバプテスマであります。洗礼という形に聖霊の降臨で内容をあたえた本当のバプテスマです。ただ形がないことをよしとして観念におちいるのでもなく、形を墨守して内実がむなしくなるのでもなく、真の内容がそのときそのときの自由な形をおのづからあらわしてゆくといったのが本当の実存であります。あるいは既存の形をうちかわから満たして、ふさわしき形に次第に変形させてゆくというような事態です。

さて終末の国、神の国の民を登録するとき、何が天国人の資格となるのでしょう。みたまのしるしたる新生の実こそそれでありましょう。「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもってせよ」、真とは砕けたる心のことです。おのれを何ものとも思わぬ無私の心です。そのときみ霊は必ず内住して下さるのです。それが「霊と真とをもってせよ」の聖言に即した現実であります。かかるとき新生の実は成るのです。「この者はかしこに生れた」ということは、そのような神礼拝において起るのです。「かしこ」は旧約のこ

の詩篇においてはシオンでありますが、イエスは「かしこ」を「いたるところ」「いづこにおいてでも」につきぬけさせて下さったのです。いたるところこれシオンであります。シオンは「母なる町」（サムエル後書二〇・一九）ともいわれますが、どこの小さな村も町も霊的な母なる村、母なる町となることこそ神のよろこびです。地の極までも、この「かしこ」は天的な「かしこ」となるのです。

一切の源泉

「かくて歌う者も踊る者も」異口同音に讃美します。

「わが一切の泉はあなたの中にある」と。何たる力づよい、全身的な告白でしょう。ヨハネ福音書第四章でイエスがサマリヤの女に語った聖言と相照応するものです。実に新しい生命の源泉は一切、神の中に、キリストの中にあるのです。わが全実存の源泉なるキリスト、これを真に告白するたましいは、本当に自分という者を「無」とします。言の最も正しい意味でわれとわが身を無視するのです。そのような無においてこそ一切の源泉たるキリストが無限となって下さるのです。無即無限無量と申すわけであります。

かくて万民がその生命と実存の源泉なる神、キリストにおいて帰一する期は終末の期であり、歴史の終末において帰一するのであります。しかもその中心は選ばれたる霊的なイスラエル、アブラハムの血族の裔たるイスラエルではなく、アブラハムの信仰の霊統を嗣ぐ万民からえらばれた霊的なイスラエルであります。もちろんパウロがロマ書でも示しているように、肉のイスラエルも真の悔改を起さねばこの終末の日は来ないでありましょう。しかし多くの所謂「みくにの子ら」が、悔改めずしてなげきはがみするであ

ろうことは、キリストが予言なさっている如くでありましょう。問題は他人ごとではなく、我々各人に関わる実存そのものの問題であります。

万民が帰一する終末的帰一の予言の詩として、実に不思議な詩篇です。しかも、「この者」とか「この人かの人」といった各個人を深く顧み、その実存的新生に問いかけているところに独特の味があります。「わが一切の泉は汝にあり」と全身的な告白を爆発させるまでに深く顧み給う愛の神、生命のキリストのよびかけに全身を投入せんかな！　アーメン、ハレルヤ。

これに応ずるは黙示録第七章の、「この後われ見しに、視よ、もろもろの国、族、民、国民の中より、誰も数えつくすことあたわぬ大なる群衆、白き衣をまといて手に棕櫚葉をもち、御座と小羊との前に立ち、大声に呼ばわりて言う、『救はみ座に坐したもう我らの神と小羊とにこそ在れ』……この故に神のみ座の前にあって昼も夜もその聖所にて神に仕う。み座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張りたもうべし。……み座の前にいます小羊は彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭いたもうべければなり」の一連の句であります。かくてわれらの心は、今や深いあつい祈りと化し、黙示録の聖句に和して聖なる歌をもって聖名を讃美し、新天新地への大希望をうたわざるを得ません。

＊　　＊　　＊

「なやみは終りて千歳の世となり、
あまねく世界は君につかえん。
曠野に水湧き沙漠に花咲き、
み神の栄光を仰ぎ得べし。

その日をのぞみて互にはげまし、
十字架を欣び負いて進まん。
なげきもなやみもしばしの忍びぞ、
楽しき讃えの歌とかわらん。

たずさえあげられ主イエスに抱かる
その日のよろこびいかばかりぞ、
備えは終れりいざ来たりたまえ
はなむこなる主よ救主よ！」

（聖歌六二三）

（「真白き富士の峯」のしらべ）

（一九五九年八月九日、浅間高原第六回夏期特別集会最終講筵の録音に基づく）

第四卷

（珠玉的詩篇　五篇）

詩篇第九十篇

1 神の人モーセの祈り
　わが主よ、あなたこそは代々
　我らの居所で在り給うた。
2 山々が生りいで、地と世界が生れぬ先きに、
　永遠から永遠まであなたは神で在り給う。
3 あなたは人を塵に還らせて、宣うた、
　「元に還れよ、人の子らよ！」と。
4 げにや千年も汝が眼には過ぎ往けば
　昨日の一日か、昨夜の警護か。
5 あなたは彼らを洪水と流し給う、
　彼らはひと夜の睡りか、晨に萌え出る青草よ。

1 「モーセの祈り」（テフィッラー　レ・モーシェー）この詩がモーセの祈りであると思う学者はまず居ない。しかしモーセの原形がなかったと断ずることもできない。「住所」（マーオーン）を LXX, MSS の如く「マーオーズ」（避所）の誤読となす学者多し。ルター訳もそうしている。しかし神の永遠性が説かれているので、我らの常住の場とみる方が好いと思う（GI）。詩二六・八。

6 晨に花咲き萌え出て、
　夕に刈られて枯れ果てる。
7 げに汝が怒りに我らは消え失せ、
　汝が憤りに我らは脅かされた。
8 あなたはわれらの不義をみ前におき、
　隠れた罪をみ顔の光に曝し給う。
9 げに我らの月日はすべてみ怒の中に消えゆき、
　われらは歳月を吐息の如く過ぎ去らせた。
10 日日並べてわれらの年は七十路か、
　長けてたかだか八十路に過ぎず、
　その誇りたるや骨折りと泡沫よ。
　それも駒のあがきで、我らも飛び去る。
11 誰か知ろう汝がみ怒の力を、
　誰か畏れて汝が憤りに如く者あろう。
12 我らの日数をあるがまま数えることを数え、
　智慧の心を我らに得させ給え。

9 「吐息の如く」（ケモー・ヘゲー）、吐息や嘆息の如くであるが、LXX「蜘蛛の巣の如く」「ベルシャ語系」とも訓む。
10 「泡沫」（アーウェン）空虚なこと。ヘブライ語の語音に似せてみた。しかし、この語は「わずらわしさ」の意の方が多い。
「骨折り」（アーマール）、伝道之書によくでてくる語。人生の空しさを嘆くこの詩の中に流れている思想は伝道之書と一脈通ずるものがある。

13 エホバよ、還り給え、なおもいつまで！
　汝が僕らの上を思い直し給え！
14 朝ごとに汝が恩恵われらを満ち足らわせ給え、
　かくて我らは生涯の限り歓び呼ばわり楽しもう。
15 あなたが我らを苦しませた月日に、
　我らが遭った禍いの年月にたくらべて、
　われらを楽しませ給えかし。
16 汝が僕らに汝がみ業を顕わし、
　汝が栄光を彼らの子らに現わし給え。
17 我らの神エホバの恩愛を我らに臨ましめ、
　我らの手の業を我らの上に確うし給え、
　我らの手の業をあなたが確うし給わんことを。

16 「栄光」（ハーダール）「荘厳」と訳しても可い。申三三・一七、イザヤ五三・二、イザヤ三五・二。
17 「恩愛」（ノーアム）ギリシャ語の「カリス」、ラテン語の「グラティア」、ドイツ語の Huld. 英語の Grace. 但しLXX はランプロテース「光輝」としている。

第九十篇　永遠の今

「神の人モーセの祈り」とは真か偽か。これを読んでみて、肯定すべきモーセらしい言葉がないようだ。といっても否定すべき根拠もない。作者はしかしモーセを記念すべく「神の人モーセの祈り」と詞書きしたのであろう。「神の人モーセ」という称え方は申命記三三・一、ヨシュア記一四・六にもある。

さて第一節で、「わが主よ」（アドナイ）と呼びかけ、神を「居所」と大胆に告白している。神が住居であるというのは、神の中に内住している意で、力強い霊的実存を表わしている。「神と共に在る」、というよりも「神の中に在る」方が信仰の次元は高い。キリストは正に「神のふところの中に」在り給うた。

第二節では、天地創造以前から神は永遠の実在者であることを告白している。

第三節に来ると、俄然調子が変って、人間のはかなさが、たたみかけて第六節まで述べられている。人は塵より出で塵に還る。これは創世紀三・一九と同じ観念である。「元に還れよ、人の子らよ！」とは神に立ち還るのではなく、塵に帰ることを意味している。地的素材から成っている人体が大地に還るすがたは

事実である。想い出すのはロングフェローの「人生の歌」の一節である。

"Life is real! Life is earnest!
　And the grave is not its goal;
Dust thou art, to dust returnest,
　Was not spoken of the soul."

Longfellow: "A Psalm of Life."

「人生は現実である！　人生は真剣である！
　そして奥津城はその目的地ではない。
汝れは塵であり、塵に還る、
　とは魂について語られたのではない。」

真剣に生きた人の魂は、肉体の死と共に滅びない、というのが近代的信仰意識である。しかしヘブライ思想では、そういう霊肉は渾然たる一体を成していると見るから、肉体の滅びと共に魂も陰府に閉じこめられるものと一般には思われていた。

百年はおろか千年でも、「昨日の一日」[4]か「昨夜の警護」[4]かというほどの短時間で、人生の時間も内実も「ひと夜の睡り」[5]か「晨に萌え出る青草」[5]にもひとしいはかないものだ。しかも、そのはかなさは何に

由るのか。「汝が怒り」[7]によって「消え失せる」[7]からなのである。東洋的諸行無常的厭世観ではなく、神に対する「不義」[8]や「隠れた罪」[8]への審判が降るから、審かれて消え失せる、という厳しい現実である。こういう意識は極めてヘブライ的である。彼らは御利益的信仰ではなく、神と人との関係が義を以て貫かれているところにヘブライ信仰の脊椎がある。そしてそこに愛の血脈が流れる。この義の関係が立たないのが不義であり、罪である。そこに神の怒りが発する。しかし、神の愛はその奥にある。

詩人は人生の長さを具体的に七十歳か、たかだか八十歳と限った。こんな考え方はモーセとは思えない。そしてその誇りが「骨折りと泡沫」[10]のような空しさである、といっているあたり、創世記第三章の「汝は一生の間、労苦して其れより食を得ん」（創三・一七）とか、「汝は面に汗して食物を食い、終に土に帰らん」（創三・一九）といった句の調子と似ている。私が「泡沫（あわ）」と訳したのはヘブライ語の「アーウェン」（空虚）という語音に合（あわ）せた語呂合せである。この人生「七十路」という概念から、西欧では人生七十年という通念が生じた。それで、ダンテが『神曲』の劈頭の起句で「われらの人生の旅路半ばに」という表現で三十五歳のダンテ自身を告白している。

詩人は更に、神を畏れ、平伏しても、「み怒の力や汝が憤り」[11]に、その程度においてかなわない。即ち、畏れすぎることはない、といっている。一体何がそんなに神の怒りの原因となっているのであろう。そのことはこの詩からは読みとれない。

どうにもならないので作者は遂に、「エホバよ、還り給え、なおもいつまで怒り給うか。汝が僕らの上

を思い直し給え」[13]と、神様の方からこちらへ向き直って、思い直していただきたいと祈り求めている。これは切々たる祈りである。

そして更に祈りは積極的になる。「朝ごとに汝が恩恵が我らを満ち足らわせ給え」[14]、そうすれば、生涯、歓び、呼ばわり、楽しむことができよう、というのである。今までの「労苦の月日や、禍いの年月に比べて」[15]こんどは楽しい年月を与えて下さい、と祈っている。

更に進んで、神の僕らに神のみ業を顕わし、その子らに神の栄光を現わして下さるように[16]、と神の業と栄光を祈っている。人生の楽しみは、神の業を楽しみ、神の栄光を衣せられるところにある、という神中心の祈りである。

更にこの詩の終句では、「エホバの恩愛」[17]を祈り、その恩愛を蒙ることによって、「我らの手の業」に神の力があらわれ、「我らの手の業」が確うせられんことを祈っている。これは、我らが神の証者となることであって、ここに祈りは極った。

そこでこの詩を顧みて、どういうことがこの詩のこころだろうかと考えてみる。

一面において、神の永遠性と人間の時限性のコントラストが非常に強く詠われている。神の常恒性と人間の無常性といっても可いだろう。もう一つの面は、神の怒、即ち神の義の強烈性に対して、人間の不義、罪の救いがたい現実のコントラスト。即ち、神は永遠の義であり、人間は毎日が罪である、即ち人間は現在的な罪の存在である。それでは人間の今なる罪はどうしたら可いのか。このままでは詩にも謳われ

ているように、「晨に花咲き萌え出でて、夕に刈られて枯れ果てる」[6]草や花のはかなさである。

神の愛が、義の背後から来臨しなければ救われようがない。そして神の恵みの力が来て、「神のわざ」がこの罪びとを通して現し、証者とされなければ、神の創造が救済とならず、神本位に生きる人間の実存も成り立たない。そしてそのような神の愛による罪のゆるしと、み霊の力が臨むとき、無常のはかなき「今」は「永遠」の質をもつことになる。神の義と愛が罪びとにおいて現ずるところに、永遠の今がある。はかなきすがたの人生が、あるがままのはかなさの中に不滅のものをもつことになる。一日が千年の質をもつ、否、永遠の質をもつ。この詩の祈りはそういうかくれた焦点をもっていると見る。このような永遠の今を生きるところに永遠の生命が現じているのである。そしてそのことを可能ならしめるものはキリストの義と愛である。キリストの十字架の贖罪が与え給う義と聖霊が臨むところに与えられる力強い愛である。

詩篇第九十一篇

1 至高者（エルヨーン）の隠れ場に坐する者こそ、
　全能者（シャッダイ）の蔭に宿るなれ。
2 私はエホバに言う、
　「わが避所（さけどころ）、わが城、わが依頼（よりたの）むわが神よ。」
3 「そは彼は汝を狩人（かりうど）の罠（わな）より、
　滅亡（ほろび）の疫病（えやみ）より助け出だし給うから。
4 その翼をもて汝を蔽い給うから、
　彼の翼の下に汝は隠れる。
　彼の信実（エメッ）は小盾、大盾。
5 汝恐れることはない、夜蔭に恐怖（おそれ）があろうとも、
　日中（ひなか）に飛び来る征矢（そ）があろうとも。

6 闇の中を往く疫病があろうとも、
　真昼に害う災禍があろうとも。
7 千人は汝の傍に仆れ、万人は汝の右に仆れる。
　（このこと）汝に近づくまい。
8 ただ汝は眼をもてこれを看、
　悪しき者の果を見るのみ。」
9 そはあなた、エホバこそ、わが避所にはあれ！
「汝は至高者を汝が住居としたから、
10 悪しきこと汝に至らず、
　禍害汝が幕屋に近づかじ。
11 そは御使たちに命じて
　彼は汝が道すべてに於て汝を護らせ給うから。
12 彼らの掌に汝を擡げ、
　汝が脚を石にぶち当てることなからしめる。
13 汝は獅子と蝮とを踏み、
　若獅子と大蛇をも踏みにじろう。」

14「彼れ我を愛慕したので我れは彼を救はう。
　彼れわが名を知るがゆえに
　我れは彼を高きに揚げよう。
15 彼れが我を呼べば我れは応える。
　我れは彼と共である、悩みのときに。
　我れは彼を助ける、彼に栄光を与える。
16 長寿をもって彼を満ち足らわせ、わが救済を彼に証示そう。」

第九十一篇　戦闘の幕屋

まえがき

一九七九年の年頭の集会にあたり、私は祈りの中でこの詩篇第九十一を撰ばせられました。そのわけは、今年は正直私にとって新しい年となるので、戦闘準備を要するわけです。その戦闘準備の心備えをするのにこの詩篇が極めて適切と思われたからなのです。私は来るべき二月七日で満七十五歳となり、三月

三十一日を以て五十年の教歴（学校教育）に終止符をうつことになるので、その時点を人生の大きな峠と思うからです。

爾後、伝道と著作に本腰を入れて取っ組みます。別な言い方をすれば、この人生の最終的な峠を越えたら、七十五歳といえば人生の夕暮ですから、一つの不滅の提燈――聖霊の燈火――を提げて山路を夜もすがら歩き抜き、永遠の晨を迎えたく思っているわけであります。

そんな心境ですので、心構えのため詩篇第九十一を撰びました。この詩篇は詩篇第四十六――ルターの宗教改革進軍の歌――の姉妹篇とも言うべきもので、何れも神の力を土台とした戦闘的な詩篇であります。

詩　意

この詩篇は、その構成上のことはいろいろ議論してもはじまりませんので、私はこれを天使の執成しの言葉と、詩人自身の告白と神の天来の聖言の三種から成るものとして解説します。

1、「至高者を隠れ場」とし、「全能者の蔭に宿る者」といった第一節の天使の言は宗教の奥義をずばりと言ったものです。即ち詩人は地上にありながら霊界にたましいの座をおいている者です。詩人ダンテがそのような人物でした。楽人バッハがやはりそういうたましいでした。「汝らは死にたる者にして其の生命はキリストと共に神の中に隠れ在ればなり」というコロサイ書三・三の聖句が新約の角度でずばりとこの消息を語っているものです。地上の何ものもこれを妨げることは出来ません。キリストこそ正にそのよ

うな人でした。これは祈りの世界の祈りの現実です。神、キリストの中に南無すること、即ち帰入し、帰依し、祈入するとき、至高者を「隠れ場」とし、「全能者の蔭に宿って」いるわけです。深い棄身の祈りでこのことを体験して下さい。

2、この天使の言葉に応じて詩人は、エホバは「わが避所、わが城、わが依頼む神」と告白しました。我々はキリストの中を「避所」とします。キリストを「わが城」としてその中に入ります。詩篇第六十一にも「汝はわが避所、我を仇よりのがれしむる堅き城」（六一・三）といっています。

3、第三節から第八節までを、天使の声としてよんで好いでしょう。この天使はガブリエルでしょう。ガブリエルとは「神はわが力」といった意味の名です。この数節は力強い天使の執成しです。

神は「猟人の罠」即ちサタンの策略から助け出し、有毒の疫病から救って下さる。このたましいを悪の力から護り、そのからだを疫病から護る、とはその詩人に神の力が現実にはたらきかけることを語っているのです。新約的に言えば、キリストの聖霊の力とその護りによることです。聖霊の内在によってこの力は働きます。

4、天使は更につづけて、「神はその羽で汝を蔽い、翼の下に隠し給う」と確言しました。「翼の下」という表現をイエスも用いました。おそらくこのような詩篇の句から思いついて自然に用い給うたのでありましょう。

「ああエルサレム、エルサレムよ、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝雛のその雛

を翼の下に集むる如く、我汝の子どもを集めんとせしこといくたびぞや、されど汝らは好まざりき」（マタイ二三・三七）。キリストがエルサレムを愛惜してこのように嘆息された。今もなおキリストは我らをその翼の下に入れようとして招いておられる。けれどもそれに応じない。キリスト者までもそうである。「翼の下」とは何か。「聖霊鳩の如く」とあるように翼は聖霊を意味する。聖霊を以て包もうとしておられます。即ち聖霊のバプテスマにあずからせようとしておられるのに、キリスト者は一般に聖霊を「好まない」。これがキリスト教界の一般である。使徒たちが天界でどれほど呻き、嘆き、怒り、悲しんでいることか。

申命記第三十二章の所謂「モーセの歌」という詩句の中に、「鷲のその巣雛を喚起し、その子の上に舞い翔ける如く、エホバその翼を展べて彼らイスラエルの民を載せ、その翼を以てこれを負い給えり」（申三二・一一）という名句があるように、翼の下に抱き、また翼の上に載せて神は護り給う。いかなる禍害に対しても、我らにとってはキリストが「小盾」となり「大盾」となって下さる。その「信実」という言葉はアーメンという語の名詞「エメッ」で、黙示録三・一五にある「アーメンたる者」がこの「信実」で、キリストは我らを裏切らない。こちらの如何に拘らず「信実」を貫き給うキリストのエメッ（信実、真理）によって、一貫した愛が顕現するのであります。

5、「夜陰」には恐ろしいことが襲って来ても、「日中」に飛び来る征矢があっても、キリストの聖名が「大盾・小盾」となり給う。

6、「闇の中を往く疫病」も聖霊の力がこれを退けて感染しない。ルターは黒死病の流行の中で勝った。結核患者や癩病人の間を廻り、按手をして彼らを慰め、み霊の力を頒け与えた経験を私ももっています。「真昼に害う災禍があっても」不思議に護られる。

7、病魔や外敵が襲わば襲え。「千人が左に仆れ、万人が右に仆れても」、神の護りは堅い。パウロはあの万難を突破して伝道をやり抜いた（コリント後書第十一章二三―三三節！）。それは彼の中に宿り給いし聖霊の力でありました。孔子も「千万人と雖も我れ往かん」との勇をもっていた。ルターはウオルムスの国会に召喚されたとき「たとい屋根の甍（いらか）ほどの多くの悪魔がやって来ても私は往く」といって立ち向った。日蓮も多くの法難を妙法蓮華経の力で制しました。使命のあるところ、キリストの護りは易りません。

8、天網恢恢疎にして漏さず、神の審判を邪悪、不信はのがれることは出来ない。迫害と中傷、誤解と作為、欺瞞と詐欺などには、神自らが復讐をなし給う。十字架を負う人々は、正しき審判を地上でか天界でかで見るであろう。「悪しき者の果てを見るのみ」とは、霊法の然らしむるところであります。

9、10、神を避所とし、至高者の中に宿る信頼深い童心の人は、しばしばふしぎな守護にあずかります。戦災の場合、そのような篤信の家のそばまで火が来たのに急に風向きが変って助けられたとか、ある家だけは火が燃えつかず、ほかの方へ飛火してしまったなどという話も聞いたりしました。

11、12、至高者のかえりみは渥く、天使たちが護ってくれる。崖から落ちても怪我をしない。信州でもこういう話を昔聞きました。崖から転落の瞬間、「主さま！」と念じたら、ひとつもけがをしなかったと。

それでサタンがこの句をもちだして、イエスを試みました。イエスはそれに対して、「主なる汝の神を試むべからず」（マタイ四・七）と応えて、サタンの御利益的な悪用を厳しく退けました。神意に従うところに信仰の本当の角度があるのに、奇跡や徴候を御利益的角度から求めるのは、福音とはちがうことを明示されたわけです。

13、獅子も蝮も大蛇も若獅子もパレスティナとその近隣の砂漠地帯には出没するいやらしい動物ですが、これらを「ふみにじる」と天使は揚言してくれている。「ふみにじる」のは聖霊の義の力であるが、アッシジのフランシスは狼をおとなしくさせました。あれは、聖霊の愛の力であります。

14、第十四節から第十六節までの三節は、神自らの聖言であります。第十四節に神を「愛慕する」（ハーシャク）という言葉が出てきますが、「ハーシャク」とは「しがみつくように愛する」意をもっています。何が何でも神を信じ抜く心境と軌を同じうするもので、愛することと信ずることはその意味で一如となります。祈りが聴かれようが聴かれまいが、外的状況がどんなに裏切られたようなことになろうが、なるまいが、神を神のゆえに信じ抜く、愛し抜くのが本当の信であり、本当の愛であります。そのような人は必ず天界に揚げられるに相違ありません。イエスはそのように神を信じ、神を愛しました。パウロはそのようにキリストを愛し、キリストを信じました。私も、貴君も、貴女も、そのようでありたくあります！　そのような「愛」そのような「信」が、聖名を「知る」ということです。第十四節は素晴らしい節です。愛・信・知円環一如の相です。

15、我れ呼ばば、神必ず応え給う。ありがたい消息です。人は必ずしも応えてくれません。キリストは真心をもて、砕けたる心を以て呼ぶ者に必ず応え給う。キリストは必ず直ぐ傍えに来て下さる。苦難の中に入って来て抱き揚げて下さる。その消息をエホバの神がイスラエル民族に実証しました。「彼らの艱難のときは、エホバもなやみ給いてその面前の天使をもて彼らを救い、その愛とその憐みとによりて彼らをあがない、彼らを擡げ、つねに彼らを抱き給えり」（イザヤ六三・九）。

16、「長寿」とは「長き日々」（直訳）で、地上の生涯の相対的長寿もありがたいことだが、その質が永遠でなかったら空しい。神に愛された生涯ならば、相対的長短は問題でないのです。神の愛は死を以て終りません、死をも乗り越えて愛し給う。神の愛、即ち「救済」のあるところに永遠があります。この詩篇は旧約の限界をやはりもっているが、新約的永遠への余韻がひびいています。

幕屋の秘義

以上をもって一応詩意はつかまえられたと思いますが、ここにこの詩篇の秘義を考えてみます。「至高者の隠れ場」とか「全能者の蔭」とか、「避所」とか「城」とか「住居」とか「幕屋」とかいう一連の言葉を、この「幕屋」というイスラエル宗教の型となる言葉に焦点を結び、幕屋の構造を述べている出エジプト記第二十五章二〇―二二節をここに引用することにしよう。

「ケルビムは翼を高く展べ、その翼をもて贖罪所を掩い、その面を互に相向くべし、即ちケルビムの面は贖罪所に向ふべし。汝贖罪所を櫃の上に置えまた我が汝に与ふる律法を櫃の中に蔵むべし。そこにて我汝

に会ひ、贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビムの間よりして我れイスラエルの子孫のためにわが汝に命ぜんとする諸々の事を汝に語らん」（出エジプト二五・二〇―二二）。

即ち「律法」の上に「贖罪所」がある、という構造に注目を要します。罪のゆるしの愛が、律法の義の上位にあるということは、福音が律法を掩い、乗り越え、完成することを旧約の宗教が既に指示していることになります。そのことを新約で語っているのがヘブル書で、特に第九章であります。

「然れどキリストは来らんとする善きことの大祭司として来たり、手にて造らぬこの世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一度び至聖所に入りて、永遠の贖罪を終へ給へり」（ヘブル九・一一、一二）。

この詩篇で、神を「隠れ場」「避所」「住居」とするとしきりに申しているのは、信徒たる詩人自身が、祈りの現実で神という幕屋の中に隠れる隠者たることを表現しているわけでしょう。イザヤ書四五・一五に「救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝は隠れて在す神なり」とあるように、神自身が隠者であります。だから、その神が自らを啓示し給うので、啓示宗教の名が生じたわけです。そういう隠者たる神が、イエスにおいて自現しました。キリストはこの隠者たる神の顕現者、体現者、実証者。隠者に対する言葉としては顕者がキリストであります。聖書の宗教は即ち隠陽道であるという新しい表現がおのずから与えられるわけです。

キリストの如き顕者は、しかし自らを何ものともしない無者であります。そういう無者が本当の顕者と

なって、正に福音を体現なさいました。我々はキリストの隠者となり、キリストの顕者、陽者となることが証人となることであります。キリストが言われたでしょう、「汝は祈るとき、己が室に入り、戸を閉じて、隠れたるに在ます汝の父に祈れ。」神秘的な祈りの陰は、あらわなる陽となって天国を現じます。隠陽自在なる福音の証者と成りたいものであります。

山路越えて　ひとり往けど
　主の手にすがれる　身は安けし
日も暮れなば　石の枕
　昼寝の夢にも　み国偲ばむ

（讃美歌四〇四）

詩篇第九十三篇

1 エホバ王となり、尊厳を衣となし給うた。
エホバは斯く衣して、力を帯となし給う。
げに堅く世界は立って動かない。
2 汝が宝座はそのかみから堅く立ち、
永遠からあなたは在ます。
3 エホバよ、大水は揚げた、
大水はその声を揚げた、
大水はその浪を揚げた。
4 あまたなる水のどよめき、
旺なる海の逆捲きにも優して
エホバは高きに在って旺盛である。

1 「エホバ王となり」（エホバ〔ヤハウェー〕マーラーク）詩九七・一、九九・一、サ後一五・一〇、王上一・一一、王下九・一三参照）。LXX も Vulg. も同様。「エホバ統治したまう」（現行訳）ではないと見る。「尊厳」（ゲーウートゥ）、もとは、「ガーアー」「昇る」を意味する。海に荒波の「さわぐ」意もある。荒波のことが書いてあるから、この「尊厳」が荒波を静める力があると思われる。イザヤ一二・五「彼は崇高に行い給えり」。「世界」（テーベール）人文的世界。詩二四・一、九六・一三、九八・七、九。イザヤ一七・二一、二七・六、三四・一。3 「大水」（ネハーロートゥ複）詩四六・三、神と大水、ちょっと連想されるのは、バビロニアの創造神話なる原始海ティアマットゥと創造神マルドゥクの闘争である。5 証詞（エードゥートゥ）、祭司典で「證詞、誡命、律法」の意に用いられている。出二五・一六、三一・七、四〇・二〇等。「律法の櫃」（アローン ハーエードゥートゥ）出二五・二二。捕囚期以来よく用いられた。詩一一九にはこの語が「律法」の意にしばしば用いられている。

5 汝が証詞はいと信実である、
神聖は汝が家に相応しい、
エホバよ、日の数のきわみまで。

第九十三篇　神威

「エホバが王となった」と劈頭に曰う。それは何を告げようとするのか。北王朝イスラエルさきに亡び、南王朝ユダも時ならずして滅びた。イスラエル民族はこのようにして戴くに王なく、護るに国なき民となった。それなのにバビロン捕囚の苦節数十年を経たのち、帰還して彼らがその中心として拠りどころとしたものは何であったか。それは神殿であり、神であった。政治の中心なく、強力な王者なきユダヤである。彼らの民族的使命は強力な王国の建設にあるのでは最早ない。彼らはバビロン捕囚を転期に徹底的に彼岸的民族――それは彼らの名「イブリー」（ヘブライ語）、「ヘブライオス」（ギリシャ語）が示す如く――となるべきであった。然るに彼らはなお強大な地上的政治的王国を夢みていた。

さてここに一人の無名詩人があった。彼は民心を代表する如く王者の出現を叫んだ。曰く、「エホバが王となった」と。王国は民の望むところ、王者は彼らの求めるところ。けれどもここに曰う王者は人なら

ぬエホバである。詩人は王国に関して一言も語らない。しかし彼はエホバが今王になったという。エホバは「没薬、蘆荈、肉桂」（詩四五・八）のようなもので衣を馨らしめず、尊厳そのものを着た。エホバはまた剣を帯せず（詩四五・三）尊厳の中に備わる力を帯とした。このようにエホバが王となったという現実の事実は常人の眼には映らなかった。それは信仰の眼に映じた信仰の世界の事実であった。活ける神のこのような荘厳な動的現実を観た詩人は直ちに世界がこの神ゆえに不動であると直観した。

しかもその現在的直観が過去への直視を与えた。即ち、神の宝座はその創造の始めから不動であった。然り、神自身は永遠の昔から在まし給うた、という内実である。即ち、「エホバは王となった」という現在的現実は同時に、「エホバは王であった」という過去的現実を啓示する。常に新たに「在りて在らしむる」神の、時に適った必然的歴史的自現の消息がその間にあるのである。

しかも見よ！　詩人の現在ある環境は「大水が怒号し、怒濤を揚げている」というに相応わしいものである。それが何を意味するかを我々は今知る由もないが、単に自然界の変動を意味したのではなかろう。何らかの形において動乱の世であったのであろう。何となれば自然変動のみならば、第五節のような内容を以て結ばれる必要はないであろう。詩人はむしろ当時の動乱を自然現象に托して表現するを適切と感じたのであろう。

聞く耳ある者は直ちに詩人の心を知ったはずである。しかし詩人にとってはその外的動乱の主体を構成するもの――恐らく諸民族――の心の波浪こそ最も深刻な現実の波浪と観ぜられたであろう。しかしこの

ような風波のどよめきにも優して旺なるはエホバの神威である。自然の猛威も人界の動乱も神の尊厳と力の前には抗すべくもない。

「大水はその声を揚げた、
大水はその浪を揚げた」（特にイザヤ一七・一二、一三参照）

詩人は何を観てこのように叫ぶのであるか。それはチグリス・ユーフラテスか、ナイルの水か。それともアッスリヤの戦車の轟きか、スリヤの軍旅のどよめきか。永遠に安住の土たるべきカナンの地、ダビデ・ソロモンの王国は、王朝分裂の後、その内憂外患による動揺は竟に鎮まるところを知らない。果ては没落、捕囚の悲運に遭わねばならなかった。作者は今どのような現実に直面しているにせよ、彼も亦痛ましいその現実と共にイスラエルの歴史を知る者である。戦勝により国運隆盛を誇るとき、神威を宣揚するは然るべきことながら、作者が今ある如き、恐らく内に社会の道徳的腐敗あり、外に強敵の圧迫あるとき、彼が神への信頼を失わず、その尊厳を高らかに叫んでいるのは如何なる心境の発露なのであろうか。

一切のうつりゆくものの中に唯一つ信実なものがある。それこそは詩人の拠って以て立つところの根拠であった。曰く、「汝が証詞（あかし）」である。永遠より永遠に在ます神の「証詞」である聖言を何ものよりも信実であると見做した。そこにはエホバの「律法」も「約束」も「預言」もこめられて居よう。この詩人においては確かに祭司的なものと預言者的なものが渾然一体をなしていると思われる。「汝が証詞」の中に彼は過去を顧みて「約束」を観たであろう。現在を思って「律法」を有っていることをあまりにも明かに

知っているはずである。また未来を望み見て「預言」を聴きつつあったに相違ない。偉大な神の実在と永遠、民族の歴史と世界の動きとを詠いつつあるこの詩人は、このように「汝が証詞においてそれに相応しい深い啓示を受けたものと惟う。

「汝が証詞」はイスラエル民族の不信と動揺にも拘らず、イスラエルの歴史を貫いて「いと信実」であった。これを観た詩人はどんなに驚嘆し、どんなに讃歎したことか。彼の確信の拠所は実に聖言のこのような実存的な確かさにあった。

あの「紅海の歌」（出エジプト第十五章）に「エホバは世々限りなく王たるべし」（出一五・一八」と詠われているのは、実に神の歴史における力強い顕示を後代から反映したものと言わなければならない。「汝が証詞」が「信実」である所以は、エホバの聖なる意志と行動が証詞に先だち、これを限定しつつあったがためである。「我汝らを治むることをせじ、また我が子も汝らを治むべからず、エホバ汝らを治め給うべし」（士師八・二三）と言ったとされるギデオンの謙虚も、「エホバはわが牧者なり」において代表されるべきダビデの精神も、世々に王として不可見の現実を支配しつつあったエホバの実在を証しするものである。

イスラエルの惨憺たる王国史にも拘らず、エホバは過去にも現在にも王であり、「限りなく」未来も王である。「マーラーク」「王となった」なる完了形は正に行為的現実を、刻々に創造しつつある神の統治を表現するに適切である。かくて「エホバ　マーラーク」には現在及過去の信仰的現実の相があると共

に、未来的現実がふくまれている。しかも可見的現実がエホバの統治を信ずるに難いだけ、未来的現実が現在に能きかけてくる力は強いのである。詩人は実にエホバ王国の儼たる信仰の事実を叫ぶと同時に、むしろその根拠ともなり本質でもある未来的彼岸的終末的な神の国を無自覚の中に預言している。意識としては現在的終末観が前面に出てはいるけれども。

イスラエルはその本質上神治王国であった。イスラエルの歴史はしかしその理想を踏み破った。破れたる地の王国を前にして、詩人の心眼は豁然として永遠なるものに向けられ、天的統治の預言となった。破れても破れない国、それこそが本来のイスラエルではないか。それは如何なる形態と本質の国であるか。曰く、「神聖は汝が家に相応わしい」[5]と。形態は「家」（ベイト）であり、本質は「神聖」（コーデシュ）である。謂うところの観念は祭司的である。盛るところの精神は預言者的である。

「汝が家」は今ある堂々たる第二神殿ではない。詩人にとって「汝が家」は、最早祭司的礼拝の場所にあるのではなく、心の砕けた民の間にある。しかもそれはまたこの世の大水を遙かに越えた天上に在る（イザヤ五七・一五参照）。そこはエホバが父であり、イスラエルが子らなる家庭である。それは血肉以上の血肉である。それは神の霊による新しい血肉である（エレミヤ三一・三一―三三「新しき契約」参照）。贖われた者らが神を父と呼ぶ国である（イザヤ六三・一六を特に参照、旧約聖書における最大文字の一つ）！「神聖」なる「家」とは、旧約においてはこのようなものを言う。神のために聖別されたのだが、それ自身は何でもない者とこのように贖い給うた神との関係、そこに神聖を観た旧約の「神聖」のおごそかさ

よ。福音的なひびきをすでに有っていた。

詩人はこのような神聖な家を観て、イスラエルの使命の那辺にあるかを指示している。「神、人と偕に住み、人、神の民となる」永遠の国、「神の幕屋、人と偕にある」まことの故里を（黙示録二一・三）。

「汝はわれらの父なり。
　アブラハムわれらを知らず、
　イスラエルわれらを認めず、
されど、エホバよ、汝はわれらの父なり。
　いにしえより汝の名を我らの贖主といへり。」

（イザヤ書六三・一六）

詩篇第百二篇

(1)　惨憺たる者が、思いくづほれて、エホバの前に、
　その歎きを注ぎ出した時の祈り。
1
(2)　エホバよ、わが祈りを聴き給え、
　わが叫びがみ許に達せんことを。
2
(3)　わが苦しみの日に
　み顔を私からかくし給うな。
　私が呼び求める日に
　汝が耳を私に傾け、速かに応え給え。
3
(4)　わが生涯は煙と消え、
　わが骨は炎の如く燃やされた。
4
(5)　わが心は草の如く打たれて枯れた。

パンを食べることすら私は忘れた。
5 (6) わが呻き声のため
わが骨は肉にこびりついた。
6 (7) 私は曠野の烏(からす)の如く、
廃墟の梟(ふくろう)のようになった。
7 (8) 私は目がさえて、わびしく
屋根の上の鳥のようになった。
8 (9) 諸々の敵は終日(ひねもす)私を嘲り、
私をけなす者どもは私を呪う。
9 (10) まことにパンのように灰を喰い、
わが飲み物には涙をまじえた。
10 (11) 汝が憤りと怒りのゆえに、
あなたは私を擡げて投げ棄て給うた。
11 (12) わが生涯は日影のように傾き、
私は草のように枯れ果てた。
12 (13) だがあなたは、エホバよ、永遠に住まい、

あなたは代々に憶えられ給う。
13 (14) あなたは起ってシオンを憐み給う。
そはシオンの恵まれるべき期、
その期が来たからである。
14 (15) 汝が僕らはシオンの石を欣び、
その塵をすら愛しむ。
15 (16) 諸国の民はエホバの聖名を畏れ、
地のすべての王は汝が栄光を畏れる。
16 (17) そはエホバはシオンを建て、
その栄光の中に顕われ給うたから。
17 (18) 彼は棄てられた者の祈りを顧み、
彼らの祈りを軽んじ給わない。
18 (19) このことは次の世のために記され、
これから創られる民にヤハを讃美させよう。
19 (20) 実に彼はその聖なる高所から瞰下し、
諸天から大地を照覧し給う。

20 (21) それは捕囚者の悲歎を聞き、
死に定まれる子らを解放せんために。
21 (22) それはエホバの聖名をシオンに宣揚し、
その栄誉をエルサレムに伝えんがために。
22 (23) それは諸国民が共に集められ、
諸王国がエホバに仕えんと集められるときに。
23 (24) 彼はわが力を途で衰えさせ、
わが生涯を短かくなし給うた。
24 (25) 私は言った、わが神よ、
わが生涯の半途で私を取り去り給うな。
汝が歳月は世代の世代も続きます。
25 (26) その昔、あなたは大地を据え、
汝(な)が手の業(わざ)は諸々の天。
26 (27) 彼らは滅び、あなたは立っている。
彼らのすべては衣の如く古びる。
あなたは彼らを衣の如く変える。

そして彼らは変えられる。
27 (28) しかし、あなたは不変であられる。
あなたの齢は終らない。
28 (29) 汝が僕らの子らはながらえる、
彼らの裔はみ前に確かと立てられよう。

第百二篇　死生の転換

――母を偲びて――

（一九五七年一月二〇日　聖書講筵）

母が昨日午後一時三〇分天界に召されました。

詩篇一〇二篇を祈りとしておはなしいたします。私が詩篇に親しみをもったのは大分以前の病床においてでした。それが契機で詩篇研究にかなりうちこみ、『旧約知識』という塚本虎二先生・植木良佐さん編輯の同人誌に詩篇の訳と解説を連載するようになったのでした。

母の召天！　昨日の今日で、はなしがはなしにならないと思いますが、おゆるし下さい。母の死の床に侍っていて、私の代りにまた母の代りに祈ってくれているのが、この百二篇のように思えて来たのです。

詞書のように、私は「惨めな者」、「惨憺たる者」です。私も「思いくづほれて」この呻き歎きをキリストの前に告白する者です。

「エホバよ、わが祈りを聴き給え、わが叫びがみ許に達せんことを」（1）。祈りの切なるものは呻きであり、叫びであります。そして祈りは本当はみな叫びなのです。この「叫び」とは、何も大声の祈りをいっているのではありません。本質的には「叫び」であると申すのです。「叫び」とは全身的なものということです。そうでなければ神様の許にはとどきません。キリストは密室で静かに隠れたるに聴き給う神に祈れ、と申しました。小さな声、或は沈黙で祈る。しかしその質は叫びです。キリストは山の中で、深夜に深く深く祈られました。それは全身を神のみふところに投入して。これが叫びというものでした。

私は満八十八歳を迎えた米寿の母の、世を去る日の近い床に侍って、病の癒されんことをもはや祈りませんでした。ただ母の中にキリストの愛の生命が漲り溢れんことを、そして平安と歓喜の与えられんことを切に祈りました。

「わが苦しみの日に、み顔を私からかくし給うな」（2）。母は五十才のとき、私の長兄政美（二十七才）の病床をはるばる北京に訪ね、看護しました。。しかし兄は召天しました。死別に臨み、「お母様、お先きに失礼いたします、キリストが迎えに来られましたので」と母に告げた由です。母は兄の遺骨を抱いて、次兄龍二との帰るさに、黄海の上で失明してしまいました。多年の過労と悲嘆のもたらした失明です。母の「苦しみの日」は私の想像に余ります。

「わが生涯は煙と消え、わが骨は炎の如く燃やされた」(3)、とは勿論火葬のことを言っているのではなく、人生のはかなさと、苦難のため骨も枯骨の如くだ、ということであります。詩人の心も枯草の如くであり、パンを食べることすら忘れてしまうほどの心の苦しみを訴えています(4)。私の母の場合は心の苦しみは無く、老衰のため体力が消耗して、最後は水一滴も入らず、唇をうるほしてもらうだけでした。肉体は枯木の如く、皮膚は枯葉の如くで、それはまことに子女五名の一家を女手一つで支え、戦い抜き、労し抜き、心を用い抜いた母の刀折れ矢尽きた尊いすがたでした。

この詩の作者はどのような苦難に遭ったかわかりませんが、「曠野の烏」か「廃墟の梟」と自らを描写しているように(6)、孤独、寂寥の現実であります。慰めてくれる友もなく、激励してくれる師もいないまことに「わびしくぽつんと坐っている屋根の上の鳥」のようでもありました(7)。「諸々の敵の嘲り」(8)の的となり、パンも灰と同じ味、水を飲めば涙がまじる現実でありました(9)。

神様は自分を慰めて下さるかと思ったら、そうではない。『汝が憤りと怒りのゆえに、あなたは私を擡げて投げ棄て給うた」(10)。我々読者はこの句に来て躓くのです。どうしたことか。この詩人は何か悪いことをしたのか。四面楚歌の声であるから、上を仰いで天界からの慰めがあるかと思えば、「怒り」「憤り」が臨んでくるとは。何故か。神様の側には人にはわからない「わけ」があります。

アブラハムが神から、約束の子イサクを捧げろ、と命ぜられたときも、アブラハムはわからなかった、ただ信じただけでした。ヨブが義人と謂われるほどの人でありながら、たたみかけて大変な災難と苦難に

遭いました。けれどもヨブは「エホバ与え、エホバ取り給う、エホバの聖名は讃むべき哉」といって、運命環境の奥に神を信じました。「何故か知らん、エホバは怒っておられる。そして自分を擯げて投げ棄て給うた」。これが詩人の信仰告白でした。

「汝我を擯げて投げ棄て給えり」の一句は、かつてわが恩師藤井武先生が愛妻の病死に遭ったとき、ある朝詩篇をずーっと読んで来て、この句に来たとき、これだ！　この句が自分の今の心境を代言してくれている、と思った、ということを我々は聞いています。また先生はその『羔の婚姻』という一大詩篇の中で告白しておられます。

「わが日は煙のごとく薄れ、
わが骨たきぎの如く燃えて、
私は忘れる、糧をとるを。
私は野のペリカン、荒野のふくろう、
友なく屋根にもだす雀、
おのが涙を飲みものとして」。
かく歌うた後にわが詩人は
一段と声をはげまして「なんぢ
私をもたげて投げ棄てたまうた！」

あやしくわたしの胸は躍った、
　おのがさけびの反響を聴いて
　さながら救ひを見つけたやうに。

（『羔の婚姻』上篇、羔第一歌コスモスより）

藤井武先生は、伝道のさなか、五人の子女をかかえ、家庭の主婦として、伝道の助手としてこよなき存在である愛妻の病死を迎え、正にどん底の現実となった。神様に撞げられて投げ棄てられた、との詩篇のこの一句が正にわが叫びとして受けとられた心境はよくうなづかれ得るところです。

この詩人の場合も、何か深いわけがあって神の怒りを蒙り、投げ棄てられた、と感じて告白したわけです。詩篇全篇で、これほど強烈な言葉は稀有であります。詩篇第二二篇第一節「わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給いし」がこの句に反響しています。

私の母を想うと、さきにもちょっと触れましたように、長子政美を失ったときの母の心境が正にこれであったと思います。折角独力育てあげて、長子をして光栄あるコースを進ませつつあったのに、それが仆れましたから、母は失望落胆のあまり、失明してしまいました。神様は何と解らぬことをなさると思ったでしょう。正に「投げ棄て給えり」であったわけです。母は一時は自殺したいと思ったと大分後になって私に語りました。五十才で失明して、八十八歳で昨日仆れるまで、母はしかし一ぺんも、目が見えたい、見える人がうらやましいといった愚痴をこぼしたことがありませんでした。これには私は全くあたまがさ

がるどころではありませんでした。愚痴を言わない母のために、失明の詩人ミルトンが代言している句が「サムソン・アゴニスティース」という詩の中にありますが、今は引用いたしません。

私は今、母を失って、文句はありません。神様のみ怒りに遭おうと、投げ棄てられようと、否、実に神の審判と罰を受けているわけです。私は親不孝者でした。さんざん苦労をかけ、心配をさせ、申訳ない者です。勿論、失明の母のため、出来るだけのことはして来たつもりではありますが、そんなことは母の労苦に対して応えられるすじあいのものではありません。報恩は私のこれからの生涯に課せられた課題です。

「あなたは私を擡げて投げ棄て給うた」。この一句を全身で受けて冥想しているうちに十字架が見えて来ました。私はキリストの十字架の下に、中に、上に、投げ棄てられているのでした。「我キリストと共に十字架せられたり」のパウロのように、そのとき神のみ怒りは消えました。キリストが引き受けて下さいました。母上よ！　おゆるし下さい、ありがとうございました。貴い生涯でした。私のために母は死にました。涙があふれて来ました。母はおのが十字架を負ってキリストに従ったのでした。福音の無言の実証でした。

本当に人生を生きた母は、一九五七年一月十九日に仆れ、八十八年の地上の生涯を終えました。と同時に、母は本当のはるかにすばらしい霊界に甦りました。死生の転換がここに起きました。私自身の信仰史においては、兄の死が第一の峠、藤井先生の死が第二の峠、こんどの母の死を目の前にして、第三の峠を

踏み越えて前進せしめられることを感じております。私の使命は母の死を通して倍加して来ました。私にとっても過去に死んで現在から将来に生きる死生の転換であるわけです。

皆さんも人生に於て、いろいろな経験をなさると思います。どうかこの私の告白が人生における体験の参考になれば感謝です。神に投げ棄てられ、キリストの十字架の中にひろわれることが本当の救です。そこにはキリストの霊気がただようからです。

この詩は第十三節から明るい調べに変わる。第十四節に「汝が僕らはシオンの石を欣び、その塵をすら愛おしむ」という著しい言葉があります。それで想い浮べるのは次の万葉の一首であります。

信濃なる筑摩の河の細石も
　君し踏みてば玉と拾はむ

これは勿論恋歌でありますが、この詩人もシオンの石を慕い、エルサレムの塵を衣につけたいほどに、シオンを、エルサレムを思慕しています。またシオンもエルサレムも、その神殿のゆえであり、神殿は活けるエホバ神のゆえであります（15）（16）。神様は我々を投げ棄て給う、そしてその「棄てられた者の祈りを顧みて下さる」（17）。だから神に棄てられたら、神は逆に顧み給うことに思いを致し、愛の鞭と信じて、いよいよ神に祈入することです。神はキリストを十字架に棄てたのち、驚天動地の復活をさせました。

神の眼は時に捕囚者に、瀕死の人に向けられ（20）、彼らの「なげき」を聞き給う。艱難はどんなにあ

っても、「わが生涯の半途で私を取り去り給わぬように」（24）と祈っているのは、詩人にも課題があるからでしょう。人は去り、世は移ろう。しかし、神は不変です。永遠に実在し給う（26）（27）。相対界で望まれることは、幾代も信仰の伝統が非連続の連続でつながってゆくことであります。相対界で大切なことは、この相対界の中に居ながら絶対界を生きることであります。アブラハム、イサク、ヤコブ等の族長らが信仰の現実では天界に生きているのです。

皆さまはこの詩篇百二篇の第十節と共に十字架され、復活のよろこびを体感して下さい。死生の決定的転換は十字架され、み霊のバプテスマを受けるところにあります。然らばわが母の死は我々をより強い信仰の現実に入れることになり、母も天界から欣んでハレルヤを歌ってくれましょう。栄光聖名にあれ、主のあつき愛の顧み母の上にあらんことを。失明の暗黒が光明のパラダイスに転換され、母が輝かしい笑顔に換えられんことを。

めぐみの光はわがゆきなやむ
やみ路を照せり神は愛なり

母の愛誦歌（讃美歌八七）

詩篇第百三篇

(1) ダビデの

1 わが魂よ、エホバを讃めまつれ。
　わが五臓六腑よ、その聖名を讃めたたえよ。
2 わが魂よ、エホバを讃めまつれ。
　そのすべての恵みを忘れるな。
3 彼は汝が不義のすべてをゆるし、
　汝が病患のすべてをいやし、
4 彼は汝が生命を陰府の穴から贖い出し、
　愛しみと憐みを汝に冠らせ、
5 彼は汝が口を嘉物で飽かしめ給う。
　汝は汝が若さを新たにして鷲の如くなる。

この詩篇は極めて福音的であるので「旧約の福音」と題した。

1 「わが五臓六腑」（コル・ケラーバイ）＝「私のケレブのすべて。」ケレブという語は、身体の内部、胸や腹の体腔で、生命、心、霊の内住する体腔、といった意味の深い言葉。それで「五臓六腑」と訳した。

6 エホバはすべて虐げられている者のために、
義を行じ審判をなし給う。
彼はおのが道をモーセに、
おのが業をイスラエルの子らに知らしめた。
8 エホバは憐みと恵みにあふれ、
怒ることおそく、慈しみゆたかである。
9 いつまでも争うことはせず、
永遠に根にもつようなことはしない。
10 彼はわれらの罪なりに我らをあしらわず、
われらの不義なりに我らに報い給わない。
11 げにや天の地を越えて高きが如く
彼の愛は彼を畏れる者の上に力強い。
12 東が西から遠くへだたるように、
彼は我らの罪過を我らから遠ざけた。
13 父がその子らをあわれむように、
エホバは彼を畏れる者を憐み給う。

14 そは彼は我らの形象を知り、
我らが塵なることを想い給う。
15 人は、その月日草の如く、
花咲くとも野花のようだ。
16 げにその上を風が過ぎればその跡もない。
彼の生い立ちも知る由もない。
17 エホバの愛は永遠から永遠に畏神者の上に、
その義は子らの子らに及ぼう。
18 それは彼の契約を遵り、
彼の訓命遂行を念とする者のためである。
19 エホバは諸天にその玉座を建て、
その王権は一切を統治している。
20 エホバを讃めたたえよ、その天使らよ。
その聖言を行う力ある勇者よ。
その聖言の声を聞こうとする者よ。
21 エホバを讃美せよ、その万軍よ。

その聖意を行う奉仕者よ。
22 エホバを讃美せよ、そのすべての被造物よ、
その統べ治めるすべての処で。
わが魂よ、エホバを讃美せよ！

第百三篇　旧約の福音

まえがき

今日は詩篇第一〇三篇。これはある意味において、詩篇百五十篇中の最大なるものと言ってもいいかと思います。それで『旧約の福音』と題しました。節の数も、ヘブライ語のアルファベットの数、二十二節から成っています、いわゆるイロハ（ＡＢＣ）歌ではありませんが。

これを読んでいると、もう解説するのがいやになってしまうすばらしい詩篇です。これに福音のすべてが入っている。旧約にこんな詩篇があるのかと思うくらいです。何と言っても旧約の世界は律法が強いですが、そういった陰はほとんど見えない。どうしてこんな詩篇が生れたろうかと怪しむくらいです。しか

も地獄的ななやみの一〇二篇に対して、一〇三篇は天国的なよろこびの詩篇です。それはちょうど、ロマ書七章と八章、或はイザヤ書三十四章と三十五章が夫々地獄と天国の対称をなしているのに似ています。

福音の根底（一―五節）

「ダビデの」とありますが、たといダビデの作でなくとも、彼の魂はこういう福音に向っていました。第一段は一―五節です。この第一段は極めて個人的な救いの消息、恵みの消息を、何とも言えなく表現していますね。何とこれは旧約をつきぬけた魂かなと驚嘆いたします。

1　「わがたましいよ」というのはこの場合「ネフェシュ」という字で、英語の「スピリット」でなくて「ソール」のほうですね。ドイツ語で言うと「ガイスト」でなくて「ゼーレ」です。ヘブライ語のネフシュは、ちょうどギリシャ語で言うとプシュヘーにあたります。

「わがたましいよ」というのは、霊と心の中間のような言で、漢字では魂にあたるわけです。「気息」の意もあり、肉体を生かしている霊的生命の坐です。

「エホバをほめまつれ、わが五臓六腑よ」

「わがたましい」と言って、今度は、「わが五臓六腑」。ヘブライの詩は、よく対句的に言いますから、「エホバをほめまつれ」に対しては、「そのきよき御名をほめたたえよ」と応じています。「エホバ」に対しては、「きよき御名」。「わがたましい」に対しては、「わが五臓六腑」。「五臓六腑」と言うのは「ケレブ（うちなるもの）」という字で、これはまさに内なる五臓六腑、英語で言うと「バウル」です。即ち魂

と五臓六腑、全的な存在としての自分、そのものです。それでこの句は魂も体も、一切がという意味ですね。心も体もエホバをほめまつる。エホバは、すなわち御名です。「彼の聖なる御名」「シェーム・コディショー」。それで、イスラエルの聖者なる神をほめまつれ。このほめまつれという言葉はもともと「バーラック」という字で、恵むという字ですね。だから、「恵みを神に帰せよ」という意味があるんです。「バーレキー・ナプシー」は、本来は神を「恵みあるものとせよ」という意味です。哲人バルーク・スピノザはユダヤ人ですから、その「バルーク」は即ち「恵まれたる者」という意味です。

2 「そのすべての恵みをわすれるな」と。ここの恵みというのは「ヘセド」ではなく「ゲムール」という字の複数形が使ってあって「めぐみのわざ」といった意です。

私たちの過去は、つまずいたり、ころんだりしたのにもかかわらず、全部めぐみに包まれているわけです。すべての恵みと言っても、恵みをただ数えたってしょうがない。恵みにおいて、恵む者それ自体、恩恵者即ち恵みの主体である神様を忘れるなと言うこと。そうしないと御利益信仰になります。私はこれこれの恵みに与りました。と言って、恵みだけを喜んでいたら、いわゆる御利益信仰になってしまう。めぐみの奥の神そのものが恵みの主体ですから、恵みなる神を忘れるな、と。神様は恵みも禍もくだすと、これは神の業であると、ヨブ記の中にあるように。だから、どんなことにあっても、わたしはただ御名をたたえると。「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの御名は讃むべきかな！」という有名な言葉がありますね（ヨブ一・二一）。この「讃むべきかな」も「メボーラーク」で元来「恵みを与える者」の意です。

3「彼は汝が不義のすべてをゆるし（汝というのは、自分に言いかけている）、汝がすべての病患をいやし」

癌は癒えないじゃないか、と。そうじゃないですよ、癌だって癒えるんです。根源的には癌も癒えてしまうです。すべて現象にとらわれているうちはだめですよ。現象の奥の世界をつかまえないと信仰は本物にならないです。どうせ厳密に言えば、みんな病人ですよ、地上にいる我々は。どんなに健やかな人だって、つねに病菌をもっていて、これと戦っているにすぎません。そこには何らかの欠陥があります。魂も、どんなに立派そうに見えたって、自我になやまされている破れ器。だから万人はみな罪人。「義人なし、ひとりだになし」とパウロが言っている通りです。キリストだけが例外者、そのキリストも罪を知っていらっしゃるですよ、ただ彼は罪に陥らなかった。けれども我々と同じように人間の弱さは全部知っていらっしゃる。だから、神に、汝の聖意と言って、自分をいつも委ねておられた。おれは罪を犯さないんだと言って、平気な顔をしているイエスではないですよ。キリスト自身は地上にイエスとしてあった間は危機的存在であった。イエスは罪を知っていらっしゃったけれども罪を犯さなかった、負けなかった。

で、「不義のすべてをゆるし」、すべての不義をゆるせるのはキリストだけです。神様はゆるし給うけれども、キリストにおいてゆるす。仏教的な大悲大慈とはちがう。すなわち、キリストは十字架においてゆるし給う。だから新約の私たちの立場では、十字架の贖いのゆえに、過去、現在、未来の一切の罪はすでにゆるされている。人間としてはどこまでも、つまずいたり、ころんだりしますよ。けれどもそれを自

分でどうの、こうの、したってどうにもならん。むしろゆるされている自分をはっきり受け取って前進していく前むきが大切です。つまずいたら、すみません、とひれ伏して進んで往くわけです。そういった十字架の絶対恩寵、これがすなわち、すべての不義をゆるしという根底の現実です。キリストはすべての罪を十字架においてゆるし、すべての病をみたまの力で癒し給う。そのような実力あるキリストの愛が、一切の罪と病に対する勝利です。聖霊を与え、私たちに永遠の生命を与えて下さっているから、私たちは、やがて肉体は死んでも、その奥に、死んでも死なない霊体がきている。これはキリストがヨハネ伝でおっしゃっている通り。「われを信ずる者は死んでも死なない」と言うことで、「信ずる」と言うのは、キリストが神の子であるということを信ずるのではない。キリスト自身を、即ち永遠の愛の生命を受け取るということです。

そのようにキリストを信受していれば、病はすでにいやされている。それは相対的な健康ではない、絶対的健康の世界に入れられている。霊体が与えられているから、肉体は、血気の体は滅びても、霊の体が生きていく。事実、相対的にも病はずいぶん癒えますよ、正直。聖霊の力がくると、本当に御霊のバプテスマを受けると、今までの精神的また肉体的な調子の悪かったのが忘れたようになおっちゃった、という例はいくらでもあるのだからね。それは一つのしるしです。はっきり現われてくる。キリストはそのような信に基づく祈りを通して、既にどれほどの人々を、こんな私を通してでも、助けて下さったか、ちょっと数えきれません。

霊的な本当の具体性、これを受け取っていけば、もう相対的現象は問題でなくなってきますから、だから、「彼は汝のすべての不義をゆるし、汝のすべての病患をいやし」が然りアーメンとなる。こういう場合はどうなんですか、なんて。こういう場合なんてありゃしないんですよ。信ずるとはそのような無条件的な根源的なものです。

4　「彼は汝が生命を陰府の穴から贖い出し」、まさにその通り、死は単なる関門であって、キリストに在って生くるかぎり、滅びでも何でもない。

「愛しみと憐みを汝に冠らせ」

キリストの贖罪愛は、いわゆるいのちよりも強いものです。キリストの霊は贖罪愛の霊ですから、「愛しみと憐み」、「ヘセドとラハム（の複数）」という字ですが、両方共大事です。愛といろいろな憐れみです。

5　「彼は汝が口を嘉物で飽かしめ給う」

「嘉物」は、新約のルカ伝では聖霊のことを、「嘉物を賜わざらんや」とキリストが言われた、あの嘉物は、まさに聖霊のことでしたが、新約の光で読めば、「汝は永遠に聖霊にてあかしめられる。斯くてなんじは壮やぎて鷲のごとく新になるなり」。これはイザヤ書四十章の終りに出てくるあの句と同じです。「鷲のごとく」、非常に力強い生命的な事態を鷲の如く、若鷲の如く、と言いますね、嵐に向かって飛び立って行くからね、鷲は。嵐が吹いてくると喜ぶんです。いい加減な風じゃだめなんだ、鷲なんていうや

つは。そして太陽に向って進んでいく。ドイツのフィヒテと言う哲学者が、ドイツ人の魂をそういう驚に譬えて表現しているんです。太陽に向って限りなく進んでやまないのがドイツ魂であるということを「ドイツ国民に告ぐ」という有名な演説の中で叫んでいます。あれはナポレオンに蹂躙されていた時だからね。その後ビスマルクもロシアの威圧に対して、ある演説の終りに、„Wir Deutsche fürchten Gott, aber sonst nichts in der Welt.“「我々ドイツ人は神を畏れる。その他の何ものもおそれない！」と叫びました。

一節から五節で、はっきりそういった十字架、復活、聖霊の恩寵のかくれた福音が語られている。どうしてこんなすばらしいことを、キリストに出っくわさない旧約の人が言えるかとあやしむばかりです。エホバの神を、本当にそういった贖罪愛の神、聖霊の力の神としてはっきり受け取っている。

歴史に現われた神の恩寵（六―十三節）

第二段は六節―十三節。ここにモーセとかイスラエルの子らという歴史が出てきた。個人の体験から歴史の方へ向って、イスラエルという歴史的な恩恵のあとを、彼は思いながら語っているわけです。

6「エホバはすべて虐げられている者のために、義を行じ審判をなし給う」

セデカー「義」とミシュパット「審き」という字はよくでてきます。神の義を以てする公平なる審きです。

で、「虐げらるる者」というのは、歴史的にはイスラエルの民がエジプトに半奴隷状態でいたでしょう、

彼らはエジプトに虐げられていたが、彼らを救ってやれと、神がモーセに告知しました。その出エジプト記第三章あたりが背景になっているとみていいと思います。で、「おのが道をモーセにしらせ」と言うのは、そういうことです。出エジプトの道、虐げと患難から救う道です。

「おのれの業をイスラエルの子らにしらしめた」。

だけれども、イスラエルの子らはモーセが受け取ったようにはなかなか受け取れなかった残念な面があります。預言書にもよく、「出エジプト」のことが出てくるですね、虐げ、迫害、患難からの贖い出し。それからもう一つ出バビロニアというのがある。これは、バビロニア捕囚、紀元前六世紀の初めの頃、五八七年、あのバビロニアにやっつけられて、エルサレムが陥落して、そしておもな人たちがバビロニアに伴れてゆかれたのでしたが、ペルシアの王クロスが解放してくれたですね。五三八年頃のことです。バビロニアから解放されたのは、イスラエルの神に対する不信仰の罪からのゆるしでありました。出エジプトの方はイスラエルの患難からの救いでした。出エジプトと出バビロニアはこういう二つの種類の神様の救済で、これは歴史的に極めていちじるしいできごとでした。出エジプト、出バビロニア。我々の人生でも、この出エジプト、出バビロニアが繰り返されるわけです。

8　「エホバはあわれみと恵みにあふれ、
　　怒ることおそく、慈しみゆたかである」

ここに怒りという言葉が出てくるんですね、それでなぜ神様が怒ったか。出エジプトの時は、神様はイ

スラエルに対して何も怒ることはない。怒りの方は何かと言うと、神の義が怒りという姿で現われるわけですから、すなわち不信に対する神の怒り、不義というのは神様との関係が破れることが不義ですから、不信は、すなわち不義である。不信に対するところの怒りだから、この怒りになると、これはバビロニア捕囚のことが前提となっているとみてさしつかえない。

9 「いつまでもあらそうことはせず
　永遠に根にもつようなことはしない」

新約では、「羔の怒り」というのがある。キリストの怒りである。これは、もう世の終りです。キリストが限りない恵みをもって、即ち十字架と復活、聖霊の恵みをもって、いつでも、だれでもを、無条件に迎えようとしているのに、いつまでも恵みを拒み、不信をつづけていれば、ついに神の怒りが爆発するときがくる。世界は傍若無神になって、恐ろしい兵器が沢山出てきた。一触即発、世界は火の海になっちゃう。そういうような破滅が来たら、そこに羔の怒りが現われる。

だけれども、そういう終末を来らせようとは神様は思っておられない。

10 「彼はわれらの罪なりに我らをあしらわず、
　われらの不義なりに我らに報い給わない」

何と深いゆるしの神様か。我らの罪とがを見て見ぬのである。聞いて聞かぬのである。キリストの十字架が神の目をそらせ、神の耳に対する防音となっている。

11「げにや天の地を越えて高きが如く
　彼の愛は彼を畏れる者の上に力強い」
　畏神とは平伏しのたましいとなることです。
12「東が西から遠くへだたるように、彼は我らの罪過を我らから遠ざけた」
　いつくしみは主を畏るるものに大いにして、天の地よりも高きがごとく。いつくしみはものすごい広大なる高い恵みである。またそれが地にくだってくると、そのわれらより罪を遠ざけたもうことは東の西より遠きがごとし。我らの罪過を遠ざけて問題とせず、お前はこうだ、ああだ、なんておっしゃらない。
13「父がその子らをあわれむように、
　エホバは彼を畏れる者を憐み給う」
「畏れる」というのは平れ伏す心です。こわがることではないですよ、畏れかしこむという字なんだからね。今の聖書にはみんな「恐」の字が書いてある。こわがるのではなく、ひれ伏して信頼することである。そこには神様の恵みがくるし、神様の権威がくるんです。ひれ伏さないで、おれは、なんてやって傲慢になるともうそれはサタンの手下になっているわけである。あわれみの心は実力のある者がもつ。父なる神は無量の実力者であるから、深いあわれみをもち給う。キリストは、神様を父よ、と呼んで父のあわれみにおのれを全托された。では父に対して母はあるか。それはマリヤではない。言うべくばそれはみ霊である。聖霊です。聖霊は愛の霊でありますから。母性愛が執り成す愛であるように、み霊は執り成しの

霊でもあることはヨハネ伝のキリストの言によって明かであります。御霊は正に執成の霊！　そこで三位一体という父、子、聖霊は、父、子、母となりましょう。イエスの父は神、イエスの母は聖霊といっても可いわけ。こういう表現はどこまでも霊的な表現ですから、その点誤解なきようにねがいます。聖霊はそのような執成しの霊、その意味で祭司、坊さんは本来大切な存在であります。しかし聖霊は勿論、父的な力強い霊、権威をもった霊でもありますから、父性、母性の両面があることを忘れてはいけません。みたまのバプテスマにあづかった者はそのことが充分うなづけるわけです。

イザヤ書に父なる神のことがハッキリ語られてあります。

「汝はわれらの父なり、アブラハムわれらを知らず、イスラエルわれらを認めず、されどエホバよ汝はわれらの父なり、上古(いにしえ)よりなんぢの名(みな)を我らの贖主(あがないぬし)といへり」（イザヤ書三章一六節）

神は父であり、贖主であると。イザヤ書一章から三九章までを第一イザヤと言います。四〇章から五五章までが第二イザヤ。五六章から六六章までが第三イザヤ。

三人の人の筆に成るもので時代的にも相前後してますが、三人の精神は一貫している。しかも第一イザヤは聖なる神を、第二イザヤは贖いの聖子を、第三イザヤは聖霊の消息を特色としているといっても可いので、まことにふしぎな構造です。聖書全六六巻、イザヤ書は全六六章、だから全聖書をイザヤ書は、ある意味において代表していると言ってもいいくらい。まあ旧約の中から何をとるか、と言ったら文句なしにイザヤ書をとるね。あんたがたは狂える人の如くなって身読しなさいよ。とにかく、キリスト者もむき

にならなくちゃダメですよ。私はかつて、預言書に浸り込んじゃって、その聖書はボロボロになっちゃったよ。

「爰にその民いにしへのモーセの日をおもひいでて曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携へあげし者はいづくにありや。（海とは紅海のことです。さっきの出エジプトのことです）彼等のなかに聖霊をおきしものは何処にありや」（イザヤ六三・一一）

第三イザヤはどうして下さるんですか、と神様に迫っているけれども、イスラエルの民がだめになっちゃったから、神様の方でそっぽを向いているんだ。それを神様どうして下さるんですか、と言って、この預言者は一生懸命喰いついているわけだ。その神に向って「父」と呼びかけている。民族的な角度から時々預言者が「父」と言っているのを、もっと個的な意味で、また世界的な意味で「父」という言い方をつかまえちゃったのがイエスです。

「されどエホバよ汝はわれらの父なり、われらは泥塊にしてなんぢは陶工なり」（イザヤ六四・八）

この「泥塊」や「陶工」のことはエレミヤ記第十八章、第十九章にも出てくるね。「汝はわれらの父なり、……われらはみな汝の聖手のわざなり」（イザヤ六四・八）。まあとにかく預言者イザヤ書におきましては、よく「聖者」、聖なる者という言葉や、また今言った「父」と言う言葉が特に出てくる。そういうように歴史を顧みて、そして、患難からの出エジプト、罪と罰からの出バビロニア。神の怒りはいつまでもつづいてはいない。神様の怒りは本当に憐みがかくされている怒りですから、ひれ伏していけと。ひと

つも恐いことはないと。神様は無条件にゆるし結う。

そこで我らは新約のパウロの言うように、「われ汝の内に、汝わが内に」という内在関係、イン・アンナイデルの関係。神・キリスト・我というこの三者一如の関係。こういう現実に祈りで入っていかなかったら、いつまでたってもしようがない。中へ入らなくっちゃ。「わが魂よ、わが五臓六腑よ、汝の中に入る」こういう福音的神秘を今のキリスト者がもっと本ものにしなければダメです。こういう一如的神秘は聖霊によって可能となるのです。ただ十字架で贖われていますと言ってるだけでは前進できません。そこに御霊がないからです。パウロがはっきり言ってるじゃないですか、パウロさんをどうしてくれるんですか。私はキリストの内に、キリスト私の内に、と言うのは形容的に言っているのですか、形容じゃないですよ。現実ですから、本当に。だからインの世界に入るのです。信仰の仰の字はいらないんだ。はじめは仰ぐかも知れないけど、交わる世界に入んなくちゃ、魂の交わりの世界、私はもう信仰の仰の字を仰ぐと書くのをよそうかな、信交。もう思い切ってやらなければだめなんです。第二の宗教改革をあなたがたがやって下さい。

過ぎゆくものと過ぎゆかざるもの（一四―一八節）

今度は第三段（一四節―一八節）。

14 「そは彼らは我らの形象を知り、我らが塵なることを憐み給う」

15 人は、その月日草の如く、

花咲くとも野花のようだ
16　げにその上を風が過ぎればその跡もない。
　彼の生い立ちも知る由もない
人間のはかなさを、その通りに書いてあるよ。聖書はあらゆる現実をごまかしなく書いている。何々主義なんてのは全部入っている、聖書の中には。全部そんなもの溶かしちゃった。包んじゃった。突きぬけちゃった。だからドラマだと言っているんです私は。聖書はドラマだ。ドラマの中で線太く生きてくれなくちゃ困るよな。私のこういう日曜の集会に来て、言葉じゃないですよ、その響き、その魂、その気合を受け取ってくれなくちゃ、いつまでたっても始まらない。分析的な判断をする人たちは私に躓いて去ってゆく。パウロが言ったように、この土の器の中にある金剛石か、または自然の火が見えないのです。同じく金剛石を宿し、同じく白熱の火が点ぜられたら、私と一緒に死を賭してもやってゆくでしょうのに、お気の毒なことです。そういう人々のため私は正直、執成の祈りをしています。
17　エホバの愛は永遠から永遠に畏神者の上に、その義は子らの子らに及ぼう。
18それは彼の契約を遵り、彼の訓令遂行を念とする者のためである。
　一八節はまさに旧約的です。我々ははかない器なんだけれども、主の愛は「永遠より永遠に」（メオラーム・ウエアッド・オーラーム）主をおそれる者の上に、その義は「子孫の子孫に」あらんと。愛と言って、今度は義と言っているでしょ。愛、義、恵み、ここらはすっかり預言者イザヤに似ています。神の義

はその福音のうちに現われ、と言ったあのロマ書の元はこういうような言葉に歴史的にはあるわけです。愛と憐みと義が一つなんです。これは審く義ではないんです。神様が憐むこと自体が義なんです。これをマルティン・ルッターはなかなかつかめなかった。神の義とは審く義ばかりだと思ってね、それで苦しがっていた。ところが義は与えられるものであった。神様は義を与える。それが即ち憐みなんです。愛なんです。

今は霊的人物の飢饉です。けれども、要するにひれ伏さなければいかんです。畏るべきものを畏れないから一切の狂いがきちゃってる。問題は教育の、そして一切の文化文明の現象の奥に、福音の宗教の世界がないからダメなのです。私は倒れるまでこのことを叫んで行きます。神様の前にだれでも降参すれば、すばらしい神の義を賜わって、本当に筋金の通ったことになっていくわけです。上から力がくるし、本当の愛はくるし。で、「その義は子孫の子孫にまで及ぶほどである。その契約をまもりその訓命遂行を念とする者のためにである」。

訓命を心にとめて、律法を心にとめて行う人、この精神はまあ旧約ですが、しかし、行うということは極めて大事なことです。突っ込んで言えば、神の言、神の言を本当に心にとめれば、「わが言は霊なり力なり」ですから行に転じます。神の言は即ち神の行に転じて我々を実行せしめる。どんなに破れ器であっても、人間的完全よりもすばらしい。どんなにすばらしい造り花も、自然の花にはかなわない。とにかく自然というのはすばらしいです。私は自然を見ていても、決してただ自然を見ているんじゃないです。そ

こに神様の心を見ているんだからね。

われらの創造られたさまがまことにはかないと。よはいは草のごとく、まあ大体いくら生きても百歳位までですよね、イザヤ書に「百歳で死ぬものもなお若しとせられる」（イザヤ六五・二〇）なんて書いてある。「その栄は野の花のごとし」そういう人生の諸行無常、「色は匂へど散りぬるを　わが世たれぞ常ならむ」という。いつくしみはとこしへより永遠にと。これも質的につかまねばダメです。即ち一日を千年の如く生きる。一日千年という言葉がある。「千年は一日の如く、一日は千年の如し」と、ペテロがそう言った。で、一日を本当に生きる人は、質的に永遠なのです。永遠の今を生きるような生き方になりますから、だから現実の相対的なはかなさも、最早突破してしまっているのです。神様に、その憐みに浴する者はだれでもがそうなのです。さっきはイスラエルの歴史から、今度は人類的に突破しているわけです。ここでは、個に徹すると人類的に突破する。だから一四節から一八節までは、個人の体験から、そういった人間そのもの、人類そのものに、万人に向かっての恵みの事態に突き抜けていると、そう見ていいわけです。これが第三段でした。だからこの詩の構造はすばらしいよ。

天的実存の讃美（一九―二二節）

第四段（一九節―二二節）

19　エホバは諸天にその玉座を建て、

その王権は一切を統治している。

20 エホバを讃めたたえよ、その天使らよ。
その聖言を行う力ある勇者よ、
その聖言の声を聞こうとする者よ。
イスラエルの神エホバは超越神として王者として霊界に君臨して一切を統治しているという神政がはっきり告白されています。天上の天使も地上の勇者もこの神への奉仕に存在の意義があるのです。
21 エホバを讃美せよ、その万軍よ、
その聖意を行う奉仕者よ。
聖言を行う者が勇者なんです。神言の行者、これが本当の英雄なんです。あなた方、ひとりびとり英雄なんです。女丈夫なんです。神言の行者が本当のエホバの僕、神様の僕、「われはキリストの僕なり」とパウロが言った。僕、本当の僕が勇者なんです。イエスほどの勇者はいません。最大の勇者です。イエスは小羊と言われるけれども、小羊は獅子よりか強いんだ。神様に完全にひれ伏している人は最大の勇者です。そして、ひれ伏しているからその聖意を体現することができるのです。行者、御心の体現者となるのです。それでみくらだとか御使だとか、万軍だとか言ってるでしょ。それは天界だ。そして、こちらは僕として地にある。だから天地相応えているところの天地万有の神奉仕です。
22 エホバを讃美せよ、そのすべての被造物よ、
その統べ治めるすべての所で。

わが魂よ、エホバを讃美せよ。

最後にまた最初の言葉にかえっている。まさにこれ円環関係になっていますね、すばらしい詩だね、これは。個から民族、人類にきて天地に突き抜けちゃった。まあこんな詩篇はちょっとないですよ。私は驚いたね。

今朝読んでいて、ああこれだ、これだと！　実はきのうからどれにしようかと思ってたんだ。今朝、これだ、これだって、そういうことなんですよ。とにかく、そういう詩篇第一〇三篇というのは、これは「旧約の福音」、この題が一番いいと思ったです。旧約に現われているところの福音、実に深遠にして壮大だからね。パウロとヨハネを一緒にしたようなことを言っている。これがダビデならダビデはすごいなあと思うけれども、出バビロニアが入ってくるところはダビデではないですよ。大体ここに出てくる詩は、相当預言者の言葉と同類のものが出てきてるから、これは預言者と同列のだれかが書いた。第三イザヤと同列のような人が書いたんでしょう。あんたがたは楽しくならなかったですか。

（一九七六年一一月二一日　東京キリスト召団武蔵野幕屋日曜集会、録音による）

第五卷

（珠玉的詩篇　十篇）

詩篇第百十三

1 ハレルヤ！
エホバの僕らよ、讃めまつれ、
エホバの聖名を讃めまつれ！
2 今から永遠に至るまで、
エホバの聖名は讃め称うべき哉。
3 陽の昇る方からその沈む処まで
エホバの聖名は讃められよ！
4 エホバはすべての国民を越えて高く、
その栄光は諸天の上にある。
5 誰か彼我らの神エホバに類うべき者ぞ！
坐しては高きに居り、

1 「ハレルヤ」（ハレルー　ヤー）「君たちヤハウェーを讃美せよ！」
ホードゥー「エホバに感謝せよ」とかハレルヤー「エホバを讃め称えよ」とかいう語は詩篇のそこここに見られるのであるが、特に「ハレルヤ歌集」Hallel-psalmen としてとりあつかわれているものは、第一一三―一一八篇である。そしてこの六篇は、礼拝用の詩篇として重要なものであったと思われる。
即ち過越祭（旧約外典第一マカビ書四・五二―五九、第二マカビ書一〇・六）、新月の節会（アモス書八・五、イザヤ書一・一三）等に歌われた。過越祭を行うときは、詩篇一一三、一一四が食前に、食後第四の満杯のときに、詩篇第一一五―一一八が歌われる。
この例に倣って、イエスはその弟子たちと、過越祭の決定的なものであったところの「最後の晩餐」を催されたときに、これらの詩篇を歌われたと思われる（マタイ伝二六・三〇、マルコ伝一四・二六参照）、これらの詩篇はそのとき新しい響きを齎らしたであろう。
万国の神と万人の解放を詠っているこの詩篇は疑いもなく捕囚時代以後の作である。旧約の「ハンナの祈り」（サムエル前書二・一―一〇）と新約の「マグニフィカート」（ルカ伝一・四六―五五）との橋としてこの詩篇を見ること（ベローン）は興味ある見解である。

6 顧みては低きに降り給う者ぞ、
　且つは天に、且つは地に。
7 彼はつまらぬ者を塵から擡げ、
　まずしき者を芥から揚げて、
8 諸々の侯と共に、
　その民の諸侯と共に坐らせ給う。
9 孕みなき女を家に住まわせ、
　子らの母として喜ばしめ給う。
。ハレルヤ！

第百十三篇　降臨の神

神の聖名の讃称を三唱しているところ、集会礼拝にふさわしい形を有っている。しかし形をつき抜けた生命がうちに躍動している。それは「エホバの僕らよ」という新しい自覚に動いている。国は北も南も相

継いでやぶれバビロン捕囚幾十年の辛酸を嘗め、神エホバに投げ棄てられたおのれらが、実は愛の鞭の下に深く顧みられている民であるという自覚に、今ぞ神の僕らとして神の命じ給うところを実践すべき使命的な自覚に到達したのである。単に選民であるという伝統の自覚ではなく使命の自覚、実存への自覚である。

つねに新たに「今」を自覚する者が「永遠」を有つ者である。現実はなお惨憺たるものである。しかしこの惨憺たる現実の「今」直ちに聖名を讃美しよう。国の破れが何であるか。社会の欠陥が何であるか。自己と社会の相対面にのみ執するあわれむべき人間の二次元性よ！　かかる相対面の直接性からは真の解決への道は拓かれない。絶対次元に実在する神を忘れたか。未だ気がつかないのか。「陽の昇る方からその沈む処まで」、然り、全世界到るところに於て、この啓示の神の聖名がまず「今」讃えられねばならない。神を讃美するとは、自己とこの社会とこの世界のすべての自己主張を先ず否定してかかることである。この世の論理と要求と問題とを先ず放棄して、何はともあれ、神を讃美するというのである。神を讃美するとは神を義とし奉ることである。一切のことはそこから始まる。

福音の命ずるところと、文化文明の問うところとはこのように先ず逆行する。その尊厳は万民の上に在り、その栄光は九天の上にある神といえば、現代人には関わりない敬遠の神であろう。だがこの崇高な神が一たび我らを「顧み」給うときは「低きに降り給う」。「坐しては高く天に在り」「顧みては低く地に降る（イザヤ書五七・一五）神である。この詩的表現が意味する真の啓示の神がどんなに素晴らしい現実を

現じ給うかを想い見よ。

神が地に降って我らを顧み給う。啓示の神は正に降臨の神である。そして「つまらぬ者」、世にその存在を無視されているような人々をその「塵から擡げ」、「まずしき者」、あらゆる意味でみじめな人々を、その「芥から揚げて」、世のあらゆる権勢の者と同じにとりあつかい給う。また禍と恥との代名詞の如く見なされている「孕みなき女」が「子らの母」、ひとの子らの「心の母」たる祝福に与り得るように、この神は弱者を深く顧み給う。

真に個々人を愛惜し、一人一人を絶対視し、絶対に他のものを以て替えることの出来ぬ者として顧み給う神である。このような神を神として信ずることの出来ない所に、一切の現世的相対主義の禍根がある。人間的な比較論がいかにつまらぬものか、無意味なものか、没人格的なものか、神抜きの世界の論理であるかを、我々は神の「今」の終末面に於て徹底的に認識しなければならない。

この聖霊を以て我ら一人一人に身親しく降臨して語り給う神、この神との親交なくして何の実存共同体ぞや。社会問題ぞや。この神を斥ける他者たる社会に対して、この神を受ける信仰者が社会面政治面に於て実存せんとするとき、その信仰者は、この神と共に下降し、この悪の幕屋たる社会の底の支柱、隅の首石の役割を担わねばならない。それは決して同一平面に於てではない。信仰者は「神の僕」としてつねに世とは否定の否定面に立つ。即ち神の「さばき」の義と「ゆるし」の愛の矛盾を「砕け」（イザヤ書五三・一〇）に於て担わねばならない。真の解放と自由と平安とはこの降臨の神の力による。イエス・キリ

ストが降りて我らのどん底となり給うている愛によってのみこの世が終末的に支えられていることを世は知らないのである。

「恵福なる哉貧しき者よ、神の国は汝らの有なり。
恵福なる哉今飢うる者よ、汝ら飽くことを得ん。
恵福なる哉今泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん。」

（ルカ福音書六・二〇、二一。）

詩篇第百十四篇

1 イスラエルがエジプトを出で、
　ヤコブの家があだし言の民を離れたとき、
2 ユダはその聖所となり、
　イスラエルはその治領となった。
3 海は見て、逃げ去り、
　ヨルダンは後ろ(うし)に退いた。
4 山々は牡羊の如く躍る、
　丘陵は小羊の如く。
5 海よ、何でおまえは逃げ去るか。
　ヨルダンよ、何で後ろに退くか。
6 山々よ、何で牡羊の如く躍るのか、

　末尾の「ハレルヤ」は次の第一一四篇の冒頭に置かるべきものであろう。七十人訳聖書ではそうなっている。

3 「ヨルダン」（ハッヤルデーン）the Thames（テイムズ河）というように定冠詞がついている。ヤルデーンとは「下るもの」の意。ヘルモン山地に発し、パレスティナを北から南へ貫流する。その支流と共にこの地方の動脈をなす。全長二百余粁（直線）、全延長は四百余粁。落下九一四米。落差一粁に対して平均四・七米。幅二四―五四米、水深一・五―三・六米。北方のガラリヤ湖（またの名は、ゲネサレ、キンネレ、テベリア等）がすでに地中海海面下二〇八米、南方死海までは二一〇米も落下する。死海は地中海海面下三九三米で世界最低の湖面をもつ湖である。
　ヨシュアがモーセのあとを継いで「契約の櫃」を先頭にして渡ったのは、このヨルダン河が死海にそそぐ附近（ヨシュア三・一六）エリコの東方に当るところ。イエスが受洗したのもそのあたりであったと推定される。

丘陵よ、何で小羊の如く。
7 地よ、主のみ前に、
　ヤコブの神のみ前に震えよ。
8 彼は岩を源泉に、
　小石を水源に化し給う。

第百十四篇　出エジプト

出エジプト

「イスラエルがエジプトをいで、ヤコブの家があだし言の民をはなれたとき」（一）

もちろん、これは出エジプトです。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ。ヨセフが兄たちにエジプトに売られてですね、ヨセフのやからが三〇〇年位、エジプトで軟禁状態で、労働を強いられていたわけです。それを神様は、じっと見ておられて、イスラエルを救ってやろう、苦しみから解放してやろうと決意され、そこに選ばれたのが申すまでもなくモーセであります。

出エジプト記第三章。ここは旧約でも極めて大事なところです。モーセにホレブの山で現われた神さまは、棘（しば）の霊火の中に現われて、「モーセよ、モーセよ」と呼び給うた。「我はなんじの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と自ら名宣り給うた。イスラエルには、歴史という言葉はありませんけれども、明かに歴史的な神であることが、こういう宣言で、はっきりとわかります。

それで、「エホバ言たまひけるは我まことにエジプトにをるわが民の苦患を視また彼等がその駆使者の故をもて号ぶところの声を聞けり、我かれらの憂苦を知るなり、われ降りてかれらをエジプト人の手より救ひだし之を彼地より導きのぼりて善き広き地乳と蜜との流るる地すなわちカナンの地に導き入れん」という（出エジプト記三章七―八節）。即ち約束の地カナンへ連れて行くと、モーセに確約をされ、「我かならず汝とともにあるべし」と（一二節）。このことがしるしだから、お前を遣わす、と言い給いました。

同じく出エジプト三章一四節に、「我は有りて在る者なり」とありますが、これを「我は有りて在らしむる者なり」と私は読んでいます。神さまが在るということが、イスラエルの民、また全人類を在らしめている。これがヤハウェー神の聖名の真意と思います。

で、その神の恵みの意志によって、イスラエルの民がエジプトから脱出しました。この詩の冒頭「ベッエート・イスラエル・ミミツラーイム」は直訳すると「エジプトからのイスラエルの脱出に際して」ですから、まさに「イスラエルの出エジプトの時に」です。アブラハムが出ウルをしました。アラビアの北

部、チグリス、ユーフラテスの南方のウルを出た。そしてこのモーセの出エジプト。「イスラエルの民、ヤコブのいへ」と別の言い方をしているけれども、内容は同じです。ヤコブがすなわちイスラエルという名前をいただいたのですから。

「あだし言」、他国語のことです。すなわち、エジプト語の民、そういった民を離れた時。

神の聖所また所領

「ユダはエホバの聖所となり、イスラエルはエホバの所領となった」（二）

すばらしい表現ですね。ユダ、イスラエル、これは十二族の代表的な族ですから、やがて南方ユダの国、北方イスラエルの国ということになりますからね。ユダは、ヤハウェーの聖所（コーデーシュ）になる。「聖所」とは「聖とする」（カーダシュ）という語源から来ている語です。幕屋の聖所または至聖所ですね。やがてそれが神殿宗教となると、神殿の至聖所になるわけですけれども、ここでは、ユダという民が、すなわち「聖所」となったという言い方をしている。これは極めて注目すべきことばです。

またイスラエルは、エホバの「所領」（メムシャーラー）となった。「所領」とは「支配する」「統治する」（マーシャル）という語源からできた名詞です。英語でいえばドミネーションですね。即ちそのすべておさめるところ、その所有するところとなった、と。詩篇第一六篇にも似たような言葉があります。「エホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり」（詩一六・五）と、すごいことを言っています。すなわち、汝はわがもの、我は汝のものとの、非常に深い神との間柄。また、「われよき嗣業をえたるかな」

という言い方が六節に出てきます。パウロがコリント書簡で、「汝らは神の宮にして神の御霊汝らの中に住み給う」（コリント前書三・一六）といっているように、汝らは活ける「神殿」であります。このような表現は、パウロが旧約のこういうところを新約の角度から受け取っているというわけです。そういう神との「我は汝のもの、汝は我がもの」というような深い相互関係において、出エジプトの事態を力強く語っている。この一節、二節は、イスラエルの歴史に於ける決定的な一つの段階で、それを非常に内面的に強くとらえ、且つ表現しているわけです。

紅海は神威を怖れ、ヨルダンも退いた

「海は見てにげ去り」（三a）。

すなわち、イスラエルの民が出エジプトする時に、紅海は、モーセに現われた神威を見て畏れ、そして逃げた！「海は見た」（ハッヤーム・ラーアー）とただ書いてあるのです。そして逃げちゃったと。すなわち、波が二つにわれて、そしてその中をイスラエルの民が通って行ったという、あの有名な「十戒」の映画にも出てくるようなすさまじい光景を呈した。そういうようにして、イスラエルはものすごい霊的な現象を通して救われたが、追跡して来たエジプトの軍勢は、また波がもどって来たので、みんな水の下に溺れ死んでしまったと、こういうわけです。

「海は」というところは、出エジプト記の十四章の一三、一四節、「モーセ民にいひけるは汝ら懼るるなかれ、立てエホバが今日汝等の為になし給はん所の救を見よ、汝らが今日見たるエジプト人をば汝らかさ

ねて復これを見ること絶てなかるべきなり。エホバ汝等のために戦ひたまはん汝等静りて居るべし」。また「汝ら静まりてわれの神たるを知れ」と言うのが詩篇四六篇の一〇節にありますが、それと相呼応するようなことばです。静まって、祈りをもって、静かな祈り心で、神様のなすところを見ろ、と。

それで、モーセは、本当に、「モーセ手を海の上に伸ければエホバ終夜強き東風をもて海を退かしめ海を陸地となしたまひて水遂に分れたり、イスラエルの子孫海の中の乾ける所を行くに水は彼等の右左に墻となれり、エジプト人等パロの馬車騎兵みなその後にしたがひて海の中に入る。ところが、暁にエホバ火と雲との柱の中よりエジプト人の軍勢を望み、エジプト人の軍勢を悩し、其車の輪を脱して行に動くならしめたまひければエジプト人言ふ我等イスラエルを離れて逃ん其はエホバかれらのためにエジプト人と戦へばなりと、時にエホバモーセに言ひたまひけるは汝の手を海の上に伸て……云々」と（出エジプト記十四章二一―二六節）。そうしたら水がかえってきて、みんな溺れちゃったと、非常に劇的なことが書いてありますね（二八節）。この記事によって、いかにして海が逃げたかがわかるわけです。

「ヨルダンは後に退いた」（三b）。

このところは、ヨシュア記の三章七節以下からずっと書いてあるんですけどね。一三節に、「全地の主エホバの櫃をかつぐところの祭司等の足の裏ヨルダンの水の中に踏みとどまらばヨルダンの水上より流れくだる水きれとどまり立てうづたかくならん」と、ヨルダンの水がそういうことになる。それで、そのことは事実、一七節、「即ちエホバの契約の櫃をかつげる祭司等ヨルダンの中に乾ける地に堅く立をりてイ

スラエル人みな乾ける地を済りゆき遂に民ことごとくヨルダンに済りつくせり」。ヨルダンを渡る時も、そのように水がとまっちゃった、と。「ヨルダンは後に退いた」というのは、そのことです。

シナイの連峯は躍った

「山山は牡羊のごとくをどる」（四a）

「山」というのは、シナイ山のことです。漢文の聖書を読むとね、この山は「大山」と書いてある、「大山は牡羊のごとくをどる」と書いてある。

「丘陵はこひつじのごとく」（四b）

しかしこの「山」も「丘陵」も複数なんです。シナイ連峰のことを言うんでしょう。「ヘ・ハリーム」定冠詞づき男性複数形になっている。「丘陵」の方は女性複数形「グバァーオート」となっている。

これはモーセの契約のしるしとして十戒が与えられた、その大事な事態を、山は牡羊のごとくをどり、丘陵はこひつじのごとく躍った。彼らはエホバの法をさずかった。けれども民は必ずしも、モーセの神の啓示をモーセの角度から受け取らない連中がいて、金の牛の像なんかを造って、偶像崇拝をした。彼らが、またいかに審きにあったかということも書いてありましたね。

「海よなんでおまえはにげ去るか」（五a）

これは神様の威光によってにげた。

「ヨルダンよなんで後にしりぞくか」（五b）。

やはり神さまの霊に圧倒されたわけですね。あるいは、神の神命に従った。キリストが嵐に、静まれ！と言われれば静まったのと同じことです。

「地よ主の御前に、ヤコブの神の御前に震えよ」（七）

「天よ開け」とか「地よおそれよ」とか、よく預言者が天地に向って語っていますが、この詩篇も、そういった角度。大体、詩篇というのは、預言者と通ずるものがしばしばあるわけです。

岩は池となり、石は泉となった

「彼は岩を源泉に、小石を水源化し給う」（八）

妙なことが書いてある。

「彼は岩を源泉に」かはらせるというのは出エジプト記十七章。これは、もちろん曠野の旅のことですが、「イスラエルの子孫の会衆エホバの命にしたがひて皆シンの曠野を立出で旅路をかさねてレビデムに幕張せしが民の飲む水あらざりき是をもて民モーセと争ひて言ふ我等に水をあたへて飲しめよモーセかれらに言けるは汝ら何ぞ我とあらそふや何ぞエホバを試むるや彼処にて民水に渇き民モーセにむかひて呟き言ふ汝などて我等をエジプトより導きいだして我等とわれらの子女とわれらの家畜を渇に死しめんとするや、是に於てモーセエホバに呼はりて言ふ我この民に何をなすべきや彼等は殆んど我を石にて撃んとするなりエホバモーセに言ひたまひけるは汝民の前に進み民の中の或長老等を伴ひかの汝が河を撃し杖を手に執て往よ視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐の上に立ん汝磐を撃べし然せば其より水出ん民これ

を飲べしモーセすなわちイスラエルの長老等の前にて斯おこなへりかくて彼その処の名をマッサと呼び又メリバと呼り是はイスラエルの子孫の争ひしに由り又そのエホバはわれらの中に在すや否やと言てエホバを試みしに由なり」（一―七）。「マッサ、メリバ」というのは、「争い、試み」という字ですが、そういうような奇跡的なことが起きたのです。こういったようなことは、法然でも、親鸞でも、日蓮でもやってるです。パウロが、この岩はキリストであった、なんて言うことを言ってましたね、コリント前書十章三節、「而して皆おなじく、霊なる食物を食し、みな同じく霊なる飲物を飲めり、これ彼らに随ひし霊なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき」（三―四）。これは出エジプトのことが背景になっている。

「彼は岩を源泉に、小石を水源に化し給う。」そこは源泉滾々たる活水の地となった。要するに水のほとばしりの事態を言っている。

出アダム、出現世！

以上が、ざっと詩篇一一四篇の、歴史的な解釈であります。ところで詩篇一一四篇を、我々の問題としては、いかに読むか。イスラエルの民がエジプトを出た、ヤコブの家があだし言の民を離れた。新しい年を迎えて私たちは本当に霊的な出エジプトをしなければならない。地上の相対的な現実にありながら、我々は、この世の民ではない、「わたしの国はこの世の国ではない」とキリストが言われた。パウロも「わが国籍は天に在り」と言った。霊的出エジプト！　地上にありながら、実は、天国人である、出現

世！　現世にありながら現世を出でたるもの、移りゆく世にありながら移ろわざるところの世にある者。すなわち我々は出現世の天国人。その質は、永遠の生命を持っている、滅びない。出現世の焦点は何か。それは出アダム！　生れながらのアダムを乗り越えたもの。第二のアダムであるキリストに属するものは、出アダムであります。生れつきの自己を立ち出でたるもの。「われ生く、しかし最早我にあらず、キリストがわが内に在りて生き給うなり」というのが、この出アダムたる霊的現実であります。その祈り心が南無キリストなのです。

新年というけれども、また新年も古くなる。そういう「新」はネオスですが、古びない「新」がある。この「新」の字はカイノスで、このカイノスの新しさ、古くなっても決して古くならない新しさ、質的な新しさ。質的な新しさというのは、これは出エジプトをしなければ、出アダムをしなければ出てこない。我々が新年を迎えて、いよいよその自覚を新しくする。すなわち、出現世である、出アダムである。これは、イスラエルの民、エジプトを出でし時という歴史的なものを、更に霊的に受け取った事態である。

活ける神殿

「ヤコブの家があだし言の民をはなれたとき」。今度は、地上のなに語でもない。日本語でもない、ドイツ語でもなければ、英語でもなければ、ヘブライ語でも、ギリシャ語でもない。万国の根源の言葉たる霊言をもつ霊民となる。即ち神の聖民（みたみ）で、聖民とならなければ聖書（みふみ）はわからない。聖書は霊言の本ですからね。万国語の奥の語が聖書のヘブライ語、ギリシャ語の奥にひびいている。いつも

私が言っている根源語です。キリストは地上ではアラミ語を語られたでしょうけれども、そのもう一つ奥の、根源の言葉（ウル・ヴォルト）をアラミ語を通して実は語っておられたのです。「儀文は殺し、霊は生かす」とパウロが言った霊言です。聖書の言葉を本当に生かすのは、この御霊です。「イスラエルの民エジプトをいで、ヤコブの家あだし言の民をはなれたとき」というのは、我々にとっては、そのような出アダム、出現世の民となり、根源の言葉を語る、聞く。そういう民となる。その時に、あのユダやイスラエルのように我々は、神の聖所となり、神の所領となる。

我々は現に天国人であります。「こんな神殿、何十年かかったか知らんが、壊せ！　わたしは三日で建てるぞ」とキリストは言われた。三日で建てるというのは、すなわち、「三日目に自分は活ける神殿となって、よみがえるぞ！」ということでした。無教会とか無神殿とか言っても、自分が活ける教会に、活ける神殿にならなければ空しいことになります。私がキリストを「無者」と申すのは、無者たるキリストこそが無限無量であるからです。

私たちがもし、そういう活ける神殿であり、神の活ける宮であり、聖霊の宮でなかったら、空しいです。み霊の内住こそが本ものなら、いつどこででも自ら神殿であります。だから、「ユダはエホバの聖所となり、イスラエルはエホバの所領となった」というのは、非常に愉快なことばです。新約の光で読むと、「汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか」（コリント前書六・一九）であります。それゆえキリストとの関係は、「われは汝のもの、汝はわが有（もの）」で

あって、キリストに向って、これが言えるわけです。これが恩寵の現実です。

躍動前進せん！

だから紅海の海も、ヨルダンの川も、おどろき、退き、シナイの山々もみんな歓び躍った。新しき年を迎えての喜びは、この現実に入らなければ本当の歓びにならない。だから、踊る宗教なんてあるけれども、あれは、ある意味において自然の現象なんです。ただ踊るために踊ったのでは困るけれども。

そのように岩石も動物も植物も、また、山も川も、海も、大いに讃美し、躍動したというならば、況んや我々人間は本当に神の歓びの器となり、躍動して前進せずばあらず！　であります。だから、私は、今日、「躍進！」と言った。そのような出エジプト、ヨルダン突破。出アダム、出現世をしよう。本当の躍進、また躍進です。この一年を、その力をもって躍進して行こう。何ものも恐れることはないです。だから、渇いても、どっこい泉が湧いてくる。石かと思ったら、それはキリストだった。そこから泉が湧いていた。と、パウロが言った通り（コリント前書一〇・四参照）。

出アダム、出現世をしながら、本当の根源の言葉を聴きながら、ただちに霊的な力を賜りつつ、霊歌現象の歓びの歌をうたいつつ、躍進、また躍進をして行こう。そして、モーセが紅海を渡ったように、ヨシュアがヨルダン突破したように、神の力で、そのように我々は神の霊的恩寵力のもとに、いよいよ躍進、また躍進していく。また、せざるを得ない。これが年頭の所感。所感といったって、いわゆる所感ではないですよ。年頭の実感であります。そのようにして皆さんと進んで行く。

こういうわけで、毎回が我々にとっては、力なんです。正直、私は語りながら、そういう状態に入っているわけです。どうぞ、どんな現実が来ても、キリストは助け給う。一切の行き詰ったところで、丁度イスラエルの民がやっつけられようとした瞬間、どっこい、海を渡っていったように、絶すると、逆に驚くべきことが開かれてくる。だから、「せん方つくれども希望を失はず、責められども棄てられず、倒されるれども亡びず」とパウロが言った通り。それでなくて、何の信ぞや、何の現ぞやです。

だから詩篇一一四篇をダンテが出地獄のあかつきに
舳には、その浄福を記せし如く
　見えたまふ天の舟人立ちまして
　その中に坐れる霊は百にあまれり。
『イスラエル、エジプトを出でし時に』と
　一同は声をそろへて歌ひけり、
かの詩篇に書かれたる残りとともに。　竹友藻風訳（ダンテ『神曲』煉獄第二曲四三―四八行）

と高らかに詠ったように、我らも旧き年を越えて、年頭に詩篇一一四篇を詠いつつ躍進します。

ハレルヤ！

（一九七七年一月二日、於東京キリスト召団新年祈禱集会）

第百二十篇

(1) 宮のぼりの歌

1 エホバをわが苦悩のさ中に在って
　呼んだ。彼は応えて下さった。
2 「エホバよ、わが魂をいつわりの唇から
　あざむきの舌から助け出して下さい」
3 おまえに彼が何を与えるか、何を加えるか。
　あざむきの舌よ！
4 鋭き勇士の矢と金雀花の炭火をこそ。
5 禍なるかな私、私はメセクにやどり、
　ケダルの幕屋べに住んだから。
6 わが魂は平和を悪む者とただ独り永く住んだ。

(1)「宮のぼりの歌」この詞書を有つ歌は本詩第一二〇篇―第一三四篇まで十五歌連続して一小歌集をなしている。第一三二篇を例外として、何れも十節以内の短詩である。しかし内容は必ずしも同種類ではない。

原語「シール（歌）・マアロートゥ（宮のぼりの）」マアロートゥは「のぼり」を意味する語で、この「のぼり」が何を意味するかが実は瞭かでない。ギリシャ語（七十人）訳聖書によれば、「オーデー（歌）・トーン・アナバツモーン（階段の）」である。両者の意を含めて意訳すれば、「階段を昇る時の歌」ということになる。即ち第二神殿（捕囚帰還後）に於てその境内の階段をのぼる時に唱われた歌とみられ、「宮のぼりの歌」とやや狭義に訳してみた。列王紀略上一〇・一九、二〇に「階級」とあるのがやはりこの語である。またミシュナー（モーセ律法の解説書）の中に「聖徒らは讃歌を繰返し歌った。レビ人は琴を手にして、イスラエルの殿域から婦人の殿域へ降りる十五の階段の上に立っていた。この十五階段は正に詩篇のこの十五の「マアロートゥの歌」の数に相応じている」とあるのは有力な証言である。即ち後期ユダヤ教に於て神殿礼拝の際にこの十五階段に立つレビ人主導のもとに歌われた歌の小歌集とみるのが大体事実であろう。しかし用途が此の如きものであるとしても、是らの歌の内容から判断すると、捕囚帰還の喜びを歌えるもの（詩篇一二六）、それほど明瞭でなくとも、エルサレムとかシオンとかを憧憬の中心としてそこ

7　私は平安。それで私がこれを唱えれば、
　かの者どもは戦争にくみする。

第百二十篇　戦争か平和か

この詩人の「苦悩」は何であったか。彼は多分戦争に敗れた種族の一人で、捕囚の身となり、奴隷も同然、ある時は黒海と裏海の狭間の山岳地帯にメセク族のもとに憂身をやどらせ、ある時は南方に移されてアラビヤの北部地帯のケダル族の黒き幕屋に労役の日を暮さねばならなかったのであろう。身は如何ほど拘束を受けようとも、彼の魂はエホバの神に在って自由であった。実に彼はその逆境に於てこそ神と最も内密な祈りの語らいをなし得たのであった。彼は苦しみの中にあって、その祈りが確かに聴かれていることを経験したであろう。神との親しき祈りの交りをなす者は、祈りが現実に終末的な完了の相において聴かれていることを経験する。それは現実にはその内容が実現しようとしなかろうと、それを乗り超えた高次の現実に関わる消息である。詩人の心を最も痛めたものは、四囲の民が「いつわり」[2]と「あざむき」[2]の族であることであった。戦争は自己弁護の美名のもとに行われる。虚偽は真理と氷炭相容れない。好戦の

に神を讃える傾向の詩が大部分である。かかる内容の面からみれば、是らの詩が「京のぼりの巡礼の歌」という意に解せられ得る。広義でやはり「昇りの歌」と言われ得るわけである。

族の間に住まうことは、その意味で彼にとって耐え難いことであった。神に信義を尽す者は「いつわり」に対して烈しい義憤を抱かしめられる。「いつわり」の魂胆は「鋭き勇士の矢」[4]を以て貫かれ、「金雀花の炭火」[4]を以て焼き尽されねばならない。この語は好戦の民、メセクとケダルの刃を逆手に使った痛烈な一撃である！　神による平和を来らせようとする民は、信義を重んずる。そこにまず平安がある。神の勇士ギデオンがこの「平安」を実証した（士師記第六章参照）。「私は平安」[7]アニー・シャーロームと告白できるためには、神の中に祈り入る魂とならねばならない。好戦者はサタンの手下である。平安者は神の族である。神霊の宿っている霊止である。平安に生きて平和ならしめんとするか。好戦に生きて戦争を誘発するか。世界の歴史は平和と戦争のドラマである。

2　「いつわり」はシェケルという語、セデク「義」とか、エムナー「真実、誠信」に対する。「いつわりの徒輩」（イザヤ五七・四）、「いつわりの舌」（詩篇一〇九・二等）。

3　「あざむき」はレミッヤー。この語は第一義的には「なまけ、おこたり」の意。それ故、いい加減なその場つくろいの気持から、「いつわり、あざむき」等の意となる。「その心にいつわりなき者」詩篇三二・二、「わが舌はいつわりを語らず」（ヨブ二七・四等）。

4　「金雀花の炭火」原語でローテムと称する灌木。パレスティナに幾種類もある。曠野地帯に生えるが、殆ど葉を有たない茎に、紫の条をもった白い蝶形の花が咲く。イゼベルに追われたエリヤが曠野の金雀花の下に嘆きし故事は有名である（王上一九・二以下）。遊牧の民は根を炭にして用いた。火力強く持久性がある由。

5　「メセク」正しくはメシェク。ノアの子ヤペテの子にあたるメセクの族（創一〇・二）。ヤワンやトバルの族と共にツロに対して奴隷売買や銅器等の商売をした（エゼ二七・一三）。黒海の南東沿岸から裏海との間の山岳地帯に住んでいたとされている。――「ケダル」創世記二五・一三によればイシマエルの次男にケダルというのがある。この族は北部アラビヤからバビロニアにかけて遊牧生活を営んでいた有力なアラブ族。特に紀元前八世紀頃からその名が知られ、その栄華は彼らの武力（主としてその強弓）によって勝ち得たるものであった（イザヤ二一・一六、一七）。彼らは黒い山羊の毛で編んだ強靭な幕屋に住んでいた（雅一・五）。村落的な生活をすることもあった（イザヤ四二・一一）。その豊かなる畜群は彼らの財であった。

第百二十一篇

(1) 宮のぼりの歌

1 「私は眼をあげるあの山々に。
どこから来るかわが救助。
2 わが救助はエホバからだ、
天地の創造主なる。」
3 「彼れは汝が脚を蹌踉に棄ておかじ、
汝が守護者は微睡給わじ
4 見よ！ 微睡まず、また熟睡り給わず。
イスラエルの守護者は。
5 エホバは汝が守護者、
汝が右手を蔽う翳。

1 「あの山々」が如何なる山々を指すかは不明。一般には「シオンの山」(詩篇八七・一、一二五・一、一三三・三)、ヤハウェーのみ座のあるところ(詩七八・六八)、そこより救助の出ずる処(詩三・四、二〇・二、一三四・三)と考えられているけれども、むしろ「イスラエルの山々」(エゼキエル書六・二)、「タボル、ヘルモン」(詩八九・一二)「バシャンの山」(詩六八・一五、一六)の如き山々であろう。二、三「わが救助」を「汝の救助」と二人称に読み変えて、巡礼者の問いに対する祭司の答とみなし、三節の「汝が脚」「汝の守護者」を反対に一人称に読み変える説(Bd. Gk. Gthm)がある。

4 「微睡む」ヌームは、精神の弛緩から来る眠り(イザヤ五・二七、ナホム三・一八)——「熟睡る」ヤーシャンは深い睡眠り(イザヤ五・二七、ナホム三・一八)——「熟睡る」ヤーシャンは深い睡眠である(創二・二一、詩一三・四、エレ五一・三九)。

5 「汝が右手を蔽うかげ」、朝日に向ったとき「右手の方」は南方となる。灼熱の陽光は南方から照りつける。それ故エホバが南方に立ち、陽光を遮って蔭となりたまう。

6　昼は陽が、夜は月も
　汝れを撃たず。
7　エホバは汝れを護って
　すべての禍害をまぬがれしめ、
　汝が魂身を護り給う。
8　エホバは汝が出入りを護る、
　今から永遠に！」

第百二十一番　神の護り

解説（其一）

この詩の作者は人生の旅をつぶさに経験し、多くの艱難の日を神に護られ切り抜けて来た人であろう。彼は今人生の遍歴時代を迎えんとして旅に就かんとする若き友に、その離別に際して筆を執りこの一篇の詩をはなむけしたのであろう。単純にして深き即吟である。後に「宮のぼりの歌」として用いられよう

6「陽が撃つ」というのは日射病（王下四・一九）。「月が撃つ」というのは西部インド、アフリカ、アラビヤの砂漠地帯で起る現象らしく、月神の祟りというような民間の迷信ばかりでなく、何か一種の精神病（マタイ一七・一五）。

と、この詩の原作の相はこういった極めて個人的な出来ごとの中にあったのであろう。真に普遍的なものは、その源泉を真に具体的な事象の中に有つものである。

若き友は今旅にのぼらんとして、憧憬の眸を故里の山々に向けた。幼きときより我が友たりし慕しの山々よ！　晨に汝らの嶺が朝暉にきらめくを望み、夕には残照にかがよう汝らの姿と祈りを共にしたではないか。歓びにつけ悲しみにつけ我を囲みて在りし山々よ。夏の真昼には白雲碧空をいただき、冬のあかつきには白銀の衣を纏うて崇高なる讃歌を息吹いていた連峰よ。わが救助の何処より来たるかを告げよ。その応答は大自然の胸底からと共に彼の心の奥底から湧きあがって来た「地の極の創造者」（イザヤ四〇・二八）にして「大空を幕屋の如く張り給う」（イザヤ四〇・二二）ヤハウェーの神、唯一の実在者我らの主、彼からこそ「わが救助」は来る！　然り、「天地の創造主」！　彼にわが全幅の信頼を投げかけ、誠信を尽せばよい。

青年のこの単純にして力強き信頼を心より喜んで、詩人はその詩の冒頭に共感措くあたわず之を掲げたのである。併し青年の多難なるべき旅路を想うて彼は、その路に神の護りの堅く親しくあらんことを祈る文字を、懇ろに且つ確信に満ちて綴った。わずか六節に「護る」という語がたたなわる波音の如く響いている。

汝は汝の路（「路」とは各人がその足を以て歩むところを謂う）を汝の足を以て歩まねばならない。他人の歩み方の真似をしてあゆめるものではない。そのとき蹉跌は来たる。汝の「歩みを定むる」（エレ一

○・二三）者は汝の守護者たるヤハウェーである。汝は微睡むことあるとも彼は微睡み給わない。汝を護る者はイスラエル民族をその歴史を通して具体的に導き給うたヤハウェーである。この天地とこの民族を具体的な活動と啓示の場として、この自然と歴史とを神の行動と意志、審判と恩寵の現ずる場として自らを顕示し給うた神こそ、同時にまた汝一個の新しき神である。灼熱の陽光が砂漠の路を照りつける時、一本の木となって汝の南側に立ち汝の蔭となり給うはこの神である。行手を遮る猛獣、岩かげや樹間に待ち伏せする強盗より、汝の魂身を護る者はまたこの神の外にない。汝の一切の路に於て、それがエルサレムの巡礼の旅であろうと、人生の永き遍歴の旅路であろうと、汝が今この故里を立ち出でて、汝の魂の故里に還りゆく日まで、永遠に汝を護り給う者はこの神である。

汝は死に至るまで、然り死を賭してこの神に誠信を尽くすべきである。彼は死を越えて永遠に汝を護り給う。神の汝に対する誠は、神が汝を護るその護りは、汝の側の一切を越える。神の護りは汝の故にあるのではない。神の護りは神自身の愛と誠の故にあるのである。噫何たる圧倒的恩恵ぞや！　神の護りは我らをどん底より担う。

詩人は無限の想い遣りを以て「神の護り」をこの一篇に托した。この詩を懐にして人生の旅にのぼった青年はこの一人に限らなかった。その後いかに多くの魂がその如くこの一篇を力として歩いたことか。

一八四〇年十一月十七日の朝まだき、その父との生別を期し、心をこめて正にこの詩篇第百二十一と第百三十五を朗読し且つ祈りし一青年があった。彼はその朝グラスゴーを出帆して「暗黒の大陸」に福音を

齎らすべく船路に就いた二十七歳のリヴィングストーンであった。

解説（其二）

詩の本文は文語体（私訳）

1「エッサー　エーナイ　エル・ヘハリーム」

「われはあぐ、わが両眼を、かの山々に、」

どういう山々をさしているかわかりませんけれども、イスラエルはちょっと見上げると、すぐ山が見えるわけで、これは詩篇八七篇、あるいは一二五篇にあるシオンの山かも知れません。エホバの御座のあるところという気持も含まれるわけですね。イスラエルの山々という言い方がエゼキエル書六章二節にあります。あるいはヘルモンの山、バシャンの山、まあいろいろありますけれども、これは「巡礼の京もうでの歌」となっているんで、大体シオンの山で、それを荘厳の複数で言ったというような気持にとっていいかと思います。啄木の歌にもあるように、もちろん故郷の山は非常に慕わしいものです。故里の歌は、多くの有名な歌があるように、詩人はエルサレムをたましいの故里として歌ったのでしょう。それが同時に京もうでの歌でもあるわけでしょう。

「自分は目をあげる、かの山々に向って」、目をあげるという言い方は、仰ぎ見るというよりも強い表現でしょう。

「いづこより来たるか、わが扶助。」

これは自問自答とみて結構なんですが、問答体にみる学者もいるわけです。そうすると二節はですね、

2「わがたすけはエホバよりぞ、天地の造り主なる。」

「わがたすけは」というのを「汝の助けは」と。「わがたすけはどこから来るか」と言った問に対して、「汝のたすけはエホバからである。天地のつくり主からだ」と。巡礼者の問いに対して祭司がそういうように答えてる。

この詩篇はそういうような問答体で使われたかも知れません。しかしテキストとしてはやはり「わがたすけはエホバより」で、私はテキストのまんまで結構だと思ってますけれども、自分で問いかけるようにして、実に「わがたすけはエホバ、天地の創造主であるところのエホバから来る」と。「天地をつくりたまへる」というこの「つくる」という字が創世記の創造するとはちょっと違うんです。正につくるという「アーサー」「造る」と言う言葉ですけども、「バーラー」創造する、という字じゃないのですが、天地のつくり主なるエホバから。

3「彼汝(な)が足をよろめきに棄ておかじ、汝(な)が護(まも)り手は微睡み給わざれ」

三節から一番終わりまで、これがみんな「汝」になっていますね、自分のことを汝という言い方もあるわけで、そうすれば全部、これはその作者が「われ」といって、今度は自分に呼びかけて「汝」と言っている。そういう自問自答で一向差支えないです。

論理的に見る人は二節を別な人が言って、三節がまた自分が言うと。それだから、「彼汝が足をよろめきに棄ておかじ」というのは、「彼わがよろめきを」と一人称に変えてしまうといったような見方をする人もいますが、まあそうしなくてもいいですね。一人称と二人称では語尾が、相当かたちが違いますからちょっと無理です。

「棄ておくようなことがないように」、禁止の願望、あるいは命令の「アル」という字です。で、この三節はそういう意味ですね。「汝の足をよろめきに棄ておかないように、汝の護り手は微睡み給わないように」。

それで四節になりますと、今度ははっきりと「ロー」という字が使ってある。同じ否定でも、さきのは禁止の命令、願望の方ですけれども、こちらは禁止の断定です、否定です。詩篇の一篇に、「あゆまず、たたず、すわらず」と三回書いてありますね、あれはみんな「ロー」という字。それからモーセの十戒の「汝殺すなかれ、姦淫するなかれ」とあれはみんな実は「ロー」なんです。だから私は、「汝は殺さない、姦淫しない、盗まない」と。むしろ断定的な言い方だと言いたいわけです。

4「視よ微睡まず、また眠り給わず、イスラエルの護り手は」。

視よ彼は微睡まない、ロー・ヤーノープというのですから、微睡まない、また眠らない。仮睡もしなければ熟睡もしないというわけです。両方とも強いから「ロー」という字。だから視よ微睡まず、また眠り給わず、イスラエルの護り手は。

この詩篇には「護る」という字が沢山出てくる。「シャーマル」という字ですが、名詞の「護り手」のときは、「ショーメール」と言います。現在分詞なんです。わがショーメール、われを護り給う者。

それから「眠る」というのは、もちろん精神的にぼやぼやしていることが「眠る」というわけです。居寝り運転なんてのは「微睡む」方です。

5「エホバは汝のまもり手、汝の蔭にして汝(な)が右手(めて)の方(かた)にあり」

仮睡もしなければ、熟睡もしない人。よく目覚めておられる。逆に言うと、神は目覚めている、覚醒しておられる、「覚者」である。

「汝が右手の方にあり」ということはね、朝日は東から出ますね、朝日に向かって右手という意味なんですね。そうすると南方にあるということです。灼熱の日が南から照ってきますから、神様はその灼熱の日を、砂漠の太陽はすごいですね。南の方に立って陽光の蔭になって下さると。それはちょうど木蔭に宿るように。やっぱりイスラエルは暑いですからね、三月でも泳いでいますから、亜熱帯地方です。そういう砂漠の経験からこういう言葉が出てくるわけです。「汝が護り手、汝の蔭にして」ということは南に立って蔭となって下さると。

6「ひるは日夜は月をして、汝を打たしめず」

ひるは日射病が、夜は月射病が汝を苦しめない、というのです。アフリカやアラビアでは、砂漠で起こる一つの現象、一種の精神病にかかるらしい。だから日の炎熱にも、夜の妙なうす気味悪い青い光にも、

そこなわれない、というのです。

7「エホバはすべての禍害より汝を護り、汝の魂身を護り給はん」

「汝のいのち」と私が訳したのは、魂と身体の両者をふくんだ意です。「ネフェシュ」という字ですから、これはソール（魂）とボディ（身）と両方をひっくるめた気持ですから、魂身と訳したんです。それで魂身と読む。霊という字はネフェシュでなくてルアッハです。で、ソール　アンド　ボディは「汝自身」なんていう時の「自身」と思ってよいわけで、「自身」というときこのネフェシュという字を使うことがあります。

8「エホバは汝の出づると入るとを護りて、今よりとこしへにいたらん」

出づるも入るも、往きも帰りも、神様はすべて護り給う、というわけです。

以上で一応言葉の上の解説を終ります。

運命と信仰

で、我々のこの人生には、まあいろいろな外的な障害や患難、内面的な悩み、苦しみが去来してこれを経験しない人はないわけです。まあそんなわけで、いろいろな護符なんてのがあるわけです。生年月日と十干十二支の組み合せや黄道十二座との関わりなど、易道がある法則を判定しているというわけです。人相、骨相、手相など、いろいろ法則を考えているわけです。これらのことは馬鹿にならないです、霊的な感覚のある人がこれらの判定と似たようなことを言うから決して馬鹿にはならない。

そういうわけでありますけれども、神の護り、我々が信ずる神の護りというのはね、これは人生の波、高い時と低い時と、まあいろいろありますが、即ち運命の満潮、干潮がありますが、それに左右されることなく、確実に護って下さる。運命の高潮のときは積極的に進み、干潮のときはじっと静かにしているものだ、といったことは、一応の参考になる。ただし、それを宿命的に考えちゃいけない。信仰の力で、それに如何に対処するかが肝腎なことです。何事も例外はある。また例外でなくとも、この法則に対して別な法則がある。それは信仰の世界の霊法で、霊法の世界に対する心の態度は平伏しの無心です。運命、環境に順応しながら、それを乗り越えてゆく、相手を包んでしまう。そのこつが分ってくると、これはパウロが言っている通りの、「一切の秘訣を得たり。」になる。苦しみにも、悩みにも、悲しみにも、喜びにも、有るにも、無きにも、行きつまりにも、迷いにも、そういった一切の状況や運命に対して対処できる。それは如何にして可能か。

柔軟心と金剛心

それには柔軟な心が大切なのです。水や空気のように順応して相手を包んでしまう。それと同時に内側に金剛心がなくちゃいかんです。何ものにも屈しない心です。柔軟心と金剛心は矛盾しないです。ダイヤモンドは何物よりも堅い。何がきてもこれは崩れないです。金剛心とダイヤモンド、矛軟心とコンニャク。別な比喩をもってくれば、火と水！　火と水はところが矛盾しない。何故か。霊の世界では聖霊はある時は火と言い、ある時は水というでしょう。この金剛心というのは火の如く熱い。柔軟心は水の如く自

由だ。

聖霊は火の如く燃え、水の如く湧き流れる。金剛心と柔軟心は即ち剛と柔、動と静。柔剛一如、静動一如！　これは御霊から来る。だから人生の諸々の患難、辛苦、苦悩、喜び、悲しみ、何でもいい、何でもござれ、これに対処していく。これは即ち、金剛心、柔軟心を持つところの御霊をしっかり抱かねばなりません。神の護りと言いますけどね、神の護りをただ外的に、御利益的に願っても、それはだめなんです。神様の護りはどうして受けるかと、自分の中に御霊を宿してそして金剛心、柔軟心となる時に、神の護りを本当に受け取ることができる。そうでないというと、神様はどうも護ってくれなかったとか、どうだこうだと。それは神様は護るんだけれども、こちらの心の受け方が悪い。聖霊に在るところの金剛心、柔軟心は時には外的な患難をも押えてしまうことがある。運命環境を変えることができる。従いながらそれを変えることもできる。聖意の中に投身した無的実存となっていると、不思議なことが起きる。決してこういう場合はこうだ、ああいう場合はああだなんて、そんなことを決めるわけのものではなく、カイロス（時機）が直覚できて、断乎として行動する。その力は上からやってくる。聖霊の力である。

そういうわけでありまして、なるほど神様の護り方、力の表わし方、お前はその時には剛で行けと。この場合は柔で行けという神様の上からの声が来る。神様はどんなところも突破させて下さる。イザヤ三〇・一五に「汝ら立ち帰りて静かにせば救を得、平穏にして依頼まば力を得べし」とある通り、またミカ三・八には「されど我はエホバの御霊によりて力身に満ち、公義と勇気衷に満つ」とあるが、そのような

境地が神の護りの現実であります。これをキリストに在って実存したのはパウロさんです。パウロはあの大伝道の苦難の途上で幾度彼は死にそうになったかわからない。コリント後書一一・二三―三三及び四・七―一〇の文字がその何よりもの証言です！　それでも尚彼は護られてきたというのは、本当に柔軟心と金剛心を御霊に於て戴いているからのことでした。最後は自分の生命を神に捧げる殉道となりましたけれども。殉道は天界への神の護り、相手は地獄へ落ちるまでのこと！　神の護りというものはそういう終末的な質を持っている！

護符などはいらない。御霊が護符であります。それを内に宿している。さきにも触れたように、そうすると正直、現実にもいろいろ不思議なことが起きて、間髪を入れざる時に、不思議な瞬間に助けられたり、不思議なものによって救われたり、ということがあるのです。

内接円関係

で、何と言っても失っていけないのは神との交わりです。神、キリスト、我のこの内接円関係、この内接円関係の一如の事態が現実となっていれば、いつでも護られて在る。本願の劫力が来ている。キリストの本願をいつなりともわが内にこれを祈り迎える。そういう魂の在り方、祈り心が大事なんです。

「われ山にむかひて目をあぐ、いづこよりわが扶助はくるか」という聖句を外的にとったらダメです。即ち、「天地を創造した神から」といっても、もう一つ、あなたがたはその先の答案が書けるかね、「われをつくり給いし神から」という告白です！　天地創造といって、外側ばかりじゃない。神様は天地創造の

最後に、人間を造ったじゃないですか、この私を造って下さった神様が護り給わぬわけはないんですよ。それが本当の信仰なんです。何のために護って下さるんですか、私の幸福のためですか、そうじゃないです。神の栄光のため、神の神らしさがそこに本当に現われるため。わが存在は神に於てある存在です。だから私たちは神に造られた。お父さん、お母さんから出て来たけども、けれども一番根源的な意味に於ては、質に於ては、神に造られてる。無理やりにそう思うんじゃないですよ。本当にそうなんですよ、神の創造による天下一品の一人一人です。霊止(ひと)っていうのは、霊が止まると書いたですね、神霊が止どまるところのさわぎじゃない。今度はみ霊によって浸透されてる。頭の先から足の爪先まで。これは神の似像たる神秘の消息です。

ところが人間の間違った在り方、やり方、神なき文化文明の公害現象。それに痛めつけられ、また自分の自我というやつが、本当の自由の妨げとなり、それがどうにもなんないから、キリストがとうとう贖って下さったわけです。神に造られた者らしく、その源のかたちに、姿に、質に回復して下さった。パラダイス・リゲインド（楽園回復）ということにして下さったのがキリストですから。だから神に護られてるということは、神様の絶対恩寵の意志です。「大丈夫だよ！」と。そういうように神に護られて、最後には地上から天界に揚げられる、何とありがたいことですか！

南無基督

この詩篇は、もちろん「京もうでの歌」ですから、シオンに向かって目を上げて、そっちの方へ巡礼し

て行く。これは旧約の世界だから、仕方がない。キリストはいつ、どこででも「我此処にあり！」といって下さる。「ゲリジムでもなければエルサレムでもない、いづこに於ても神を拝する時が来る。今すでに来ている」とキリストは言われた。至る処これ青山あり、至る処これ神の山なり。目を上げてみたところが、自分は山の上にいた、というもの。山はどこにあるでしょう、足下にあった。私は読んでいるうちに、だんだん天的現実に入れられてしまう。聖書から離れちゃうというのではなく、突き抜けちゃうですからね。文字の奥の世界に入ってしまう。私は、この天地創造の神様の大自然と融合する気持を持っています。大自然は我々の庭だから。だからすべっても、ころんでも私は聖手のうち。

炎天下でも、風雨の中でも、夜蔭の下でも、敵前においても、味方と思った裏切者からも、猛獣や毒蛇からも、病魔からも、神は護って下さる、聖霊うちに満ちている限り。万難突破の秘訣は、「南無妙法蓮華経」「南無阿弥陀仏」「南無基督」である！　ヒエロニムスも、アッシジのフランチェスコも、法然も、親鸞も、日蓮も道元も一遍も一休もみなそういう霊的現実を生きていた霊止でしたから護られていた！　ルターも「キリストという一言がサタンを仆す」と喝破しました。ですから本当に護られるためには、自分自身の内に本当に護り本尊を迎え入れていなきゃだめです。自分の中に守り本尊が来てなかったら、南無阿弥陀仏も、南無妙法蓮華経も、南無基督も力が無いわけです。だから一流の坊さん達が、ただ一念にそう想い、一言そう唱えれば、苦難は逃がれた。日蓮が龍ノ口で「南無妙法蓮華経」を唱えれば、斬ろうとした奴がぶっ倒れちゃったです。

いいですね。これが即ち、さっきから申し上げている御霊に於けるところの柔軟心と金剛心であります。人間は相対的には弱い者です。いわゆる精神も、肉体も、疲れたり参ったり、まあ、いろいろです。けれども、もう一つ奥の世界、何時、如何なる時に、何処に於ても、直ちに入れるという事態は、この深い祈りの世界をいつも持っているということです。

神に護られ、他人を護る

一八四〇年一一月一七日朝まだき、その父との生別を期し、心をこめて、正にこの詩篇一二一篇と一三五篇を朗読し、且つ祈った一青年がありました。彼はその朝グラスゴウを出帆し、暗黒の大陸に福音をもたらすべく船出しました。二七歳のリビングストンでありました。

リビングストンはアフリカへの旅の時に、この詩篇一二一篇と一三五篇をお父さんと読んでお別れしている。このリビングストンも非常な患難や危険に幾度も会いました。ある時は獅子に襲いかかられた。もうちょっとのところで獅子に裂かれてしまうところだった。獅子がリビングストンの肩のところに飛んできて爪をかけた。正に間髪を入れず、その瞬間に土人が射殺してくれた。それで獅子はぶっ倒れた。「使命のある限りは神様は護って下さる」と、その体験の後で彼はそう言ったそうです。東洋や日本へのあの大伝道者ザビエルにしたところで、みんな御霊の祈りの世界で護られつつ自分達の使命を全うしたわけですね。使命ある存在。我々の存在は使命がある。ただおもしろおかしく暮すために生きているんじゃない。存在が即ち使命。どうぞ皆さんは、この福音を受けたらば、とにかくこの生命を、この喜びを、この

力を、人に分け与えないではいられない。それが使命です。福音は福音すること。身をもってそれを人に与えて行くということ。存在が、そのような使命。他人を護り、他人を助け、他人を救う。

エホバの護り、神の護り、キリストの護りが、護って下さるのは何のためだ。神の栄光のため、聖名のゆえ。それはまたどういうことかと言うと、他人を救うことによって、他人を護ることによって、他人の蔭となり、木となってその蔭を宿すような人。泉となって人の渇きをうるおしてあげる人、暖炉となって人を暖めてあげる人。これが即ち、我々が護られることの真義であります。何故に護られるかと言うと、今度は逆に展開して、他人を護る人となること、そうならざるを得ないのです。もう詩篇一二一篇を越えてしまったです。旧約の詩篇は、私好きなんですけどね、御霊の世界に入ってきたら詩篇も時折ちょっと物足りなくなってきた。何か欠けているということは、やはり旧約の限界なんです。で、何と言ってもキリストの霊の世界、新約の世界は、結局一つの言葉で言えば愛ですけども、愛するということは本当に人助けをするということ。自分を捨ててかかるということ。そういう魂になればなる程、神様は限りなくその人を強うして下さる。また人の思いに過ぐる喜びが来ます。また神の栄光が現われてきます。詩篇一二一篇の神の護りは、わが内に神を宿す、キリストを宿すことに於て、御霊を宿すことによって、柔軟心、金剛心となって一切に対処し、且つまた、み霊にある柔軟心、金剛心を持って人を助けていく、人を護っていくというところに渾然たる構造とその内容が秘められてありました。

（一九七五年一〇月二六日の講筵に基づいて）

詩篇第百二十二篇

(1) 宮のぼりの歌、ダビデの。

1 「さあ、我らエホバの家に往こう」と
私に言う人々があって私は歓んだ。

2 エルサレムよ、汝が城門の中に
我らの脚は立っている。

3 エルサレムよ都城として建てられ、
共同体に結ばれたものよ。

4 其方に登って来たのは
諸々の族、エホバの諸族。
エホバの聖名に感謝するは
イスラエルの誡律。

3 「建てられ」（ハッベヌーヤー）を捕囚後のエルサレム再建の意に解するのが通説で（ネヘ一―七章参照）、はっきり「再建」と訳している学者が相当あるが、グンケル、シュミットは必ずしも賛意を表していない。――「共同体に結ばれたもの」は問題の句で、学者は夫々訳を試みている。正文を直訳すれば「其自身に対して共に結合されたもの」という関係文章。「その族そのうちに集りしもの」（グンケル）、「我らを糾合するもの」（エスターレー）、「それ（エルサレム）に彼ら（諸族）が同じ心で結ばれているところの」（ドゥーム）、「それ（エルサレム）の福祉のために共同体に結ばれているところの」（ケーニヒ）、「堅く石垣に囲まれたる」（シュミット）、「裂けも崩れもなき」（キッテル）、等々訳は区々であるが、エルサレムの物的構成の堅固さか人的構成の近密さか何れかに関わる。拙訳は人的構成の意にとり、期せずしてケーニヒの訳に近きものとなったが、物的要素にとることも充分可能である。

4 誡律（エードゥートゥ 'edûth）出エジプト記第二十五章にある祭司典記事（P）の「律法の櫃」の「律法」はこの語。即ちモーセ律法を総称的に指す場合（詩一九・八、一一九・八八、一三二・一二）とこの詩に於ける如くそのうちのある誡律を指す場合とある。現行訳「證詞」は誡律を遵る側から考えられた訳語であり、「誡律」は神の要求を基とした祭儀的誡命としてとられた訳語である。

げに彼処には審判の宝座が、
ダビデの家の宝座が据えられてある。
エルサレムの平安を祈求めよ、
「汝れを愛する者ともに安泰あれ。
平安は汝が石垣の中に、
安泰は汝が殿堂の中にあれ」と。
わが兄弟、わが隣人のため、
私は言いたい、「平安汝れにあれ！」と。
われらの神のため、エホバの家のため、
私は祈求めたい、「善福あなたに在れ！」と。

第百二十二篇　わが愛エルサレム

詩篇第一二〇が悪の幕屋、不信の世界に投げだされた者の霊的な戦を語る信仰の現実であるならば、詩

6「汝れを愛する者どもに安泰あれ」（イシュラーユーオーハバーイク）「汝れ」とはエルサレムのこと。これを「汝の幕屋に安泰あれ」（ヨブ一二・六参照）とよむ学者もいる（Ew. Dh. Gk. Kl.）即ち「幕屋（複）」は「オーハラーイク」で似ているから。しかし正文のままがやはりよいと思う（LXX. Wei.）

篇第一二一はエルサレムに向う巡礼者の、また人生の目的を目指して発足した旅人の信頼の歩みを描く希望の現実であり、第一二二は全イスラエルの魂の都であるエルサレムに到り着いた者の歓呼と限りない愛着を謳う愛の現実である。

これをまた神の側から見るならば、前者は信仰の戦をした者への救贖の現実であり、中者は希望に歩む者が神に護られた恩恵の現実であり、後者は目的の国、神の都に平安を与えられた者の終末の現実である。三歌相連って三部作曲を作す（Bar.）。これはまた偶然であるとは思えない。これは実に個人の人生史を語ると同時に幕屋の民イスラエルの救贖史であり、神の民エクレシヤの三現実相を標示するものである。

エホバの神への活きた信仰は失せ、モーセ律法の伝承は忘れられ、神殿の周辺は穢されて、救い難くも堕落したイスラエルの民は、痛憤と悲哀の預言者エレミヤの嘆きの中に滅亡と捕囚とを刈りとった。エレミヤはしかしある時こんな言を遺した、「エフライムの山の上に守望者の立ちて呼ばはる日来らん、曰く、汝ら起てよ！　我らシオンにのぼりて我らの神エホバに詣でん」と（エレミヤ三一・六）。

そしてこのエレミヤの深い愛の預言は、その後、幾十年、捕囚帰還後のある者によって応えられた、曰く、「さあ、我らエホバの家に往こう」と。これを聞いた詩人は歓び勇んで相携えて旅に登った。愛慕の都エルサレムに来て見れば、かつて黄金時代を誇ったダビデの都の面影がどことなく偲ばれるではないか。城門は整い、石垣も修復し、都市の様相は「共同体」と呼ばれるに相応しく結合されて頼母しい。

今ぞ神殿は厳かに鎮座し、神々しい平安がエルサレムに漲っている。歓喜に溢れて、彼は畳みかけるような語調でエルサレムとそのすべてのために平安を祈る。

神の都、エルサレム、「平安（サレム）」の礎（いしづえ）。年に三度びは、イスラエル諸族の参殿する大本山（出二三・一七、三四・二四、申一六・一六参照）。見ゆる神殿の現実に酔い、これを限りなく愛したユダヤ詩人の心。同じ心がキリスト教二千年の歴史を支配して来なかったか！　しかし生ける実在の神は、見えざるエルサレムから「限りなき愛を以て汝真誠（まこと）のイスラエルを愛して在り給う」（エレ三一・三参照）。ああ愛のなんたる矛盾ぞや、悲劇ぞや！　祭司的直接現実を預言者的終末現実に「転じた」（同三一・一九）決定的事実は起こらなかったか。イエスが自らの砕（くだ）けを通して神殿を砕き天上に「神殿なき」エルサレムを築き、地上に「霊と誠とをもって父を拝する」現実を開示し給うた恩恵にキリスト教界はいつまで冠と尖塔を加えようとするのか。

我らの弱きを知り給う神はキリストと共にその人に相応（ふさわ）しいエルサレムを与え給う。これは天上のエルサレムの無数の投影である。

第百二十六篇

(1) 宮のぼりの歌

1 エホバがシオンの命数を転えた時、
我らは夢見る者の如くであった。
2 その時の笑声はわれらの口に満ち、
歓声は舌にあふれた。
その時諸国の民が言った、
「エホバは彼らに大いなるわざを作した」と。
3 エホバ我らに大いなるわざを作し給うたので、
我らは歓喜の人となった。
4 エホバよ、我らの命数を転え給え、
南方の諸々の川の如くに。

1 バーネスは第一節の「エホバがシオンの命数を転えた時」を「エホバがシオンの帰還者と還り給うた時」と訳している。少しく大胆な訳と思うが、第二イザヤが「エホバの来臨」(イザヤ四〇・三、九―一一)を告げ、その神に伴われて出バビロンをした解放の道(紀前五三八年)を想えば、かく訳せないことはないのみか、行動的な啓示の事実に最も即していると思われる。普通は「シオンの運命を転じ給いし時」と訳すか、ベートゲン(Baethgen)、ドゥーム(Duhm)、ヴァイザー(Weiser)、グンケル(Gunkel)、ブリッグズ(Briggs)、メンゲ(Menge)或は「シオンの帰り来たる者を還し給いし時」といった訳で、デリッチ(Delitzsch)、シュミット(Schmidt)、ケーニヒ(Kônig)、エスターレー(Oesterley)等が大体この線の訳である。現行日本訳のようなのはカークパトリック(Kirkpatrick)である。詩篇八五・一に同様の問題がある。要之、「運命」「命数」「帰還」「捕囚」の原語の原形を「シューブ」「帰り来たる」と考えるか、「シャーバー」「捕え去る」と択るかによって読み方がいろいろになるわけである。

4 「南方(ネゲブ)の諸々の川」で、「南方」はユダヤの南方地帯の名である。北方はベエルシェバのあたりから、南方はカデシュの辺に亘る曠野的な地域といわれる。シナイの曠野に境する。その曠漠たる地域に於てすら、唯一ヶ所をのぞいては泉の湧き出るところがなく、雨期が来るのを待つより外に水を得るすべがない。「川」とは連河の如きものをふくめていう。平常は水底が見えているわけである。

5 涙と共に播く人は
歓声と共に刈り穫るよ。
6 彼は涙しながら出て往った、
種子袋をたづさえて。
彼は歓呼して帰って来るよ、
おのが禾束をたづさえて！

第百二十六篇　涙の種子、歓びの禾束

バビロン捕囚半世紀、その間シオンは寡婦の如く寂しく、捕囚の民はエルサレムを想うて異境の地に涙をおとした。紀元前六世紀の末近き五三八年、ついに新興ペルシャ王クロスを起用して、神は歴史の歯車を大きく廻し給うた。イスラエルの民はおのが不信のため刈り穫った滅亡と捕囚の苦杯をここに飲み干し、永かった服役を終った。いよいよ捕囚から解放され、故里シオンへの帰還とはなった。その消息は無名の預言者第二イザヤが、その第四〇章に於て慰め深く且つ歓びの声高らかに告げしらしめた。エホバの

6 第六節の「種子袋」は多少問題の語であるが（Gr）、種子の「量器」（Bar, Oes）でも可い。全然読み変えて「種子を播き撒らす」とする者（Dh, Gk, Schm）、「種子の一播きの分量」（Kg）となす者もある。なおアモス九・一三参照。

神自ら来臨し、彼ら帰還者を引き伴れて還り給うたのである。それは彼らにとって、突然牢獄から解放される囚人の如く、「夢見る」心地の歓喜であった。異邦人たちすら驚いて、「エホバはでっかいことをした！」と叫んだ。運命の偉大な転換である。恩恵の圧倒的来臨である。エホバの神に親しく迎えられ、共に帰る旅路の歓喜よ。足に羽が生えたおもいであったろう。誰か「歓喜の人」とならないで居られようか。

この詩の前半の歓喜の調べが、突如変調を来たした。何の故であろう。偉大なる恩恵が、いたずらなる過去となっては虚しい。イスラエルの民はシオンの第二神殿を中心にして真に光ある現実を生くべきであった。しかし運命の歯車は再びイスラエルの信仰の枯渇のゆえに（イザヤ五九・九―一四、六三・一五―一九）、停屯してしまった。南方の川がつねに干て、滋雨が来ない限り絶望的であるように、イスラエルは再び霊的枯渇状態となった。

詩人はイスラエルの将来につき預言的、象徴的な幻影を見てしたためた。即ち「彼れ」という一人の選ばれた青年が種子袋をかついで出て往った。その瞳からは汗の如く涙が滴っていた。

その種子はやがて到り着いた土地で、これも涙がこぼれるように蒔かれた。種子粒は地に落ちて死なねばならない。種子蒔きと共に彼は自分の死の運命を予感した。恩恵の雨がしかしそこに降ることを信じつつ彼は蒔いた（ヨエル一・一七）。そうでなければ穀物は果を結ばない。その如く、この青年は同胞の魂の復活のため、救済のため、先ず自らが「一粒の種子」とならねばならなかった（ヨハネ一二・二四）。涙の

種子蒔きである。人知れず流れたその涙を誰か知る。収穫を神にゆだねて、彼は種子を播いた。彼の播いた種子は歓喜の花と咲き、歓びの禾束ができた。しかし帰って来たのは彼ではなかった。彼によって救われた同胞であった。新しい神の民が帰って来た。詩人の夢は、一粒の「彼」から、多くの粒の「彼ら」の帰還という現実となった。「涙の種子」は「歓びの禾束」と化った。

「憂さつらさも身にいとわで
道のために種子を播け
ついにみのるその垂穂を
神は愛でてみそなわさん
刈り入るる日は近し
歓び待てその垂穂」

（讃美歌五〇三）

第百三十篇

1 〔宮〕のぼりの歌
実存主(エホバ)よ、あなたをこの深淵から私は呼ぶ。
2 主よ、わが声を聴き給え、
わが願いの声に汝(な)が耳を傾けて下さい。
3 ヤハよ、あなたがもし不義に眼をとめたら、
主よ、誰が立ち得ましょう。
4 だがあなたのみ許には赦しがある。
それ故あなたは畏(かしこ)まれ給う。
5 私はエホバを待ち望む、わが魂は待ち望む。
私は聖言に望みを抱く。
6 わが魂の主を待つや、衛士が晨を待つにも優る。

○ どんな詩篇が最善のものであるかと、ある人がルターにたずねたところ、彼は答えて〈Psalmi paulini〉(「パウロの詩篇」)といった。然らばどれがそれなのかと卓を同じうする者たちが彼に迫ると、ルターは「詩篇三二、五一、一三〇、一四三だ!」と答えたという(Del. S. 757)そしてルターがこの詩篇に準じて讃美歌 „Aus tiefer not schrey ich zu dyr:" を作ったのも、この詩篇においてのが魂の告白を如実に感じたからである(日本訳、讃美歌「貴きみ神よ、悩みの淵より」二五八番)。〈De profundis〉(「深淵より」なる名称は Vulgata ラテン語聖書の発句)という名称のこの詩篇は所謂「七つの悔改詩篇(7Psalmi poenitentiales: 6. 32. 38. 51. 102. 130. 143.)の第六番目のもの。
福音的なこの詩は、捕囚の経験をもった預言者的な魂の作であろう。

実に衛士が晨を待つにも。
7 イスラエルよ、エホバに望みを抱け。
そはエホバの許に恩恵があり、
救贖は彼の許に豊かにあるから。
8 彼こそはイスラエルを贖う、
その不義のすべてから。

第百三十篇　待晨

呼ぶ者は深淵にいる。呼ばれる者は天界に在ます。天は高い、淵は深い。しかし天と淵とはただ離れているのではない。天は淵の面に接している。絶対界の神も相対界の人間にそのように接し給う。深淵から叫べば、天雲は谺を返す。そのように神は応えて下さる。人間は深淵に浮沈する木片のようなものだ。これを自覚しなければ、人生をも、人間をも、罪をも、そして神をも語ることは出来ない。赤児がその母を求めて泣く如く、深淵の人は神を求めて叫ぶのが本当だ。

人間は何故にかくも惨めであるか、不可解であるか。環境か、遺伝か。自然の仕業か、悪魔の悪戯か。神の呪咀か、自己の矛盾か。我執の罪か、因果の原罪か。

ああこの「なやみ」を如何せん。この「死の体」を如何せん。神もし不義に眼をとめ給わば、わが立場は何処にあらん。詩人は自己の深い自覚から、人間一般の鋭い認識に達している。「主よ、誰か立ち得ましょう」[3]と。「生ける者一人だにみ前に義とせらるるは無し」（詩一四三・二）と言った「ダビデのうた」がある。「善をなす者一人だに無し」と詩篇十四篇にも語っている。パウロもこれに応じて、「義人なし、一人だになし」（ロマ三・一〇）と告白した。

しかし神の心は審判を越える。神は審く以上に罪を赦し給う。神の赦しに遭って、砕けた心は感動し、厳かな罪観念は一層深められる。儼然たる審判の門の前に平伏せば、見よ、恩恵の虹が天上に架するを。「あなたのみ許には赦しがある。それゆえあなたは畏まれ給う」[4]。神の赦しは、人間を単に平安や歓喜にのみ導くのではなく、実に神を畏れるまことの謙遜と、いよいよ自己を罪びとなりとの自覚に導く。パウロが「神の仁慈（なさけ）汝を悔改に導く」（ロマ二・一）といっているのもこの消息と相通ずる。神の恩恵の偉大と厳粛を静かに思う。畏れを以て神に親しむのである。具体的にはキリストへである。

そしてそこには希望が湧いてくる。神を待ち望む心である。絶対的なゆるしの恩寵を受けるのが信仰である。そこに平安と待望が湧く。「衛士が晨を待つにも優る」[6]終末的希望である。預言者たちが「その日」とか「末の日」とか言っている終末の日である。しかしこの待望も、現実に、質的にその内実が来ていて

はじめて本当の待望である。身心の全き救い、天国的現実の到来を待つ現在に何か保証はないのか。「恩恵」[7]と言い、「救贖」[7]という内実は旧約では、まだ預言的であるが、新約に来るとキリストである。十字架の贖罪と聖霊の降臨である。この詩人はそれを知る由もなかったが、第七、第八節がキリストの救済を知らずして指向している。即ち夜を守る衛士が晨を待つより切実な終末的待望を以て、神を拝している現在は、歴史の夜が明けて永遠の晨に処をゆずるときこそ真に永遠の現在として永生をそこにもたらすことになる。マーラナサ！

（一九四四年二月『旧約知識』誌第六十号、終刊号所載のものが本稿の原形）

「貴きみ神よ悩みの渕より
呼ばわるわが身を顧みたまえや
みゆるし受けずばきびしき審きに
誰れかは堪うべき」

（讃美歌二五八。ルター原作）

第百三十七篇

1 バベルの河べ、とあるところに我らは坐り、
つらつらシオンを偲びつつ泪した。
2 柳のさなかにおのが小琴をわれらは懸けた。
3 そは我らを捕え移した者らが歌詞をば求め、
われらを苦しめた者らが楽しみを求めて、
「我らの為にシオンの歌を歌え」といったから。
4 どうして我らはエホバの歌を
異境の地で歌えようか。
5 エルサレムよ、もし私が汝れを忘れるなら、
わが右手は……忘れる。
6 もし私が汝れを想わないなら、

わが舌はあぎとについてしまう、
もし私がエルサレムをわが歓喜の首に戴かないなら。
7 エホバよ、エドムの子らをエルサレムの日に憶え給え、
彼らは言った、「粉砕せよ、粉砕せよ、その土台までも。」
8 破壊されるべき娘バベルよ、
汝れに報復する者に幸あれ！
汝れがわれらになした汝が荒廃に対して。
9 汝が乳児を奪いとって
岩に投げつける者に幸あれ。

第百三十七篇　思慕の魂

まえがき

この詩篇は、バビロニア捕囚からまだ復旧されていないエルサレムに帰還したばかりの頃、イスラエル

のだれかが書いた詩と思われます。

バビロニア捕囚というのは、第一回は五九七年で、それから十年後、紀元前五八七年、エルサレムがバビロニア王ネブカデネサルによって陥落したとき、第二回捕囚がいとなまれました。それから半世紀あと、バビロニアを亡ぼしたペルシャの王クロスによって紀元前五三八年に帰還をゆるされるまでの五十年間をバビロニア捕囚時代といいます。捕囚の身になっていたのはイスラエルの主な人たちでした。

イスラエル人の信仰はエルサレム中心、神殿中心ですから、それから彼らが離れれば、場所的に異国にいるので、信仰も失ってしまうというような政治的な策略もあったと思われます。けれどもその捕囚の民の中にも、やはり、祭司的預言者がいまして、集会をやはりある制限のもとに開いていたわけです。その中の主な人が預言者エゼキエルでした。この詩篇の作者は多分このエゼキエルに導かれた人でしょう。

バビロン河畔の想い出

1バベルの河べ、とあるところに我らは坐り、つらつらシオンを偲びつつ泪した。

「バベルの河べ」　エルサレムはシオンの山とも言われる丘陵の上にあります。すなわち、イスラエルは山が中心である。ところがバビロニアはチグリス、ユーフラテスの大河が中心で、河畔の都市です。首都バビロンはヘブライ語ではバベルです。

「シオンを偲びつつ泪した」　西の方、遙かシオン、エルサレムを想うて望郷の念にかられました。帰りたいなあ！　と、魂の故里を想ってひそかに涙したのでした。

2「われらは柳のさなかに、我らの琴をかけた」　一幅の絵を見るようです。神を讃美する歌を歌いたいんだけれども、歌うわけにいかん、弾くわけにいかん、異国だから！

3～4そは、われらを虜にしたものが、ひとつおれたちを慰めるために歌をうたってくれ、と言ったけれども、そんな異国の者に神讃美の厳かな尊い歌をうたえるか、というわけで拒んだ。恐らくは迫害にも遭ったかも知れません。

汝エルサレムよ！

5エルサレムよ、もし私が汝れを忘れるなら、わが右手は……忘れる。

この五節は非常に力強いことばですね。それこそは、この五節を忘れることはできない。「右手は」というのは、この場合は手で琴の弦を弾くことでしょう。また、文人ならば、右の手で讃美の文章を書くでしょう。また、彫刻の人ならば、やはり、右手で槌を打つでしょう。原文はただ「右手は忘れる」といって目的語がないのが却て余韻があります。もしつけ加えるなら「右手のわざ」というところでしょう。

「右手のわざ」ということは、その人の一つの天職をある意味において象徴するようなことばです。「右手」といっても要するに、わざはこれは全身的なんです。身心のわざ、これが右手のわざの真意でしょう。

このわざは、何のためのわざかと言えば、「汝」のため。この詩篇は一人称、二人称でもって非常に力

強く書いています。「我なんぢをわすれなば」、昼も夜も、毎日、汝のことを忘れることはないと。この詩人にとってシオン、エルサレムはたましいの故里で恋人のようなものです。況んやその中心は神殿であり、神殿は神礼拝の場として、神を意識しているわけですから。宗教の世界で、この不信が罪です。罪というのは信義を裏切るということです。

私もまたこの詩人と同じくまさに「あなた」に生きている。「あなた」とは誰か。キリストという福音体です。これに生きている。私自身がダメな奴だから、破れ器だからこそ「あなた」に生きている。この私の根源の事態を見そこなって何んのかんのといって集会を去るなら去るにまかせるまでです。彼らは私のはなしを録音したテープを沢山持っている。いつかそれを聴きなおして、やっぱりおれは間違っていたとさとったら、「あなた」なるキリストに告白してもらいたい。それでいい。事実そういって親しい回心の手紙をくれた友もある。

貴方、キリストよ！

「あなた」というキリスト、これは何にも変えられない。聖歌にあるね、〝キリストにはかえられません〟と。だから、あなたを忘れたら、もう、右手のたくみを忘れさせて下さい、どうかしちゃって下さい、と。我々もどうかなっちゃうです、キリストを忘れたら。キリストぬきになったら、われわれの仕事は、生活は、みんなどうかなっちゃうです。それなのに、福音と文化文明を同次元に置いて「どうも、それがかたがつきません」なんていって、出てったりする。何を聞いてるのかね。文学でも絵でも彫刻でも、そ

れが本ものになるには自分自身のたましいが宗教の絶対界に入らねばダメなのだ。私が第二巻『芸術のたましい』で叫んでいる通りです。本当にこの世界に入ったら、その右手のわざが、無限無量の展開をはじめる。これは原動力だから、他のものと比較することのできない次元。ある一流の歌手があの『芸術のたましい』を読んで、感激の電話をくれました。

だから私は、この「あなた」は絶対次元だと言っている。これだけの魂の気合いを持ってれば、何がどうなっても大丈夫です。いいですか。人生はいろんなことに出っくわします。失恋したり、入学試験をやりそこなったり、就職がうまくゆかなかったり、事業に失敗したり、病気にかかったり、近親が死んだり……。そのときこそ「あなた」に来なさい。「あなた」を忘れたらおしまい。そういうわけで私は本当にあなたがた一人一人を、百万人とも換えることのできないひとりびとりにしたいわけだ。またなってもらいたいわけだ。孤軍であれよ！　天に「あなた」キリストを中心とする万軍が味方するよ！　これが天降りして「私」を助ける。

『本来無東西、何処有南北』

すべての問題は、この「あなた」からきているんです。宗教の一番根源の世界から。仏教の人は仏教の世界で徹底的になってもらいたい。仏教と言えば、昨日、浅草で会があった。時間が早かったので久し振りに私は仲見世を歩いていた。浅草は庶民情緒があっていいね。そうしたら坊さんが歩いてきたよ。その坊さんの菅笠を見て私はびっくりしたよ。あの菅笠もらいたかったな。そこに何と書いてあったかと言う

と、

本来無東西、何処有南北
迷故三界城、悟故十方空

（本来東西なし、何処にか南北あらん。迷うがゆえに三界城なり、悟るがゆえに十方空なり）

これが菅笠の上に十字形に書いてあった。私はこれを読んでびっくりしたんだ。しばらく、じっと後をつけて歩いていた。あれ、話しかければよかったな。この句は木喰（もくじき）上人のことばです。彼は木彫する有名な上人。私は木喰のあの仏像が大好きだから。あれを造りながら全国を歩いていたんだ。

拙著の木喰上人のひとくだりのところ（第二巻『芸術のたましい』五三、五四頁）を是非参考に読んで下さい。

地球は文字通り球形で、いたるところが中心となります。そのようにキリストを有つところ、到るところ是れ聖地であります。イスラム教徒はメッカを聖地として、その方を向いて拝しますが、キリストはヨハネ福音書にある通り、サマリヤの女に、「ゲリジムでもなければ、エルサレムでもない、到るところで神を拝する時が来る。否、既に来ている」と言われました。天界の都エルサレムには神殿もない。神の羔が活ける神殿だ！　と黙示録二一章二二節に示されているのと同じ精神です。地上においても天上においても、中心はキリストの在ますところです。

み霊の宿るところに神殿あり

「あなた」に限り無く捉われていくのみ。この詩篇の「あなた」は「エルサレム」ですが、我々にとっては、「キリスト」。「キリストよ、もし私が、あなたをわすれたら、わが右手にその巧をわすれしめ給え、ああどうにもなりません！」そういう気合いですよ。商売でも、会社でも、医術でも、絵画でも、彫刻でも、学校でも、何でも。海の水を見て、「あれは塩辛い」なんて思うですか。どこに塩がありますか。塩なんか見えない。塩は見えないが、なめてみれば塩っ辛い。本物はそのように、溶け込んでいるものなんです。宗教臭いんじゃないんです。宗教が本当にその中に溶けているような在り方。そういうことにならなきゃ本ものとは言えません。

それを、あの信仰はどうもとか、こういう信仰箇条が気にいるだとか気にくわないだとか、礼拝の仕方がどうであるこうである、祈りかたがどうであるこうであるとか。そんなことは、みんな末の話。そんなことにこだわっているうちは、本ものの世界に入れない。本ものはそんな分別を超えた世界です。本ものは溶けてる世界です。この花を見て下さい。花は、土から栄養分を取っている、太陽の光を受けている。しかも光も溶けていれば、土の栄養分もみんな溶けちゃってる。みんなそれぞれの姿と香と形で太陽光熱と地の一切の養分を表わしている。しかしながら根源はみな一つ。太陽の光であり、土の養分である。表われ方は千体万化である。そこに本当のハーモニーがある、調和がある。百花繚乱の趣きがある。それがみんな同じだったらどうする。花の咲くところに太陽の光あり。水滴のあるところに月影は宿る。虹のかかるところに陽光は溶けている。そのようにみ霊の宿るところにキリストという活ける神殿あり、であり

ます。

あなたがたひとりびとりがそれぞれの、のっぴきならない自由な在り方をしてもらいたい。しかし、その自由は自己本位の勝手気儘じゃ絶対にないです。キリストの宇宙の霊気が溢れているような自由！「天地正大の気」の詩句は大好きですが、あれを思い出して下さい。第二巻（『芸術のたましい』二〇頁参照）

「天地正大の気」を書かしめた藤田東湖の霊感はすばらしいよ。あのような本当に自由無碍な、霊然神然たるところの人間の姿になりたいものです。

私もみ霊の自由をいただいてから、そういう境地に入ると、すぐそういうようになる。それでちゃんと生命を摑んでいる。それで楽しくなります、自分ひとりで。こだわっちゃだめですよ、なんでも、みんな飲んじゃう。みんな消化しちゃうです。善からざるなし！　みんな神様のわざであります。どうしても私はそういう角度から霊的な「神学」を書かざるを得ないです。

「キリストよ、われ汝をわすれなば、わが右手にその巧をわすれしめ給へ」、こういう句はしっかり魂にきざみこんでおきなさい。「エルサレム」のかわりに「キリスト」だ。もう私のはらわたの中に異言が来ているんです。

6もし私が汝れを想わないなら、わが舌はあぎとについてしまう。もし私がエルサレムをわが歓喜の首に戴かないならば。

キリストはまさにわたしの歓びの極みです。キリストなしで生きているようなクリスチャンが沢山あるよ。そんなのは、クリスチャンでも何でもないよ。道を歩いても、何をしても「主様！」とはらわたの底から呼びかけているような魂でなければ、ね。この五節、六節、これが詩篇一三七篇の中心です。これだけといってもいいくらい。あとはまた旧約の限界内のことばが出てくる。

兄弟喧嘩

7「エドムの子ら」というのはヤコブの兄エサウ、綽名としてエドムと呼ばれたエドムのことで、ヤコブと喧嘩した。兄弟でありながら、ヤコブ（イスラエル）とエサウ（エドム）は不倶戴天の仇みたいになっていました。兄弟争いの第一はカインとアベル。創世記第四章のあまりにも印象深い物語！　とうとうカインがアベルを殺した。四方の海を同胞と思うのに、なんで国際間に波風が立つか、という主旨の明治天皇の名歌があるね。日露戦争をせざるを得なかった明治天皇も、そういう心境を持っておられた。今の天皇陛下だって、戦争なんかしたくなかった。けれども、ああいうことになってしまった。

そのカインとアベル、エドムとヤコブの兄弟喧嘩、こちらでは頼朝と義経の悲劇の如く、人類の歴史の終わりまで、要するに戦争は絶えない。戦争が歴史を終わらせるのです。今度大戦争があったら世界はおしまいだからね。結局、力がものを言うです、地上じゃそういう武力がものをいっている。これは要するに兄弟喧嘩。だから、キリストは十字架にかからざるを得ない。今またキリストが現われたら、また十字架にかかる。カインとアベルの事態、歴史の最初の物語りが、最後をあらわしている。だから人間は絶対

に救を要するんです。宗教のことは万人の根源の事態なんです。

それでこの第七節は

「エホバよ、エドムの子らをエルサレムの日に憶え給え、
彼らは言った、「粉砕せよ、粉砕せよ、その土台まで」

報復観念

8〜9　エルサレム陥落の日を憶えて、エドムに対する逆粉砕の復讐心がうかがわれる。まあ詩篇のうちで一番いやらしいというか、とんでもないことばの一つだよ。なんぢの嬰児をとりて岩の上になげうつものはさいわいなるべし、幼児とか嬰児は万国共通にかわいいものです。一つも憎むべきものじゃないです。それを岩の上になげうつものに幸あれ、なんて聖書の中に書いてある。聖書なんて、とんでもない書だな。普通、いきなり読む人は、びっくりする。もう聖書なんてやめたなんて、そうなっちゃうよ。

だけど、ユダヤ人には、「目には目を、歯には歯を」というのがあるでしょう。強烈な報復観念。報復観念の強いのは、ゲルマン人もそうだった。『ニーベルンゲン物語』というのがあるだろ、あれがそうです。同じゲルマンの諸族が共倒れになっちゃうよ。悲劇的なドイツの民族詩です。

「人もし相争ひて妊める婦を撃ちその子を堕させんに、別に害なき時は必ずその婦人の夫の要むる所にしたがひて刑せられ、法官の定むる所を為すべし、若害ある時は、生命にて生命を償ひ、目にて目を償ひ、

歯にて歯を償ひ、手にて手を償ひ、足にて足を償ひ、烙にて烙を償ひ、傷にて傷を償ひ、打傷にて打傷を償ふべし」（出エジプト二一章二二―二四）。これをレックス・タリオーニス「復讐律」というんです。レビ記の二四章にも、申命記の一九章にもあります。ユダヤ的報復観念はシェックスピアの『ベニスの商人』でもうかがわれるでしょう。

贖罪の十字架

だからパウロは、「罪の価は死なり」といってる。罪の価の死を刈り取らなければならない、我々は。神さまに審かれたら、みんなだめなんだよ、亡びちゃうんだよ。ところがキリストは十字架をもって罪を贖い給うた。死をもって罪の罰を受け給うた。罪の罰としての十字架には、そういう意味がはっきりあります。その罰をキリストは十字架で受けたんです。彼らが十字架につけたというのは相対的な現実。キリストの霊的現実は、罪を贖うため。「罪を負う神の羔」とヨハネが言っているように。彼が罪をしょって、罰を受けて、自ら死に給うたので、我々は無罪放免となりました。キリストの十字架の贖いは、私たちを罪と死から解放して下さったわけですね。全部キリストが引き受けた、「私がみんな引き受けたよ」と。それに対して何が言えるんですか、ことばじゃないですよ。ひれ伏すより他にないですよ。私たち死刑囚が無罪放免されたんです、キリストによって。

無罪放免されて、しかも、今度は本当の生命をやるぞ、と、死生の転換をして下さった、この十字架をもって。聖霊が今度くるから、これが絶対恩寵でなくて、何が絶対恩寵ですか！　私は仏教でも何でも飲

み込むけれども、中心ははっきりしていますよ！　決してぼけているんではないですから。「小池というのは、何だかんだ、いろんなものをまぜあわしている。まるで五目寿司みたいだな」と言うかも知れない。そうじゃないよ、中心は沢庵のお茶漬けだ！　日本的キリスト。そういう中心がはっきりしていますから、無限無量のものが展開して、一切を包摂しちゃうと、こういうわけです。

だから、こういう、目には目を、生命には生命が、歯には歯をという観念が、やっぱりこの詩篇にも現われている。彼らは正直、エルサレムで殺されましたよ。女も子供も殺されたり、いろんなことになった、惨憺たるものだ、エレミヤ哀歌を見てください。悲惨な状況が書いてある。だからその復讐をすると。キリストも長子たちの殺害という犠牲を負っていたんです。まあ砂漠の民は血なまぐさいね。日本人にはあんまり肌に合わないんだけどね。日本人は仏教的な方が肌に合うんだけれども。しかし、ただ肌に合うじゃ、仕様がないんだ。魂の肌に今度は福音の方が合う。大慈大悲もいいですよ。でも、この恐ろしいところを通ると今度は、悟りでなくて、もっとものすごい本当の救いの世界というものがやってくる。仏教でも救いということを言うさ。けれども、このキリストの聖霊の生命の世界は無比です。仏教でも如来の霊ということは言うけれども。

だから終りの七―九節の血なまぐさい復讐の心を、キリストが十字架につけてしまったのです！　詩篇をキリストの光に貫かれて生き生きとしたものにして読んで下さい。旧約の単なる次元で読んでいたらだめですから。

孝道師道

「山はさけ海はあせなん世なりとも
　君に二心わがあらめやも」（源　実朝）

実朝は万葉調を新しく受けとったすばらしい歌人であると正岡子規が言っていますが。この「君」は「キリスト」だ。恋人同志だってこういう境地はあるだろうね。私は藤井先生という先生に対しては、こういう気持を持っています。私は藤井先生をかつぐようなことはしないです。本当の意味において先生を尊敬し、なつかしく思っております。私は藤井先生の「真実」という精神を、もう一つ突き抜けて、「砕け」と言っているんです。藤井先生の偉大な『羔の婚姻』という詩篇が遂に未完成で終わってしまった。最後の一句は、まるで予言みたいな句だよ。

　先の二つの禍害に増す
　第三の禍害、地に住むものら
　哀哭切歯することあらう。

（藤井武全集第一巻『羔の婚姻』より）

もし、もう一ぺん禍害がきたならば、この世界は嘆き歯がみしても、どうにもならんという句で終わっている。もう一ぺんというのは第三次戦争。藤井先生の志を、私は私の詩で継ぐつもりだ。

そういう「孝道師道」というものを、日本人は忘れてはだめだよ。この間言ったでしょ、諸橋徹次先生

が臥薪嘗胆三十年。その中の十年間は一時失明したんです。そしてやっと治されて、更に続けた。それ以前の自分の原稿も、また組版も焼かれてしまった。それをまた書き直した。そして遂に、『漢和大辞典』という、全十二巻の驚くべき、個人の書いた辞典では世界一の辞典を完成された。それが出来上った時、諸橋先生は何と言ったかというと、「これでやっと親孝行ができました」と言ったそうだ。これが孝道です。

「孝道師道」、こういうものを忘れたり、特に裏切った奴は地獄のどん底にいく。ダンテが忘恩者や裏切り者を地獄のどん底においている。ダンテの『神曲』なんかも時々読んで下さいよ。今度私はダンテのことも書きましたから。(第二巻『芸術のたましい』中の「ダンテの苦難」のこと)。

日本人は民主主義なんて、空念仏なんか言って全然なっちょらん。高次な宗教の土台のないものは皆だめになってゆく。もう民主主義なんて言葉を聞くのもいやだ。本当の意味においては、「民主」の土台に「神主」がなければダメだ。もう一ぺん日本人の本道に還れ！　師道、孝道は民主主義とは本当の意味では決して矛盾はいたしません。もう私のような明治の人間がだんだんいなくなるからね。あんたがたは、よく継いでもらわなくては困るよ。

ダビデの無的忠誠

「山はさけ海はあせなん世なりとも」という、これと同じ精神に生きていたところの人が旧約にいたんだ。「君に二心わがあらめやも」ということを実存してきた人がいた、旧約に。サムエル前後書を読みま

したか、ダビデです。ダビデが、自分の主君のサウロに追われて殺されようとした。そのような妬みの悪霊がついていた主君サウロに、決して仇をかえそうとか、背こうとかしなかった。自分を殺そうとしたその主君に対して、どこまでも忠誠であるという。普通の忠誠とは、また違うんだよ。ある意味では、赤穂義士よりも偉いかも知れない、ダビデは。サムエル前書二十四章十四節、「イスラエルの王は誰を追はんとて出でたるや、汝たれを追ふや、死にたる犬をおひ一の蚤をおふなり」。自分のことを死んだ犬だとか、一つの蚤だとかダビデは言っている。「あんたは、その私を追っかけて、どうなさるんですか」と。その少し前にも書いてある、十節から、「視よ今日汝の目の前を洞のうちにて今日わが手にわたしたまひしことを見たり人々我に汝をころさんことを勧めたれども、我汝を惜めり我いひけらくわが主はエホバの膏そそぎし者なればこれに敵してわが手をのぶべからずと」。サウロはサムエルに油注がれた人でした。油注ぎで神霊がきた時はよかったんだけれども、ダビデに対して妬みを起した。その時に神の霊が悪霊に変わっちゃったんです。切り変わっちゃったんです。だけれども、とにかく油注がれたる者即ち「メシヤ」なんだ、自分は主君に叛かない、そう決めたと。

「わが父よ視よわが手にある汝の衣の裾を見よ、わが汝の衣の裾をきりて汝を殺さざるを見ばわが手には悪も罪過もなきことを汝見て知るべし、我汝に罪をかせしことなし。然るに汝わが生命をとらんとねらふ」。けれどもわたしは、それに対して復讐はいたしません。「敵は本能寺にあり」という心はダビデの中にはありませんでした。ダビデは正にこのキリストの気持を先駆した人です。自分を殺そうとする者

も、もう手にかかっているんです、本当は、ひと突きできるんです。けれども、それをしませんでした。「ごらんの通りです、あなたの衣の裾がここにあるじゃないですか、私みたいな死んだ犬、蚤みたいな……」、一匹の蚤と言っている、蚤を追って何になさるんですか、と。これが「君に二心わがあらめやも」です。「海往かば水ずく屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」と、戦争の時によく歌われた歌です。日本の軍人がなぜ強かったかと言えば、やはり天皇陛下に対する、この忠誠です。君のため、国のために、とにかく生命を捨ててった人。戦争の是非はともかく、彼らは生命を捨てたんです。それに対して、やはり、時々、冥目して、我々の今日あるのは彼らの犠牲によったということを思わないでどうするんですか。

だから、詩篇一三七篇の、もし「あなた」を忘れたら、わたしはどうにもならない、地獄行きだという。キリストなしには生きていられません。わたしのいのちのいのちです、どうぞわたしを通して「あなた」の聖業を現わして下さい！　なすことすることみんなキリストの神の栄光です。自分の何ものでもない。それが本当のキリストの「無者」というのです。旧約の「エホバの僕」が正にエホバの「無者」であったわけです。

詩篇第百四十三篇

1 ダビデの紋歌
　エホバよ、わが祈りを聴き、
わが願いに耳を傾け、
　汝(な)が信実と汝が義に在って答え給え。
2 汝が僕の審判に関わり給うな。
　そは、生者は誰もみ前に義とされません。
3 まことに敵はわが魂に追い迫り、
　わが生命を大地にうち砕き、
　永遠の死者の如く暗き所に住まわせた。
4 わが霊はわが衷(うち)に萎(な)え果て
　わが心はわが内に曠(あ)れさびた。

5 私は昔の日を想い出し、
　汝がわざのすべてを思いめぐらし、
　汝が手のわざを考えています。
6 あなたに向ってわが手を拡げ
　わが魂は乾地の如くあなたに喘ぐ。　セラ
7 速く速く答え給え、エホバよ！
　わが霊は衰えました。
　み顔を私から隠さないで下さい。
　でないと私は坑に降りたも同然です。
8 晨には汝が恵みを聞かしめ給え。
　あなたに私は信頼しているのです。
　わが歩むべき道を教え給え、
　あなたに向ってわが魂を揚げますから。
9 仇敵から私を救って下さい、エホバよ！
　あなたに私はしがみつく。
10 御意のままを成すように教え給え、

あなたこそはわが神ですから。
汝が善恵のみ霊、私を平地に導き給え。
11 エホバよ、聖名のゆえ私を生かし、
汝が義に在ってわが魂を患難から引き出し給え。
12 汝が恵に在ってわが仇敵を断ち、
わが魂を抑圧する者をみな滅ぼし給え。
まことに私は汝が僕ですから。

第百四十三篇　しがみつき

詩篇一四三篇、これはルターが「七つの悔改めの詩篇」といった詩篇中、しんがりの詩篇であります。

これは「悔改め」と言いましても、いわゆる悔改めの詩篇じゃないです。大体「悔改め」という訳があまり感心できません。「回心」とか「帰入」とか、一層のこと「南無」といった方がいいでしょう。この詩篇は何とも名状し難いですね。第九節の「あなたに私はしがみつく」によって「しがみつき」と題しま

す。この「しがみつく」と訳した原語は「カーサー」という言葉で、この詩の場合は「あなたへと自分をかくし、包む」即ち、敵をさけて神なる「あなたを隠蓑（かくれみの）とする」が原意ですが、それを強く意訳して「しがみつく」としました。

1「汝が信実にあって」と「汝が義にあって」ということがこの「答え給え」という言葉の後にある。信と義は角度からいうと垂直線です。義は上から下へ。信は下から上へです。即ち下なるアブラハムは上なるエホバを信実としました。すると上なるエホバは下なるアブラハムを義としました。即ち義は上から臨み、信は下から上へです。上なる神を然りといって信入すると、地上の自分は無となります。だから本当の信者は無者というわけです。だが同時に神の中の無量者です。ですがここでは「汝」は神ですから、この信も義も、神から人への信と義です。

このような信仰を本当に生きたのがキリストなのです。この事に初めルターは躓いてたんです。即ち義なる神は人間を審くと思っていた。だからルターは神様が怖くてしょうがない、それで「如何にして神の前に義たらんか」といって非常に苦しんだ。ところが、ルターは詩篇第三十一篇の二回目の講義をしていて、その第一節、「エホバよ、われ汝に依頼む、願はくはとこしへに我を恥しめ給はざれ、汝の義をもて我を救い給へ」この言葉にびっくりしたんです。ルターは、「義をもって救う」とはどういう事だろう、義なら審く、愛なら救うかも知れないけれど、義をもって救うとはどういう事か。これがルターにとって宗教改革への一つの鍵となりました。神様の義は、なるほど罪人を審くでしょう。けれども神様の義は審

き切りの義ではなかった。実は審きの義が同時に与える義であった。

人間は不義の罪びとでどうにもならない。それを救うためには、神様が義を与えるよりほかに道がないのでした。じゃ、どこでその義を与えて下さったか、義を生きた人は誰であるか、信を以て義に応えたイエスでした。「神の義は福音の中に現われ」というロマ書の言葉、あれとこの詩篇の言葉が相照応するのです。「神の義は福音の中に現われ」、これにもルターは躓いたのです。福音の中に神の義が現われたとは何か。イエスが神を完全に信じぬき、神様とあの縦の線がはっきり立った、これを神様がキリストの義とした、これが義の消息である。この関係と内容が義である。この義を神様からキリスト・イエスは戴いている。即ちイエスは、「汝の聖意を成させ給え」と言って挺身した。そうして本当に神の聖意が体現した。その事態が義であるから、イエスが義人である。何も道徳的に正義なんて言うんじゃない。イエスのは「義」ですよ。このことをハッキリして下さい。

「汝の義をもて救い給え」というのは、今度は新約の光でもってルターは解かった。なるほどこれは旧約に既に福音が隠されていた。そういう表現じゃなかったけど、そういうことが解かった。それで、「汝の義をもて救い給え」。キリストが私たちに義を下し、罪はみんな担って下さった。キリストは私たちに罪と義の交換をして下さった。そんな交換はどこにある。その交換は何でやったか、これは十字架。私は十字架でもっておまえの罪を負っちゃったから、わたしの義をその代りにおまえにやると。これが贖罪の十字架なのです。ルターがその事を『キリスト者の自由』の中で言ってますよ。神様の聖意を成らしめてい

るところのその義。キリストはこの様な義を行じたが、じゃ何で行じたか、御霊です。聖霊が彼において能いているから、この義を行ずるところの、神の意志を行ずるところの力が来ていた。

ところで「信仰によって義とされる」ということと、義を行ずることとはちがいます。キリストを、キリストの贖罪を信ずる、全存在で信受する、そうすると義とされる。そういう信仰はルターがローマ書の序文で申しているように、全人を変えて、別人の如くする、なぜ別人の如くされるかというと、聖霊が必然ともなって与えられるからです。聖霊を受けると、善き行為が自然生じてくる。しかしよき行為が生じて来たから義人となったのではない。みたまの義人とされたから、善行が生じてくるまでである。或は生じないこともある、人間は死にいたるまでそのような矛盾存在である。

汝の義において聞いて下さい、わたしの単なる願いじゃありません。汝の義の中で、汝の信実の中で、信と義の中で聞いて下さい。これが詩篇の三十一・一とロマ書一・一七と相通ずるところの言葉なのです。義をもって救うのです。それは十字架という愛が土台となっている。この縦の線は義です、義を与えるとそこに横線が生ずる。それは愛の線です。縦と横、義と愛がクロスしている。しかしその義と愛は一如です。こういうクロス十字架の上にキリストはかかられた。

ですからこの第一節の後半は力強い言葉ですよ。私の側の熱心じゃありません、あなたの義において、あなたの信実において。汝の信実に、汝の義に依頼む。だからこれは聴かれる。この願いは聴かれる。祈られている内容が神の義神の信実という絶対的なものだからです。クリスチャンの祈りはどうですか、

「聖名によって」と最後につけるでしょう。あの「聖名によって」はむしろ「聖名に在って」です。そしてこの一語が一番力強い祈りなのです。自分の祈りはでたらめで、また聖意に適っていないかも知れませんが、どうぞ「聖名に在って」聴いて下さい。「聖名の御執成しをもって」聴いて下さい、汝の信実において、汝の義において聴いて下さい、そうしたらば、どんなに惨憺たる願いであっても、とに角体あたりしている祈りは聴かれる。自我的な祈りでも、その自我がはずされて聴かれてる。それには自我であっても何でも、「汝の信実において」という言葉を真剣に祈りの中に入れないとだめですよ。聖書の言葉はいい加減に言われている言葉じゃないですよ、ここに重点がかかっている。イエスも沢山お願いがあったでしょう、けれども、イエスの最初にして最後のお願いは、「汝の聖意の成らんことを」、神の本願は必ず成る。本願の中に自分を投げ入れていけば必ず成る。

2　汝が僕の審判に関わり給うな。

汝のしもべに関しては審判の中におかないで下さいよ、審判をのけて下さい。それはあなたの義にわたしは頼むから、あなたの信実に頼むから、こっち側は問題にしないで下さいということです。図太い信仰です。自分なんか問題でないので、恩恵の中に投身する図太さというものです。なぜそんな心境になれたかは後半の句をみるとはっきりします。

そは、生者は誰もみ前に義とされません。

「義人なし一人だになし」とパウロが言ったが、この句も思い出されたにちがいない、また詩一四・三の

「善をなす者なし、一人だに無し」もこれと相照応する句です。

生きとし生けるもの皆汝の顔の前に義でない。誰も聖意が行えない。そういう現実の一人たる自分だからどうぞこの審判はよして下さい。私はただあなたの信実と義だけを頼みとしますから、という祈りであります。罪をいい加減にしてるんじゃないですよ。もうやり切れん、もうどうにもならん。どうにもならんからあなたの義と信実だけに依頼んでいるのです。それで聞いて下さいよ。これは極めて福音的な心境の祈りです。全くイスラエル人というのは、ヤコブじゃないけれども、神様と取っ組んでいました。しがみついて祈ってる。しかもそれはぶっ倒れてしがみついてるすがたです。

今朝の早朝祈禱会で、あの朝霧の深い高原で、皆さんの讃美歌をうたうのを黙って聞いていました。私は聞きながら、天界を冥想していると、聞きながら魂がぐーんと上げられていく、そうすると何だか知らんけれど、ピカッと光が来た、その瞬間にたまんなくなって飛び上っちゃった。一フィートくらい上っちゃったかな、同時に手をパッパッパッパッと叩いて、全身で聖名を讃えたというものでしょう。不思議なことが起きました。そうしたら横にいたNさんが私にしがみついてきた。彼は私の霊動を通してみ霊に打れたわけでした。ダビデの躍踊もわかるような気がする（サム後六章）。

この第一節、第二節の祈りは非常に大切です。あなたに審判かれたら死ぬほかありません。万人は死の運命を持っています。それをキリストが救い上げたじゃないですか。いかなる人が一人の人間を救ったか。いかなる哲学者が、思想家が、またいかなる芸術家が人一人を救ったか。人間は人間をどうしょうも

ないです。教育だけではどうしようもないです。パウロは「ああわれ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ」と。ユダヤ人は「悩める人」、「この死の体」と言った。ギリシャ人は「何にもわからないことがわかった」と言った。やっぱりギリシャ人は知的です。ヘブライ人は実存的です。

誰でもが聖前に義でない。ところが詩篇第三四篇の第二二節に「エホバはその僕らの魂を贖い給う。エホバに依頼む者は一人だに罪なはるることなし」とありますが、キリストに贖われた者はひとりも罪せられない。一方で罪、罪、罪といって罪にこだわる連中があるかと思えば、他方では霊、霊、霊といって霊ばかりを問題にしている。どっちも困ったはなしです。本当の罪の認識をし、本当の霊の世界に入った信仰の戦士はパウロでした。パウロほど自我の強い奴はなかったかも知れない。誇る、誇るって言ってる。だけどもパウロが救われてから、言ってる誇りは、ただキリストをのみ誇ってるんです。諺に「性質は決して変わらない」というが、内容が変わってしまう。角度が変ってしまう。質が変ってしまう。そうですよ。ガラテヤ書の中で、「十字架のほか誇るところなし」（ガラテヤ六・一四）とパウロは言いました。今度は御霊のことを強調して「み霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」（ロマ八・九）と明言しています。これパウロにとって十字架と復活の主と聖霊とは不可離の事態であるからです。

だれも義人ではないと。今度は、贖われた者はだれも罪に定められないという。それがロマ書第八章です。

3　まことに敵はわが魂に追い迫り、

わが生命を大地にうち砕き、
永遠の死者の如く暗きに住まわせた。

深刻な現実だね、これは。魂を、そして存在を、生命を地獄的な現実に転落。われをして永遠に死にしもの同然に化し、墓場に持って行くような、そういう迫害に遭ってる、だから

4 わが霊はわが衷に萎え果て
わが心はわが内に嘘れさびた。

もうどうにもかなわん、いよいよこちらはやっつけられそうだと、その悩みの死の体からだれが救ってくれるんだ、この墓場行きからだれが救ってくれるんだ。

皆さんはまだ若いからいいけどね、私みたいに七十を越えると、この地上の人生の終りを考えないでもない。ゲーテさんもそう言ってるけど。だけどもちっとも自分は心配じゃないとゲーテも言ってる。この地上の生涯が終ったら次の形態を大自然は必ず与えてくれると言う。ゲーテは大自然と言ったけれども、私たちはキリスト。

5 私は昔の日を想い出し、
汝がわざのすべてを思いめぐらし、
汝が手のわざを考えています。

これは非常に親しい言葉です。神の恩寵を回顧している。昨日から恩寵の回顧のお話が時々ありました

が、私も正にその通り。私がこの詩篇で想い出すのは、私の兄が北京から書いた藤井先生への手紙の一節です。「苦しさのあまり、ダビデと共に御名を呼び求めました、また御名を讃えています。もう今日で詩篇百四十三篇まで進んで参りました」。これは一九二一年六月六日の手紙でありますが、舎兄から先生への手紙は数十通あったが、先生の家が戦火で焼失したとき全部烏有に帰しました。

福音の世界で私の第一の恩人は、何と言っても私のこの兄、小池政美！　私はこの兄に著作集第二巻『芸術のたましい』を捧げました。この兄が無ければ私の今日は無い。私のこの兄は一九二一年の秋、二十七才を以て北京で召天しましたから、今年が一九七七年ですから、もう五十六年も昔のことですが、いつも昨日のように思うのです。私は七十三才ですが、いつも兄は兄です。兄の死がもたらした私への課題は無量なもの、白熱的なものです。それを果さないでは死ぬわけにはゆきません。だから私の生涯は兄の弔合戦。この兄が私のため、福音の芥種一粒となって地に落ちた。そうしたら、そこから私の芽が生えた。それでこの破れ器を通して魂の救われた人は数え切れない。また多くの兄弟姉妹の病を按手の祈りで癒しました。皆、私を通して聖霊がなし給うたのです。私は平伏すばかりです。とにかくこの福音は宣べ伝えざるを得ず、証しせざるを得ずなのです。死に至るまで。救われた者は、御霊の世界にあっては証しせざるを得ないんです。パウロは、宣べ伝えずば禍いなるかな、やむを得ざるなり、と言っている。天的必然でやっているんだと。

信仰の世界は大バカにならなくちゃだめだよ。単純なる無から、或いは一から無限無量なものが展開す

るんです。聖霊というものは名状し難きものです。それを表現したらずれちゃう。また一面しか言えない、何とも言えないから仕方がない。ほかに表現の仕様がないから「無」というのです。

さっき歌った、「主われを愛す」、あの讃美歌は、讃美歌のアルファーにしてオメガですよ。日曜学校で最初に教わる讃美歌。これがアルファーにしてオメガ。「これはわが愛しむ子なり、汝らこれを聞け」と、キリストを指して上から来た言葉だ。「主われを愛す」と「神我を愛す」。キリストこそこのことを感じておられた。洗礼の時も変貌の山でも。

我々は、この主様に愛されてる。ひとりびとりが愛惜される。あの人、この人じゃないですよ。みんな、御自分がです。神様の愛し方なんて説明がつきませんですよ。神様は一見何か不公平のようです。私はいろんな不幸にあってどうにもなりません。どこが愛なんです。神様がいるのに、世の中に悪い奴がはびこったり、戦争なんかがあったり、一体神様はあるんですか。現象から見たらみんな躓くです。福音書のキリストに来て下さいよ。福音書のキリストに来て、キリストの中に入ったら、そのような問題はみんな吹っ飛んで行っちまう。世の中がどんなに不公平であろうと、どんなに非常時であろうと、どんなに自分が不幸であろうとも、そんな事を乗り越えた次元に入っちゃうんです。そのとき、神は在し給う、キリストは在り給うという事が告白できる。必ず神の国は来る、ここに来てるじゃないですか、極楽じゃないか、天国じゃないか私は、と言えるのです。あんた方が運命、環境でもって、いろんな事がうまく行かなくなってしょげたりする。しかし何をかと言ってキリストの中に入って下さいよ。行詰るなら行詰って見

ろと。「詮方尽くれども希望を失わず」とパウロが言えたのは、キリストが内在しているからでした。

ここにいらっしゃる増田さんという社長さん。この方を誰がひっくり返したのですか。一人のHさんという女性が断食して一週間祈った、その祈りが増田さんを福音の世界に躍り込ませましたと承っています。人を本当に愛するというならば、我々は御霊の力を持って愛しましょう。祈りましょう。

詩篇には神との交わりの、取っ組みの、しがみつきの世界が出てる。けれども詩篇でどうしても足りないものがある。旧約でどうしてもうすいのは、人を救い上げていく愛の祈りなのです。この詩篇でも出ていない。終りの方でもって、「汝が恵にあってわが仇敵を断ち、わが魂を抑圧する者をみな滅ぼし給え、まことに私は汝が僕ですから」と祈ってる。その苦しみの切実さはわかる。しかし、そこをつきぬけて「汝を迫害する者のために祈れ」という次元に至るには聖霊の力、聖霊の愛が要る。この愛は最大の力を持っています。愛は一切に勝つ。愛は相手を救い上げるということです。愛するとは相手を救い上げることであります。それをやったのがキリストであります。罪をすっかりゆるして、今度は聖霊を与え、永遠の生命を与え給う。この永遠の生命を人に分たざるを得なくする。永遠の生命を相手に分かち、相手を救い上げていく。その霊肉を渾然として癒し、また救っていくのは愛の力です。聖霊の愛の力です。「我汝の内に、汝わが内に」というみ霊がもっている力です、愛です。これがパウロが言ってる信仰の本当の現実であります。

6　あなたに向ってわが手を拡げ、

わが魂は乾地の如くあなたに喘ぐ。

手と言い、たましいと言ってます。これはやっぱり全人です。手足と魂と。身心共に「あなた」を喘ぎ慕う。これと酷似した言葉が詩篇の第六三篇にあります。

「神よなんぢはわが神なり、
われ切になんぢをたづねもとむ。
水なき燥きおとろへたる地にある如くわが霊魂は汝にむかひてかわく、
わが身は汝を慕う」（六三・一―二）

魂も身も「あなた」に飢え燥き慕うという、文化文明じゃ満たされません。ある程度は満たされるでしょう、けれども本当に満ち溢れてしょうがないものは、神様の他にありません。キリストの他にありませんです。文化文明なんて言ってるうちはだめだ。文化文明にとらわれない世界に入ってる、自由自在である。

我々が彼岸の世界に行く時、何を持って行くんですか、この愛読している聖書すら持って行けないんです。自分自身が聖書となって、自分自身に聖書が化体して行かなくちゃ、何にも持って行けない、裸で行くんだからね、この次の世界は。魂は御霊の言葉でもって生きている。「われは生ける聖書なり」と化りたいです。パウロは、「汝らはキリストの書なり」（コリント後書三・三）と言った。パウロさんというのは愉快だね、本当に。ズバリと言ってくれるからね。

そういうように我々の心身はキリストに喰いついてる、しがみついてる。「信仰」なんて体裁のいい言葉なんて使わないで下さいよ、しがみつきの世界。私にはしがみつきの他ありません。キリストにしがみつく、キリストにどうやってしがみつくんですか、私はロダンの「キリストとマグダレーナ」という彫刻が何とも言えないのです。裸体のマグダレーナが十字架のキリストにしがみついてる。あの第二巻『芸術のたましい』の扉に載せました。マグダレーナは復活のキリストの脚もとにしがみつきました（マタイ二八・九）十字架じゃないです。だけどもロダンは十字架されているキリストを見てやり切れないマグダレーナの心情をあのように大胆に表現したのでしょう。全存在を救ってくれたキリストに対する全存在的な愛の表現でしょう。ロダンでなきゃあんな彫刻はできないでしょう。

しがみつきと思ったところが逆にキリストの方で私たちを抱きかかえ、本当にしがみついていて下さってるのです。キリストの本願の力の方が私たちのしがみつきよりも強い。イザヤ書に「万軍のエホバの熱心これを成し給う」（イザヤ三七・三二）、「彼らのなやみのときはエホバもなやみ給いて、そのみ前の使者をもて彼らを救い、その愛とその憐みによりて彼らを贖い彼らをもたげ昔時の日つねに彼らを抱き給えり」（イザヤ六三・九）とあるように！　こっち側の如何に関わらず、だめであればあるほど、神の顧みはあついです。先程からのお話の通り、行詰れば行詰るほど、やけ酒でも飲もうと思った時に天来のひらめきがやって来た。キリストにしがみつかれた。キリストのみ霊に感じた梅村君に、決河の勢いで啓示が臨んだではありませんか。勿論平素の投身的な祈りを必要とします。

エレミヤも叫びました「エホバよ、汝はわが神なれば、我をひき返し給え、さらば我れ返るべし」（エレミヤ三一・一八）あなたの方から帰って来て下さい、そうしたら私は帰ります。帰ろうたってだめなんですから、どうぞこっちへ来て下さいよと。図太い信仰だね。お母ちゃん歩けないよ、こっちへ来ておくれよと、そうすると、お母ちゃんは来るんです。お母ちゃん！　と叫ぶよりも先に、どこにいるんだろうとさがしているのがお母ちゃんです。「求めよ、さらば与えられん」というのは、みな神様の方で私を求めておられるから、神様の方で私を訪ねておられるから、神様の方で心の門を叩いていらっしゃるから、ありがたい、というわけです。我々は太陽に引っぱり回わされている地球みたいに神さまから離れられないわけです。その事に気がつくだけのことです。神様の手に気がつき、神様の声に気がつき、キリストの愛の力に気がつくだけの話。聖書は要するにそのような本願の現実を語っているのです。

7　速く速く答え給え、エホバよ！
　わが霊は衰えました。
　み顔を私から隠さないで下さい。
　でないと私は坑に降りたも同然です。

「坑」というのはシェオールというんで、陰府のこと。

8　晨には汝が恵みを聞かしめ給え。
　あなたに私は信頼しているのです。

わが歩むべき道を教え給え。

「道を教えたまえ」、道とは、「あなた」という道でした。キリストという「あなた」に来て見たらそれが本当の「道」でした。無限軌道です。空中を走るところの鷹の空路の如きものです。

9　仇敵から私を救って下さい、エホバよ！

あなたに私はしがみつく。

「しがみつく」、原意は「隠れ蓑とする」です。

10　御意のままを成すように教え給え、

あなたこそわが神ですから。

聖旨を体現させて下さい。キリストの祈りです。

汝が善恵のみ霊、私を平地に導き給え。

「善恵のみ霊」という著しい言葉が出ている。「トーバー」は、「善恵」とでも訳したい言葉です。聖書ではみんな恵みの現実を「幸」と言ってる。だから英語の「ハピー」やドイツ語の「グリック」（幸福）という言葉は聖書にほとんど出て来ません。「恵み」という概念が圧倒的です。

11　エホバよ、聖名のゆえ私を生かし、

汝が義に在ってわが魂を患難から引き出し給え。

この一一節が先程の一節と相呼応しているところの大事な節であります。

「聖名のゆえ」、我々が救われるのも全部聖名のゆえです。私たちの救いのためじゃないです。だから聖名が一切なのです。パウロもペテロも、本当に彼らは聖名に印せられて、聖名を称えれば直ちに御力が働くという事態です。上から愛の力が流れこんでくる。そして直ちに救を求める人に流れ入る。そのようなキリストの愛は、これを義と言おうが愛と言おうがいいですよ。要するに聖名の中にキリストの義と愛が渾然とふくまれている。「聖名のゆえ」とは聖名が原因であり、目的であることです。このヘブライの表現がすばらしいです。詩篇第一四三篇は、まことにすばらしい福音の詩篇ですよ、単なる「悔改め」じゃないです。むしろしがみつきで、そのしがみつきも、神様の方のしがみつきの方が強かった。それは「汝の恩恵」「汝の義」「汝のいつくしみ」に救と力の根拠があるからです。キリストは私たちを離さない、追求してやまない、恵みは追っかけてやまない。どうぞ皆さんはこの本願の力、本願の劫力、力と愛は一つ、愛なき力、力なき愛は愛に非ず。力に非ず。そこに本当の生命がある。キリストの十字架と復活の生命がそのことを現じました。だから、ただ一人のキリストが地の涯てまでも、世の末までも、自分自身をかぎりなく与えてゆく。何億人という人たちに救いの、永遠の生命を与えてやまない。それを受けたらまた人に与えて行かなければやまない。分たざるを得ない、そうするといよいよ上からやって来る。無一物無尽蔵という。そういう意味でも詩篇第一四三篇はすばらしい詩篇での一つです。

12　汝が恵に在ってわが仇敵を断ち、
　わが魂を抑圧する者をみな滅ぼし給え。

まことに私は汝が僕ですから。

さきにふれたように、この祈りは旧約の限界のものだが、闇を光に変え、悪を善に転ぜしめる力はキリストの「愛」、十字架の他にない。そのようなキリストの愛の僕と我らはなりたい。否、されている。

（一九七七年七月三十一日　熱海における夏期福音特別集会で）

「腰は立たずともこの手はゆるめじ、
汝が恵みなくば生くるかいもなし。
死力をつくして取り組むこの身を、
いざ祝したまえ明方来ぬ間に！」

（聖歌五五八）

第百四十八篇

1 ハレルーヤー！（きみたち讃美せよ神(ヤー)を！）
実存主(エホバ)を讃美せよ、諸々の天から。
彼を讃美せよ、諸々の高所(たかみ)で。
2 彼を讃美せよ、すべての天使よ。
彼を讃美せよ、すべての天軍よ。
3 彼を讃美せよ、陽と月よ。
彼を讃美せよ、すべて輝く星辰よ。
4 彼を讃美せよ、諸天の天よ。
諸々の天の水上よ。
5 彼らエホバのみ名を讃美せよ。
彼れ宣(の)り給えば彼らは創られたから。

6 彼は彼らを永久に永遠に存立えしめ、
　法を与えた、そしてこれは過ぎゆかない。
7 エホバを讃美せよ、大地から。
　龍とすべての深淵よ。
8 火炎と霰よ、雪と霧よ、
　み言を行う暴風よ。
9 山々とすべての丘よ、
　果樹とすべての香柏よ。
10 野獣とすべての家畜よ、
　爬虫と翼の鳥よ。
11 地の君主たちとすべての民らよ、
　諸侯と地のすべての審き人らよ。
12 若者たちよ、また乙女らよ、
　老いたるも若きも共に。
13 彼らエホバのみ名を讃美せよ。
　げにやみ名のみぞ高所に置かれ、

その栄光は大地と諸天の上にある！
14 彼は一つの角(つの)をみ民のために揚(あ)げ給うた、
これは彼の恵信者(ハシディーム)すべての、イスラエルの子らの、
彼に近親(ちか)しい民の讃美の権化ぞ！
ハレルーヤー！

第百八十四篇　万象の讃美

ハレルヤ讃歌の最たるものである。自然界及人間界の万象に対して神讃美を称揚している。そして万象の神讃美の客観的根拠、即ち神の創造のわざ、育生のわざを讃えているのが詩篇第一〇四篇である。

そしてこの詩で絶対に見のがせないのは第十四節の「一つの角」である。「角」（ケレン）は神の威力を表わす象徴である。メシヤの力である。選民イスラエルの栄光たる神威である。これはダビデの裔に出現するメシヤ、キリストへの預言である。作者自身はナザレのイエスの如き人物を夢にも想わなかったであろうが。

これと類似の預言が詩篇第八九篇にある、

「われわが撰びたる者と契約を結び、
　わが僕ダビデに誓いたり。
〈我れ汝（ダビデ）の裔を永遠に固うし、
　汝の座位を立てて代々に及ばしめん〉（八九・三、四）

……

彼らの力の栄光は汝（神）なり、
　汝の恵によりてわれらの角は高く揚げられん、
そは我らの盾はエホバに属き、
　われらの王はイスラエルの聖者（神）につけり」（八九・一七、一八）。

即ち「角」なるメシヤはイスラエルの盾であり、イスラエルの王である、と称われている。そのことは理想的な王者にして僕たるダビデとの契約において誓われてある。しかしこれは旧約的な内実で、地上の王者としてメシヤが来臨する、という預言である。

また詩篇一三二篇には、

「われダビデのためにかしこに一つの角を生えしめん、
　わが受膏者のために燈火を備えたり。

われ彼れの仇に恥を衣せん、
　されど彼はその冠栄ゆべし」（一三二・一七、一八）

とあって、ダビデをメシヤの預言的存在とし、「一つの角」は世の「燈火」、世の光として臨む、と預言されてある。正にキリストを預言している聖言である。しかし内容はこの世の栄冠のひびきをもっている。出現したキリストは天の栄光を衣たナザレ人イエスであったが。

さてこの詩篇に因んで連想されるのは、アッシシのフランチェスコの「被造物の頌歌」である。或は「太陽の讃歌」ともいわれる。その全詩をここに掲げよう。

いと高き全能の善き主よ！
讃美と、栄光と、尊崇と、凡ての祝福とは、汝のものなり。
いと高き者よ、ただ汝のみこれを受くるに足り、
而して何人も汝を論らふには足らざるなり。
　汝の諸々の被造物のゆえに、わが主を讃美せよ、
特に兄弟太陽のきみゆえに、然すべし、
彼日を来たらし、また光をもたらす。
且つ大いなる輝きをもて佳しく照り映ゆ。

いと高き者よ、彼は汝の御姿を宿せり。
姉妹なる月と、諸々の星のゆえに、わが主を讃美せよ、
天にありて神彼らを、清く貴く麗はしきものに造り給へり。
兄弟なる風のゆえに、空気と雲と
晴れと凡ての時候とのゆえに、わが主を讃美せよ、
これらのものによって彼の被造物を、生存へしめ給ふ。
姉妹なる水のゆえに、わが主を讃美せよ、
これ益多くして順しく、貴くして清きものなり。
兄弟なる火のゆえに、わが主を讃美せよ、
これによりて汝、闇を照らしたまふ、
且つ彼は麗はしくして快よく壮にして強きものなり。
われらの姉妹にして母なる地のゆえに、わが主を讃美せよ、
こは生命を与へてわれらを護り、
また諸々の果を、彩られし花と草と共に生ぜしむ。
汝の愛ゆえに相容し
また懦弱と困苦とに堪ふる人々のために、わが主を讃美せよ、

平和の中に耐ぶ者は福なるかな、
汝いと高き者、彼らに冠を戴かしめたまはん。
われらの姉妹、すなはち肉体の死ぬゆえに、わが主を讃美せよ、
何人もこれより逃がれて生くるものなし、
死の罪を負ひて死するものは福なるかな、
いと聖き御旨の中にあるを見らるる人は福なるかな、
第二の死かれらを害ふことなければなり。
汝らわが主を讃美して拝み、
いたく謙譲り、感謝して彼に仕へまつれ。」

（中山昌樹訳）

この詩は万象に向って詩篇一四八篇のように直接に呼びかけて讃美をうながしているのではなく、被造物たる万象のゆえに神を讃美せよ、聴者、と読者に呼びかけている。そして特に詩の終りの部分において、人間界を顧みて、「いと聖き御旨の中にある」者に焦点を結んで、真の幸をそこに見、平伏して神に仕える実存を指摘しているところは、フランチェスコの実存的告白として注目すべき句である。

詩篇一四八の明朗にして力強い素朴さをもった万象の神讃美は、「詩篇」という「讃美歌集」（テヒリーム）のある意味での絶頂であるが、フランチェスコのこの「被造物の頌歌」は、イスラエルのこの「万

象の讃美」の中世版ともいうべきものである。

「なんぢみ霊を出だし給へば、万物みな創造(つく)らる、
　汝地のおもてを新にしたまふ。
願くはエホバの栄光永遠にあらんことを、
　エホバその聖業(みわざ)を喜び給はんことを！」

（詩一〇四・三〇、三一）。

〔附録〕1

●旧約聖書の略語表　（　）内を省略する。

創（世紀）
出（エジプト記）
レビ（記）
民（数紀略）
申（命記）
ヨシ（ュア記）
士（師記）
ルツ（記）
サ（ムエル）前（書）
サ（ムエル）後（書）
（列）王（紀略）上
（列）王（紀略）下
（歴）代（志略）上
（歴）代（志略）下
エズラ（書）
ネヘ（ミヤ記）
エス（テル書）
ヨブ（記）
詩（篇）
箴（言）
伝（道之書）
雅（歌）
イザヤ（書）
エレ（ミヤ記）
（エレミヤ）哀（歌）
エゼ（キエル書）
ダニ（エル書）
ホセア（書）
ヨエル（書）
アモス（書）
オバ（デヤ書）
ヨナ（書）
ミカ（書）
ナホム（書）
ハバ（クク書）
ゼパ（ニヤ書）
ハガイ（書）
ゼカ（リヤ書）
マラキ（書）

●新約聖書の略語表　（　）内を省略する。

マタイ（伝福音書）
マルコ（伝福音書）
ルカ（伝福音書）
ヨハネ（伝福音書）
（使徒）行（伝）
ロマ（人への書）
コリ（ント人への）前（の書）
コリ（ント人への）後（の書）
ガラ（ニヤ人への書）
エペソ（人への書）
ピリピ（人への書）
コロ（サイ人への書）
テサ（ロニケ人への）前（の書）
テサ（ロニケ人への）後（の書）
テモテ（人への）前（の書）
テモテ（への）後（の書）
テトス（への書）
ピレ（モンへの書）
ヘブル（人への書）
ヤコブ（の書）
ペテロ（の）前（の書）
ペテロ（の）後（の書）
ヨハネ（の第）一（の）書
ヨハネ（の第）二（の）書
ヨハネ（の第）三（の）書
ユダ（の書）
（ヨハネの）黙（示録）

〔附録〕 2 ● 『詩篇』の主な参考書類 （ ）内は略記

〔Textum Masoreticum〕 Rudolf Kittel : BIBLIA HEBRAICA (T. M)
A. Rahlfs : Septuaginta 2 Bde, 1931. (LXX)
Franz Delitzsch : Die Psalmen, 1894. (Del.)
E. Kautzsch : Die Heilige Schrift des A. T. 2. Bd, 1923. (Kau.)
Bertholet : Das Buch der Psalmen, 1923. (Bt.)
Fr. Baethgen : Die Psalmen, 1904. (Baet.)
Hermann Gunkel : Die Psalmen, 1926. (Gk.)
Hermann Gunkel : Einleitung in die Psalmen, 1933. (Gk.)
R. Kittel : Die Psalmen, 1929. (Kl.)
Eduard König : Die Psalmen, 1927. (Kg.)
Bernh. Duhm : Die Psalmen, 1922. (Dh.)
Hans Schmidt : Die Psalmen, 1934. (Schm.)
Artur Weiser : Die Psalmen, 1950. (Weis.)
Deutsche Augustinusausgabe : Die Auslegungen der Psalmen, 1955. (Aug.)
Hans-Joachim Kraus : Psalmen, 2 Bde, 1960. (Kr.)
Helmut Lamparter : Das Buch der Psalmen, 2 Bde, 1959. (Lam.)
Ligmund Mowinckel : Psalmenstudien, 2 Bde, 1966. (Mow.)
Luthers Psalmen-Auslegung 3 Bde, 1958. (L.)

C. H. Spurgeon : The Treasury of David, 7 Vol. 1892. (Spur.)
E. Grace Briggs : The Book of Psalms, 2 Vol. 1927 (Brg.)
Kirkpatrick : The Psalms, 1921. (Kirk.)
The Interpreter's Bible Vol. 4. The Book of Psalms. (Inter.)
W. E. Barnes : The Psalms, 1936. (Bar.)
W. O. E. Oesterley : The Psalms 2 Vol. 1939. (Oes.)
嘗て用いて今手もとにない参考書の著者名のみを次にしるす。
Benzinger (Benz.), Gressmann (Gres.), Ewald (Ew.)
Sellin (Sel.), Moffatt (Moff.), Budde (Bd.), Graetz (Gr.)

黒崎幸吉：旧約聖書略註中巻所載「詩篇」1943.
松田明三郎：詩篇，〔三巻〕1956.
関根正雄：詩篇註解〔上，下〕1976.

辞典：Wilhelm Gesenius : Hebräisches and Aramäisches Handwörterbuch, 17. Aufl. (Gs.)
Englishman's Hebrew and Chaldee Concordance of the Old Testament. (Eng.)

後記

私が東大文学部の学生であったとき、一九二九年に卒業するまで、石橋智信教授から殆ど一対一でヘブライ語の授業を受けた。元来詩が好きな私は、おのずから詩篇を自分なりに訳してみたくなり、翻訳を始めたのが一九三二年秋の頃であった。その後『旧約知識』誌（編輯、塚本虎二、植木良佐）の同人となるに及んで同誌に連載することになり、「詩篇」の第一巻（一―四一）の翻訳と解説を大方果した。一九四〇年秋から自宅の一角を会堂にして、教職の傍ら独立伝道のスタートを切った。その日曜講筵において「詩篇」も大方講じ終えた。録音したままで余り筆にはしていなかった。

一九七五年から『著作集』を企画することになったので、「詩篇」一五〇篇中五十篇を選び出して、その翻訳と解説に取っ組んだ。新稿の他に『旧約知識』誌、『キリスト教常識』誌（編輯、塚本虎二、斎藤茂）、『活かすキリスト』誌（主筆、今橋淳）等に寄稿したものからも採用したが、どれも旧稿のままではなく、然るべく訂正、削除、補筆、改作等の作業をした。訳詩の文体は一貫しているが、解説の文体には講筵調

のものもある。訳詩は文語体ならむしろ易しいのであるが、文語的口語体であるので苦心した。『旧約知識』誌上に載せたときはヘブライ語の活字も用いて、註は語学的にも立ち入ってみたが、この度の註にはその点殆ど全く触れなかった。それらのことを踏まえた上ではあるが、註は最少限度にとどめた。『旧約知識』誌に連載していたとき、大いに共感し、評価して、熊本から手紙をくれた未知の人があった。それは『生命の光』誌主筆手島郁郎氏であった。彼はその後、自分の集会員鴻海黎明君をして、私のその「詩篇第一巻」を見事な謄写版刷の刷子に作製して会員その他の人々に頒っておられた。往年の彼の熱い友情を偲びつつ、この『詩篇珠玉集』を天界の彼に捧げる。

なお本巻以後は京都大学法学部の奥田昌道教授が本刊行会の責任者になられたのでお報せしておく。

一九七九年暮

天　鐘

●著者略歴

一九〇四年、東京に生まれる。水戸高校を経て東大文学部ドイツ文学科入学。在学中より藤井武の門下生となる。卒業後、塚本虎二の大手町集会聴講生、「旧約知識」「キリスト教常識」同人となり、かたわら幼年学校、陸士、陸大、昭和大学のドイツ語教官を務める。一九四〇年、武蔵野に聖書講筵を開く。一九五〇年ごろより使徒的次元の信仰を追求、集会名を「武蔵野幕屋」とし今日に至る。その間、一高教授、東大教養学部教授、早大講師。東大停年後、独協大教授、同中・高等学校校長を務め、一九七九年三月末日を以て教職五十年を終り、爾後福音伝道と著作に献身。著作活動としては、雑誌「曠野の愛」の主筆（三七号まで）、「曠愛新書」発刊（六号まで）等。訳書に『眠られぬ夜のために』（ヒルティ著作集第四巻、白水社）、『神と人間の実存的弁証法』（ベルジャーエフ著作集第六巻、白水社）等。今はこの著作集に力をそそいでいる。

なお著者のグループは日本キリスト召団と称い、諸処に兄弟団があって、その代表者となっている。

©一九八〇

小池辰雄著作集　第四巻

詩篇珠玉集

初版発行　一九八〇年一月三〇日

著者　小池辰雄

発行　小池辰雄著作刊行会

東京都武蔵野市吉祥寺東町四ノ一五ノ一九（〒一八〇）

TEL　〇四二(21)三四三三

〔振替〕東京五―六一三一八

（責任者）奥田昌道

印刷　中央精版印刷株式会社

製本　中央精版印刷株式会社

装幀　前野洋一

頒価　二八〇〇円

（送料　二〇〇円）

●小池辰雄著作集（年刊）○印既刊＊印次回

第一巻　無者キリスト（再版）　○一九七五年刊　二五〇〇円
第二巻　芸術のたましい（再版）　○一九七六年刊　二五〇〇円
第三巻　無の神学（内村・藤井五十周年記念）　＊一九八〇年刊
第四巻　詩篇珠玉集（新刊）　○一九八〇年刊　二八〇〇円
第五巻　百世の師ヒルティー（初版）○一九七七年刊　二五〇〇円
第六巻　旧約聖書抜粋　一九八一年刊
第七巻　新約聖書抜粋　一九八二年刊
第八巻　聖書の人ルター（ルター生誕五百年記念）　一九八三年刊
第九巻　随筆集　一九八三年刊
第十巻　一日千年　一九八四年刊

◎お申し込みは振替（東京）五―六一三一八　小池辰雄著作刊行会へ。
分売可能。送料各巻　二〇〇円